
魔法少女リリカルなのは ~次元世界最強の弟子~

大政奉還

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは

（次元世界最強の弟子）

【Nコード】

N8591N

【作者名】

大政奉還

【あらすじ】

兄の死を哀しみ、上司達の侮辱に傷ついていた少女ティアナ。彼女の前に現れたのは、銀髪の女だった・・・

【虚無の魔法使い】の続編・・・？

プロローグ

激しいどしゃ降りの中、一人の青年、ティータ・ランスタ
ーは立っていた。身体の間るところから血が滲み、地面の水溜
まりを赤く染めている。辺りには先ほどまで他愛ないことを喋っ
ていた戦友たちが同じく水溜まりを赤く染め、倒れ伏している。

「…………ちくしょう」

口の端から鮮血を垂らしつつ呟くティータ。前方にはこの惨
劇を引き起こした異形が近づいて来るのが見える。震える身体に
鞭をうち、長年の相棒である銃型のデバイスを構える。

「…………ティアナを…………ティアナを頼む…………」

ティータの脳裏に浮かんだのは、数年前からつき合いがある、
便利屋を営む銀髪の女だった。

自分が死んだことを聞けば、あいつなら妹に寂しい思いをさせな
いだろうと思ったのだ。

「うおおおお おおおおお おおおお おおおーっ！」

ティードは残された魔力を全て使い、異形へと向かって行った。

ティード・ランスター一等空尉。逃走違法魔導師の追跡任務中に殉職。後の調査によると、違法魔導師自身も殺害されていることが分かり、第三者の犯行と思われるが、依然として犯人は判明していない。

「犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だ」

「そのとおりだな。たとえ死んでも捕えるべきだった」

「ふんっ、任務を失敗するような役たたずは死んで当然だな」

そんな言葉をポツポツと雨が降り注ぐ墓地でティアナは聞いた。

まだ十歳ほどの、オレンジ色をした髪の少女だ。　そして・
・・・殉職した魔導師、ティードの妹だった。　歯をくいしばる。
悔しかった。　命を賭けてまで犯人を逮捕しようとした兄を
侮辱されたのだ。　悔しくない筈がない。　しかし、ティアナ
は泣かない。　泣いてしまえば、全てが崩れてしまいそうだから
・
・
・

ティアナは兄が眠る墓石の前に無言で立ち尽くす。　兄をさ
んざん侮辱した軍服姿の参列者達・・・管理局の上司達はすでにい
ない。　雨に濡れるのもかわわず、ティアナは立ち尽くす・
その頬が濡れていたのは雨のせいか、それとも・
・
・

「ティードの妹・
・
・よね？」

後ろから声をかけられ振り返る。　そこにいたのはグレーの
ローブを纏った銀髪の女だった。

「
・
・
・あなた、お兄ちゃんの知り合い？」

「個人的な・
・
・ね。　アイツには、この『世界』に来てから、

色々世話になったのよ」

知らない女だったが、ティアナにはこの人が兄の死を悼んでい
ることだけが、なんとなく分かった。　女は持参した酒瓶を墓石
の前に置く。　そして、黙祷するように目を閉じた。

「……………惜しい奴を亡くしたわ」

周囲から『無能』や『役たらず』などと蔑まされてきたなか、
ただ静かに悲しんでくれる目の前の女の存在が、ティアナには嬉し
かった。

「あなた、一人なんでしょ？　…………私と来る？」

そう言って、銀髪の女は手を差し出してきた。　その手をテ
ィアナは……………とった。

「ねえ、あなたの名前はなんて言うの？」

「おっと、自己紹介がまだだったわね。　私は……………」

私はルイズ。　最強の魔法使いよ

1 1 修業！（前書き）

目指せ完結！ 頑張ります。

1 1 修業!

S i d e ・ ティアナ

「ほらほら〜 避けないと死んじゃうわよ〜」

「だーッ! 当たる当たる! ツ髪にかすった!」

視界一面にうつる魔力弾が、霞むようなスピードで私に迫って来る。 あつと、また髪にかすった。 ここはミッドチルダ郊外にある、ルイズさんのアジトの一つ。 その中の地下訓練場だ。 ルイズさんに引き取られて早三ヶ月。 私がなんでこんなことをしているのかと言うと、話しは二ヶ月前に遡る……

「は? 私の弟子になりたいですって? 正気?」

「ハイ! 私はお兄ちゃんの夢だった執務官になりたいんです……」

「いえ、絶対になるんです！」

呆れたようにルイズさんはため息を吐いた。私はまっすぐと視線を離さない。この一ヶ月で、私はルイズさんがどれだけ滅茶苦茶なのか、嫌というほど知った。襲いかかってきた違法魔導師は指一本で吹き飛ばし、さらには『依頼だわ』とか言つて、マフィアのマジトに単身突入して行き制圧したり（この時、無傷）、etc.....とにかく強かった。あの墓地での『最強の魔法使いよ』宣言も、あながち間違いではないと思う程だ。お兄ちゃんを笑った上司たちを見返すため、そしてお兄ちゃんの夢を私が果たすために、どうしても私は強くならないといけない。すると、ルイズさんは真剣な顔になり言った。

「.....本気？」

「ハイ！」

「.....やっぱり血は侮れないわね。.....実はね、貴女のお兄さんから弟子入りを頼まれたことがあったのよ.....断つたけどね。もし、あのとき弟子にしていたら.....いえ、『もし』とか『たら』はいらないわね。きつくなるわよ。着いてくれるかしら？」

「ハイ!!!」

「ふむ。やるからには最後まで……中途半端が一番危ないって言うしね。面白いわ。貴女が何処まで強くなれるのか、見せてもらおうわ」

「ッ！ありがとうございますー！」

「よし。修業中、私のことは師匠と呼びなさい。それじゃあ明日から早速やるわよ！」

「ハイ！」

……以上、回想終わり。あれから二ヶ月。基礎体力のためと、走り込んだり、【気】という生命エネルギーの運用方法を教わり、少しずつ使えるようにしていったり、今やっているように、地獄の回避訓練をしたり、さらに集束と圧縮に適正があった私に、精神を限界まで磨り潰し、魔力の集束・圧縮を繰り返させたり

と、色々やっている。そのなかでも、回避訓練は特にヤバイ。まず、最初にやったときは全身打撲だった。骨が折れなかったのが奇跡・・・人間、追い詰められれば凄いのだと、自分の身体で実感した。だってルイズさん『あ、私の魔法は非殺傷設定なんてないから。デバイスとか使えばそうでもないけど、メンドイし、身体で覚えた方がいいでしょ?』とか言つて、静止も聞かずに始めるんだもん・・・とにかく、そんな日々を過ごす、今日この頃でした。

「お・・・終わった・・・」

地獄の回避訓練も終わり、この日の修業は終了した。幸いにも大きな怪我もなくのりきれた。エレベーターで地上に上がる。ルイズさんは【紅き翼】という便利屋を営んでいるらしく、複数の拠点があるらしい。私が住んでいるところも、その中の一つだ。外見は少し大きい二階建ての住宅なのだが、そこは師匠クオリティ。なんと地下百メートルまでエレベーターが伸びており、地下施設があるのだ。そこは物置だったり、訓練場だったりとかかなり広い。・・・どうやって建てたんだか。

つと、地上に着いたようだ。　ボロボロの身体を引きずるよ
うに歩き、一階のリビングに入る。　もうすぐ夕御飯の時間だ・
・・・、因みにこの家には【紅き翼】のメンバーも住んでいる。
そのテレビに向かってゲームのコントローラーを連打している
金髪の少女がエヴァ。　そして、優雅に紅茶を飲んでいる長髪の
青年？　がアルだ。　他にもあと三人いるらしいのだが、私が
引き取られるのと同時に、長期の依頼が入ったらしく、一度も会っ
たことがない。　もうすぐ帰ってくるらしいのだが・・・・

「おや、来ましたか。　ふふふ、ボロボロですね。　お風呂にでも
入ってきたらどうです？」

アルがそう言ってきたので、返事を返す気力もない私は頷いて、
お風呂場に向かった。　お風呂は大好きだ。　何処かの誰かが
『お風呂は心の洗濯！』と言っていたが、その通りだと思う。

お風呂からあがると、台所から良い臭いがしてきた。　どう
やらルイズさんが、夕飯を作ってくれているらしい。　この家の
ご飯は当番制で、ルイズさんが今日は当番だった。　今日は・・・
・・ミートスパゲッティみたいだ。　ルイズさんは意外と料理が
上手だ。　今度、料理も教えてもらおうか・・・

「「「「いただきます」」」」

毎日、一緒に誰かと食事をするのは、実はここに来てからだっ

た。お兄ちゃんは管理局の仕事が忙しく、帰ってくるのが遅く、たまの休日にどこかに外食に行くくらいだった。・・・お兄ちゃんの殉職から、ここまで早く立ち直れたのも、実はこのおかげかも知れない。スパゲッティを食べていると、ルイズさんが話しかけてきた。

「ああ、そうだティアナ、あなたのデバイスが出来たそうよ。知り合いのデバイスマイスターから連絡があったから、明日取りに行ってきた」

「ッ！ ホントですか！」

「ええ、・・・・ま、銃に詳しくなやつだったから、楽しみにしときなさい」

「銃に詳しいって・・・・質量兵器・・・・まあいいか」

そう、世の中には知らなくていいこともある。さて、私の相棒になるデバイスは一体どんなんでしょうね？

明日を楽しみに、私は食事を終え、雑談やエヴァとゲームをしたあと、ベットに向かった。

1 2 修業！！

S i d e ・ ティアナ

「此処よ……ね」

昨日、ルイズさんに言われた通り、私は自分の相棒となるデバイスを受けとるために、知り合いのデバイスマイスターとやらの店に来たのだが……。ここで大丈夫よね？ 描いてもらった地図を見る限り、間違いないハズなのだが……

「どうみても、カフェよね……」

そうなのだ。 路地裏を通り、やっとたどり着いたのだが……

・ カフェだ。 何処からどうみても……。メニューとかあるし……。しかし、メニューを開き、私は啞然とした。なんと、紅茶とかコーヒートかの飲み物と同じように、デバイスの名前が記入されていたのだ。しかも写真つき。……

……大丈夫だろうか？ なんか色々。しかも、メニューに載っているデバイスが、かなり質量兵器っぽく見えるのは気のせいだろうか？ ルイズさんたちと生活していて分かったが、あの人は管理局の法律を守っているようで、守っていない。強いて言うなら『へ〜、そんなのがあるんだ〜で？』くらいにしか考えていないだろう。つまり、知り合いであるこの店の店主も、またそう言う部類の人な訳で……

「来たか」

「ッ！！？」

いつの間にか後ろをとられていた。話し掛けられるまでまったく気がつかないなんて・・・ルイズさんにそれなりに鍛えられているハズなのに・・・振り向くと、そこには褐色の肌、長身に短い白髪、黒のタンクトップにジーパンと言う出で立ちの男がいた。二十代後半から三十代前半くらいだろうか。

「ティアナ・ランスターだな」

「は、はい」

「ふむ。話は聞いている。少し待っている」

そう言うと、私を置いて店の奥に入っていった。私はカウンターに座り待つ。さっきの人、筋肉のつきかた、足の運びなどを考えるに・・・強い。そう感じた。しばらくすると、男は戻ってきた。

「待たせたな。これだ」

そう言って、テーブルの上に置かれた四つの銃・・・四つ？

「あ、あの〜 なぜ四つもあるんです？」

「ふむ、そうだな。このサブマシンガンのような物が【P90 D】だ。装弾数五十発。弾倉の交換に熟練は必要だが、利き手を選ばず、また装弾数も多い。使いこなせば、大きな力になるだろう。そして、この二挺拳銃が【デザートイーグルD】装弾数七発。拳銃としては最高クラスの威力だ。なかなかの暴れ馬だが、これもまた、手なずけられれば頼もしい力になってくれるだろう。そして最後のこれが【レミントン700D】ボルトアクション式のライフルだ。装弾数六発。高い命中精度、堅牢な構造、信頼性など狙撃銃としても優れている。ちなみに最後についている【D】はデバイスの【D】だ」

そう一気に説明された。私はてっきり一つだけだと思っていたのだが……

「む、もしかして、一つだけだと思っていたのか？ 戦場に武器の類いを一つしか持っていかないなど、死にたいのかね？ 管理局の魔導師はデバイスを一つしか持たないことが多々あるようだ、私からしたらありえんな。動作不良が起きる可能性はゼロではないと言っのに」

……表情？

私の考えていることを読むなんて……

「なに、君の表情は読みやすいものだよ。それと、私から忠告だ。管理局に属するにしても、どうするにしても、闘う道を行くならば、常に最悪の事態を予想しろ。デバイスの動作不良もそうだが、世の中に『絶対』なんて事はほぼないと言っても過言ではないからな」

なんなんだこの人は……　だが、言っていることは間違いではない。　それどころか、とてもためになる。　世の中に『絶対』なんてほぼない……か。　覚えておこう。

「忠告ありがとうございます。　ところで、今更ですけど名前はなんて言うんですか？」

そう聞くと、男は驚いたような顔を一瞬し、腕を組んでから少し間をおき言った。

「……そうだな、正義の味方の成り損ない。　ふむ、アーチャーとでも呼んでくれ」

アーチャー……弓兵か。　明らかに偽名だがまあいい。

「アーチャーさん。　素晴らしいデバイス、ありがとうございます。　使いこなせるように頑張ります！」

「ふっ、お代はもう貰っている。あの魔女に礼を言うんだな。それに何だかんだ言って私もアイツには世話になったしな」

「・・・それでもです」

「そうか、ならその銃達を使いこなしてくれ。俺は本来、刀剣が専門なんだが、それでも中々の出来だと自負している。造ったものとしてはそっちの方が嬉しいしな」

あれ？ 一人称が『私』から『俺』になった？ ……
ま、いつか。

「はい！」

「それと、その銃に使うカートリッジは特別製だ。弾丸の注文があれば、連絡してくれ。ただ普通に魔力を込めても魔力弾は撃てるが、君では高ランク魔導師の障壁を破ることは難しいだろう。このデバイスの良いところ・・・って言うか特徴は、一つの弾丸に溜め込んだカートリッジの魔力を全て込められる・・・いや、込めてしまうところだ。本物の銃同様に、カートリッジの弾一発につき、魔力弾が一発しか出せない。つまり、これを使いこなすには、並外れた集束・圧縮能力が必須な訳だが・・・まあ、精進してくれ」

つまり、カートリッジロードで魔力を底上げするんじゃないかと、カートリッジの魔力を弾丸に、自分の魔力で集束・圧縮して、それを撃ち出すわけね……。うわっ。カートリッジの消費量とかバカにならないじゃない……。まあ、自分の魔力を弾にも出来るみただけど、確かに私の力だけじゃ、高ランク魔導師とかの障壁を抜くのは厳しいだろう。

こうして私はアーチャーさんの店を後にした。サービスだと言って、それぞれのデバイス専用カートリッジを百発ずつ、計三百発貰った。使いこなせるように修業しなければ……。

この日から二丁拳銃による格闘・射撃。サブマシンガンの連射に追い付く魔力の集束・圧縮の瞬発力、そしてライフルによる狙撃訓練がメニューに加わることになった。

Side・ティアナ

「ふっふっ・・・ふっふっ・・・ふっふっ・・・ふっふっ」

朝露の湿り気を感じながら、私は習慣となっている朝のランニングに励んでいた。時刻は午前五時ちよつとすぎ。【魔力】

や【気】による身体強化は使わず、素の体力で走っているため、かなりキツイ。十歳の私の体力なんてたかが知れているが。

しかし、基礎体力を上げることで、強化したときの力の上がり幅が大きくなるみたいだから、疎かには出来ない。空戦適正がない

私には・・・虚空を蹴って高速移動する技術はあるらしいが・・・走るしかない。また、魔力量も凡庸な私では、シールドなどの魔力障壁の強度もあてにならないため・・・

まあ、何を言いたいかと言うと、体力は大事だったことだ。

さて、今走っている森を抜けると、お兄ちゃんが眠る墓地だ。

私はランニングついでに毎朝顔を出しているのだ。

さて、アーチャーさんからデバイスを買ってから一ヶ月がたった。まだまだ二挺拳銃等、一挺ずつしか使えないが、少しずつ使いこなせるようになってきたと思う。　　っと、家に着いた。早く汗を流したい。

「ただいまーっ!？」

「………おかえり、なさい?」

ドアを開けて家の中に入ると、そこには青みがかかった長い髪をリボンで纏め、黒を基調としたドレスのような服を着た女の人がい
た。　　はつきり言って会ったことがない。　　………誰?

　　尋ねようとしたとき、ちょうどルイズさんがやって来た。

「お、帰って来たわね。　　ちょうどよかったわ。　　シャワーを浴びたら、リビングに来なさい」

　　そう言って、リビングにいつてしまう二人。　　いったい誰なんだろう?　　もしかしたら、依頼のために長期間別世界に行っている
と言う、三人の一人だろうか?

シャワーを浴びてリビングに行く、そこにいたのはルイズさん、エヴァ、アル、そしてさっき会った見知らぬ女性と、これまた見知らぬ男性が二人だった。私が来ると、ルイズさんが口を開いた。

「紹介するわね……ってかあんた達は自分でやんなさい。この娘はティアナ・ランスター。知り合いの妹で、訳あって引き取ったのよ」

そう三人に説明する。私は頭を下げた。

「ティアナ・ランスターです。よろしく願います。ティアナでいいですよ」

「じゃあ俺からいくか。ヴァーミリオン・CD・ヘイズだ。ヘイズでいいぞ」

ヘイズさん。身長は百七十センチぐらい。年はたぶん二十代前半くらいかな？ 黒いつなぎの上下。その上から、暗い赤色のジャケットを纏っている。右目が薄い赤色で、左目が薄茶色だった。そして、一番特徴的なのは、その頭。収まりの悪いくせつ毛は染めたんじゃないかってくらい見事に真っ赤で、前髪のひと房だけを濃い青色に染めていた。

「じゃ、次俺な。俺はクード・ヴァン・ジルエツト。クーでいいぜ」

次に挨拶してきたのがクーさん……。なんか敬語使わなくていいや。クーはなんと言うか真っ赤だった。赤いジャケットに同じような素材のスボン。中に黒のインナーを着ている。ブラウン色の髪の毛で、年は十八くらいだろうか？ ヘイズさんと同じくらいの身長だ。

「私はレヴェリー・メザールانس。レンでいい」

レンさんはさっきも言ったが黒を基調としたドレスのような服を着た女の人だ。クーと同年くらいだろうか……。何処と無く眠そうな印象を受ける。

「さて、自己紹介も終わったわね。まあ仲良くやりましょ。同じ釜の飯を食べば仲間ってね。今日はちょっと豪勢にしてみたわよ。さっそく朝ごはんとしてましょ」

気がつかなかったが、テーブルには何時もより些か豪華な食事が並べられていた。朝だからか量はそれほどでもないが、手込んだ料理だ。今更ながら、ルイズさんにはお世話になってるな〜と思った。どんな依頼だったのかとか、談笑しながら、私は血は繋がっていないが、新しい家族が増えたことを心の底から喜んだのだった。

1 4 修業!!!!

Side・ティアナ

「心を無に、身体を世界の外と内との窓にするのです」

アルの声が、地下訓練場に響く。

「……………左手に【魔力】、……………右手に【気】……………ッ！
!?!」

バチツと音を立て、胸の前で合わせた左手と右手が弾かれた。

今、私は【咸卦法】と言う超高等技術の修業をしているのだが・

……………難しい。成功する気配すら見えない。

「ダメですね。その調子では十年かかりますよ？ もっと心を無
にしてください」

「……………心を無にして、どうすればいいんですか?」

「まあ、ぼろぼろってことですね」

「むむ……」

理屈は分かるのだが、……感覚がなかなか掴めない。

「左手に【魔力】、右手に【気】……ッ!？」

「左手に【魔力】、右手に……ッ!？」

「左手に【魔力】、右……」

「左手に【魔……ッ」

「左手に……」

「左……ッ」

「ひ……」

「……」

ダメだ……、成功する手応えの『て』の字も見えない。
と言うか、無理なんじゃ……。相反する【魔力】と【
気】を合成させることで、爆発的な出力を得る……。使えれば、
戦術の幅が大きく広がるのだが……。

「手本とかってないんですか？　こう、イメージとかが出来ないんですか」

そう言うと、アルは頷き、懐から一枚のカードを取り出した。

……デバイス？　いや、薄すぎるか……。アルが何かを
呟いた途端、何百冊もの本が螺旋を描くようにアルの周囲に浮遊す
るように現れた。その中の一冊を手に取り、槲を挟む。

「私のアーティファクト……。まあ、ここではレアスキルとか
になるんですかね？……は、特定人物の身体能力と外見的特徴の
再生です。もっとも、自分より勝れた人物の再生は燃費が悪く、
数十秒からもって数分しかできず、あまり使える能力ではないので
すが……。その人物が使っていた技すらも使うことが出来ませう」

そして、槲を引き抜く。一瞬閃光がはしり、それが収まると、
アルさんが立っていた場所には真っ白なスーツを着た、中年の渋そ
うなおじさんが立っていた。俗に言うハードボイルド……。？

「よしと」

低い男の声。 両手を合わせた途端に……

「ぶはっ……」

ぶわっつと、突風に煽られたと錯覚するほどの圧力を感じた。
これが……

「これが【咸卦法】だ」

うん。 渋い声だ。 すると、何故か両手をポケットに入れた。
 と思ったらいきなり私の頭上に現れて……

「きゃあっ」

轟音と共に、私の周囲の床が一メートル程凹んだ。 驚いて
いると、アルはいつの間にか元の姿に戻っていた。

「ふむ、かなり威力を抑えてもこれ程とは……やはりガトウ、
あなたは素晴らしいですね」

なんか感心していた……ガトウってさっきの人のことだろうか？

「って、いきなり何すんのよ!!！」

一歩間違っていれば私がペツちゃんこよッ!？」

「ははは、すいませんね。今のは【剛殺居合い拳】と言って、【咸卦法】の肉体強化をフルに使い、凄まじい拳圧を飛ばす技です」

……拳圧って……魔法じゃなかったの？

「居合い拳って何ですか？」

「居合い拳と言うのは、ポケットを鞘がわりに拳速を極限まで速め、不可視の拳圧を飛ばす技です。【剛殺】程の威力はありませんが、とても静かな技ですから、我々レベルでも、なかなか見切れることは出来ないという妙技ですね」

それは凄い……

「さて、お手本にはなりましたか？」

「はい。技の方は凄すぎて、なにがなんだか良く分かりませんでしたけど」

ジト目でアルを見つめるが……微笑むばかりだ。と思
ったら、急に何かを思い出したように言った。

「……………この床はどうしましょうか？」

「知りませんよ！ アルさんがやったんでしょ！？」

結局、【威卦法】は一度もこの日には成功しなかった。

1 5 時間差72倍！

S i d e ・ ティアナ

その地獄はルイズさんの一言から始まった。

「何かいまいちね」

原因は何だろうか？ なかなか上達しない【咸卦法】のせい
か、それともいまだに魔力弾に障壁貫通能力を付与出来ないからか
・・・

「エヴァ、ちょっと巻物借りるわよ？ ・・・よしっ
と、外との時間差を最大にしようと・・・よし、じゃあ一週間
くらい入ってるから、みんなに言っておいて」

「ちよっ、ルイズ！ お前は・・・」

「さ、逝く（誤字にあらず）わよティアナ」

そこで、私の視界は真っ白に染まり、気がつくまで辺り一面真っ白な空間に立っていた。 此処はまさか…… 某管理外世界で有名なマンガにでてきた【精〇と〇の部屋】！？ そんな感じでパニックしていると、ルイズさんが後ろからやって来た。

「ここはエヴァの巻物の中よ。 時間差を最大にしてあるから外の一時間が、中だと72時間になるわ」

「……………まわり一面真っ白ですけど、食事とかはどうするんですか？」

そう私が言うと、ルイズさんは指を弾いた。 ……目の前に家が現れた。

「もう何でもあり……………」

思わず呟く。

「まあ、一種の幻想空間ね。 時間差がありすぎて肉体ごと取り込んだから、本来は食事とか不要なんだけど、メンタル面とかも結構重要出しね」

「……………」

「ちなみに、この空間で肉体を鍛えても、現実にはフィードバックされないわ。でも技術面はされるから、体捌き、咸卦法、障壁貫通能力、それに魔力の集束・圧縮の最適化とか……ま、頑張りなさい」

私は話について行けてなかった……

ここからは日記形式でいきます……

5日目。

白い空間で精神統一をした。何処までも続く白い空間を眺めていると、とても心が穏やかになる。ルイズさんはシャドーを相手に自己鍛練に励んでいた。

30日目。

一瞬だけ【咸卦法】が成功した。ホンの一瞬の事だが、この感覚を忘れないようにしなければ……

100日目。

此処に来てからもう大分経った。【咸卦法】はまだ五秒くらいしかもたない。が、コツコツとやっていた【障壁貫通能力】の付与が、やっと出来るようになったのが嬉しかった。

150日目。

なかなか【咸卦法】の継続時間が延びない。障壁貫通は徐々に強力にしていつている。また、ルイズさんの白兵戦での体捌きなどを近頃はやっている。この空間だと、怪我をしてもそれこそ致命傷でも一瞬で元通りに治るみたいで、ルイズさんの手加減が段々となくなってきたように感じる。それにしてもエヴァ、アル、クー、レンさん、ヘイズさん・・・妙に懐かしく感じる。まだ外では一週間も経っていないと言うのが嘘みいだ。確かに身体は成長していないようだが・・・

250日目。

【咸卦法】の継続時間がやっと十秒続くようになった。まさか、これ程修業して、此だけとは・・・才能ないのかな・・・

だが、体捌きや白兵戦はかなり上達して、手加減してもらっているとは言え、【デザートイーグルD】で、ルイズさんの斬撃をあの程度はしのげる程になった。ルイズさんの評価は及第点とのこと。　　だけど、ルイズさんの及第点は一般常識からかなり逸脱しているから、実際はどうなのだろう？　　この白い空間での生活も残り半分を切った。　　確か、504日間で外での一週間の筈だ。
・
・
・

365日目。

今日で、此処に来てから一年が経った。　　【咸卦法】はまだまだ十秒台から延びない。　　流石は超高等技術。　　そう簡単にはいかない。　　【障壁貫通能力】はかなり強力になってきた。

ルイズさんによると、Aランク魔導師の障壁までならなんとか貫通するほごらしい。　　また、集束・圧縮の瞬発力もついてきた。

【P90D】が、秒間十五発で、それに着いていけるから・・・
だいたい0.06秒に一発、集束・圧縮出来る計算だ。　　ルイズさんたちは当たり前だが、私も段々と人間離れしはじめているような・・・

500日目。

あと4日でこの空間とはおさらばだ。　　そう浮かれていたら、ルイズさんが突然実践形式でいきましようかと言いだめた。　　真

つ白な空間はミッドチルダのような街並みになった。　　こんなことが出来たなら、もっと早く風景を変えて欲しかった。　　こうして、ルイズさんとのサバイバルが始まった。

サバイバル2日目。

私は死ぬほどの致命傷を負ったら負けで、ルイズさんに一撃入れたら勝ち……だが、そうは言っても手加減少な目で攻めてくるため、とてもじゃないが一発の弾丸もヒットしない。　　超超距離からの狙撃を弾丸をみて避けるなんて……

サバイバル4日目。

この4日間で、ミッドチルダの街並みは無惨な姿に変わってしまった。　　3日目辺りから、ルイズさんの手加減がさらに減った。

『25%の力で相手をしてあげましょう』とか言っつて、拳でビルを叩き割ったり、魔力弾が比喻でなく雨あられと降り注ぎ、砲撃魔法のような魔法も使ってきた。　　なぜ、『ような』なのかと言うと、威力があり得ないほど高いからだ。　　ビルが宙を舞うほどの威力と言えはわかるだろうか？　　これで25%とは……分かるっていたが……言いたくなる。　　……化け物か？

やっと、懐かしの我が家に帰ってきた。　ルイズさんとのサバイバルは結局ドロ―。　私は腕が無くなったりしていたが、致命傷ではなく、またルイズさんには一撃も入れることが出来なかったからだ。

「おっ、出てきたな」

クーが紙コップを手にこっちに来た。　確か、記憶だと地下訓練場で巻物に入った筈だが・・・　外だ。　青空が広がっている。　久しぶりに見た青空だ。　思わず、自分はやりきったのだと涙が滲んできた。　すると、大きな手が頭の上のせられた。

「よく頑張ったな。　中で何があったかは知らないが、嬢ちゃんを見れば、何となく分かるぜ？」

いつの間にか来ていたヘイズさんが頭を撫でてくれていた。　涙を拭う。

「よっしゃあッ！ それじゃあ、ぱあっとやるうぜ！ ほら、ティアナ」

そう言って、クーがオレンジジュースが入った紙コップと、紙皿を渡してきた。それで気がついたが、肉の焼ける匂いがしてきた。

「・・・バーベキューですか？」

「まあな、っとクー！ まだ食うなよ」

家の庭でバーベキューとは・・・ 初めてだ。 椅子は無く、立ち食いのようだ。

「はい、どひぞ」

「ありがとうございます！」

レンさんが焼いた肉や野菜をよそってくれた。 だいたい配置につくと、クーが咳払いをする。

「ゴホン・・・、それじゃあティアナの巻物修業終了を祝って・・・
乾杯ッ」

「乾杯ッ」

楽しいバーベキューだった。レンさんに聞いたが、メンバ
ーのほとんどは巻物で修業したことがあるらしい。だから巻物
修業とかクーが言ったのか・・・

1 6 社会見学!?

ミッドチルダの複雑にいりくんだ路地裏の先に、一軒のカフェがあった。そのカフェに、一人の少女がいた。ティアナだ。ガランとした店内のカウンターに座っている。

「……………と言っわけで、お願いしますね」

「仕方ない…………… それでは、その値でいいだろう」

「っ、ありがとうございます!」

何やら商談? の途中だったみたいだ。ティアナの嬉しそうな顔を見るに、値切ることに成功したようだ。

S i d e ・ ティアナ

巻物修業から早一ヶ月。時が経つのは早いもので、私が引き取られてから五ヶ月が経った。精神的には巻物修業で一年半ぐらいだから、二年近く修業していることになるのだが……………

正直、私ってどれぐらい強いのだろうか。　ルイズさんとは文字通り天と地ほど差があつて、エヴァやアルともそれぐらい差があるだろう。　クーとレンさんは一人ずつで手加減してもらえば、なんとか勝負になる。　クーは【気】で、影分身とかしてくるし、レンさんは主にミッドチルダ式の魔法を使ってくる。　魔導師ランクにしたら、二人ともAAAランクぐらいか・・・　でも、二人の本来の闘い方ではないらしく、ルイズさんによると、本気になればSSオーバーくらいになる・・・らしい。　ヘイズさんは派手な技とか使つてるところはまだ見たことないけど、模擬戦してもらつたら、私の攻撃が全く掠りもせず、簡易の【気】による強化だけで、銃を頭に突きつけられ、負けてしまった。　あの時の銃って質量兵器なんじゃ・・・　とにかく、みんな強すぎて自分がどの程度なのか実感出来ないのだ。　そんなことを考えていると、目の前に紅茶が置かれた。

「サービスだ。　さっきから何を難しい顔をしているんだ？」

「こつこつ言うときは、年長者に聞いてみるのがいいか・・・」

「アーチャーさん。　私ってどれぐらい強いですかね？」

「・・・なぜ唐突にそんな話になるんだ？　どれぐらい強いかなど、状況次第でどうとでもなるだろう」

それはそうなのだが・・・

「その顔では、納得いかないようだな」

「もつと具体的にないんですか？　こう、君は　レベルだーみたいなの」

「無茶を言うな。それに俺はティアナがどのくらい強いのか知らん」

「アーチャーさんぐらいになると、相手の強さとか分かるんじゃないんですか？　ド○ゴン○ールみたいに、『戦闘力たったの5か、ゴミめ』……とか」

「……そこまで正確に分かる訳がないだろう。それより早く飲め。紅茶が冷めてしまう」

カップに口をつけ、紅茶を飲む。　……美味しい。　あまり詳しくないが、とても美味しく感じた。　あ

「確かに相手の力量を見抜くことは生き抜く上で重要だが、それも確実ではない……俺に言えるのはこれだけだ」

イメージするのは常に、最強の自分だ。　相手がどれ程の力を持っているのか分からない、何か奥の手が有るかもしれない。　だが、そんなことにいちいち構ってはいは、誰とも闘うこ

となど出来ない。ならば、相手の力量を推し測りながらも、イメージしろ。戦う相手とは自身のイメージに他ならない。最強の自身のイメージにどれだけ近づけるか……己の限界を超えてもなお飽くことなく挑み続けたとき、必ず君は勝利を得ることが出来るだろう

灰色の瞳は此処ではない遙か遠くを見つめているようだった……

さて、弾丸の注文のため、アーチャーさんの店に行ってきた私が帰ると、リビングの扉の前に、アルとエヴァが立ち、聞き耳をたてていた。

「……何してるの二人とも？」

「ふふふ……」

「ふん」

私が尋ねると、答えとも言えない返事が返ってきた。 . . .
つと、次の瞬間、二人は音もなくササツと消えていった。 何故
かと首を捻っている、扉が開き、中から見知らぬ人が出てきた。
私も目立たないように脇による。

「では、むこうには伝えておくのでよろしく、ルイズ君」

中から出てきたのは 管理局のお偉いさん？

「あ、ティアナ。返ってきたの？」

「ルイズさん。今の人は」

「ん？ ああ、管理局のお偉いさんよ。 ちょっとした依頼らしく
てね。 たまにまわってくるのよ 管理局の外交上、表
沙汰に出来ないよーな危ない仕事だね。 まあ、夕ごはんまで、し
ばらくかかるから、テレビでも見てなさい」

「この時はあまり気にしていなかったのだが」

S i d e ・ ア ウ ト

その日の夜、ティアナを除いた全員がリビングに集まっていた。
時刻はもう二時過ぎだ。

「なるほど、社会見学ね。しかし、大丈夫か？ 嬢ちゃんはまだまだ十歳くらいの女の子だぜ？」

ヘイズの声だ。

「そうですが・・・なんとかなるでしょう。それに、何も一人でやらせる訳ではありません。あくまでも見学です」

「そうそう。それに・・・遅かれ早かれ、ティアナが戦う道を選んだ以上、いつかはやることよ。無茶ぐらいがちょうどいいんじゃない？」

「そ、そう言うもんか？」

アルの言葉にルイズが賛同し、ヘイズが納得？する。

「じゃあ今回は誰が行きますか……いくわよ！ ジャンケン・
……」

「……ポント」「……」

……

「それじゃ、クーとレンが今回の依頼担当ってことでよろしくー」

「はあ、負けちゃった」

「頑張ろうね、クー」

「ティアナのこと、よろしくね？ まあ最近は大分強くなってきた
と思うから、大丈夫だと思うけど」

「任せとけ。 あいつは妹みたいなもんだからな」

「うん。それに、私とクーの二人なら、誰にも負けない」

その夜、ティアナは妙な寒気を感じたそうな……

S i d e ・ ティアナ

黒い長袖のインナーに、これまた黒の、ポケットが沢山ついた長ズボン。赤いラインが入った、軍用？のブーツ。そして、その上から赤い、足元まで届くコート。黒い、指先が出せるようになってるグローブ。……それらを朝起きた私が、リビングに来ると、渡された。

「……………これって……………」

「あなたの戦闘服よ？ 全部、耐魔法・物理処理がされた特注品よ？ 大きくなっても使えるように、サイズ変更機能もつけておいたわ」

……………嬉しいのだが、何故か悪い予感がした。 後ろに控えているメンバーが、早く着替えて来いと視線で言っているので、私は洗面所で着替えた。 ご丁寧に、銃を装備出来るようにベルトもあった。 両脇の下に【デザートイーグルD】、腰の裏に【P90D】が装備出来た。 【レミントン700D】は……………ちょっと無理だ。 腰のまわりに弾倉をセットして……………完成！ ……………うん、結構似合ってる……………かな？

着替えた私はリビングに向かった。

「うん！ 似合ってるじゃない。 前々から皆で相談して作ったのよ」

と、ルイズさん。

「やっぱり赤だよなー」

と、クー。

「クーとお揃いだ」

と、レンさん。

「ふふふ」

・・・アル。 意味が分かんない。

「なかなか似合ってるじゃないか」

と、エヴァ。

「ま、その装備なら何とかなんだろ」

と、ヘイズさん。 ……『何とかなる』ってやじうじう
ことだろ？

「ま、こっから先は何があるかわかんねーからな。用心のためさ
！常に臨戦態勢でいけっつーこと」

クーがなにか言っている。

なに？

臨戦態勢？

Wh

y?

「んじゃ行くか」

そう言っつて、私はいつの間にか車の後部座席に乗せられていた。
・
車なんてあったんだ。　　・・・・じゃなくて！

「どつ言っつことですか！？ 何故に車に？」

車にはクーとレンさんが乗っている。

クーが運転だ。

「お、そつだ。 向こうに着いたら、これしといたほつがいいぜ？」

そう言われ、渡されたのは、運動する人がたまにつけているよ
うな、サングラス？だった。

「え？ あ、ありがとう。 じゃなくて！」

「逝ってらっしゃーい」

「生きて帰ってこいよー」

物騒な言葉が含まれていたような気がするが、ルイズさんたちが手を振って見送っている。さっきから思ったけど……何が起きてんの!?

「それじゃ、出発ーっ」

「おー」

おー、じゃなくて……

「どっへー!?!」

こうして、私は朝起きてからの一連の動きに着いていけず、何処とも知らない場所へと、クー、レンさんと共に向かったのだった……

1 7 社会見学!!!?

Side・ティアナ

「なるほど・・・ 依頼で、ボディーガードみたいな仕事が入ったのね」

「ああ。 ルイズが、『ティアナもそろそろ実戦の雰囲気を経験した方がいい』とか言い出してな。 まあ、ちよつと命の危険がある社会見学って感じだよ」

ルイズさんめえ。 私は今、ミッドチルダの首都クラナガンの、あるビル目の前に来ていた。

「・・・まあ、わかりました。 命の危険がどうたらこうたらも、執務官になりたい私には、いつか経験しなきゃいけないことだし・・・でも・・・」

周りを見る。 ・ ・ ・めっちゃゴツい男四、五人がデバイスを構えて私たちを囲っていた。

「私がボディーガードしてもらいたいんだけど・・・」

「なんか軽い行き違いがあったみてーだな」

「よくあることだよ、ティアナ」

・・・クーあんたはともかく、レンさん・・・・・・・・貴女までそんなこと言いますか・・・

Side・アウト

ミッド臨海空港に、一人の男が降り立った。黒い帽子、黒いコート、黒い靴。黒づくめの男だ。その男が空港の出口に歩いて行くと、二人の女が車を停めて待っていた。女が敬礼する。

「・・・・・・・・下準備は出来ているな？」

「はい、プロフェッサー」

Side・ティアナ

「クー！ 早く誤解を解いてよッ！！」

クーの襟を掴み揺さぶる。 私は今、デバイスを構えたゴツい男たちに囲まれている。 剣型のデバイスを見るに、おそらくベルカ式……

「面倒臭いし、のしちまおうぜ」

「絶対そっちの方があとあと面倒でしょうが！！！！」

私はコートの中に右手を突っ込み、左脇の下の拳銃型デバイス

【デザートイーグルD】に手をかけ、何時でも抜き放てるように構える。

「護衛を頼んだら、非魔導師の男に、女が二人だと？　なめてるのか!？」

「いずれにせよ、我々にやられる程度の助っ人など必要ない!」

「腕を試させてもらおうか」

そんなことを言いながら、男たちが襲いかかるうとしてくる。

「よかつたなティアナ。　さっそくその仕事服が役に立ちそうだな?」

「良くない!　どうすんのよ!？」

「こっすんだよ」

言葉と共に、クーの姿が一瞬ぶれる。　すると、残像でない、実体を持った分身が、一人一人に飛びかかる。　本体のクーはその場から動いていない。

「よっと」

軽い掛け声と共に、分身たちが、男たちの鳩尾に一撃喰らわせ、気絶させた。　流石はクー……

「本体の半分以下の密度でこれかよ……弱っ」

確かに。　言っちゃ悪いが、もっと強いかと思った。

牽制のような攻撃で気絶するなんて……　人は見かけによらな
いって事が。

それにしても……

「倒しちゃって本当によかったの？」

「ま、襲いかつて来たんだから大丈夫だろ」

「……出番がなかった」

レンさんがそんなことを言っている。　そんなレンさんをク
ーがなだめていると、ビルの中からいかにも金持ちって感じの男と、

それを護衛するように、女一人、男が二人ついてきた。

「お見事お見事・・・ シシシ・・・ 流石は噂に名高い【紅き翼】」

「ふん、噂に名高い質量兵器の商人も、管理局のお膝元じゃあアームドデバイスがせいぜいか？ ゴーシュさんよ」

金持ち風の男はゴーシュと言うのか・・・ って、質量兵器の商人！？

「そんな人聞きの悪い。私はただ、魔力を持たない人でも戦える武器を欲しがっている人に売っているだけです。クク・・・ まあ、戦場で使われることも多々あるようですがね」

そんなことをビルに入りながら喋っているクーとゴーシュさんとやら。 はあ・・・ 初っぱなから、変なことがあったし、先が思いやられる・・・

「依頼内容を一応確認しとくぜ」

「シシシ……なーに簡単なことですよ。私がミッドチルダにいる三日間の身辺警護です。職業柄、敵が多くてね。管理局も表だって護衛は出来ないものの、私がミッドに居るときに殺害されるのはいろいろ困るとみえる……」

長テーブルに座らされ、ゴーシュさんの説明を聞かされている。

「で、オメーを狙ってる殺し屋に、AAランク以上魔導師がいるってのは本当か？」

「シシシ……あくまで噂ですが……私の部下だけでは心配だね」

殺し屋……って殺し屋!? あの殺し屋よね?
なに? もう狙っている奴が居ることが分かっている人を護衛するわけ?

「ちょっと、クー」

「ん? 言ったら、ちょっと命の危険があるって」

ちよつとどごろじゃないじゃない！　まあ、私が正面きつて闘う訳じゃないと思うけど・・・　そんなことを思っている。と、ゴーシュさんに秘書の女の人？が何かを言っている。

「シシシ・・・　それでは【紅き翼】の諸君。　私は早速商談があるのでね、ホテルまでの護衛を頼みますよ？」

「まあ、任せとけ。　そのかわり、すべて俺のやり方でやらせてもらっせー！」

大丈夫だろうか？　大丈夫、今までの修業を思い出せ！
私なら生き残れる！

S i d e ・ ア ウ ト

一台の車が、とあるビルに向かっていった。　その車を見つめる黒ずくめの男・・・

「……………セットアップ」

『Roger』

その手に握られたのは、二刀の小太刀。逆手に持ちながら、男は自分が立っているビルから……………飛び降りた。

「ん？」

「おい、何だあれは!？」

車の運転席に座る男たちが気づくが、もう遅い。

『Dark』

飛び降りながら、男は両手に持った小太刀を交差させる。刀身の長さが三十センチ程だったのが、黒い魔力刃に覆われ、二メートル近くまで伸びる。

「……………スラッシュ」

次の瞬間、車が×字に切り裂かれた。轟音を立てながら、横転する。

「うっ……」

呻く護衛の男。この車にはゴーシュが乗っていたのだ。

四分割された車に近づき、止めを刺そうとする黒い男。二人の護衛のうち、一人は逃げ、もう一人はデバイスを起動させ、剣型のデバイスを構える。

「ちくしょうッ！！！」

悪態をつきながら斬りかかってきた男を黒い男は……

「……シッ」

短い呼気と共に首をはねた。鮮血が噴き出す。その一連の動きに、まわりの人間はこれが現実であることに気がついたのか、叫び声をあげ、逃げ始めた。

「……」

そんなことは意にも介さず、車に近づく。が、そこに転がっていたのはゴーシュに似た服を着せられた……

「マネキン・・・だと？」

小太刀を一閃。 車を跡形もなく吹き飛ばす。 男は念話
で誰かに話しかけた。

『どっとなっている？』

『
』

「【紅き翼】・・・だと？ ふふ、【紅き翼】・・・はは
は、裏をかかれたか！ 流石だ。 つまらん仕事かと思ったが、
・・・たのしくなってきたじゃないか！ なあ、【ブラッディア】」

『That's right』

男は人混みに紛れるように姿を消した。

Side・ティアナ

さて、車でホテルまで向かう筈だったところをクーの言葉で、
リニアモーターカーを利用し、現地に向かうことになったのだが・
・
・

「・・・もう少し、まわりを警戒してくれないか、クー君、レ
ン君？」

「んだよ、今いーところなんだよ」

クーはレンさんと携帯ゲーム機で、通信していた。確か、
仲間と一緒に巨大モンスターを狩るゲームだ。 どっから取り出
したんだか？ と言うか、さっきから臨戦態勢の私としては、卒倒
しそうだ・・・・

「むちゃくちゃだわ！ ゴージュ様をこんな物リニアなんかに乗せるなん
て！」

「いやだねー、後ろめたいことしてる連中は、こんなも落ち着い

「乗れねーんか」

「・・・クー、閃光玉」

「おっと、了解。 畏頼むな」

「ん」

「こんふたりやーなにやってくれちゃってんのホントに!？」

「私も落ち着けないんだけど(怒)」

「こっちは命の危険があると言われて、神経すり減らしてるのに・・・」

「ま、安心しろ。俺やレンくらいになると、どんなに殺意を隠すのが上手い奴でも、十メートル以内に近づかれれば、気がつくからよ・・・」

「どびどびどびした! 殺し屋か!？」

「いや、レア素材が出た」

「マ・ジ・メ・に・や・ね！……！（怒）」

危ない危ない、私としたことが、キレかけたわ。 リニアが
駅に着き、人が出入りする。 ……何だろう？ 車内の
空気が変わったような……？ その時、クーとレンさんがゲ
ムの電源を切った。

Side・ティアナ

何だろっ、さっきの駅から、空気が変わったような気が・・・
この感じ、どこかで・・・

「そう言えば、いい忘れてたな。俺はともかく、レンはこれだけ近づけば、念話を傍受するくらい分けないんだぜ？ 下準備をしっかりやっておくとはなかなか手練れだな・・・ そうだろ？ ……女スパイさんよ」

そんなことをいきなりクーが言った。次の瞬間、秘書さんがナイフ型のデバイスを起動させ、ゴーシュさんの首を突こうとしたが、レンさんのシールドに防がれる。ちなみにレンさんのデバイスは左手の薬指にしている指輪だ。指輪の形で、すでに起動状態だ。AIはなく、幾つかの魔法だけが、登録されている、使い手のレベルによっては最弱にも、最強にもなるというデバイスだ。

「ちっ」

秘書さんは舌打ちをして、飛び退く。 そうだ、思い出した。 この感じは殺気だ！ あれはルイズさんとの修業の最初の頃だっただろうか 『プレゼントよ、あんたが闘う道を選ぶなら、いつかは感じる筈のものを今最高レベルで感じさせてあげるわ』と言って、殺気をあててきたのだ。 あの時は一瞬死ぬかと思ったし、全身の毛穴から冷や汗が吹き出たのを覚えている。 でも、違う。 この秘書からはそれほど強烈な殺気は感じない。 ってことは

「ティアナ！ スパイは任せた！ 俺とレンは親玉を叩く」

クーとレンさんが睨む先には 黒ずくめの男がいた。

「ふふ . . . 、流石は【紅き翼】バレたか」

あの人だ！ この強烈な殺気の主は！！ って『任せた』って、ちよつと ええ？

秘書さんがナイフ型のデバイスを構えて、私に斬りかかってきた！

「シッ！」

「くっ！ クー、後で風穴あけてやるー！！！」

悪態をつきながら、私も素早く両脇の下にある【デザートイーグルD】を抜き放ち、銃身を刃を捌く。 ルイズさんの閃光のよ
うな斬撃に比べたら、ぜんぜん遅いが、ナイフと言う戦いなれない
得物が相手だからか、はたまた初めての実践で緊張しているのか、
なかなか反撃出来ない。

「くっ………」

いったいどうしたら良いの！！！？

「焦るなティアナ！ いつも通りだ、そんなんルイズや俺なんかに
比べたら、止まっているようなもんだろ？」

クーが、二刀の小太刀で斬りかかってくる男の斬撃を釣り針を
巨大化させたような武器？（たしか、【アンゲル】と言っていた）
で、捌きながら声をかけてきた。

………そうだ。 焦る必要なんてない。 相手を無理
に倒す必要もないんだから。

「はっ！……！」

タタンツと、タイミングを合わせ引き金を引く。 ものほんの銃弾並みまで集束・圧縮されたカートリッジの魔力弾が薬莖の排出と共にナイフの刀身に当たり、弾き飛ばす。

イメージするのは常に最強の自分だ

そんな言葉が脳裏によぎった。 ナイフを後方に弾かれた秘書が、意識を逸らした一瞬を突き、膝蹴りを鳩尾に喰らわせる。

私が銃撃しか出来ないと思ったら大間違いなのよ!!! 【気】の乗った一撃を喰らって後ろに吹き飛ばぶ秘書だが、たぶん自分から飛んである程度威力を殺した。 すかさず、両足に魔力弾を二発ずつ撃ち込む。 非殺傷設定だが、しばらくは立てないだろう。

「よく出来ました」

・・・へ? 横にレンさんが立っていた。 もしかして、ずっと見てたの? 私の頭を撫でる。

「レンさん・・・ 助けてくれても」

「ん、だけど、少しは自信がついたでしょ? 初めての实战で、自分と丁度いい相手と当たれるとは限らないから」

「……つまり、初実戦で丁度いいと判断した訳か。　　す
ると、ゴーシュさんが私とレンさんに言った。」

「は、早くクー君に加勢しろ！」

見ると、確かに黒ずくめの男は強い。　　リニア内と言う狭い
空間で、よくあれだけ自由自在に動けるものだ……。　　つと、
女スパイがやられたのを見たのか、小太刀が黒い魔力に覆われ、六、
七倍の長さに伸びた。　　高速移動魔法で、女スパイまで駆け寄る。

「……ここは私が不利のようだ。　　一時撤退させてもらおう」

そう言つて、アイツはなんとリニアを輪切りにした。　　轟音
と共に火花を散らすリニア。　　急いで緊急停止ボタンを私は押す
が、車両が脱線しそうになる。　　ヤバくない？

「ちっ、アイツなんつーことしてくれんだ！　　レン、頼む！」

「……分かった」

脱線しそうになる車両を風が包み込み、安定させる。　　レン
さんは魔力変換資質【風】を持っている。　　猛烈な風がリニアを

止めるが……

「……逃げられたか」

クーが言った。あまりリニアに人が乗ってなかったからよかったですものを混雑しているときにやられたらどうなっていたんだろう？ 想像してしまい、一瞬寒気が走った。

「ちっ、管理局がうるせえかなー、早いところ商談のホテルとやらに行こうぜ」

「ん」

「ま、まさかスパイがいるとは……」

「ゴーシュさんが青ざめた顔で、呟いた。
私もそう思うわよ。
……全く、一日目でこれとは……
どうなっちゃうの？」

「ここが商談のホテルとやらだよな？」

「ああ」

リニアを逃げるように・・・実際逃げたが・・・後にした私たちは、ゴーシュさんの商談があると言つホテルにやって来た。ホテル一つを貸し切りのようだ。金持ちはいいな。こっちは弾代に悩まされてるってのに・・・

「お待ちしておりました。ゴーシュ様ですね？ 最上階へどうぞ」

エレベーターに乗り、最上階に向かう。そこには・・・誰も居なかった。

「ちっ、商談自体が畏かよ。手がこんでんな」

「なっ、どう言うことだね!？」

狼狽するゴーシュさん。と、言いつつも私も驚いている。商談が畏か？

「つまり・・・」

「つまり、こう言うことだよ。 武器商人、ウィリアム・ゴーシュ」

現れたのは、つい数時間前に襲撃してきた、黒ずくめの男だった。既にデバイスを起動させている。それだけではなく、周囲から数十人の女達が、各々の武器を手に持ち、私たちが今いるホールに押し寄せてきた。

「まったく、本当なら最初の車での移動でカタがついていた筈なのに・・・ 【紅き翼】が出てきてはかなわんよ」

「ならさっさと退け、今なら見逃してやるぜ？ お前じゃ俺には勝てねえ。 リニアで分かっていると思ったんだけどな」

クーがアンゲルを取り出し、構える。

「レン、ティアナ、周りの雑魚と、ゴーシュの護衛。 頼むぜ！」

「分かった」

「ッ了解！」

「私がお前に勝てないだと？ ふふふ、それはどうか？ ブラッ
ディア、リミッター解除」

『Roger』

次の瞬間、男の魔力がはね上がった。 どうやらリミッター
で自分の魔力を抑えていたようだ。 ……クー、大丈夫よ
ね？

「おらッ！」

「はああああ」

クーと男が激しくぶつかり合い、天井をぶち抜いて、外に出て
いってしまった。 ……信じて、目の前の敵に集中しよう。

「シッ！」

無心で引き金を絞る。 狙うのは足や武器を持った手、一発、
二発、三発、四発、五発、六発、七発。 両手に持つ【デザート

イーグルD】からそれぞれ七つの空薬莢が飛び出たところで、弾倉を排出。

異空弾倉！！！

すかさず、ルイズさん直伝の物質転移魔法を発動。空中に【デザートイーグルD】の弾倉を転移させ、リロード。後ろから迫ってきた斬撃をしゃがみながら回避、同時に蹴りで足を刈る。

こけそうになったところで、コロラド撃ち、頭と腹に二発ずつ撃ち込む。非殺傷設定だからたぶん死なないだろう……。たぶん。今ので七人を無力化したはず。辺りを見渡すと、まだまだ二十人はいた筈の敵が、すべて倒れていた。……。流石レンさん。

「レンさ……」

声をかけようとしたら、風の刃が顔の横を通り抜けた。後ろで悲鳴と共に、やられたフリ？をしていた女が吹っ飛ぶ。後

「油断しない」

「は、はい！」

注意深く辺りを見渡す。 とうやら全員気を失っているようだ。 一息つくつとしたその時 !

「のわあああッ」

天井の穴からクーが落ちてきた。 所々斬られ、出血している。 . . . ヤバイかも？

「クー!!!!!!」

レンさんが駆け寄る。

「大丈夫だ。 まだまだ行ける」

そう言っつてクーは立ち上がった。 それにしても、クーをここまで追い詰めるなんて 強い!

『Dark』

「スラッシュ!!!!!!」

天井の穴から現れた男は×字の巨大な魔力刃を飛ばしてくる!

「らあああッ」

「【エア・バースト】！！！」

クーが気弾、レンさんが風を集束させた竜巻を放ち、相殺する。衝撃でホールの壁とかにヒビが入ったけど大丈夫だろうか？

再び睨み合う黒ずくめの男とクー、レンさん。この二人が力を合わせてやっと互角？だなんて……絶対Sランクオーバーはある。なにがAAランク魔導師よ、間違うにも程があるでしょうが！

と、その時……

「動くなあ！！！」

ゴーシュさんの声が響いた。何やっちゃってんのこの人？その手には質量兵器らしき、拳銃が握られていた。

「こ、この大武器商人、ウィリアム・ゴーシュ様がただ逃げ隠れしただけか……お、思ったか！？ どうだ！？ 用心のた

め一挺だけ拳銃を隠し持っていたのさ!!!」

「……なに？　この人死にたいの？　クー達は勿論、黒ずくめの男にも……いや、魔導師には質量兵器……しかも、ただの拳銃なんて効かないも同然なのに。」

「バカ野郎！　隠れてろよ!!!」

「……バカ」

と、注意をクーとレンさんが一瞬。　ほんの一瞬そらした瞬間、男が間合いを詰めた！

「しまッ!!!」

「くッ」

「いくらなんでも余所見がすぎるな。　コンマ一秒も気を抜くなんて」

「うおおっ」

「きゃああっ！」

咄嗟にガードしたようだが、クーモレンさんも、男の斬撃に吹き飛ばされ、壁を突き破ってホテルの外に飛ばされてしまった！
……これって、最大のピンチ？

「こんなウジ虫のような奴に気をとられるとは……クーにレンとやら、甘すぎるな。まあいい、さっさと仕事を終わらせよう」

「う、うわあああ」

錯乱したように銃を乱射するゴーシュ（もう、敬語はいいや）。
あつと言う間に間合いを詰められ、ついでに弾切れに……
つて、殺させる訳にはいかないのよ！

「待てえええ！」

腰の裏から素早く【P90D】を取り出し、十発ほど連射。
……だが、シールドで防がれる。私の弾はカートリッジを使って、二挺拳銃でAAランク。この、サブマシンガンでAランク魔導師の障壁までなら貫通する。推定Sオーバーのあの男に通用するとは思っていないが、気を引くくらいなら出来るだろう。

「・・・見逃してやろうと、思っていたのだがな。 邪魔するなら仕方無い」

「うぎゃあああ・・・足ががああ!!!」

ゴーシユの足を蹴りで折り、私に向かってきた。 素早く二挺拳銃を取り出す。

「フッフ・・・、その若さで大したもんだ。 だが、まだ私と死合うには早すぎたな」

銃撃はシールドで難なく防がれ、小太刀を一閃してきた。

グリップで受け流し、引き金を絞る。 火花を散らしながら、魔力弾が弾かれる。 ダメだ、効かない。 いったいどうすれば！

「くっ・・・ かはっ」

ルイズさんでスピードには慣れていいるとは言え、だからといって捌ききれぬ訳もなく、腕を浅く切り裂かれ、さらに重い蹴りを腹にもらって吹き飛ばされる。 たぶんこの戦闘服でなかつたら、
・普通のBJハリアジャケットを装備していたら・・・アバラが四、五本折れていた。
ルイズさんたちに感謝。 でも、このままじゃなぶり殺しになる。 なんとかシールドを抜かないと・・・

「・・・左手に【魔力】、右手に【気】・・・合成」

咸卦法!!!

よし、成功。この状態だと、普通の状態よりワンランク上のシールドを貫通出来る。兎に角撃つてみるが・・・

「ふん、無駄だと分からないのか？」

少しの拮抗と共に弾かれた。このままじゃダメだ。どうすれば？ 考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ

『自分が死ぬ、最後の最後の瞬間まで思考を止めちゃダメよ？ 勝利の女神は気紛れだからね』

考える考える考える考える考える考える考える考える

『最強の自分のイメージに何処まで近づけるか・・・己の限界を超えてもなお飽くことなく挑み続けたとき、君は勝利を手に来るだろう』

考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える
考える考える もう【咸卦法】の継続時間が五秒を切ってる。

．．．．．最強の自分のイメージ．．．．．すべてを貫く弾丸。

貫く弾丸．．．．．

四秒．．．

貫く弾丸。 貫く 貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く

貫く貫く貫く貫く

三秒．．．

貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く貫く イメージ
しろ！ 私の．．いや、ランスターの弾丸に、貫けないモノな
んかない！！ 集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束
集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束集束
圧縮圧縮圧縮！！ 死ぬほど繰り返してきた事だ！ 出来ない筈
がない。 咸卦の気をすべてこの一発に．．．．

二秒．．．

「ランスターの弾丸は……」

一秒……

「……すべてを貫く!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

纏っていた【咸卦】の気まで集束・圧縮させた、今の私の限界を超えた一発が、超音速で黒づくめの男に突き進む。そして……
……シールドを貫通……した。……が。

「ぬおっ！」

シールドにかなり勢いを殺された弾は、男の小太刀を一本破壊するに止まった。……ヤバイ……死ぬ？

「この小娘がああ」

残りの一本で、止めを刺そうと言うのか、男が凄まじい勢いで

踏み込んでくる。　　が、私に余力は残されていない。　　はは、壁を背に尻餅をつく。　　もう魔力弾の一発も出せないや……。走馬灯のように、今までの修業や温かかった食事風景……が脳裏をよぎる。　　ああ……私には幸せすぎる日常だったな「ちよつと待ったあああああああ!!!」

「な！　　がああああッ」

クーが壁を突き破り、男を蹴り飛ばす。　　虚を突かれたのか、クリーンヒットしたらしく、男は悶える。　　クーが突き破ったところから、レンさんもやって来た。　　た、助かったの？

「悪かったなティアナ。　　大丈夫だったか？　　怪我は……ってかなりボロボロ!?　　アイツ……」

「でも、凄いよ。　　生きてるし、相手のデバイスを一本壊したみたい」

安堵からか、涙が溢れてきた。

「ヒック……じ、ジヌかど思ったんだかね……ヒック……」

「……よく頑張った。初実戦でここまで出来りや言うことねえよ。あとは任せて、そこで見とけ。ちょっとだけ本気ってヤツを見せてやるよ。レン！」

「うん」

あえかなる夜へ 伽つむぎ まなふたに栄ゆる
おもしめし そまどろ包み いし明かし 我といましと
息の緒に 相生性の契り籠ん あからしま風を纏いたり 甘
ない相具す うきかわさん

詩のような言葉を二人が呟く。すると、レンさんが風を纏った大剣に姿を変えていく。これは……古代ベルカの融合騎？ いや、なにか違う。それに二人からは魔力を感じない。 いったいどうなってる……

「く、やってくれたな」

男が頭を振って立ち上がり、一本になった小太刀を構える。

「貴様……その大剣は……」

「久々にいくぞレン」

『わかった。 おもいつきりやっちゃんおう』

紅波のさを弓に宛行し 瞬きの間ものがわなん ゆ
くりかなりと八重波は 僕の心知るを結わん

凄まじい、と言う言葉すら超えた、表現しがたい程の風が集束して行く。 こんなのだ。 人間の扱える出力じゃない。 . . . 更に異常なことはこれだけ凄まじいのに、魔力をちつとも感じないのだ。 いったいなんなんだ？ レンさんは大剣になつちゃうし. . . ? そして、集束した風が解き放たれた。

ゼフィロスタート
西風の阿!!!!

「ぬっつ おおおおあああああああッ」

クーとレンさんが放った一撃は、五十階建ての巨大ホテルを縦に真っ二つにし、更に大地に深い爪痕を残した。 . . . ハツキリ言う。 スケールが違いすぎる。 黒づくめの男は. . . . いた、瓦礫に埋もれて瀕死状態だ。 まあ、死んでないだけましか. . . . 余計なことをして、私に死を覚悟させたゴージュは. . . . 生きていようだ. . . . チッ

「つとやべえな、管理局が来る前に引き上げないと・・・」

「ふぁ・・・ 久しぶりだったから、眠くなって・・・ZZZZ・・・」

「レーン！ 寝るな、頼むから！ 捕まる捕まる！ くっ、しやあない」

クーが寝てしまったレンさんを背負い、気絶したゴーシュを脇に抱えると、駆け出した。

「ティアナ、早いところ引き上げるぞ！！！！」

「ちょっと待つてよ！ くっ、立て、立ってちょうだい私の足！ こんなところで前科持ちなんかになりたかないわよ！！！！」

このあと、追ってくる管理局員を必死にまいたところで私は力尽きましたとさ。 メダシメダシ・・・じゃない？

1 9 旅行に行こう！ 前編

Side・ティアナ

さて、死を覚悟したあの社会見学・・・いや、あれを社会見学と言ったら、本当の社会見学に失礼か・・・から数週間。

今日は0069年のちょうど月も変わり、10月1日だ。

お兄ちゃんが殉職したのが、69年の4月15日だから・・・まだ、引き取られてから、半年程しか経っていない計算だ。

私の感覚では、数年は経っているような気がする程、ここでの生活は濃密で、そして温かかった。

修業はキツイが、それを除けば、何でもない日常を私は過ごしていた。

そんなある日・・・

「旅行・・・ですか？」

「そ、旅行。一泊二日のリゾートホテルが福引で当たったのよ

！アトラクションとかもあるみたいだし・・・ あんた、こう言うところに行ったことないでしょ？」

・・・と、言うことで私とルイズさんたちはレジャー施設・・・
ディニーランド的な？・・・に行くことになった。

正直に言おう・・・そう言う施設でどうやって遊んだらいいかわからない。
十歳の子供がなに言ってるんだと思うかも知れないが・・・うん、遊園地のようなところに行った記憶がない。
・・・ま、楽しみにしておこう。

翌日

転移魔法で、跳んだ先は何処かの船の中だった。
つと、ヘイズさんがやって来た。

「お、来たな。ここは俺の次元航行艦【Hunter Pigge on】の中だ。なかなか広いだろ？」

「次元航行艦まで個人所有してるなんて・・・流石」

「そつだ、今のうちに自己紹介させとこう・・・ハリー」

ヘイズさんが誰かを呼んだ。

すると、空中にディスプレイが現れ、そこに横線三本のマンガ顔が映し出された。

『初めまして。この艦の管制人格をやっております。ハリーです。以後お見知りおきを』

機械の合成音声なのに、やたらと抑揚が利いた声だ。

「まあ、ときどき疑似人格か？って思うほど人間臭い時があるが、よろしくやってくれ。さて、ルイズたちは向こうの部屋にいるぞ。だいたい二時間ぐらいでつくからな。ま、くつろいでてくれ」

そして、ヘイズさんは操縦室？に行ってしまった。

『クールなようで、熱血漢なところもありますが、ヘイズをよろしくお願いしますね、ティアナさん』

「え？ いや、私のほうが大分お世話になってるから・・・っ

て、あなたホントに疑似人格？」

「お褒めの言葉と受け取っておきます」

こうして、私は第十二管理世界フェディキアにあると言つ、リゾートホテル【エデン】へと向かったのだった。

Side・アウト

ティアナたちが船に乗って二時間。

フェディキアに着いた。 転移魔法を使い、リゾートホテル

【エデン】の正面ゲートへ跳ぶ。

「ス、スゴい！」

興奮気味のティアナ。 ルイズにエヴァ、アルにヘイズ、ク
ーとレンも、思い思いに楽しんでいるようだ。

リゾートホテル【エデン】　ひとつの大都市並みの総面積に様々なアトラクション、数々の次元世界の名物料理店がところせましと並ぶ。

・・・とても一日では回りきれない広大な土地の中心には百階建てと言う、超超巨大なホテルがある。　予約が一年先まで埋まっている程の人気があり、余程運が良くなければ泊まることは出来ないと言う・・・

「・・・それじゃ、船で決めた通りにね。　今は午前10時だから・・・6時間後の午後4時に中央ホテルで！」

「うしっ、んじゃ行くかレン！　ティアナ！」

「うん」

「うん！　早く行こう！　時間は待つてくれないよ！」

何時になく気合が入っているティアナ。
弱冠キャラが崩れている気もしなくもないが、初めての事だ。
仕方ないのかも知れない。

「遅れんじゃないわよ、今日は遊ぶぞー！……！」

「おー!!!!!!!!!!!!!!」

……はあ、まあ楽しんで来なさいよ」

グループをクー・レン・ティアナの十代？グループと、それ以外に分けて、一行はアトラクションに向かった。

ティアナの目が輝いている。

ちなみに、一行の服装は以下の通りだ。

ティアナ 黒を基調に両サイドに赤いラインが入ったジャージ。

クー トレードマークの赤い上下に黒のインナー。

レン 黒を基調にしたドレスのような服。

ルイズ 黒を基調に白いラインが入った長袖のハイネツク？にスカート（黒） ニーソックス（黒） その上から灰色のローブ。

アル 魔法使い風。

エヴァ そろそろ肌寒くなってきたのに、黒の袖無し制服？

ヘイズ 全身真っ赤の上下赤スーツ。

以上。

ティアナたち三人組がアトラクションの方向に走り去るのを見送るルイズ。

「・・・さて、次元世界の名物料理。堪能させて貰おうじゃないの！もしかしたら、クックベリーパイみたいなものもあるかも・・・」

「ま、行きたいところもないし、いいんだけどよ・・・」

と、ため息をつくヘイズ。すると、アルが問いかけた。

「それにしても、良く福引なんかで当てましたね？」

「そうね、何だったのかしらね？ 私って戦闘中以外は遅なんてからっきしなのに……ま、そんなこともあるでしょ……」

急に辺りを見回し始めるルイズ。

そんなルイズにヘイズが眉をひそめる。

「どうした？」

「……今、なんか視線を感じたような……、気のせいかしらね」

「視線……？」

「……まあいいわ。私たち……てか、アンタとアルの格好なんか目立つし、そのせいかしら？」

「おいルイズ、早く行くぞ。世界の珍味が待ってるんだ、時間は有限なんだからな」

「ええ、そうね」

どうも納得が行かないと、言った表情をするルイズだったが、エヴァに急かされ先を急いだのだった。

Side・???

あぶないあぶない。 まさか、こんな遠距離からの視線にも気づかれそうになるなんて…… 流石は【紅き翼】 仲間にも注意しておかなければ……

「こちら、デビル01。 ターゲットの入場を確認した」

『……了解。 作戦通りに行動しろ』

「了解。 あと、忠告だ。 一キロ離れた場所からでも、場合によっては気づかれる。 監視には細心の注意を」

『………了解した。各員にはこちらから知らせておく』

「頼んだぜ。通信終わり」

………さてと、組織を壊滅寸前まで追い詰めてくれたんだ。
お前らの命で償ってもらっぜ？ それに【紅き翼】の連中を
潰したとなりゃあ、オレらの名も売れるっもんだ。 へへ……
……

S i d e ・ ティアナ

『君達は栄えあるギャラクティカソルジャーの一員だ！ この星を
救うため諸君の健闘を……』

辺り一面から襲いかかってくる怪物たち。

その怪物たちを私は光線銃で撃ち抜く!!!

「おりゃー」

「やるなティアナ！ 流石に何時も銃で特訓してるだけはあるぜ！
だが……負けねー！！！」

クーが光線を連射する。 ふつぶ、馬鹿め！ 一体一体丁寧
に狙ってる私に勝てるだけでも？

無駄無駄無駄！！！！ ハイスコアを叩き出してやるわ
よー！

わーわーわーわーわーわーわーわーわーわーわーわーわーわー
わーわーわーわーわーわーわーわーわーわー

さて、宇宙船に乗りながら、怪物を倒していく、ライドアトラ
クション【ギヤラクシーウォー？】 なかなかの強敵だったけど・
……私の敵じゃなかったわね！ 次は……

「クー、レンさん！！！！ 次はあっちに行ってみましょー！」

む、なにになに……

『恐竜たちが襲いかかってくる、古代の島を船に乗って探検だ！
君は耐えられるか？』

やったるうーじゃないのよ!!!

「・・・何時になく楽しそうだな」

「こんなティアナ、見たことないかも・・・」

「さあ！ 早く早く早く早くハリーハリーハリーハリーハリーハリー
アップ!!!!!!!!!!!!!!」

Side・クー

「きゃー」

何時になくハイテンションなティアナが、楽しそうに・・・か

なり暴走気味に暴れまわってる。

まあ、年のわりに大人びてると思ってたけど、たまにはいいんじゃないかね？

「レン、どうした？」

なんだか、レンがボーとしてる気がした。

「ん。 私たちに子供が出来たら、こんな風なのかなって想像しちゃって……なんか良いね」

「こ、こ、こ子供！？ そりゃ嬉しいけどさ、けどさ恥ずかしいやら何やらでってなにパニックってんだよオレ！」

「……そうだな。 ……」

「……」

「……」

「……」

「・・・くっ」

「クスクス」

なぜか笑いが込み上げてきた。

腕を組むオレとレン。　そうしていると、ティアナが急かしてきた。

「早く行こう！　時間は待ってくれないんだから！」

オレが返事をしようとした、その時・・・

「ん？　な、なんだ！？　ッ！　ロボティラノが暴走したぞー！！」

職員らしき男が逃げ惑う。　すると、街中に巨大なティラノ

？　が爆走してきた。

しかも、俺たちの方に向かってきてる！？

「あぶねえな」

脇によってやり過ぎすか・・・　目立つと何かと不便だから
な・・・

「GWAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA」

って、引き返して、また来た！？

・・・どうなってんだ？石柱のオブジェにぶち当たり、石柱が折れる。

ヤバっ、石柱の影に人が・・・

「っと、大丈夫か？」

身体だ勝手に動いていた。一瞬で距離を詰め、石柱を支え、押し潰されそうになっていた青い髪の小さな女の子に声をかけた。

「あ、ああ、ありが、とう・・・」

あつぶねー、あと一瞬遅れてたらこの娘死んでたな・・・
って、かなり石柱が重い。

てか、オレの足が地面にめり込んでる。

「GAAAAAAAAAッ」

そこで、ロボティラノが再起動。

石柱を支えるオレに向かって、体当たりしてきた。 . . .
どうなってんださっきから？ 当たったら痛そうだな . . .

「ふっ」

「らあああッ」

レンが、両足を切断。 ティアナが、咸卦法？で肉体強化して蹴り飛ばした。 危なかったな。

「よっど」

石柱を下ろし、青髪の少女をみる。
ティアナと同じか、少し下くらいか？

「怪我はないよな？」

「う、うん」

涙を堪えている。 一歩間違えば死んでいたかも知れないんだから、当たり前か。

「大丈夫あなた？」

ティアナが、青髪に話しかける。

「……うん。もう騒ぎが大きくなってるけど、これ以上大きくなる前に逃げた方がいいな。」

「スバルって言うの？ 私はティアナよ。ま、もう会うこともないでしょうけどね。」

「ティアナ！ ずらかるぞ！ 事情を説明しろとか言われたら面倒だ」

「はい」

「レン、頼む」

「分かった」

レンが、突風を巻き起こし、その間に移動する。それでも、あのロボティラノ、オレを狙っていた気がする。……こりゃ、少しキナ臭くなってきたか？

それ

S i d e ・ ティアナ

途中、事故があつたが、そんなのはおかまえなしに私たちは
【エデン】のアトラクションを回った。 楽しかった。

ハイテンションになりすぎて、細かいところを覚えてないほど楽し
かった。 いやー、恐るべき雰囲気。 私の理性を悉く破壊し
ていくとは……………

楽しい時間はすぐ過ぎてしまうもので、あっという間に時間が
来てしまった。 まあ、充分堪能したし、いいか。

それにまだ明日もあるしね。

それにしても、あの事故？ 本当に事故だったのだろうか？
後になって思い返すと、クーヤレンさん、私を狙っていた気がする。
……………

ホテルの部屋は広がった、それはもう広がった。

具体的には『え？ここで戦闘訓練出来るんじゃない？』ってくらい。

運ばれてきた料理を楽しみ、風呂に入った後は、地下にある巨大カジノに行くことになった。ルイズさんたちは先に行ってしまい、今からクーとレンさんと共に向かうところだ。

「ギャンブルってあんまり好きじゃないんだけど……」

「まあ、行ってみろって。お前、昼間は暴走気味に楽しんでたんだからよ」

「う……」

エスカレーターで地下一階に向かう。

自動ドアが開くと、そこはレーザー光線で彩られた噴水（何故に地下に噴水？）のあるエントランス・ホールに出た。

そこを抜けた向こうが、……カジノ・ホールだ。流石に巨大カジノと言われるだけあって、とてつもなく広い。

「ドリンクいかがですか」

「カクテル、ウィスキー、コーヒー、全て無料になっております！」

「ご注文の方はお近くのウェイトレスをお呼びください」

エントランス・ホールを抜け、カジノに入ると、バーニーガールの姿をしたウェイトレスさんがボードを片手に歩きまわっていた。

「クー、ルイズさんたちは何処にいるの？　．．．．クー？」

問いかけても返事がない。　見ると、クーはバーニーガールを凝視していた。　その顔．．．いやその瞳の中に、ウサギが映っているのは気のせいではないだろう．．．．多分。

クーがなにかを呟いている。

「う、うさ．．．みみ．．．うさみみ、うさみみうさみみうさみみうさみみうさみみうさみみ」

．．．．！！！！！！？

「ティアナ、先に行つて。　クーはこうなると暫くこのままだか

ら

「え？ はい、はい」

「バンナガールを見て？
……クー、あなたの好み
って……」

「おかしくなったクーはレンさんに任せて、ルイズさんたちを探
す。」

「が、出入り口付近には居ないようだ。
途中、バンナなウェイトレスさんにオレンジジュースを注文し、
カジノの奥に行ってみた。」

「奥にはトランプやマネー・ホイールといった高額チップを賭け
るゾーンがあり、客層も本物のギャンブラーっぽい人々が多くなっ
てきた。」

「ルイズさんたちはいったい何処に？」

「すると……」

「ざわ……ざわ……」

「あの人たち……なんかしたんじゃ？
まさかとは思いますが、
やけに人が集まっているところを発見。」

人だかりに近づいていった。

「すげー、あいつ……. どんだけ負けてんだ？」

「ありえねえ、ルーレットの二択で、なんであれだけ外せるんだ？」

「おつまただ！ これ、連続31回目だ！」

話を聞くと、とんでもなく運が悪い人がいるようだ。何となく気になり、人込みをかき分けて、その運なしの人を見ると・
・
・
・

……. ルイズさんが居た。

周りではヘイズさんやエヴァが必死に止めようとし、アルが苦笑している。

「では、プレイヤーは次の賭け金をどうぞ」

こここのルーレットはまずプレイヤーがお金を賭け、次にディーラーがルーレットに玉を転がすようだ。

玉が転がされてからは賭け金の追加・変更は出来ないルールだ。

「は、ははは……. あり得ないわ！？ この私が……. 最強

無敵のこの私が、ルーレットごときに……………」

と言つて、ルイズさんは周りの野次馬にも気づかず、一人でルーレット台についている。

すでに相当キテイルよつだ……………」

「おい、ルイズ！ いい加減このへんで止めとけよ。 どんだけ負けてんだ？」

「そつだぞルイズ！ 今のも合わせたら、このカジノに来てからお前の貯金の10分の1が翔んだだろ？」

ルイズさんの貯金の10分の1…………… それはとんでもない大金だろう…………… なんとつて、ルイズさんが受ける依頼はほとんどが、危険度にしてSSS。 一般の管理局員の危険度がBぐらいだから、まあ、そのぶん報酬も桁外れだ。 一年や二年…………… いや、一生涯遊んで暮らせるほどだろう。 　その10分の1……………」

「なーにまだまだこれから…………… たつた数億負けただけよ……………」

……………！！！！！！？

私の弾代、何発分！？

私は負けた額に驚くと共に、ルイズさんがおいたチップの数に驚愕した。

1枚につき百万を意味するチップが100枚……一億!?

「ちよつ、お前!!!」

「馬鹿か貴様!!?」

ヘイズさんとエヴァは驚きを通り越して、もはや呆れが入った声で言った。

野次馬たちが拍手喝采しているが……身内としてこれはいくらなんでもちよつと……

その100枚を全てテーブルの【黒】のマス目に置いた。

目が血走ってますよルイズさん……てか、修業の時より今の方が怖い。

カララララ……と乾いた音をたてて、玉がホイールの上を回る。

回転は徐々に勢いをなくしていく。

赤に入って、跳ね、今度は黒に入って、跳ねて……。

ルイズさんが血走った目でなにかを呟いている。

「私は最強無敵伝説の【虚無】にして【光と闇の女帝】……こんなところで負ける訳がないいや負けていいはずがないわこんなどこ

ろで負けたら今まで乗り越えてきた強敵たちに申し訳がたたないっ
てもんでしょうがさあ入れ黒に入ってこいや黒に黒に黒に黒黒黒黒
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒
に・は・い・れ」

・
・
・

そして、玉は一つのポケットに入り……、止まった。

玉は【赤】に入っていなかった……が、【黒】にも
入っていなかった。 親の総取りを示す緑のポケット……【
0】の数字が光輝いて見えた……

「燃えた……燃え尽きたわ……真っ白に」

休憩所のような場所で、私たちはお茶をしていた。 クーた
ちとも合流した。 何故かクーがボロボロになっていたが気にし
ない。 それより、今はルイズさんだ。

うわ言のように、さつきから燃え尽きたと呟いている。

「たつく、俺たちは止めたぞ？」

「馬鹿が」

「いい見せ物でしたよ」

「かはっ……」

アルたちの止めで、ルイズさんは沈んだ。

時計を見るとそろそろ11時になるところだった。

「さてと、そこで燃え尽きてる奴はほつといて、俺たちは部屋に戻るか？」

ヘイズの言葉に、みんなが頷きエントランス・ホールの方に向かおうと、席を立った。

……その時！

ふつと、いきなり灯りが消え、真っ暗になった。すぐに灯りはついたが、なにかおかしい。

周りの客も訝しげに辺りを見回している。
と、次の瞬間・・・

ダンツと、魔力弾が天井に向けて放たれた。

「動くな！ 動けば死ぬことになるぞ！！！」

顔を黒い仮面で隠し、真っ黒なスーツを着こんだ男たちが、エントランス・ホールの方からなだれ込んできた。

総数は見えるだけで三十人・・・ っと、いきなり突っ伏していたルイズさんが私を突飛ばし、男たちから見えないようにテールブルクロスの下に私を押し込んだ。

ウインクひとつ、ルイズさんは立ち上がる。

「【紅き翼】！ ここにいる奴らを皆殺しにされなくなかったら、抵抗せずにこっちに来てもらおうか！」

黒男の一人が怒鳴った。 ルイズさんたちはため息を吐いて、男たちの方に歩って行く。

・・・もしかしなくとも、ヤバい？

ルイズさんたちだけならどうとでもなるけど、周りの客が全て人質じゃ・・・ いや、人質を無視する可能性も・・・

永い夜になりそうだ。

1 1 0 旅行に行こう！ 後編（前書き）

咸卦法の設定が、少しオリジナルになっています。

Side・ティアナ

さて、人質は多数、敵も三十人と多数・・・いったいどうすれば？

テーブルクロスに隠れながら私は考える。

あれから客や従業員は一ヶ所に集められ、周りには各々デバイスを構えた男たちが睨みを聞かせている。考えていると、ルイズさんから念話があった。

『ティアナ、聞きなさい。私たちは正義の味方じゃない。もしもの時は人質なんて無視するわ』

やっぱり・・・

『でも、あなたは将来管理局に入るんでしょ？ だったら、人質全員救って見せなさい。一瞬だけ隙をつくるから、そのコンマ数秒で、あいつらのデバイスを破壊、もしくは手を撃ち抜きなさい。まだ練習中だと思うけど、アレを使えばなんとかなるでしょ？ 幸運を祈るわ』

・・・無茶を言ってくれ。

私は何時も持ち歩くように言われていた【転移魔法符】を使って二丁の拳銃と装備するためのベルトを呼び出した。

音を立てないように装備。 両脇の下にホルスターがくるよ
うにし、そこに銃を収める。

・・・アレ・・・か。

何時ぞやか見せてもらった【居合い拳】を参考にして編み出した、私の咸卦法時にしか使えない技。

【居合い弾】・・・、アル、というかガトウさんは魔力による
肉体強化だけで出していた不可視の技だが、私は咸卦法時に、しか
も拳圧ではなく射撃をするため、難易度は格段に低い。 と言っ
ても【居合い拳】と比べたらで、かなり難しい技だが・・・

「ふー、・・・やってやるわよ」

気合いを入れる。

出来るだけ咸卦法を静かに発動する。

・・・

・・・気づかれてないわね。

「おい、もうひとりガキがいたハズだ、何処にいる!？」

「あの娘は・・・」

ルイズさんが右手を私が隠れているテーブルに向けて・・・

「ククッッッ！！！」「」「」

フィンガースナップと共に手から閃光を放った。

凄まじい光は注目していた男たちの目を一時的に潰す。

いま！！！！？

しゃがんでいる身体に力を入れ、テーブルクロスを突き抜け、飛び出る。

「シッ！！」

一息に六発。

発砲音がしたときには、既に両脇のホルスターに銃が収まっている。

弾丸は今にも人質に向かって魔力弾を放とうとしている男たちのデバイスを持つ手を撃ち抜く。

「ククッッ」

「手が、手がぁー！！」

「「「つ！！！」」」

撃つてから気づいた。

非殺傷設定で放ったハズの私の弾丸は、男たちの手に風穴を開けていた。

手を抑え、うづくまる者。

痛みを無視して反撃しようとする者。

みんな私に撃たれた者は、血でデバイスを持つ手を赤く染めている。

刹那の間に考える。

なぜ？ 殺傷設定にしていないハズ・・・

その時気づいた・・・咸卦法・・・【気】と【魔力】が混ぜられているせいで、非殺傷が出来ないのか・・・？

【居合い弾】で撃ち出すのは【咸卦の気】

撃ち出す弾丸だけ魔力にするなんて器用なまねは、私には出来ない。

背中に氷を押し付けられたように背筋が寒くなった。

今、この時、急所を撃ち抜けば、人は簡単に死んでしまう。男たちはまだ二十人以上いる。

両手に持つ双銃が重く感じた・・・

「あ、あああああ!!」

思考はまとまらない。

でも、身体に染み付いた動きは機械的に男たちに銃口を向け、引き金を引く。

おそらく、常人には……いや、かなりの実力者でも、私が腕を組んでいるように、はた目には見えるだろう。

しかし、実際には目にも映らぬスピードで射撃を繰り返しているのだ。

男たちは何が起きているか、分かっているかも知れない。

私は撃った。

手を足を肩を……
動けぬように四肢を……

一瞬のようにも永遠のようにも感じた。

気がつけば、男たちは床に赤い水溜まりを作って倒れていた。

「はあ……はあ……はあ……うっ」

息が乱れる。

この程度の運動で、息切れするはずがないのに……喉の奥から、すっぱい何かが込み上げてくる。

それを無理矢理飲み込む。

周りが騒がしくなってきた。

人質に取られていた人達が事態に気づき始め、パニックに陥りそうになっているようだ。

眠りの霧

瞬間、濃霧が人々を包み込んだ。

次々に倒れていく。

どうやら、寝ているようだ。

「安心なさい」

後ろにルイズさんがいた。

「誰も死んでないわ……後始末その他諸々は私たちがやっておくから、あんたは休んでなさい。……ひどい顔よ？」

そう告げられ、私は目の前が真っ白になった。

「……………」は

目を覚ますと、そこは来るときに乗った【Hunter pion】のなかだった。

「私……………は……………」

脳裏によぎるのは、血を流しながら倒れていく男たちの姿だった……………

「ああ、ああああ……………」

こんなことで身体が震えるなんて駄目だな私……………

絶対、執務官になるって誓ったのに……………

お兄ちゃんのことをバカにした奴らを見返してやるって誓ったのに……

人を撃つたぐらいで、震えが止まらない……

私は、何処かで道を間違えたのかな？

私は、何処で道を間違えたのかな？

私に撃たれた人たちはどうなっただろうか……死んではいないと……

……強くなりたかった。

強くなれば、執務官にもなれるし、お兄ちゃんをバカにした奴らを見返してやるって思った。

強くなれば、誰かを守れると思った、私みたいにお兄ちゃんを亡くして泣くような人が、出来るだけ少なくなるように……

それに……

お兄ちゃんを殺した奴を見つけ出して、仇をとれると思った。

．．．．．わからない。

強さとはなんだろう？

ツヨイとはいったい．．．．．

うやむやになってしまった旅行から一週間が経った。

襲ってきた犯罪集団を末端まで殲滅したルイズたちは、リビングに集まっていた。

ティアナはいない。

「……どうにかなんねえのかよ!? 今日で一週間だぞ! ティアナが部屋に閉じ籠って。俺は言葉でなにかを伝えるのが下手だけどよ、ルイズ! お前ならなんとか出来るんじゃないのかよ?」

クーの言葉に、しばらく間をあげ、ルイズが答えた。

「……たぶん、初めて人を傷付けたことで、混乱してるんでしょうね。クーもレンもヘイズ、あんたも……まともな精神をしてる奴なら、自分が初めて人を傷付けた……殺したとき、悩むハズよ。……立ち直らせるだけなら、カウンセラーじゃないけど私にも出来るでしょうね」

「なら! 「クー」なんだよ、ヘイズ?」

「お前さんも、この世界……戦う道に生きる以上、分かっただろう? 戦う理由は自分だけのもの。人から教えられた理由なんて、

クソくらいだつとな。確かに、戦う理由を『正義のため』とか、他に預けちまつてる奴も世の中には大勢いるだろう。けどな、人を傷付けることに、免罪符はねえんだよ。苦しくても、背負わなくちゃならねえ」

「……ああ」

「ましてや、嬢ちゃんの目標は執務官。場合によっては相手を殺さなくちゃならない時もあるだろう。そんな時、責任を他に預けることはして欲しくねえ。十歳ちよつとの女の子が悩むことじゃないけどよ、武器を捨てるか、それとも背負って前に進むか・・・岐路に立ってるんだと思うぜ？ それに答えを出すのは俺たちじゃねえ、嬢ちゃん自身だ」

「……っ！ そうかも知れねえ。けど、……けどよ」

「確かに、十歳のティアナにはまだまだ早いでしょうね。でも、人生つてのはそんなもよ？ 準備万端の時に、何事も起こるとは限らないわ」

「……」

ルイズの言葉に沈黙するクー。

「クー」

「レン……………」

「私たちに出来ることはないかもしれない……けど、祈ることは出来る、信じて待つことはできるよ」

レンの言葉にクーは目を見開く。

そして、身体を震わせた。

「……はは……ははは……レンには敵わないな。信じて待つ……か。そうだな、ティアナはそんなに弱くねえ。今はうつ向いてても、絶対に前に進むと……そう信じて待つか」

レンは頷く。

その時、クーは気付いた。ルイズたちも、自分と同じようにティアナが心配なのだ。

そして、呟いた。

「がんばれよ、ティアナ」

S i d e ・ ティアナ

目を閉じると、男たちのうめき声と鮮血の水溜まりがうかぶ。

仕方なかったんだ、咸卦法に非殺傷設定が出来ないなんて知らなかったんだから・・・

自分は気付いた後も、引き金を引いた・・・

仕方なかったんだ、今にも人質が殺されそうだったんだから。それに身体に染み付いた動きが悪いんだ。私は悪くない。

本当はわかってる。自分が狙いを定めて、自分が引き金を引いた。

・・・旅行から帰ってきて、ずっと部屋に閉じ籠りっぱなしだ。

お腹が減っても部屋にあったカロリーメイトですませる。

寝ようとしてもあの時の光景がつかんでろくに眠れない。
このままじゃ駄目だっってわかってる。
わかってるけど……

「……………」

ふと、二丁の【デザートイーグルD】が視界に入った。
手にとる。

「……………重い」

とても重く感じる。
部屋に閉じ籠って筋力や体力が落ちたとかじゃない。

「……………出掛けよ」

こんなところに閉じ籠ってたら、考えが暗くなって当然か……
私はあてなどなく、部屋から出た。

気付くとアーチャーさんのお店の前に来ていた。

空を

見ると曇り空だった。　一雨来るかも知れない。　なんとなく扉を開けてお店に入った。

「いらつしゃい・・・ティアナか。　どうした？　なんだかやつれているぞ」

カウンターにはアーチャーさんが椅子に座ってグラス拭いていた。

「・・・・・・・・」

「ん？」

今、私は何を言おうとしてるんだろうか・・・・・・・・　自分で言っているハズなのに、実感がない。

「・・・・・・・・この銃を・・・返しに来ました」

グラスを置いて、アーチャーさんが視線をこちらに向ける。
その顔が、不審に染まる。

「・・・なにを言っている？　どこか壊れたのか？　普通のデバイスに比べて、強度は何倍もあるハズだし、ティアナに整備の仕方は

教えたはずだが・・・」

私は上着の下に装備していた二丁の【デザートイーグルD】を取り出した。

私は首を振り、力なく笑った。

「私には、これを使う資格がありませんから」

こんなの卑怯だと分かっている。

資格なんて関係ない。でも、私にはもうこの銃を使う

ことは出来ないかも知れない・・・

装備するだけならともかく、両手に持つと、何倍にも銃が重く感じるのだ。

薄々分かっていた。

私は怖いのだ。

あれだけ、お兄ちゃんの墓の前で誓ったのに・・・戦う事が怖いのだ。

自分が傷つくのが怖いんじゃない。

相手を傷付ける・・・もしかしたら死なせてしまいかもしれない事が怖いのだ。

・・・こんな中途半端な気持ちで戦ってたなんて・・・

自分が許せない、なんてかつこいいことは言えない。ただ、

私は、自分が怖い。

「この銃。とっても使うのは大変でしたが、とても心強かったです。ありがとうございます」

アーチャーさんの目の前に銃を置く。

なにも言わなかった。無言で手にとり、カウンターから、私が立っているところに来た。

怒っているのだろうか……　当たり前か、いきなりこんな風に突き返されたら……

アーチャーさんは私のところまで来ると、膝をついて、私に視線を合わせた。そして、握っていた二丁の銃を私に差し出す。

「君の銃だ」

私は反射的にそれを払い除けてしまった。

二丁の銃が床を跳ね、乾いた音を立てる。

「…………アーチャーさん……私は……」

「戦うのが、怖くなったか？」

下を向いていた私は、とっさに顔を上げた。

凶星だった……

「その気持ちを忘れないことだ」

「え……」

思いがけない言葉だった。

アーチャーさんは小さく息を吐き、言葉が続けた。

「……この世界の魔法や武器には非殺傷設定というものがあ
るから、大半の者は忘れてしまっている……いや、忘れようとし
ているのかも知れないな……どんな理想を掲げて、どれほ
ど純粋な心を持っていても、本来は武器を振るえば血が流れ、人が
死ぬ。戦いとは、そういうものだ」

アーチャーさんはなにかを思い出すように目を閉じる。

「……強くなれば誰かを幸せにできるなんて考えは、ただの思い
上がりだ。それに気づかず突進すれば、待っているのは理想に
溺れる溺死だけ。武器を振るって敵を倒しても、生まれる物はな
にもない。強さとは所詮、奪った命の数でしか測れないもの。
戦いとは結局、相手を力で切り捨てること。……それが怖
いなら、武器を捨てるしか道はない」

目を開け、私を見据える。

「だが、それでも……たとえすべてをなげうって成し遂げ
たいことが、君にはあるんだろう？」

とくん、と心臓が音を立てた。
すべてをなげうつても成し遂げたいこと。
執務官になる。

お兄ちゃんをバカにした上司たちを見返す。

そして……

……お兄ちゃんの仇をとる。

私はあの日、あの場所で確かに誓った。
だけ……

「……でも……私は人を……」

「俺は何があつたのか知らない。君が何か間違いを犯したのかも
しれない。だが、本当にそれだけか？」

「え……？」

アーチャーさんは二丁の銃を拾い上げた。

「ある男の昔話をしてやろう。『全てを救う正義の味方』という理想を目指した、愚か者の話だ。『正義の味方』を目指す男は紛争地帯、事故現場、殺人事件、ありとあらゆる場所で人を救った。感謝されることもあれば、軽蔑され恨まれることもあった。だが、男の悩みは恨まれることではなかった。『正義の味方』は自分に味方するものしか救えない。敵がいれば、その敵を殺すことで、他者を救う。十を救うと言いながら、現実には九を救って一を切り捨てることしか出来なかったのだ。次第に心は削れ、機械的に人を救っていった。そして、最後には救った者に裏切られ、死ぬことになった。どう思う？ 愚かだと思つか？」

「・・・凄と思います」

そんな人がいたら凄い。最後に救った人に裏切られて、死んでしまったのは悲しいけど、そこまで理想を貫き通したこと自体が凄いと思った。

だれの話なんだろう？ アーチャーさんは生きてるし・・・

「凄い・・・か、確かに凄いかもしれないな。だが男は一を切り捨てたことに捕らわれ、残りの九を救ったことに気付いていなかったんだ。その九の人から見たら、その男はまさしく『正義の味方』だったのに・・・愚かな者だろ？」

「・・・」

「それと同じだ。君はこの銃で、人を傷付けたのかもしれない。だが、君がしたことはそれだけじゃないだろ？」

私に銃を再び差し出す。

「君はこの銃で、誰かを救ったはずだ」

「それは……」

そうかもしれない。

私はあの男たちを撃つことで、人質になっていた人たちを救った……でも。

「……それで、私のやったことが帳消しになるって言うんですか？」

私の問いにアーチャーさんは首を振った。

「違う……君が、戦う道を進み続けるなら、相手の命を奪うこともあるだろう。人を傷付け、あるいは殺す時もあるかも知れない。人の死とは、どんなことをしても取り返しがつかないものだ。いつか君のことを人殺しと罵る者もいるかも知れない。……だが、それでも、君が銃を撃つことでしか為し得ないことが、確かにある」

「あ……………」

戦慄に似たなにかが、私の身体を走り抜けた。

「…………君がこの先だけのことをこの銃で為したとしても、君の罪は決して消えない。もし、戦う道を突き進むなら、君の銃は、これからさき、数えきれないほどの命を奪い、悲しみを生むかもしれない。そうなれば、人は君を殺人者と呼び、恐れるだろう」

アーチャーさんは銃のグリップを私に握らせる。

「それでも戦え。罪も痛みも、すべてを背負って生きる。強さとは…………たぶんそういうことだ」

「…………私は……………」

押し付けられた二丁の銃を見る。

ルイズさんに弟子入りしてから、殆ど毎日肌身離さず、一緒に地獄の修業を耐えてきた銃。

…………罪を背負って、それでも戦い続ける…………

「…………と、言っても、これは俺の答えであって、君の答えではない」

「……………？ それはどういうことですか？」

「人は、一人一人違う理由で戦っている。その答えがひとつなはずがないだろ？」

おどけるように言うアーチャーさん。

人それぞれ違った理由で戦っているんだから、答えも人それぞれ……か。

確かにその通りだ。

「……………私は……クー」

その時、お腹から可愛らし音がなった。

恥ずかしさで、顔が赤くなるのを感じる。

「ふふふ、少し待っていてくれ、簡単なものならすぐに出来るからな」

ほんの二、三分でチャーハンが出てきた。

……ここっって一応カフェよね？

一口食べる。

……美味しい。

空腹も手伝い、五分足らずで完食してしまった。

「・・・美味しかったです」

「お粗末様だ」

食べ終わると、急に眠くなってきた。

ここ一週間、ろくに眠れていなかったのが原因だろうけど、食べたら眠くなるなんて、赤ちゃんみたいでなんだか恥ずかしい。

「外は雨が降っているようだ。ルイズには連絡しておくから少し眠って行くといい」

「ありがとうございます」

目を擦りながらお礼を言う。

「ふむ。それじゃあ眠る前に、最後に一つ言っておこう。さっきの話の続きだ」

「・・・？」

「戦う理由は人それぞれだから答えも人それぞれだと言ったが、必

ずしも答えが出るとは限らないんだ」

「……え？」

「覚えておくといい、『答えが出ない』と言う答えもあるってことを……君はまだまだ若い。いろいろな経験をして、自分と向き合い、そして悩み。その苦悩の先に答えがあるとは限らないが、それでも前に進んでみるといい。前を見て歩き続ける者に……」

そこまで聞いたところで、私は眠ってしまった。

悪夢は……見なかった。

剣が無限に突き立つ大地に、赤い外套を着た男の夢をみた気がした。

起きると辺りはもう暗かった。

時計を見るともう七時をまわっていた。

私の目の前には磨かれた二丁の銃が置かれている。その銃の下にメモが置かれていた。

『急用が入った。今日は帰らないから店の扉は開けっぱなしで帰っていいぞ。大事に使ってくれよ』

かけられていた毛布をたたんで、メモに『ありがとう』と書いておく。

「……よし」

……答えは見つかっていない。

これから銃を撃つとき、どうなるかわからない。だけど……

……私は悩み続けるけど……前に進んでみることにした。

「……帰る」

家につくと、扉の前でルイズさんが待っていた。

「迷惑をかけました」

頭を下げる。

いつたい何時から扉の前に立っていたのだろう？

「……………答えは出たかしら？」

「いえ、でも……………前に進んでみようと思います。いろいろな経験をして、その後に答えが出たら出た、出なかつたら出なかつたで、その時考えることにします」

そう。

殺傷設定と非殺傷設定…………… 威卦法を使っているときは強制的に殺傷設定になってしまうけど……………

「どんなに苦しくても、どんなに辛くても、後悔だけはしません」

「……………そう。ま、頑張んなさい。みんなあなたを待って夕飯食べてないんだから、早く来なさいね？」

そう言ってルイズさんは家に入って行った。

私は『まえ』に進んだ。

1 1 2 ファーストミッション 前編(前書き)

注・社会見学は依頼に含まれません。
あくまでも、ティアナの社会見学です。

ってわけで、ファーストミッション・・・始まります。

1 12 ファーストミッション 前編

11月19日 午前8時00分

とある世界の地下研究所。 その仮眠室で女は目が覚めた。
彼女の名はリサ。
ベッドから起き上がり、フックにかけてあった白衣を着る。
仮眠室から出ると、青白い顔の同僚がちょうどやって来た。

「やあ、リサ」

「おはよう」

リサもまた笑顔で挨拶する。
いつでも挨拶はおはようだ。
朝日などここでは見る事ができないのに。
おおよそ千五百名のスタッフがここで働いていることは最新の
設備に、行われている研究も最先端だ。

「どづした、リサ。 顔色が悪いぞ？」

「・・・・・・・・」

リサはここ、通称【蟻の巣】と呼ばれる、極秘施設のスパイだった。

しかし、そんないつバレるかビクビクする生活も今日で終わり。彼女はついに、この研究所で何が行われているのか突き止めることが出来たのだ。

あとはこの情報を時空管理局、もしくはマスメディアに持っていけば、リサの仕事は終わりだ。成功のあかつきには一生遊んで暮らせる大金が彼女の手元に転がり込んでくるのだ。

「何でもないわよ。大丈夫」

顔色が悪いのは貴方だけどね、と内心呟いた時だ。警報が鳴り響いた。

不安を掻き立てるような高い電子音に、誰もが所在なく周囲を見回した。

「火災訓練だ」

誰かが言う。

「火災訓練か」

誰かが繰り返す。

まるで安全を約束する呪文のように、そこらかしこで火災訓練だと口にする。最初は自分の事がバレたのかと心配したりサだったが、神経に障る警報が鳴りやむと同時に、杞憂だったのかと、胸を撫で下ろした。

しかし、それは間違いだった。

扉を叩く音がした。

オフィスの分厚い防災用のガラスを同僚の一人が叩いている。

「なんだ？ 開かないぞ？」

リサも扉に手をかけるが、ビクともしない。鍵がかかって
いるのだ。

「火災訓練ね」

彼女もまた魔法の呪文を口にした。

「もうちょっとしたら開くわよ」

そう言っつてリサはため息を吐く。

だが、いつこうに扉は開かない。

しばらくすると、再び警報が鳴り響いた。

今度は先ほどとは違い、幾分か低い電子音だ。
その音に彼女は不吉なものを感じた。

いきなり白い霧状のガスが、天井から噴出してきた。

誰かが叫ぶ。

が、彼女には聞こえなかった。

皆が出口を求めてでたらめに走り出した。

開いている扉など、一つもない。

ガスはみるみる部屋を満たしていった。

叫び声。

怒声。

泣き声。

呻き声。

リサも逃げようと振り返り……足がもつれた。 天地
が裏返る。

辺りから悲鳴を聞きながら、リサは激しく床に頭を打ちつけ、
彼女はその時あっさりと死んだ。

その日、【蟻の巣】で死んだ千五百人の中では、最も幸福な死
に方だった。

S i d e ・ ティアナ

おはようございます。 ティアナです。 今は11月20日午前0時00分。 ヘイズさんと一緒にとある世界の街・・・【クーランシティ】にきています。 どうしてこんなことになったのか・・・ それは依頼が来たからです。 なんと、ルイズさんは、とある世界へ世界滅亡を止めに、クー・レンさん・アル・エヴァの四人は、とある世界へ要人警護に行きました。 更にそこで、依頼が来たのでルイズさんが

『そろそろ依頼を受けてみる？ てか受けなさい。 大丈夫よ、この前の社会見学よりは安全だから・・・たぶん』

と、言い出したので、やって来ましたこの世界。 嫌な予感がバシバシ来てます。

生きて帰れるのか・・・

「そう緊張すんなよ。大丈夫だって、今回はAIを止めに行くだけだからな」

「・・・なんで止める事になったんですか？」

「なんでも、そのAIが研究員千五百名をいきなり殺しちまったらしい」

「・・・」

わーお、なにその超危険AI・・・
そんなことをいつている間に、クーランシティの郊外に建つ、洋館にやって来た。そこが地下研究所への入口らしい。

「ま、警戒するに越したことはねえな。なんでも、ヤバイ研究をやってるって噂があるみたいだしな」

「・・・ヤバイ噂？」

「ああ、なんでも生体兵器から何かいろいろ手を出してるらしい」

「……………」

洋館の中はもぬけの殻だった。

情報にある通りに、本棚にある一冊の赤い本を持ち上げると、壁が音を立てて扉のように開いた。

向こうは真っ暗闇だ。

「【蟻の巣】か、洒落たこと言いやがるな」

「洒落じゃないわよ……………」

「はは、それじゃ最終確認だ。この中に入って最深部にあるAI【赤の女王】を止め、速攻で脱出。中でなにがあるか未知数だ、気を引き閉めて行くぞ」

「……………了解」

大丈夫、私は生きて帰る。

今までの修行を思い出せ、私！

！！

こうして、危険な臭いがプンプンする地下研究所へと、私とヘイズさんは向かったのだった。

『サポートですが私もいますよティアナさん』

目の前の空間にいきなりモニターが開き、三本線の漫画顔、ハリーが現れた。

……大丈夫……よね？

「ちっ、エレベーターのワイヤーが切れてやがる。こりゃ階段で行くしかないな」

貨物列車のような乗り物に乗り、移動した私たちが奥に進むとそこは高層ビルの中にあるオフィスのロビーだった。窓からはブラインド越しに、立ち並ぶ高層ビルと青空が見えるが、ここは地下だ。スクリーンに映った映像のようだ。ヘイズさんによると、エレベーターは使い物にならないらしい。階段を降りていく。

両手には二丁の拳銃、私は仕事着である厚手のインナーに黒を基調とした赤いラインが入った長ズボン、そしてその上に赤いロングコートといった格好、ヘイズさんは上下赤のスーツに左手に質量兵器？の拳銃を握っている。

『ヘイズ、問題があります』

「なんだ？」

モニターが開き、ハリリーの顔……と言っても三本線だが……が映し出された。

『【赤の女王】は研究棟の先ですが、研究棟はほぼ水没しています』

「水没？」

「おそらく火災時用の放水をしたのでしよう。研究棟は他と比べても機密性が高く、それぞれの研究室が水で満たされています」

「……………迂回路はあるか？」

『多少時間は掛かりますが、食堂Cを抜ければ、【赤の女王】まで』

行けます』

「わかった。 ティアナ」

「なに？」

「俺の勘だが、 楽には行きそうにねえぞ」

「奇遇ですね。 私は、ここに来てから直感危険探知レーダーが危険域を振りきってますよ？」

ヘイズの言葉に、 なにかを諦めたような声でティアナは答えた。

「「「「「「「「」」」」」」」」

「「「「「「「「」」」」」」」」

「「「「「「「「」」」」」」」」

金属の扉があった。

断言出来るけど、断じて食堂への扉はこんなに嚴重じゃないはずだ。

「ロックが掛かってんな」

『そうみたいです。ヘイズ、有機コードを』

「ああ」

そう言って、ヘイズは懐から取り出したコード？の片方を扉の横にあるパネルに繋ぎ、もう片方を首筋に……

「って、何やってんのよ!？」

「ん？ ああ、言ってなかったか？ 俺の頭ん中にはそこら辺のコンピュータの数千倍の演算能力があるんだぜ？ で、パスワードを調べてるわけだ。ほれ」

扉がギシギシ音を立てて開いた。
中から這うように冷気が流れてくる。

何だかよくわからないけど、この先になにかある！・・・気が
する。

「・・・行くぞ。 気を引きしめる」

「・・・さっきと同じ台詞よそれ」

「「・・・」

ヘイズとティアナは同時に中を覗き込んだ。

「「・・・おいおい、嘘だろ（しょ）」

巨大なタンクがズラリと並んでいる。 床や壁には大蛇のよ
うなパイプがびっしりと張り巡らされ、オマケに生体ポットのよう
な物もあり、中にはグロテスクとしか言いようがない化け物チック
なヤツが入っていた。

私は寒気を感じた。

気温が下がっていることだけが原因ではなさそうだ。

ここを食堂だと言った奴出てこい、そこで食事してみる
つてのよ。 たぶん、どんなに美味しい物でも不味くな

るでしょうね……………

「……………ここが食堂？」

「……………たぶんな」

『はい、図面ではそうなっています』

ハリーが、この【蟻の巣】の図面をモニターに出して説明してくれた。

『この先が【赤の女王】がいる部屋の筈です』

私とヘイズさんの二人は、無言で『食堂C』とやらを進んだ。無数のタンクに太いパイプ。何に使うのかサッパリ分からない機械類。 ついでに、生体ポットの中に浮かんでいる化け物が、微妙に身じろぎした気がするのは気のせいか？ ……気のせいね。 そうに違いないわ。

「……………」

ようやく扉が見えてきた。扉の正面にはコントロールパネルがあり、モニターがいくつも並んでいた。

「……ロック解除つと」

ヘイズさんが有機コードを介してロックを解除する。
一秒足らずで扉が音もなく開いた。

『御武運を……ここから先はジャミングが激しく私は行けませ
ん』

「わかった」

扉の向こうは暗い通路だった。

闇に隠れて見えない。

持ってきていたライトをつけ、慎重に進んでいくと……

突然灯りが点り、私たちはその場に立ち止まった。

「……ひゅ〜」

ヘイズさんが口笛を軽く吹いた。

通路を渡りきり、【赤の女王】の部屋への扉が目の前に来た。

ヘイズさんが再び有機コードをパネルに差し込もうとしたところ
で、いきなり後ろの扉が閉まった。

「……閉じ込められた？」

そう思った瞬間、目の前に赤い光の線？が現れた。

咄嗟に

飛び退く私とヘイズさん。

「…………ヘイズさん。これって地味にピンチじゃないですか？」

「…………ちよつとな」

警報ブザーが狂ったように鳴り響く。

「レーザーか？」

「…………当たったら真つ二つになりますね（笑）」

赤いレーザーが迫ってきた。

私はジャンプ、ヘイズさんは屈んで避ける。

正面を再び向いた私は驚愕した、今度は一本どころじゃなく、網だ。

逃げ場は…………ない。

「くっそ」

ヤパイと思い、レーザーを発している壁を私たちの周囲だけでも壊そうと思い、魔力弾を連射するが、少し凹ませるだけだった。

時間をかければ咸卦法で出力を上げるなり出来たのだが、もう数秒もない。

レーザーの網が私たちに迫る。急いで咸卦法を発動しようとして……指を弾く音と、靴で地面を叩く音が二回ずつした。

「……え？」

私たちの周囲の壁が、スプーンで削ったように、抉れて、砂になった。

迫ってくるレーザーの網は壁が壊れたことで、私たちを細切れにするまえに、消えた。

「ふー、あぶねえあぶねえ」

「……ヘイズさん、今なにを？」

「……まあ、企業秘密だ。簡単に言うと、俺らの周囲の壁を原子レベルで分解した」

「……」

「詳しい話は後だ、今は先に進むぞ」

「・・・了解」

指パッチンで物を分解ってどういう原理よ？

ヘイズさんが扉を開く。今はこっちに集中するでしょう。

突き当たりの扉の向こうは正八角形のそれほど広くはない部屋だった。

床はスチール？でピカピカに輝いている。

部屋の中にはチェスの駒にも似た、高さ1.5メートルほどの何かのモニュメントが置かれている。

たぶんこれが【赤の女王】だ。

「こんなところでなにをしてるの？」

背後から声！

振り返り二丁拳銃を突きつけるが・・・

背後にいたのはかすかに燐光を発しているエプロンドレスを着た少女だった。私と同じ年ぐらいに見える。

「お前を壊しに着たんだよ、・・・依頼でな」

ヘイズさんが答える。

「ここから出て行って。私を止めると大変なことになるわよ」

少女・・・【赤の女王】なんだろう・・・は私を見つめて話を続ける。

「言つとおりにして、おねがい」

「お前を停止させると、どうなるんだ？」

「閉じ込めていたアイツらが出てきちゃっわ」

「アイツら？　ここの職員のことか？　お前が殺したんだろ？」

「違っわ。　あれは仕方なかったのよ」

「仕方ない？　千五百人を殺して仕方ない理由ってなんだ？」

「・・・」

「んじゃ壊すか」

「っ・・・待って！　分かったわ、教える、教えるから」

「で、理由って？」

「……ここでは色々な研究がされているわ。そのなかに、【IMMORTAL VIRUS】通称【I・ウイルス】と言う細菌の実験も行われていたわ」

「……I・ウイルスとは？」

「不死身で死なない兵士を作る、と言うのをコンセプトに産み出された細菌よ」

「ここで何があった？」

ヘイズさんが尋ねた。

「最初はウイルスによって汚染されたのよ」

「……なぜ、汚染が起きた？」

「ごめんなさいね」

【赤の女王】はペコリと頭を下げた。

「私にはわからないの。 わかっていることはE・ウイルスが抗ウイルスと一緒にすべて盗まれてしまいそうになったこと。 そしてそのうちの一つが割れて、ウイルスの汚染が始まってしまったこと」

「それでああなたは職員を皆殺しにしたのね？」

「ええ、残念だけど、仕方なかった」

睨み付けるような私の視線に、少女は汚れない笑みで返した。

「ここを汚染したのはE・ウイルスよ。 これはね、もともとは魔導師のリンカーコアを巨大化させるために開発されたの。 部分的には成功していた。 ウイルスは確かにリンカーコアを巨大化させ、元々持たない人にもリンカーコアを作り出して、魔法を使えるようにするの。 でもね、残念なことに、被験者は全員死んじゃった。 リンカーコアの巨大化過程で、内臓が全部ダメになっちゃった。 失敗作ね。 でも、それはすぐに別の側面で注目されたわ。 細菌兵器としてね。 だってE・ウイルスに感染すれば必ずと言っていいほど発病するの。 そして、致死率は100%なのよ」

まるで世間話をするかのように、【赤の女王】は話続ける。

「……AIとは人間と同じように、成長するものだ。それを考えると、産み出された時からこんな血なまぐさいことしか知らない【赤の女王】が、不憫に感じた。」

「最初ウイルスは空気感染するの。そして、身体の組成を変えてリンカーコアを持つ、不死身の兵士に変化させる。知能はほぼないからたいした魔法は使えないけど、簡単な障壁や誘導性のない魔力弾ぐらいなら使えるわ。そして、生存のためのわずかな機能を維持するために行動するようになる。」

「……どづいことだ？」

「肉を食べるの。手に入るものならなんでも食べるわ。バカみたいでしょ？ 消化するべき内臓はもう機能してないのに。」

「じゃあ何のために食べるのよ？ 趣味とか言わないわよね？」

「腐敗させ、エネルギーを得るため、ただし感染者の肉は食べないのよ。ウイルスに汚染されている細胞は腐敗しないから。上手く出来てるでしょ？ ウイルスに感染した敵はすべて死に、不死の兵士になって襲いかかってくるのよ。……つと、話がずれたわね。さて、そのE・ウイルスが流出してしまった。ウイルスはすぐに空調システムを伝って空気感染していったわ。私はただちに空調を停止したけど、すでに職員の四割が感染している可能

性があった」

「……それならなんで職員のを殺す必要があった。残りの六割は救出することが出来たんじゃないか？」

ヘイズさんが納得できぬ顔で言った。

確かにそうだ、まだ六割の人が、感染してなかったかも知れないのに……

「ウイルスは環境によって姿を変える。いい、このE・ウイルスは敵国にばら蒔かれる細菌兵器なのよ。いつまでも空気感染してたんじゃ、瞬く間に敵味方関係なく感染してしまうわ。だからウイルスは最初空気感染から始まり、やがて経皮感染へと変化していくの」

「？ それなら余計に救出しやすいんじゃないの？」

「職員の十人に四人は感染してる可能性があるのよ。それをどうやって区別するの？ 隔離して、検査している間にどんどん発病していく。これが私が職員を全員殺した理由よ」

「……まあ兎に角、お前を停止させる……壊すことが俺らの仕事だしな」

「まだ言っているの？ 私が停止したら、あなたたちは閉じ込めて

いる、千五百【匹】の魔法を使うゾンビと戦うことになるのよ？
魔法による怪我なら関係ないけど、アイツらの爪や歯にはウイルスがたっぷり含まれているのよ？ 少しでも傷をつけられたらその時点で感染。あなたたちが死ぬのは構わないけど、その結果、この世界が生ける屍だらけになってしまうのよ？ 出来るの？ 一人七五十匹のアンデッドを相手にして、引つ掻き傷の一つもなく」

「……お前、【紅き翼】って知ってるか？」

ヘイズさんが苦笑しながら問いかけた。
もしかして、ヤル気？

「【紅き翼】？ 確か、いるかないかわからないけど、達成率百%の伝説の便利屋のこと？」

……！？ ルイズさん達って、そんな風に世間で呼ばれるの？ 全然知らなかったわ…… 確かに前の社会見学の時
に『流石は【紅き翼】だ』とか言われてたけど……

「ま、依頼は達成するってことだよ。お前の本体は停止させてもらう。だが、お前が俺たちに依頼するなら……無傷でここから脱出して、この研究所を封鎖してやるさ。どうする？ ついて来るか？ お前の情報を俺らの船に送って、コピーするぐらいなら出来るんだが」

「……はあ、仕方ないわね。 あなた達の實力にかけるとし

ましようか。 それに私が言っても止まらないんだから、選択肢がないじゃない。 分かったわよ。 私も消えたくはないわ」

「よし、それじゃあこの通信機を介して、俺たちの船にお前をコピーしてくれ。 ジャミングは切れよ？」

「. はあ、分かったわよ。 コピー完了」

その言葉を聞くと、ヘイズさんは手を掲げ、指を弾いた。

瞬間、直径五十センチほどの球体状に【赤の女王】の本体が、真ん中から砂のように崩れた。

「ヘイズ、いったい何があったんですか？ いきなり変な疑似人格はダウンロードされてくるし、大部予定と違うようですが」

いきなり空間モニターが開いた。

『変なとはなによ、変なとは』

モニターが二分され、【赤の女王】の顔がアップで映し出された。

「あー、詳細はそっちにいる【赤の女王】に聞いてくれ」

『・・・はあ、あなたもお節介ですね。 どうせ、AIが相手とは
いえ、なんだかかわいそうになったんでしょ？』

「・・・っ」

・・・凶星か。

『え、そうなの？』

「ああ、もういいから、最短距離で地上に行けるルートを出してく
れ」

「・・・これから1ミスで死亡のデスサバイバルか・・・泣け
てくるわ」

ここからが大変そうだわ・・・はあ
と言つか、この状況でパニックにならないんだから、私も大部
染まってきたわね・・・

某世界・海上

二つの影。

空気を支配する、暴力的なプレッシャー。

恐らく、心臓の弱い者なら、この一帯に近づくだけで、死に至るであろう程の膨大な殺気が、数時間前からこの海域にあった。

「はあああああああああああッ」

ルイズ流 光の太刀！

「おおおおおおおおおおおッ」

デス・ボール！！！！

極大の斬撃と死をもたらす闇の球体がぶつかり合う。
が海面を襲い、膨大な量の水飛沫が空に舞う。

衝撃

「らあああああああああッ！！！！」

常人には消えたようにしか見えないであろう速度で銀色の髪をしたローブ姿の女……ルイズは斬りかかった。
頭から真つ二つにしようとする。

「なめるなあああッ」

太い尻尾を持つ、宇宙人？　　のような男は腕に光剣を纏わせ、
応戦する。

「「おおおおおッ」

海面から二十メートル以上離れているのに、ルイズの刀と男の
光剣がぶつかり合う毎に、水飛沫がたっている。

「エクスプロージョンッ！！！！！！」

斬り結びながら、呪文を唱えていたルイズ。　　空間そのものを壊
すかのように、数百の爆発をおこす。

……が、悉く回避される。
再び超スピードの斬り合いになり、数十、数百合と相手を突き、
薙ぎ、払い合う。

鏢迫り合いの後、両者とも大きく飛び退き、二十メートルほど距
離をとった。

男が気合いと共に両手を突き出す。

ドンツという破裂音。不可視の波動がルイズに叩きつけられ、数百メートル飛ばされ、海面に叩きつけられた。

すぐさま飛び上がるルイズ。

「ぐっ！！！」

「ふ・・・ふはははは！ そんなにオレの本気が見たいなら見せてやる！ 言っておくが、今のはまだ七十%と言ったところだぞ！」

「カカカツ 楽しく死合いましたようカツ！！！」

男の言葉と同時に更に膨れ上がるプレッシャー。

最早、大気が震えている。 それを楽しそうにルイズは見つめる。

「・・・・・・・・待たせたな、こいつがお望みのフルパワーだ」

「はハハ、この場で武器は無粋ね・・・ 拳で語りましょウカ」

「・・・・・・・・」

二人の姿が消える。

空中に破裂音と共に閃光が走る。

「アンリミテッドッ……ルイズツフラあああああああ
ああっシュ!!!」

ルイズの身体全身から、光が放たれる。

「おおおおおッデスツビイイイイムッ!!!!!!」

男の指先からは、極太の閃光が放たれた。

「……次デ終いだ」

「面白い……木っ端微塵にしてくれるわッ」

ルイズの右手に光、左手に闇が集束していき、両手を合わせる
ことで、強引に融合させた。

「うおおおおお……!!!」

ポウツと男の身体が光に包まれ、筋肉が一回り膨張する。

Side・ティアナ

【赤の女王】が指示した迷路じみた回廊と階段を経て、私たちは下に進んでいった。

時たま曲がり角やありとあらゆるところから現れる、感染者を殺傷設定の魔力弾で頭を撃ち抜いて殺す。　多少は魔力の障壁を張っているようだが、良くてBランク程度だ。　私の弾なら容易に貫ける。

・・・弾が勿体無いから、カートリッジなしで撃つてて、正解だったわ。　使ってたら、今頃何発消費していたことか・・・

上下水道を含むすべての配管が通されているトンネルに出た。

「・・・ヘイズさん。　今、足音みたいなのが聞こえませんでしたか？」

「・・・ああ聞こえた。　【赤の女王】、どこにアンデットがいるかわからないのか？」

モニターにヘイズさんが声をかけると、【蟻の巣】の平面図らしきものが映し出された。

『無理よ、【蟻の巣】であなたたちを補足しているのは熱センサーよ。　あいつらは体温を持っていない。　だから感知不能ってわけ』

「・・・わかった」

私たちの背後のトンネルから、足音が近づいてくる。　　これ

は・・・犬？

「・・・ちっ」

ヘイズさんの舌打ち。
見えた。

ドーベルマンに似た、しかし、皮膚が腐って崩れ、筋肉が露出している犬が五匹、私たちに向かって歩いてきた。

向こうも、目視したためか、一旦止まる。

二十メートルほど距離が空いているだろうか・・・

「なっ！　はやっ」

一瞬消えたように見えた。　　犬はコンマ数秒で、私たちとの距離を半分まで縮めていた。

予想外のスピードに、あわてて銃を構え、引き金を引く。

最早、身体の一部とも言えるほどまで使い込んだ銃は

構える　狙いを定める　引き金を引く

と、言う作業を

構える 引き金を引く

まで、短縮する。

銃口から吐き出された魔力弾は犬の頭に正確に一発ずつ跳んでいき……

「ッ！！！！」

障壁に弾かれた。

あり得ない……つまり、Aランク以上の魔力障壁を犬たちは張っていると言うことだ。

一瞬の思考が仇となり、目の前に、口を開けた犬が迫り……

……崩れた。

まるで、犬の集団の中に、三カ所ぽっかりと、この世から消滅してしまったかのようなだ。

急いで、カートリッジ使用にモードを切り換え、撃ち殺した。

空薬莖が音を立てて地面に転がる。

……危なかった。もう少しで、アンデットの仲間入りをするところだった……

「ティアナ、気を付ける。俺はお前の頭を撃ち抜くことになるなんて、ごめんだぞ?」

「はあ、はあ、ありがとうございます」

「……うん。命には変えられない。今度から依頼のときはどんな時でもカートリッジを使おう……。お金は掛かるけど。」

「「「「「」」」」」」

無言で辺りを警戒しながらトンネルを進んでいく。その時、再び空間モニターが開いた。

『正体不明の熱反応が、そちらに物凄い速度で向かっています。お気をつけ下さい』

ハリーだった。

熱反応を示す赤い点は私とヘイズさん、そして、まっすぐに私たちの後ろを追ってきている点の三つがあった。

「ヘイズさん……」

「・・・生存者ってわけねえよな」

ヘイズさんの眼は既に廊下の向こうを見つめていた。
そこにはなにもいない。

「生存者だったら、随分と元気ですね。 研究員の中には魔導師は
いないんですね？ だったらその人は、【魔力】を使わずに人の
限界を超えていますよ？」

私は軽口を叩きながら、両手の銃を赤点が迫ってきている方向
に向ける。

赤い点は廊下をまっすぐ私たちへと近づいて来ている。 し
かし、その姿が見えない。

赤い点が私たちと重なる。 姿が見えない。

「・・・熱センサーが壊れッ！」

頭の上から微かな、本当に微かな物音。
直感に従い、身を投げ出して横に跳ぶ。 ヘイズさんも床に
転がっていた。

見ると、一瞬前まで私たちが立っていた場所に、触手のような
ものが突き立っていた。

「おいおい、こりゃー」

まるで、皮膚を剥いで筋肉を剥き出しにされたかのような身体が天井に張り付いていた。

だらりと長い舌が垂れる。それは、突き立っていた触手だった。

「何よ、あれ？」

濡れ雑巾を叩きつけるような音を立てて、それは床に降りた。鞭のようにしなる舌が私たちに襲いかかる。

足を狙ってきた一撃をジャンプで私は回避し、ヘイズさんほどここまで舌が伸びるのかわかっているかのように後ろに下がった。

怪物が霞むような速度で迫る。

が、犬で経験していたのでそれほど驚かず、振りかぶってきた爪を避けた。

爪は鈍い茶色に光っていて、まるで、バターを抉るかのように壁や地面を削った。

ヘイズさんの銃弾が怪物に跳ぶが、障壁に容易く防がれた。

爪の攻撃をぬって、カートリッジの魔力を使用した圧縮弾を私は放ったが、怪物はそれを障壁で防がずに避けた。

「もしかして、知能がある？」

「そうつっぱいな。ティアナ」

「なに？」

「ここは俺に任せて、お前は後ろから援護してくれ。さっきから、お前にはっかり前衛をやらせてる気がする」

そんな事を言つて、ヘイズさんは怪物に突っ込んでいった。

ヘイズさん親指と中指を軽く弾いた。

それだけで、振りかぶっていた怪物の右腕が、肩の付け根から崩れ、腕が跳ぶ。べちゃっと湿った音を立てて、怪物の右腕が壁にぶつかる。

怪物が痛みでか、それとも何が起きたかわからないのがイラつくのか、吠えた。

ヘイズさんが、呟く。

「魔法士でもない生き物の情報解体なんて、俺からしたら簡単だ。しかも、【こつち】じゃ【情報の海】からの攻撃に対する防壁なんてないに等しい……チートだな」

ヘイズさんのあの技は情報解体と言つらしい。

他にもぶつぶつ言っているが、何をいつてるのかわからない。

と、怪物は触手のような舌、残った左腕等でヘイズさんに攻撃するが、どう動くのかわかっているよに、完璧な読みでよけていく。

「……すいじ」

再びヘイズさんが、指を弾く。　今度は頭を狙ったのか・・・
しかし、凄まじい反応で、怪物は自分の耳？の辺りを砂にされるにとどまった。

靴の踵で床を打ち鳴らす。　と、同時にヘイズさんは頭に目掛けて銃弾を放った。　本来なら魔法障壁に弾かれ筈なのだが・・・
・・・今度は魔法障壁をその【情報解体】したのか、銃弾が素通りして、怪物の頭部に弾が吸い込まれていった。

「・・・死んだの？」

「・・・たぶんな。　念をおして、首も折っておくか」

頭から血を流し、ぐったりとしている怪物の首を【気】で強化した手刀でヘイズさんが、折った。

みきりと大きな音がした。

「なんだったの、こいつ」

異空弾倉で、リロードしながら、私は【赤の女王】に尋ねた。

『・・・彼は【蟻の巢】でなされた初期のプロジェクトのひとつね。
I・ウィルスをもとの胎児に投与し、遺伝子操作を繰り返して造り出された生物兵器』

「まったく、胸くそ悪くなる実験ばっかだなこは」

これ以上なにかが出てくる前に、私たちは先を急いだ。

S i d e ・ ? ? ? ?

痛みだ。

激しい痛み。

純粹な痛みが身体の中にみっちり詰まっている。

耐えき

れぬその激痛が、自分の苛立ちを断ち切っていた。

あれだ。

あれのせいだ。

ぶるりと身体を震わせる。

指が動く。

鋭い爪が擦れて金属音をたてる。

千切れた腕が、くっついた。

折れた首を手で押さえる。

ゆっくりと、異様に折れ曲がった首を元に戻していく。

「まあ、ヘイズさ」「ぐぎゃあああああああああッ！！！」
「・・・マジですか？」

私たちが出てきた床の扉から鉤爪が飛び出し、殺した筈の怪物が再び飛び出してきた。

どついうわけか、千切れた腕が、繋がっているし、感じる魔力がさっきより強く感じる。

「がああああッ」

最早、音波兵器か？つてくらいの叫びと共に、怪物が爪を振り下ろし・・・

「きゃっ」

「うおっ」

茶色の衝撃波のようなものが、凄まじい勢いで、襲いかかってきた。

なんとか避ける。

「左手に【魔力】・・・右手に【気】・・・」

合成・【咸卦法】！

紅いロングゴートを翻し、【居合い弾】の連射を浴びせるが・

・・・

なんと、障壁に弾かれています。

・・・なぜ？

【居合い弾】はカートリッジを使っているが、咸卦の気を圧縮して放つことで、同等の威力、貫通力を持っているはずだ。

まさか、どこぞの戦闘民族みたいに死にかけると、力が上がるの!？

「ちっ」

舌打ちと共にヘイズさんが、指を弾く。

しかし、紙一重で身体にかするだけで、クーリンヒットさせない。

「おいおい、強化されてても、人間の反射神経じゃねえぞ？ お前はルイズか・・・って人間じゃなかったか」

ヘイズさん、その言葉だとルイズさんが人間じゃないみたいに聞こえますよ？ まあ、あの人人間じゃなくても、なんら不思議ではないけど・・・

でも、私も防がればかりだとしゃくだ。

鞭のような舌の攻撃や爪による衝撃波を避けながら、咸卦の気を両手に集める。その間、一秒。【居合い弾】の溜めがゼロコンマ数秒以下だから、どれだけ溜めているか分かるだろう。溜めた分だけ威力が跳ね上がるってわけじゃない。限度はあるけど、これが私の二丁拳銃での決め技だ。

「恨むなら、私を恨みなさい……アンティケイメノイン・ショット（咸卦の射撃）」

二発の超高密度弾が音速を超えて、怪物に跳ぶ。

私の見立てだと、奴の障壁はトリプルA、つまりAAAランク。

【アンティケイメノイン・ショット】はSランクの障壁すら貫通する。

強制的に殺傷設定だから使いどころに困るし、並のデバイスだと集束・圧縮に耐えられない。アーチャーさん製のデバイスとこういう状況だからこそ使えるのだ。

「ぎゃっっ」

悲鳴。

私の弾丸は容易く障壁を突き破り、頭部と腹部に着弾した。風穴をあけて吹き飛ぶ怪物。

「今度は頭を完全に潰すか」

指を弾いて、怪物の頭を砂のように崩した。

これで生き返ったら、生物としてどうかと思う。

………と言うかヘイズさん。 あなたの技が凶悪過ぎです。

「ん？ ……ああ、言っておくが、人間みたいに考える力が強い奴が相手だと、こうはいかないぞ？ 出来なくはねえけど」

……こわっ。

列車に乗って地上を目指す。

今回はなんと言うか……… 社会見学の時とは違った恐怖を感じたわ………

その後、地上に出た私たちは、ヘイズさんが依頼者たちに【赤の女王】を破壊したと報告。 固く扉をロックして、依頼達成となった。

ちなみにこのあと、【Hunter Pigeon】の管制人格が、二人になったのは言うまでもない。

「帰って・・・きた」

家の扉の前に立ち、生を実感する。

「何やってんだティアナ、入るぞ」

「今回も、生きて帰ってきたな〜って感動してるんですよ！」

「大丈夫だ、そのうちそれが当たり前になる」

「・・・私、どこで道を間違えたのかな？ 私はどこかで道を間違えたのかな？」

なぜか、目から汗が流れてくる。

あ、あれ？・・・おかしいな。

家の中には要人警護に行っていた、クー達四人がくつろいでいた。

「いやー、大変だったぜ。ビルごと爆破してくるは狙撃はしてく

るはで」

なかなかクーたちも、波瀾万丈な依頼だったようだ。

「・・・あれ？　そう言えばルイズさんはまだ帰って来てないんですか？」

私の問いにレンさんやクー、エヴァが首を傾げる。　アルはいつもの微笑だ。　その時、インターホンがなった。　扉が開く音がしたので、出迎えるために私は玄関に向かった。

「ってぼろぼろー!？」

そこにいたのは殆ど半裸に近い状態で、口から鮮血を垂らしているルイズさんだった。

「あ、ティアナ。　ただい・・・ごぶっ」

びちゃびちゃと吐血するルイズさん。

それでもなんでもなないように靴を脱いであがってきた。

「っ・・・大丈夫なんですか!？　病院に行った方が・・・」

「大丈夫大丈夫。げふっ……ちよっぴり、内臓の方の再生が
終わってなくてね？ いや、流石は宇宙最強とか嘯いてただけは
あったわ」

笑いながら吐血…… はっきり言って怖いです。

この日、このままこの人達とついて行って、マトモになれるの
か、本気で悩んだ私だった……

1 14 ルイズの故郷（前書き）

・・・駄文だ。

1 14 ルイズの故郷

S i d e ・ ティアナ

12月30日。

もうすぐ、今年も終わりだ。

と言っても、たいしてこれと言って変わったこともなく。いつも通りの生活・・・修業して、ゲームして(やっとエヴァと互角に格ゲーで対戦できるようになってきた)、ご飯食べて、たまに依頼について逝って・・・の繰り返しだ。

そんなある日のこと。

「ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶ」

今は朝の6時。

私は習慣になっているランニングから帰ってきた。シャワーを浴びて、火照った身体をサッパリさせる。そして、髪を拭いていると、ルイズさんがやって来た。

「おはようございます!」

「ん、おはよう。……ああ、そうだティアナ、今日の午後から行くところがあるから準備しておいて」

「? 依頼ですか?」

「いえ、ちょっと私の故郷にね……約束があるのよ」

……ルイズさんの故郷か、まさか、ルイズさんレベルの人たちがわんさかいたりして……まさかね。いつたい何処の出身なんだろう?

「……完全装備ですか?」

ルイズさんの故郷じゃ、どんな危険があるかわかったもんじやないわよね?

「いや、そんな危険な世界じゃないわよ？ でもまあ、何かがあるか分からないし、とりあえず仕事服で来なさい。場所は地下施設の【あの】場所ね」

「わかりました」

「……ふう、人外魔境と言うわけではないようだ。それにしても地下施設？ それも、今まで一度も入ったことがない【あの】部屋か……」

「じゃ、そう言うことで」

このあと朝食でヘイズさんやレンさん、クーに聞いてみたけど、今回が初めてらしい。

「……まあ帰郷するだけなんだから、それほど心配する必要はないと思うのだが……」

地下施設。

そこは訓練所や物置など、とてつもない広さをほこる。聞

いた話によると、空間圧縮魔法で不可能な広さをとつたらこうたら

・・・

そんな地下施設には誰も入らぬ開かずの扉があった・・・

「・・・と、そんな開かずの扉の前に集まった訳ですが、このなかには何があるんですか、ルイズさん？」

「ふふふ、この中にはね、ある魔法陣があるのよ」

そう言うと、扉の横にあるタッチパネルに手をおいた。

すると、巨大な鋼鉄製の扉がガキガキ、と音をたててスライドしていった。

自動で中の部屋のライトが灯り、明るくなる。

「・・・・・・・・すいっ」

扉の向こうは三十メートル四方の空間で、その床一面には言葉通りに魔法陣が刻まれていた。複雑怪奇な見たこともない陣だった。

「すげー、この部屋入ったことなかったけど、こんなもんがあったのか？ 知ってたかレン？」

「ううん、知らなかった。確かにすごいね」

レンさんも言っているが、滅茶苦茶複雑な陣だ。しかも、描かれている訳ではなく手作業で刻まれている。

「・・・この陣を完成させるのに、一年はかかったのよね・・・大変だったわ。確か、最後に使ったのは十年前だったかしら」

懐かしそうに呟くルイズさん。

後から聞いたが、ルイズさんの故郷はとてつもなく遠く、次元航行艦の航行速度だと、五十年はかかるらしい。　　どんだけ遠いんだと思ったが、さらに驚き、と言うか呆れることは、その距離をこの魔法陣のサポートとルイズさんの全魔力の八割を消費する事で転移出来ることだった。

次元航行艦で五十年を一瞬って・・・

魔法陣が白く輝き、視界が白く染まる。

「浮遊感が一瞬私を襲った。」

光が収まると、そこは地下施設と似たような陣が床に刻まれている部屋だった。

「・・・成功みたいね。　ああ、疲れた・・・　ごっそり魔力を持ってかれたわ」

肩を叩きながら、出口らしき扉を開けるルイズさん。
扉の向こうには階段が続いている。
階段を登りきったときは・・・

「森？」

鳥のさえずりや虫の鳴き声が聞こえる。
森のなかだ。

「ここがルイズの故郷か」

ヘイズさんが辺りを見渡しながら言った。

「イメージとちょっと違うなー、もっとこつ化け物がわんさか襲っ

と、青い髪をした二十代前半の女性が、家の中からちよつと出てきた。

「シルフィ、久し振り」

「……！ あ~~~~~！！！！！！ ルイズなのね〜！」

……外見のわりに幼い？ 女の方は、両手を振って家の中に駆け込んで行き、これまた二十代前半の青い髪をした女性を引っ張ってきた。 この人は赤淵の眼鏡をかけている。

……いまいち状況が……この家がルイズさんの故郷なのだろうか？

簡単に自己紹介した私たち。眼鏡をかけているのがタバサさんで、外見の割りに幼いのがタバサさんの使い魔のシルフィード

だそうだ。

「どうぞ」

そう言つて、タバサさんはお茶を……出さずに、サラダらしきものを出してきた。

……やはりルイズさんと同じように、何処かズれているようだ。

透き通るような蒼い瞳が、私に食べると言っている気がする。

「い、いただきます」

口に含んだ。

……！！！！？

強烈な苦味が舌に広がる。ど……毒！？

いや、見るとルイズさんは懐かしそうに食べている。私が

おかしいの？ いや、そんなハズは……

クーとヘイズさんは顔をしかめている。やっぱり私の舌が

おかしいわけではないのよね？

「……美味しい」

レンさん……貴女が甘いものが苦手なのは知ってましたけど、この苦さが美味しいって……どうなのよ？

見つめ合うレンさんとタバサさん。

「……………」

お互いあまり喋るような人柄ではない。
無言で頷き合う。
いや……………なぜ？

「それにしても、久し振りねタバサ。十年振りってところかしら？ 最近の世情はどんな感じになってるの？」

「……………漸く、エルフと東、ハルケギニア各国との友好同盟が一ヶ月前に結ぶことが出来た」

「……………そっか、それじゃあ」

「……………そろそろ、私もこの世界を去ろうと思っていた。種族間の問題、貧富の差、東との貿易……………裏で暗躍して、幾星霜……………すべてが解決出来たわけではないけど、私は十分に支えた。これからの事は、この世界に生きる者たちに託す」

「なんだか、難しいことを話すルイズさんとタバサさん。でも、わかった。タバサさんは永い間、裏からこの世界を支えて

いたんだ・・・

「・・・・・・・・私と来ない？」

「迷惑にならないの？」

「何人来ようが問題ないわよ。それに私、今はあの時みたいに便利屋をやってるのよ？ 貴女達の戦力が邪魔になるってことはあり得ないし、・・・・・・・・それに貴女も【紅き翼】でしょ？」

「【紅き翼】・・・か、私もルイズ、貴女もずいぶんと『遠く』まで来てしまった。なら、行けるところまで突き進むだけ・・・・・・・・」

「きゅい！ なに歳より臭いこと言ってるのね！ まだまだお姉さまはピチピチなのね！」

「・・・・・・・・」

タバサさんが大きな杖を何処からともなく取りだし、シルフィを軽く小突いた。

「・・・しばらく世話になる」

「オツケー。 ってことで、みんな、このタバサとシルフィが仲間になるわけだけど、反対の奴はいる？ 力はそうね・・・少なくともエヴァと同等以上はあるわよ？」

「異議なし」

「よろしくなタバサ、シルフィ」

「よろしくね」

「宜しくお願いします」

私やヘイズさん、レンさんにクーが挨拶した。

「よろしく」

「よろしくなのね」

こうして新たに二人の仲間を私たちは得たのだった。 いや、私にとっては家族か……

夕暮れに照らされる中を私たちは蒼い鱗を持つ巨大な竜に股がり、空を飛んでいた。

この竜、なんとタバサさんの使い魔のシルフィなのだから、驚きだ。 なんでも、シルフィードは今では絶滅したと言われている希少種の竜種らしい。

それだけでも驚きなのだが、更に驚くべきなのは、今私たちが飛んでいる空に浮かぶものだ。

森のなかでわからなかったが、このハルケギニアと言う世界はあちこちに浮遊している島があるのだ。

大きいものなら都市一つ、小さいものでも一戸建ての住宅が建てられる程の大きさの島が夕陽に照らされる光景はまさに絶景と言えるだろう。

「ルイズさん。 今さらなんですけど、何でこんなに浮島（私命名）が浮いてるんですか？」

ふと気になったので、聞いてみた。

「ん、私もよくわからないのよ。昔ね？ 私とアルとエヴァ、そしてシエスタって戦友と一緒に強大な、まさにラスボスって感じの奴とこの世界で戦ったの。その時にシエスタはピンチの私を逃がすために戦って・・・結局、そいつは倒したんだけど、私たち三人は遠い世界に飛ばされちゃったのよ。何十年か掛けて戻ってきた時にはこんな有り様だし・・・あの時は驚いたわね」

「・・・トンデモ話、ありがとうございます。でも、ルイズさんの過去を聞くのは何だかんだ言って初めてなんじゃ・・・って、然り気無く言うけど、何十年って・・・やっぱりルイズさんって人間じゃないんじゃない・・・外見年齢二十代前半なのに、何十年って言ってる時点で人間ではないでしょ？ と言っても驚きはないわけだが・・・」

しばらく飛ぶと、シルフィはある浮島に着陸した。面積は百平方メートル程だろうか？ 島の中心に巨大な石碑が突き立ち、その周りには色とりどりの花ばなが咲き誇っていた。

高さ五メートルはあるだろうかと言う石碑の前まで歩いていく。石碑には何かの文字が刻まれていた。会話は翻訳魔法を駆使すればどうとでもなるが、文字となるとそうはいかない。

「・・・なんて刻まれているんですか？」

「これ？ この石碑には『救世の英雄達、ここに眠る』……
そう刻まれてるわ」

そう言つて、ルイズさんは目を瞑つて黙祷した。

……ここに眠る人たち、……仲間だったのだろうか？
私たちは立ち尽くし、その場でしばらく黙祷したのだった。

それはタバサとシルフィードが【紅き翼】に復帰してから二ヶ月の時間が過ぎた、新暦0070年の2月中旬の事だった。

Side・ティアナ

私の胸を閃光が貫いた。鮮血が噴水のように吹き出る。そんな傷口を実感なくぼんやりと眺め、抑えた。

「かはっ、……は、はは……ド……ジっちゃっ……た……ゴホッゴぷっ」

咳と一緒に吐血した。

「ティアナッ！ くっ、この野郎！！」

要人警護の依頼中、殺し屋の一撃を受けてしまった私。傷口から感じるのは痛みではなく、熱さだった。

南風の弦！！！！
ノトスコード

膝をつく……あれ？ なんて地面が目の前にあるんだろ
う？

ああそうか、私倒れたんだ……

「おい、ティアナ！ クソッ、血が止まらねえ」

「クー、落ち着いて！ 私が応急処置しておくから、ルイズに連絡を……」

…… 身体から力が抜けていく…… 血が床に広がるのがわかる……

…… ああ……私……死ぬのか……な……

「・・・・・・・・はっ！ つ痛・・・・・・・・」

目を開けると、そこは何時もの私の部屋だった。
さっきまでは・・・・・・・・夢？

「・・・・・・・・じゃないか」

私の胸には包帯が巻かれていた。
看病してくれていたのか、レンさんとクーがベットのそばに椅子を置いて、そこに座って寝ていた。

「・・・・・・・・」

目眩がして、上半身を起こしていられなくなり、ベットに横になっ

た。その音で起きたのか、クーとレンさんが目を覚ました。

「ティアナ！ よかった、目を覚ましたか」

「ごめんね、私たちがついていながら・・・」

「いえ、・・・依頼についていく以上、こう言うこともあるって分かってましたから。だから、私がどんなに重傷を負っても、それは私の責任です」

そう。 わかっていたのだ。 寧ろ、今まで死ななかつたのが不思議なくらいだ。 それにしても、生きているのが不思議なくらいの重傷だったハズ。

「・・・あの日から何日経ったの？」

クーに尋ねる。 傷が完全に塞がっていることから考えて、十日以上・・・いや、下手をしたら一ヶ月以上経っていても不思議ではない。

「ああ、あれから三日だ。 ルイズによると、傷は魔法で塞いだけど血の量とか身体へのダメージは完全には治癒出来てないから、しばらくは安静にしてるだつてよ」

……相変わらずのチートっぷりを発揮してくれたようだ。
瀕死の重傷が三日で表面上だけとは言え完治するとは……
いや、傷自体は数秒で治したのかな？

「……そっか。少し眠るね」

「わかった。ゆっくり休め」

クー達が部屋から出ていった。
それと同時に抑えていた身体の震えが始まった。

「……」

何故震えるのだろうか？
だろうか？

死を間近に感じて、恐怖したの

わからない。

ただ私は目を閉じて、身体を休めることに集中することにした。
やがて、震えは治まった。

Side・アウト

リビングに【紅き翼】のメンバーは集まっていた。そこに、看病をしていたクーとレンがやって来る。

「ティアナが目を覚ましたぜ」

「そう。様子はどうだった？」

「ああ、まだ血が足りてないみたいだったが、身体の方の傷は大丈夫そうだったぜ。ただ・・・」

「ただ？」

「本人は抑えてるつもりだろうけど、身体が震えてた・・・」

クーの言葉にルイズ、タバサ、エヴァ、そしてアルの四人がため息を吐いた。

「やはり、恐れていたことになりましたね」

と、アル。

「そうね。心に恐怖が宿ってしまった……」

「うん。身体は魔法ですぐに治った。けど、心に恐怖のタネが植え付けられてしまった。これは……戦う者として致命的」

タバサが続ける。

「私は何人も見てきた。死闘の果てに生還したものの、心に恐怖のタネが宿り、戦えなくなった者達を……」

「じゃあどうするよ？　クーの話じゃ本人はまだ自覚してねえみたいだが」

「……恐怖のタネは時間を置いても育つだけ、自然となくなることは殆どない。リハビリは早いほうがいい」

.....

無言になる。 全員がどうしたらいいのか考える。 その
とき、ルイズが言った。

「.....やっぱり、荒療治だけど.....」

「なっ、いいのかそれで？」

「大丈夫よヘイズ。 たぶん」

「なんて無謀な..... しかし、それぐらいしか思い付かないのも
事実。 ここはティアナの心の強さにかけてみましょう」

私が大怪我から目覚めてから一週間が経った。 身体は完全に癒え、今ではなんの後遺症もなく動くことが出来るようになったのだが……

「うん、もう身体は大丈夫そうね」

「はい、ルイズさんの治療のおかげです！」

軽く身体を動かし終わり、調子を確認していると、ルイズさんがやって来た。 あの前ほど重傷を傷痕がまったくわからないほどに治すなんてね……

「ところでティアナ、あなたには直ぐに依頼に行ってほしいのよ。……Sランクのね」

「……はい？」

ルイズさん、貴女が何を言ってるのかわからないよ、ルイズさん…… Sランク……

前にもちらつと言っただけ、管理局武装局員（最前線）で危険度Bランク、この前行った地下研究所の依頼はゾンビもどき達が襲ってきたのも考えて、AAランクってところか。

で、Sランクって言ったなら、その二段階上な訳だが・・・

「可愛い子には旅をさせろって言うでしょ？・・・完全装備で玄関に三十分後に集合。完全装備だわよ？」

そう言って、私の返事も待たずに、ルイズさんは訓練場から出ていってしまった。

・・・いったい何なんだろう？ とにかく、装備出来るだけ装備して行こう。 死の淵からなんとか復帰したのだ、まだ死にたくはない。

玄関に行くと、ルイズさんにアル、エヴァ、それにヘイズさんにクーとレンさん、タバサさんにシルフィと全員が揃っていた。

「もしかして、全員で行くんですか？」

普段は一人か二人、私を入れても三人が一番多い人数だったのだが……

「いえ、見送りよ。今回はタバサとシルフィのペア、それとヘイズとあんたの四人で行ってもらおうわ」

「よろしく」

「ティアナと組むのは初めてなのね!」

「よ、よろしくお願いします!」

……人数が過去最多なんだけど、何故?

「あの、なんで四人なんですか? 何時もは大体一人か二人じゃないですか」

気になってルイズさんに尋ねてみた。すると、ヘイズさんが答えてくれた。

「あくまで保険だ。もしこん中の誰かが死んだ場合、残りの奴が嬢ちゃんを守って依頼を達成する」

「え、死？」

「そう。私はまだそれほど依頼に行つてはいないけど、Sランクの依頼なら……いくら私たちでも、ある程度は覚悟しなければならぬ。戦いの世界に絶対など存在しない」

「きゅい！ シルフィは誰も死なせる気はないのね！ ちゃちゃつと片付けて、お肉を食べるのね！」

……最後の言葉で緊張感が霧散してしまったが、相当に危険らしい。……にしても、なんで急にSランクの依頼に私を連れていくことになったんだろうか？

「ティアナ」

出発しようとしたその時、ルイズさんに呼び止められた。

「なんですか？」

「……私の弟子になることで、あんたは一步を踏み出した」

「……………」

なにか……………とても大事な何かをルイズさんは言おうとしている。

……………そんな気がした。

「この依頼に行けば、……………もう一步を踏み出せば。あなたはたとえ帰ってこれたとしても、二度と平穏な日常をおくる事が出来なくなるかもしれない。所謂、後戻り不能地点ポイント・オブ・ノー・リターンつて所に立っているんだと思うわ」

「……………はい」

「あなたが弟子入りして直ぐに聞いたけど……………もう一度聞いておくわ、ティアナ」

「……………」

「……………本当に戦う道を進んでいいのね？ 死が常に隣り合わせで、いつ肩を叩かれるかわからないような世界に……………足を踏み入れてもいいの？ 今からでも、この家で暮らしたり、管理局に入りたいならデスクワークの方で、死ぬか生きるかの世界から、足を洗うこ

とは出来るわよ」

違う道を進むかどうか、ルイズさんに弟子入りしてすぐに問われた。その時私は戦う道を進むと、そう答えた。そして、死んでもおかしくないような怪我を負った。そこで、この問い……たぶんルイズさんの言う通り、この依頼は今までとは勝手が違うのだろう。でも……

「……ありがとうございます、ルイズさん。でも、私は進むって決めたんです。最初は何となくでしたけど、今は違います。あの旅行のとき、……人を殺傷設定で撃つた時から私は……何時か、この判断を間違いだと思うこともあるかも知れませんが……けど、私は後悔だけはしません。私は前に進みます！」

「……そう。わかったわ、そこまでの覚悟があるなら私は何も言わない。……泥にまみれても尚、前に進みなさい、それでこそ私の弟子よ。必ず生きて帰りなさい」

こうして、私はヘイズさん、タバサさん、シルフィと共に依頼へと向かったのだった。

この時の選択を私は後悔はしていない。けれど、……反省はしている。……もう、手遅れだけかね？

設定

(前書き)

とりあえず、まとめてみました。

設定

人物設定

ティアナ・ランスター

この物語の主人公。闘い方からか、儉約家に・・・周りが周りだけに、原作より弱冠ポジティブ。近・中距離戦では二丁の拳銃型デバイス【デザートイーグルD】、サブマシンガン型デバイス【P90D】を使つての射撃・格闘をこなし、遠距離戦ではボルトアクション式のライフル型デバイス【レミントン700D】を使いこなす。【気】と【魔力】を合成させ、爆発的に出力を増大させる技法【咸卦法】をある程度習得していて、三十分継続、全力戦闘なら五分間継続出来る。また、障壁貫通能力が弾丸に付与されているため、二挺拳銃でAランク魔導師の障壁、カートリッジの魔力を集束・圧縮させれば、AAAランクを貫通、【P90D】ならB Aランク、【レミントン700D】ならAA Sランク魔導師の障壁と、だいたい1〜2ランク貫通力が上昇する。今のところの決め技は二丁拳銃による銃の居合い抜き、【居合い弾】・咸卦の気を集束させて放つ【咸卦の射撃】アンティケイメノイン・ショット。前者は当初、咸卦法時にしか使えなかったが、1 14〜15の間に通常時でも使用できるようにになった。ただ、障壁貫通力は通常時はAランク程度、咸卦時はAAAランクとかなり威力に違いがある。撃つところが目に映らないので、避けるのは至難の技。後者は二発のSランクの障壁貫通力が付与された弾丸を放つが、咸卦時にしか使えず、強制的に殺傷設定になってしまうのでティアナはあまり多用しない。ティアナ自身の魔力量はそれほどないが、極限まで圧縮し、障壁貫

通能力を付与した魔力弾が持ち味となっている。だが、そればかり鍛えていたからか、誘導系の魔力弾が苦手・・・と言っか、全く使えない。

雨の中、兄の墓前で執務官になり、上司を見返すこと。そして、この物語では仇を討つことを誓っている。

ルイズ・フランソワーズ

銀髪の女。便利屋【紅き翼】のリーダーにして、ティアナの師匠。Sランクの魔導師を片手で捻る程の実力者。快樂主義で、自分が楽しそうと思った依頼しか受けない。どうやら人間ではないようだか・・・

アルビレオ・イマ

いつも微笑む謎の司書。【紅き翼】に所属。重力を操る。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

巻物の人造霊。【紅き翼】に所属。ルイズが持ち込んでくる騒動に巻き込まれながらも、楽しむ。氷結系統の魔法を多用する。

ヴァーミリオン・CD・ヘイズ

『異端なる空賊』 改造され、次元世界間も移動可能となった、元雲上航行艦【Hunter Pigeon】のマスター。

ある時、異世界に跳ばされ、ルイズ達と出会う。 【紅き翼】

所属。 外見年齢は二十代前半。 苦勞人。

ハリー

【Hunter Pigeon】のAI。

クード・ヴァン・ジルエット

通称『クー』 十代後半の青年。 陽気で前向き。 あ
る時、レンと二人で傷だらけで倒れていたところをルイズに助け
てもらい、そのまま【紅き翼】へ。 魔力はあまりないが、ルイズ
に【気】の鍛錬法を教わり、ある程度は修得。 同契者のレンと
は恋人。 なお、女の子のファッションではウサミミが我を忘れ
るほど大好き。

レヴェリー・メザランズ

通称『レン』 口数は少ないが、クーが大好き。 額に核
石という、マカライト色の石があり、普段はリボンで隠している。

クーと【同契】することにより、風を纏った大剣に姿を変える。レンと力を合わせれば、台風以上の天災クラスの力を発揮する。マイペース。

シャルロット・エレヌ・オルレアン（タバサ）

外見年齢二十代前半。 ミッドチルダとは遥かに離れた世界（次元航行艦で五十年）ハルケギニアで数百年と平和の為に暗躍していた、かつてのルイズの仲間。 透き通るような青い髪と瞳をしている。 異種族との問題解決を一区切りに、【紅き翼】に復帰。 無口で無愛想だが、冷酷と言うわけではない。 人間の姿は擬態で、正体は……

シルフィード

タバサの使い魔。 天真爛漫な性格。 普段は青い髪をした二十代前半の女性の姿だが、正体は体長三十メートルを超える龍とと呼ばれる、言語を操る竜である。 主にルイズやアル、エヴァが使う魔法と同系統の風の術式を使って戦う。

アーチャー

ミッドチルダのとある裏路地にあるカフェのオーナー。 客が入

っているのかは不明。 180?程の長身に褐色の肌、真っ白で逆立てた短髪。 ティアナのデバイスの作製者であるが、本人曰く、刀剣が専門。 よくティアナの愚痴を聞いてくれるらしい。 過去の素性は一切不明、ルイズに世話になっただけらしいが・・・? 時々、時たま店を空けて、何処かに出掛けるのだが、何処に向かったのかは誰も知らない。

ティーダ・ランスタール

数年前からルイズと交友があった青年。 ティアナの兄であったが、違法魔導師の追跡任務中、何者かに襲撃され死亡。 その場にいた全員が殺され、犯人はわかっていない。

???

ティーダとその部下、そして違法魔導師を殺した第三者。 正体は不明。

【紅き翼】

所在地・依頼方法不明の裏世界伝説の便利屋。 ペット探しから世界滅亡の危機まで、手広くやっている。 引き受けた依頼は

超絶的な実力で確実に達成し、その依頼達成率は100%。メンバーは一癖も二癖もある者たちばかりで構成されている。依頼に邪魔ならば、たとえ管理局が相手でも排除することがあるため、メンバー全員は犯罪者としてマークされている。が、一部の者はコンタクトをとり、依頼することもあるようだが、詳細は不明。

ヘイズの設定（前書き）

原作と違つところがあったとしても、気にしないで下さい。

ヘイズの設定

ヘイズの【情報解体】について。

破碎の領域

普段使っている指パッチンや靴の裏を鳴らすことで空気分子に論理回路を刻み込み、最大直径五十センチの円形領域を情報解体する技。

解体レベルはS（異常）

ファーストミッションでは怪物の肉体を障壁を無視して解体していたが、それはほとんど本能で張ったような粗い障壁だったため。

普通の魔導師等が相手の場合は、一番外部の障壁を強度に関係なく破壊する（BJも一種の障壁）。思考力のない物体だと、原子レベルで分解、生命体も同様。しかし、人間や思考力のある（基準として、本能以外の行動がとれるレベル）生物、またはAIが搭載されたデバイスなど『稼働している』高い演算能力をもつコンピュータなどは、受けると壊死したり、壊れたりする。空気の振動（音）を媒介にしているため、速度は音速。最大射程はヘイズの認識可能範囲すべて。だが、情報解体の瞬間僅かに空間が歪むらしく、『本物』には回避されてしまうこともある。

虚無の領域

範囲内の全てを情報解体で分解する。生命体だろうとお構い無し。最大直径十キロの範囲を解体し、【破碎の領域】とは違い、障壁を張っていても無駄。ただし、一度使うと三時間、一キロ以上の規模だと九時間、I・ブレインが停止してしまうため、その間は【情報解体】や相手の動きを予測演算しての先読み回避が出来なくなる。

S i d e ・ ティアナ

草木が一本たりとも生えていない、岩や砂だらけの荒野・・・
熱いほど照りつける太陽の下で、私は迫り来る死から逃げるため、
引き金を引き続けていた。
バスケットボール大の魔力弾が、雨あられと降り注ぐ。 勿論当
たり前のように殺傷設定だ。

「くっそおおおおッ!!!」

撃って撃って撃ちまくる。ギリギリ私の周囲に降る魔力弾は相殺し
きったが、それ以外の魔力弾に手を出す余裕はない。

「チキシヨオオッ!!! いくら戦い続けても平和な世界なんて来
ねえのかよ!!!」

誰かが叫んだ。

「諦めるなッ!!! 俺達ならやれるっ!!! 諦めなければいつか
必ずッ.....ぐああッ!!!!」

仲間の兵士が次々と撃ち抜かれ、血を吹き出しながら地に伏せていく。

「ジャックツッ!! 死ぬんじゃないわよ! 傷は浅いわ!!」

「かふっ……へへ、ドジッちまつ……た」

「ジャあああックッ」

早く!

増援はまだなの!?

物陰に隠れながら毒づく。先ほどの弾幕にやられ、辛うじて生きている兵士を仲間の一人が助けに駆け寄る……。すると、遙か彼方からの狙撃に頭を撃ち抜かれ、倒れた。

「ふー……。冷静に、戦場では焦った者から死んでいく……」

頭に銃身をあて、呟いた。今の私は変身魔法で身長や髪の色を変えている。

身長170?、髪の色は黒だ。大体二十代前半を意識して掛けてもらった。

『待たせたな』

「ッ!!! 遅い! ヘイズ!!!」

ヘイズからの通信。

空から真っ赤な船体の【Hunter Pigeon】が現れ、荷電粒子砲が放たれる。

「・・・助かった」

また今日も生き長らえることが出来た。

Sランク依頼。

あのルイズさんに後戻り不能地点について問われてから既に二ヶ月が経過していた。

なぜ私がこんな戦場でドンパチしているのか、その説明には二ヶ月前のあの日にまで遡る必要がある・・・

世界を西の帝国と東の連合に二分して戦争が続いている世界。

管理局ともかなりの緊張下にある、この独自の魔法が発達した世界

【アルガーナ】の文明発祥の地と呼ばれる【王都アスタ】

今回私たちに依頼してきたのはそのアスタにある【ウルテア王国】の王女だった。

「で、依頼の内容はまだ教えてくれないんですか、ヘイズさん」

「いや、今から向かう場所にいる奴が説明してくれるってよ」

機械的とはいかないまでも、ミッドチルダとそれほど変わらない文化レベルを持っていそうな東の連合首都【メガロポス】の宮殿に入っ
ていき、私たちは何処かの待合室に案内された。

しばらくして扉がノックされ、初老の男が入ってきた。

「失礼する。君たちが【紅き翼】の？」

「ああそうだ、そっちは？俺たちに依頼したのはウルテア王国のお姫様の筈だが、何故、連合国の首都が指定された場所なのかも含めて、しっかり説明してもらおうか」

無口なタバサさん、口を開くと『お腹が減ったのね』とか言い

そんなシルフィに代わってヘイズさんが言った。

「すまない。私はルギクス元老院議員だ。主賓はいまこちらに向かつて来ている」

数分後、ウルテア王国・・・リカ王女が私たちの前にやって来た。腰まである金髪に右目が緑、左目が青のオッドアイ。スラツとした体型で凛とした性格の、そんな女性だった。

【帝国】と【連合】

二つの巨大勢力に翻弄され続けてきた王国の王女。リカ・アキア・ウルテア殿下。

彼女は自ら調停役となり戦争を終わらせようとしたが、両勢力の陰に潜む組織に邪魔されてしまい、協力者として私たちに助けを求めたらしい。

その組織の構成員は双方の中枢まで入り込んでいるらしく、信頼できる者がいなかったようだ。私たちは戦場を巡りながら、その謎の組織の構成員を確保、情報を引き出しあわよくば潰そうと動き出したのだった・・・

……以上、回想終わり。

あの後、映画なら三部作、漫画にしたら単行本三十巻分ぐらいく
であるう二ヶ月の死闘を繰り広げた私たち。

最初は戦場に立つ度に、身体が何故かガタガタと震えたが、そんな
のに構っていたら待っているのは死だけだ。 無理矢理動かして
いるうちに、震えは無くなった。

やっと手に入れた、情報を元にして、信頼できる仲間の兵士たちと
共に、謎の組織の支部らしき基地に向かい、交戦した訳だ。 なん
でこんな真つ昼間から、しかもこんな荒野のど真ん中にある基地に
突入したかと言うと、滅茶苦茶センサーとかが張り巡らされて、夜
間に紛れて襲撃など、こつちが逆に視界が悪くなるって結論に至っ
たからだ。

「生きてるよな、ティアナ」

「……なんとかギリギリだけどね」

ヘイズが船から降りてやって来た。 そう言えば、いつの間にかこ
の二ヶ月の間に『ヘイズ』と呼ばび捨てにしていた。 ヘイズ自身、
何も言わないので、気にしていないと思うが……

タバサさんとシルフィは今制圧した基地に入り、情報を集めてくれ
ている。 流石は何百年も裏で暗躍し続けた人達だ、その動きは
どこかやり馴れているように感じた。

「タバサ達が戻ったら、一旦メガロポスに戻るぞ。今回の作戦、正面突破するしか手がなかったとは言え、お前も疲れただろ」

「もうボロボロですよ。でも、他の仲間達は……」

仲間の兵士たちは私が弱かったから死んだなんて、傲慢なことはいわない。

でも、なかなか割り切ることも、また出来ない。

「そうか、自己管理はしつかりな？」

そう言ってヘイズは基地の入り口に視線を向けた。

ちなみにどんな基地だったかと言うと、山に偽装され、カムフラージュされた基地だった。洞窟のような入り口に私も目を向けると、タバサさん達が出てきた。

「よう、どうだった？　なんかあいつらの情報はあったか？」

ヘイズの問いにタバサさんはブイサインで答えた。

「ベリーグッド。詳細はあとで話す」

「早く帰って、ご飯にするのね！」

リカ王女を交え、私たちは得た情報を整理した。
場所はメガロポスにある私たちの隠れ家だ。

「どうじゃった、何か新しい情報は手に入ったかの？」

「私が説明する。あの基地はどうやら末端だったみたい」

「はあ？ あの規模で末端か？ 山に偽装されて、かなり大掛かりな基地だった筈だがよ」

最初、私たちは謎の組織を国際マフィアや死の商人……つまり、戦争があると儲かる者たちの組織だと踏んでいた、しかし、それにしては規模がまるで違う。これではまるで……

「今回の基地での情報で、組織の名前が分かった……【救済者の集い】」

……この世界すべてを操っているように思える。

「んぐんぐ、そうなのね！ それで……もぐもぐ……こんなのが見つかったのね！」

……どうでもいいけど、口にものを入れながら喋るんじゃないわよ……って、タバサさんに杖で小突かれた。

シルフィが懐から取り出し、テーブルに広げたのは、誰かの男の画像だった。その男との会話記録も残っている。

……お菓子以外のものも入ってたのね？

「なっ……こやつは……！」

「おいおい、マジかよ？ この男、確か今のメガロポスの執政官のナンバー？ じゃねえか」

それは大物が釣れたわね…… まさかそこまで中枢に入り込まれてるなんて……

「ぬっ……じゃが、この証拠があれば戦を終わらせることが出来

るはずじゃ……どう思うかの?」

「おそらく……その可能性は高い」

「まあ、確かに裏で操っている奴らがいると証明できれば、戦争が終わるかもな」

「しかし、そのためには帝国の皇族の誰かと接触し、手を借りなければならぬ」

帝国の皇族…… 確か、全員女で第三皇女までいた筈だ。

「では、その役目は妾が担おう。今の帝国領に侵入するのはそなた達でも危ういじゃろう、東の連合などもっての他じゃ。妾なら言い訳はたつ。連合国の説得は主たちに任せてよいか?」

「問題ない」

「まあなんとかするぞ」

「モロモロ、……きゅー」

「私は役にたてるかわかりませんが・・・」

シルフィはあとでタバサさんに絞られるんだろうな〜と思いながら、私はそう言った。

すると、リカ様が私のところまで来て、肩を掴んだ。今の私は変身魔法を解いているから、リカ様が膝をついて、やっと視線が同じぐらいだ。

「何を言っておる。主も立派な仲間じゃ、頼りにしておるぞ」

こうやって、ストレートに褒められたことがないから、どう反応していいかわからなくて、どもってしまった。

「え、あ、ありがとうございます。が、頑張ります!」

「うむ」

この王女様、無愛想なようで案外優しいんだ・・・
と、そんなことを考えていると、タバサさんがリカ様に何かを渡している。

・・・指輪だろうか？

時計を見ると夜の八時をまわっていた。

私たちは明日の夜、証拠の品をもってルギクス元老院議員のもとへ、

リカ様は帝国第三皇女のもとへと発つことになった。

さて、いよいよこの依頼も大詰めかしらね？

街のライトアップが地上にある星のように、輝いていた。私は眠れず、屋根の上に座り込み、夜空に浮かぶ星の海を眺めていた。

「……………」

戦場に立った日の夜は必ずと言っていいほど悪夢にうなされた。

いや、最初の頃は毎晩のようになされたのだから、まだマシになった方だ。

……………だが、私はこの悪夢を甘んじて受けるつもりだ。

無論、この悪夢に潰されるつもりは微塵もない。

だが、これは私の罪の証、私が撃ち抜いた敵…………

守れなかった仲間達…………急所を撃ち抜かず、どうしたら殺傷設定の咸卦法るとき、相手を行動不能に出来るのか調べた、だが人を撃

っていることに違いはない。未だに直接人を撃ち殺したことはないが、それも何処まで貫いて行けるか……おそらくだが、これが二ヶ月前ルイスさんが言いたかったことなのだろうと思う。

「……後悔だけはしない」

きっと、この悪夢や罪悪感は時間が過ぎることに薄れていくのだろう。だから私はここにもう一つ誓いを……

「……もし、この先人を撃つなら、私は自分の意思で……」

殺さないなどと、甘ったれたことは言わない。

戦場に立ち、実践の空気を肌で感じているうちに、戦いはそんな事を囁けるほど甘くないと気づいたのだ。いや、たとえ殺さなかったとしても、戦う相手を打ち負かすと言うことは、相手の思いを砕いて殺すこと……ならば、私は思ったのだ。

相手のことを否定するなら、誰に命令されるのでもなく自分の意思で、と。

「……寝よ」

こうして、夜は過ぎて行った。

S i d e ・ テ イ ア ナ

さて、今日の夜にルギクス議員と待ち合わせした私たちは、リカ王女を見送って、メガロポスの街でショッピングと言っかなんと言っか、時間を潰すことになった。

「・・・シルフィ、あんたなんでそんなに食べられんの？ その姿の時って、胃も小さいでしょ？」

ヘイズは船の整備、タバサさんは本屋を巡って来ると言っって、姿を消した。

そこで私とシルフィが残り、街を散策することになったのだが・・・

「ふがふが、ぐもぐもぐ・・・きゅい、ぐくっ　ふふふん、私のお腹に限界と言っ文字はないのね！」

「そうなんだ・・・って、どう考えても、食いすぎでしょ！ あんたの買い食いで、今日の為に多めに渡されたお金が、もう半分よ？　これは使わせないんだからね！」

「そんな〜 ティア〜、まだまだいけるのね〜 それにティアだって文句言いながら食べてたのね！」

「・・・はあ、まあいいか。 買い食いに全部使っちゃおっか」

「うん！ さすが話がわかるのね！」

周りから見たら、いい歳した二人の女が大量の買い食いをして、口に食べ物詰め込んでいると言う、かなりシユールな絵に見えると思うのだが・・・。

気のせいと思いたい。
それに何故か、将来もこんな相棒が横にいるような気がするのだが・・・？

さて、あつと言う間に時間は過ぎ、私たちは証拠の品を持ちルギクス元老院議員のもとに向かった。
メガロポスのほぼ中心に位置する、ビルの最上階にエレベーターで

上がっていく。

ドアが開くと、そこはかなり広いオフィスだった。

壁はガラス張りで床一面に赤いカーペットが敷かれている。大きなテーブルが一つ置かれ、その横でルギクス元老院議員が背をこちらに向けて、外を眺めていた。ガラス張りの壁の向こうは星光のような明かりが街を照らし、幻想的な雰囲気醸し出していた。

「ルギクス元老院議員」

ヘイズが呼び掛ける。

すると、ルギクス元老院議員は背を向けながら答えた。

「ご苦労。証拠品はちゃんと持ってきたらうね？」

「ああ・・・ 法務官はまだ来てないのか？」

何処と無く怪しい雰囲気を感じた。

「・・・気のせいだろうか？」

「法務官は・・・来ないことになった」

「・・・!!!!!!」

「……………なに？」

「あれから少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だ……………
ここにきて慌てて水を指すのはどうかと思ってね」

「……………」

議員の言葉にヘイズは押し黙った。

……………すると。

『……………どう思う？』

ヘイズが私たちに念話をしてきた。

『怪しいのね！ 絶対なんかありそうなのね！』

「いや、その……………私の意見ではない。そう考えるものも多いと
いうことだ……………時期が悪い。時を待つのだ」

……………あまり話はしなかったが、こんな風にすぐ意見を変えるよう
な人だっただろうか？

この二ヶ月、サポートしてくれていたのは誰でもない、ルギクス元老院議員なのだ……

『私も……なにか違和感を感じます』

『……まかせて』

『はい?』

『なんだって?』

『きゅい?』

今、タバサさんが不穏な響きの言葉を呟いた気がするのだが……

「しっ」

呼吸と共に氷の槍がルギクス元老院議員に向かって空気を裂きながら飛び……

「ぎゃあっ!?!」

右腕を貫通し、防弾ガラス?の壁に縫い付けた。
吹き出る鮮血が、ガラスに紅い模様を描く。
………つて!

「ちよっ」

「きゅい! 流石お姉さま」

「おまつ なにやってんだッ!」

上から順に私、シルフィ、ヘイズだ。

「問題ない。アイツはルギクス元老院議員じゃない。 気配が微妙に違った………と思う」

ちよっとー!!!

思ったからって、いきなり串刺しにする普通!?

「ぐう……くっ、糞が!!! 変装は完璧だった筈だ! なんて俺が議員じゃないと気づいた!」

「……わーさすがはたばささんだすごいやーちゅうちよもせず
にぎいんをぶっさしたとおもったらほんとうににせものだー」

「って、本物のルギクス元老院議員はいつたい何処にやったのッ！」

「は、はははっ、もう十日前からどっかの湖のそこだ」

くっ、もう手遅れ……か。

十日前から入れ換わってたなんて……

……十日前？

ッ！？

リカ王女の船を手配したのはルギクス元老院議員だったはず！

「もしかしなくても、姫様がピンチだなこりゃ。　ちっ、まさかこ
うなるとは……」

ヘイズが悪態をつく。

いや、ここはコイツから姫様の居場所を聞き出すのが先だ。

ヘイズもそう思ったのだろう。

偽者に近づきながら尋ねる。

「王女をどこにやった？」

「そうなのね！ リカ様をどこに連れてったのね！ 言うのね」

「ぎあああッ」

ヘイズが無理矢理に氷の槍を引き抜き椅子に座らせ、シルフィが風の枷で拘束した。
痛みに顔をしかめる偽者だったが、ひきつったように笑う。

「言うと思うのか、俺が」

「はっ、言わせるんだよ」

ヘイズが懐から鉛玉を吐き出すオートマチックの拳銃を取り出し、銃口を相手の頭にポイントした。
一瞬目を見開いた偽者だったが、意地もあるのかひきつった笑みを浮かべる。

「は、はったりはよせ。俺を殺せば、二度と王女にたどり着くことはできんぞ」

「お前が口を割らない限り一緒だろ？ 大丈夫だぜ、心配しなくても助かるように撃つてやるよ」

ほがらかなヘイズの口調が怖い。偽者もそこに恐怖を感じたらしく、しきりに唾を飲み込んでいる。と、押し黙っていたタバサさんが言った。

「私が聞く」

偽者の前に立つ。

「王女はどこ」

「い、言えねえな」

「王女はどこ」

「……」

こわっ。

あ、今度は手のひらに槍が……
うっ、流石に戦場で大分慣れたとはいっても、気持ちのいいもんじやないわね……
すると、ヘイズが私の肩をたたいた。

「あっちに行くぞ。お前にはまだ早すぎる」

「え、う、うん」

なんか呻き声やら悲鳴やらを背にしながら、私はヘイズと別室に向かった。

思ったより早く終わった。だいたい十分ぐらいだろうか？ もっと短かったかもしれない。
シルフィが呼びに来て、オフィスに戻った。

「わ、わかった。いう！　いうから……ひっ、それはやめてくれ」

……何があつたんだろう？　外傷はそれほど見当たらないが、非常に疲れたようすの偽者。

あえて何をしたのかは聞かない・・・　　っというか恐くて聞けないでしょ？

「アスタだ・・・。　　王女は王都アスタの空中王宮最奥部【次元の宮で・・・かほっ」

！！！！？

何処からか飛来した槍に胸を貫かれ、偽者は・・・　　おそらく即死だろう。

私たちは反射的に飛び退く。

飛んできた槍は黒く、まるで闇をそのまま固めたかのような色をした、投擲槍だった。

見ると、強化ガラスに穴があいている。

そこから投げて、口封じってところだろうか？

「ちっ、喋りやがって。　　あと数分持たなかったのかよ」

「仕方ありませんよ、しかし、これは痛いですね・・・　　バレてしまいました」

「なに言ってるのよあんなたち。　　そんなのこいつらを殺っちゃえば、なんの問題もないじゃん」

いかにも怪しい三人組が転移してきた。

全身に西洋風の鎧、そして背に巨大な斧を装備し、顔すら見えない口汚い男、たぶん、こいつが槍を投げた奴だ。

そして、丁寧そうな言葉遣いの男。腰まである白い長髪を一つにまとめている。黒一色のジーパンにロングコート。背中には刀？を背負っている。

最後に女。肩まである黒髪。黒ブーツにジーパン、へそだしのジャケット、そして腰に下げた……二丁の銃！ あれはリボルバーだろうか？

そんな三人組が現れたわけだ。

「お前ら、何者だ？」

ヘイズが身構えながら尋ねる。いや、タバサさんやシルフィもいつでも動けるように構えている。私も、すぐにでも銃が抜けるよう構えた。

「はっ、【救済者の集い】っていやあ分かるか？」

「すみませんがあなたがあなたたちは邪魔なのですよ、ここで退場してもらいます。……つとその前に……わ、わしだ！ ルギクス議員だ……うむ、反逆者だッ！ ああ、うむ、確かだ、奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ 【紅き翼】の奴らは帝国のスパイだった！ 今も狙われている、軍に連絡を……」

・・・面倒なことになった予感が・・・

「げっ、面倒なことしてくれたな」

「・・・やられた」

「きゅい」

『タバサはあの刀使いっぽいのを頼む。俺はあの鎧をやるから、シルフィとティアナはあの銃使いを頼む。さっさと片付けて、王女を追うぞ。モタモタしていると、連合軍が来るかも知れないしな』

『わかった』

『わかったのね!』

『了解です!』

「・・・はあ、本当なら今日で証拠を渡して山場は終わりの筈だったのに・・・」
「ややこしくなっただけだよ」

Side・ティアナ

さて、ルギクス元老院議員に化けていた謎の組織【救済者の集い】の構成員を捕まえ、リカ王女の行方を吐かせた私たち。

だけど、その直後、ビルの外からの襲撃に構成員は消され、転移してきた怪しい三人組。

さあ、戦闘開始だ？

目の前には二丁拳銃の女。私と同じ武器だが、違うのはあっちはリボルバーで、こっちはオートマチックって所だろうか。
まあそれは兎も角・・・隙がない。

シルフィもいるが、これはちよつと分が悪いかな？
まるで、ルイズさん達と模擬戦をする時のようだ。

間違いなくこの世界に来て、一番の強敵だろう。

つうつと、一滴の汗が頬に垂れ、赤いカーペットに落ちる。
と、次の瞬間。

ズンツと轟音が轟き、ビルが揺れた。

おそらく外に飛び出た四人のうちの誰かがやったのだろう。
……今!?

「シッ」

居合い弾!!!

威卦状態ではないから、威力に不安がある。 だけど、弾速は変

わらない筈だ。 一息に六発。

この状態ではこれが精一杯だ。

同時にシルフィも瞬動で突っ込む。

「面白い技じゃん。 っと、なかなかやるね〜あんたら! おっと」

「きゅい!?!」

ダンツと、発砲音が一回。 けど、その一回で私に六発の高密度

魔力弾が飛んできた。

とんだだけのクイックドロローなのよ!?

ぎりぎり転がって回避。

容易く壁を貫通したところから、私と同様に貫通力が高いようだ。

けど、それだけじゃない、アイツは今、頭の二発を傾げることで避け、両手両足の一発ずつをいつの間にか抜いた一丁の銃で全て弾いた。つまり完璧に反応している。

カートリッジを使っていないから、音も殆ど出ていない筈なのに……だ。

……めっちゃ強いじゃん……

ここまでの思考にコンマ五秒。

霞むようなスピードのシルフィの拳や蹴りの連撃に二丁の銃を抜き、グリップや銃身で捌き、反撃もしている銃使いの女。

飛び退きながら、再び超スピードのクイックドロ！。今度は二丁使つて十二発か？ たまらずシルフィも飛び退き、私のそばまで下がる。

「きゅい……私の障壁を簡単に……」

見ると、避けきれなかったのか頬と脇腹に血が滲んでいる。深くは無さそうだが、私でも【咸卦の射撃】を使わなければ、簡単には貫通出来ないシルフィの障壁を抜くとは……

「いいわね〜 あんたら実に良いよ〜」

……くっ、まずは咸卦法を使わなきゃ、話しにならないわね……でもそんな隙は……

『ティア。私が時間を稼ぐから、咸卦法をするのね！』

念話と同時にシルフィが飛び出す。

「逆巻け夏の嵐、彼の者等に竜巻く牢獄を・・・」

風花旋風風牢壁・・・・・・・・なのね!!!!

シルフィが女を閉じ込める竜巻を発生させる。
今のうちに・・・・・・・・

「左手に【魔力】・・・・・・・・」

「甘いわッ」

風牢壁を吹き飛ばし、女も一瞬でトップスピード。

「きゅいっいっいッ!」

「ははははっオラッ!」

風を纏わせたシルフィの手刀と女の二丁拳銃がぶつかり合う。

「右手に【気】・・・」

「蜂の巣になりなッ」

霞むどころか、映らない女の両腕。障壁は貫通されると思ったのが、シルフィは手刀や体捌きで回避していく、だけど、女のクイツクドローは異常に速く、掠り、どんどん血塗れになっていく。

「ぐきゆうつうつ 来たれ雷精、風の精・・・」

雷の暴風!!!

と、避けながら詠唱し、砲撃魔法のような雷を纏った竜巻が放たれ、ビルの壁に大穴をあけた。銃使いの女の姿は見えない。

「合成、【咸卦法】！」

よし、力が溢れてきた。

でももう倒しちゃったんじゃない・・・

「ティア、危ないッ!!!!」

「ッ!？」

いきなりシルフィに突き飛ばされ、床に転がる。

「ハハハッ、まずは一人」

「か・・・はっ」

突き飛ばしたシルフィは胸を抑え、膝をついた。
その胸から真っ赤な血が溢れ出てくる。

「ティア・・・あと、よろしく・・・なの・・・ね」

「・・・ッ!!!!」

私が気を抜いたからッ・・・いや、落ち着け、まだ敵は目の前にいる。焦りは隙をつくり、隙は死に繋がる。
ならば、今はこれだけに集中!!!!

「ふー・・・はっ」

居合い弾の雨を浴びせる。 咸卦状態なら撃てる弾数に制限はなしだ。

しかし、女は笑いながら両手のリボルバーで弾きながら接近してくる。

「いいねいいねッ 冷静じゃないかッ！」

グリップの部分での強烈な振り下ろしの打撃。

私もグリップ部分で迎え撃つ。

瞬間、とんでもない衝撃が身体全体を襲う。

咸卦状態でなかったら、確実に骨が逝っていただろう。

「？ 【気と魔力の合一^{シュンタクシス・アンティケイメソイン}】？ そんな奥の手があるとわね！」

カーペットの下の床がベキベキと音を立てて、ひび割れるのがわかる。

そのまま銃撃格闘戦へ。

お互いの銃口を相手に突き付け合い、撃たれる一瞬前に自身の銃身で捌き、狙いを外させ、自身の銃口を再び突き付け合う。

二の腕を掠め、頬を掠め、少しずつ私の傷が増えていく。

それに、銃口だけに注意していても駄目。

時には銃身がそのまま襲いかかり、グリップ、蹴り、肘、有りとか

あらゆる場所が必殺の打撃となる。

「近頃はめつきり銃を使う奴が減ったつてのに、これ程使いこなす者と出会うなんてね。殺すのが惜しくなってきたわ。ま、しゃあないか、そろそろ終わりにするかね」

「・・・くっ」

徐々に、本当に徐々に、捌き切れなくなってきた。

銃での戦闘において、完全に向こうの方が一枚も二枚も上手だ・・・と、グリップによる打撃が今までの数倍の重さになった。

まさか、まだ本気じゃなかったとは・・・たまらずよろめいたところを・・・

「ぐっ・・・ッ!!!!」

左腕を撃たれた。

並みのBJより数倍の対魔・物理防御力がある、ルイズさん特製仕事服を一瞬の拮抗で貫き、血が吹き出す。たまらず、左手に持つ銃を手放してしまい、大きな机の上に落ちた。

「ほれほれ、終わりかいな？」

右腕だけで捌くが、両手を使ってもぎりぎりだったのだ。まし
て、片手で捌ききれぬ訳もなく、どんどんと血が吹き出していく。
左肩、右太股、左右の脇腹、未だに左腕以外は全て少し決れる程度
ですんでいるのが自分でも驚きだ。

「ほらよつと」

「かはつ……!!!!」

鳩尾に膝蹴りをモロに喰らい、吹き飛ばされる。

咄嗟に自分から後ろに跳んだが、息が詰まる。

と言うかミシミシと骨がなった気がする。

コンクリートの壁に叩き付けられた。これが強化ガラスの場所だっ
たら、落ちて終わっていただろう。

「くそつ………ぐうつつッ」

左腕が熱い。

膝蹴りの衝撃で身体中がガタガタ、弾が掠めて抉られた傷口も熱い。

それでも………震える足を気合いで動かし立ち上がる。

諦めない。

最後の最後まで。

考える。

考えるんだ私！

「まあ安心しな、自分が死んだか気づかないうちに殺してやるよ」

辺りを見回す。

・・・・・・・・・・・・・・・・見つけた。

逆転の鍵！

震える右腕を必死に動かして、【アレ】に狙いを定める。

チャンスは一回。

失敗は許されない。

「ふん、この距離から、しかも只撃つだけじゃ、私に通じないってわかってる筈なんだけどね？」

「ふー、ふー・・・」

「・・・・・・・・ちっ、出血多量？ そんなに流したか？ まあいいや、死にな」

私の頭をポイントしてくる女。

私は引き金を・・・・・・・・・・・・・・・・引いた。

女目掛けて突き進む弾は容易く避けられた・・・・・・・・・・が、それは計算のうちだ！

「そらっこれで終わッ・・・・・・・・!？」

狙い通り。

私が狙ったのは女ではなく、女の後ろにある机。その机の上にある、銃口をこちらに向ける、私の愛銃の引き金だ。集束させた弾が一発装填されっぱなしだったのだ。

その状態のなら、ただの質量兵器と変わらない。引き金を引けば弾が出るのだ。

上手く弾が発射してくれてよかった。確率にして、数%と一桁台の成功率だった。

これで気を失ってくれれば……

「ぐ、やってくれるじゃないか。楽には死なせてやらないよッ！」

左腕を抑えながら立ち上がる女。

どうしよ、ぜんぜん元氣っぽい。

今の状態で弾丸を回避なんて無理っぽいな……こりゃ参った。

「はははッ 悲鳴を聞かせておくれよ あはははハハッ……
がはっ」

と、バカ笑いしていた女だったが、後ろから何かに胸を貫かれ、血を吐いた。

「ば、ばかな…… お前、心臓を撃ち……抜いた……は

・
ず
」

そう言い残し、銃使いの女は事切れた。

「敵の生死も確かめずにいるからなのね。 竜の生命力を舐めたのが、お前の敗因なのね！」

そこにいたのは右腕を真っ赤に染めた、シルフィードだった。

シルフィに回復魔法を掛けて貰い、傷口を塞ぐ。

流した血までは戻らないから、しばらく安静にしていなと・・・

「きゅい。 けっこう強かったのね」

「ごめんねシルフィ。 私が気を抜かなければ、もっと早く倒せて

たかも知れないし、そんな怪我もしなかったかも知れない」

「いいのね。アイツは強かったし、不意を突けなかったら苦戦したかも知れないのね。ティアもよく持ちこたえたし、一撃いれたのね！」

いや〜危なかった。

シルフィによると、目が覚めたのが私が壁に叩き付けられた辺りらしい。

もうちょっと遅かったら、お兄ちゃんの所に逝くところだった。

すると、ヘイズがシルフィの【雷の暴風】で空いた壁の穴から入ってきた。

「おう、勝ったみたいだな。そっちも苦戦したか」

そう笑いながら、左肩を抑えているヘイズ。

どうやら一撃もらったらしい。ヘイズに一撃入れるとは・・・

「大丈夫なの？」

「まあ、なんとかな。アイツ、全身鎧の癖に動きが速いし、一撃一撃は威力が高いので、大変だったぜ？　しまいにや俺の【情報解体】を『空間が歪むから、避けようと案外・・・』とか言い出して・・・まあいい、嬢ちゃんは大丈夫なのか・・・って、駄目そうだな」

・・・まあ、服があちこち裂けて血塗れだしね。

「取り合えず、タバサの様子を見に行くか。ハリーによると、なんとか攪乱してるけどすぐそばまで軍が来てるってよ」

「わかった」

「きゅい。その前に、ヘイズの肩を治すのね」

「おっと、わりいな」

こうして私たちは屋上で殺り合っていると云うタバサさんと刀使い？の闘いを見に行くことになった。

シルフィが元の竜の姿に戻り、背中に乗せてもらう。話は変わるが、引き金を狙い撃ちした方の【デザートイーグルD】が引き金が粉々になり、壊れてしまった。とてもじゃないが使えないだろう。

簡単な手入れや整備なら出来るが、これほどの破損はアーチャーさんに修理してもらわないと駄目そうだ。

さて、タバサさんの闘いを見に行こう。

「おおおおおおおッ」

「はあああああッ」

屋上が、原型を残していなかった。

なんと言うか・・・そこらかしこに下の階まで貫通している穴があるし、ひび割れている。今は二人とも空中戦をしていた。瞬きをすると、二人の場所が入れ替わっていたりするのだが、ほんだけの速度でやり合っているのだろうか？

刀とタバサさんがいつも持っている身の丈ほどの杖が攻めぎ合っ。

「はあ、はあ、はあ・・・くっ、二人とも殺られてしまいましたか」

「降伏するなら命までは取らない」

既にボロボロの二人。

しかし、刀使いの方は口の端から血を流し、ダメージを受けているのがわかるが、タバサさんは服こそあちこち切り裂かれているが、

それほど血も滲んでいない・・・浅いのだろう。

「ふふ、観客も来たようですし、我が秘剣にて終わらせて差し上げましょう」

「・・・・・・・・しょうがない、なら私も奥義の一つで応える」

そう言つて、タバサさんは杖を投げ捨て、無手で構えた。あの構えは・・・・・・・・拳法？ 左手を前に突きだし、右腕を腰だめにして
いる。

男の方は背負っている刀の柄を握る。

「・・・・・・・・」

二人はビルの屋上に十メートルほど離れて立つ。

高まる威圧感。

鳥肌がたつ。

と、同時に二人が掻き消えた。

秘剣・一瞬百撃居合い陣！！！！

・・・・氷殺浸透掌

咸卦状態でもない私の目には、なにがなんだかよくわからなかった。

いつの間にか轟音と共に、二人の位置が入れ替わっている。

タバサさんの右の頬と左の肩から血が吹き出た。

「…………見事。まさか、我が秘剣を正面から無手で捌ききる…………とは…………ごはッ」

「貴方の秘剣…………なかなかのものだった」

口から大量に吐血し崩れ落ちた男。

タバサさんは杖を拾い、こちらに飛んできた。

「待たせた」

「いや、なかなかの手練れだったみたいだな」

「そう。尖兵でこのレベル…………心して掛からなければならぬと思う」

「そうだな。そっちはどうだ？」

ヘイズが呼ぶと、二つの空間モニターが開き、棒が三本の漫画顔のハリーと、前に拾ってきた赤の女王の顔が映し出された。

『あと一分でそちらに連合軍の艦隊が向かいます』

『なんとか攪乱させていたんだけど、もう無理ね。早くこっちに転移した方がいいわよ?』

つて、見えたー!!!
いっぱい来てるんですけど?

「おし、確か、【次元の宮殿】だったな。急ぐとするか。なんか悪い予感がするぜ」

「ん」

「わかったのね!」

「了解」

ふう、一難去って、今度は十難・・・とか?

1 19 Sランク依頼 くラストダンジョンく(前書き)

ふと気付いた・・・ コレって『リリカルなのは』なのか？

Side・ティアナ

なんとか三人組を倒した私たちは、連合の艦隊から身を隠し、王都アスタの最奥部にあるという【次元の宮殿】に急いだのだった……

「ん〜」

【Hunter Pigeon】の私にあてられた個室の中、増血剤を服用して、私はどうにか壊れてしまった銃を修理出来ないか試していた……のだが。

「……無理、よね〜……」

手持ちのパーツじゃ、どう考えても無理だし、かなりガタが来てるのが見て分かる。　流石にどうしようもないわね。

【次元の宮殿】まで、あと三時間と言ったところか……寝よっかな。

そう考えていると、ドアがノックされた。　開けると、シルフィが立っていた。

「ティア、魔法球に入って、身体を休めるのね！　確かお姉さまが持ってたから、貸して貰うのね」

魔法球か……、一時間が一日になるやつだったけ？

造った人によっては効果に違いがあるらしいけど、確かそんな感じだったと思う。　エヴァの巻物と違うところは、実際にそこで過ごした分、歳をとるところか……　でも、このボロボロの肉体を回復させるにはうってつけだろう。

「オツケー、行きましょ」

「お……」

見渡す限りの草原。　その中に、ハルケギニアで見た、タバサさんの小さな家がポツンと建っている。

魔法球に入ったのは私、シルフィ、タバサさんだ。

ヘイズは船の操縦や、追手のこともあり、来なかった。

まあ傷もそんなに酷くなかったし（肩を挟られた）大丈夫だろう。

・・・こう考える私はもしかして、だいぶ一般常識からズレてきているのだろうか？

そこが怖いような気が・・・

「・・・寝よ」

・・・

テンテンテレテン

『ティアナのたいりよくがかんぜんかいふくした！』　夢の中で、

そんな電子音を聞いたような、聞こえなかったような・・・？

見えてきた。あれが【次元の宮殿】かな？

どこぞの天の城ラ ユタを思い出させるフォルムだ。最奥部に巨大なヒコウセキの結晶があつても不思議じゃないわね。

『ヘイズ！ 未確認飛行物体が接近してきます！ 数はおよそ・・・100、150・・・200・・・300なおも増加中です！』

『映像を出すわよ』

操縦室にハリーと赤の女王の声が響く。

ついで、モニターに数百の機械兵（あのラ ユタに出てくる奴を想像してちょうだい。 って私は誰に説明してんの？）が此方に向かって飛んでくる。

「こりやべーな。・・・よし、俺が船で囿になるから、お前はその隙に、下から侵入しろ・・・嬢ちゃんは空が飛べなかつたよな？ 虚空瞬動で行けるか？」

「問題ないわ」

「それじゃ行くぞ！ ハリー、接触まであと何分だ？」

『あと、三分です』

「……でも、一体どこにリカ様が捕らえられてるか、私たち知らないんだけど？」

『ティアナさん、どうやらお困りのようですね』

「え、ええ」

『まあタバサさんなら経験豊富でしょうし、難しく考えない方がいいですよ？』

「……人工頭脳よね？」

『【次元の宮殿】について調べてわかったんだけど、どうやらあの宮殿を手にした者は、次元世界全てを消し去る力を手に入れるらしいわ……嘘かホントか分からないけどね』

「……ま、そう言うことだ。　気合い入れていけよ、お前ら！」

そう言うって、ヘイズが拳を突き出してきた。

その拳に皆が円になって自身の拳をぶつけた。

「ヘイズ・・・」

機械兵の群れに突っ込んでいく船。

それに引き付けられ、ほとんどの機械兵が迎撃に向かった。

今しかない！

宙を蹴り、私は空を駆けるように【次元の宮殿】の下部に向かった。

タバサさんとシルフィも、横を飛んでいる。

「来たッ！！！」

宮殿の縁にたどり着くまであと五百メートルと言ったところで、目の前に機械兵達が十数体飛んできた。

口に当たる部分に光が集束していくのだが？

「邪魔」

・・・魔法の射手・氷の千一矢

タバサさんが手を振るうと、数えきれない程の鋭利な氷の塊？が機械兵達を粉々に砕いた。

そのまま止まることなく突き進み、ようやくたどり着く！

「って、着いたはいいですけど、何処から入るんですか！？ 入り口とかないですけど？」

そう。

目の前にはよくわからない材質で出来た、宮殿の下部の壁。後
ろからは機械兵の群れ。

大部分はヘイズの方に行ったのだが、全てではないのだから当たり前か・・・
シルフィが魔法で魔方阵のような足場を作ってくれたので、そこに立つ。

「問題ない」

壁に向かって、タバサさんが杖を突き出す！

轟音を立てて、大穴があいた！ 急いで穴の中に入る。

追って来ないところを見ると、どうやら機械兵は中に入って来ないようだ。

「・・・作戦通り」

得意気に眼鏡を光らタバサさん。

……まあ結果が全て……よね？

壁をぶち破って入った場所は何処かの迷宮のような通路だった。通路に光源は存在しないのだが、周囲は不思議な淡い光に満たされて視界に不自由することはなさそうだった。硬い石の床に足音が出来るだけ反響しないように、しかし素早く進んで行く。

「タバサさん。一体どこに向かってるんですか？」

「この宮殿……遺跡の動力炉。そこにリカ王女に渡した、魔法発動体の指輪の気配がする」

「……まさかこれを予期して？」

「もち」

「……なんと！」

ハリーが言っていた事が当たったわね。

と、ただ白く淡い光を発していた周囲が、急に薄青白い光に変わった。

それと共に、とてつもない魔力を進んでいる先に感じた。

これは……ロストロギア！？

「急ぐ」

「きゅい！」

「了解です！」

足音を立てないように注意するのを止め、全速力で走る。

すると、突き当たりに灰青色の巨大な二枚扉が見えた。

その扉を前を走っていたタバサさんが……

「邪魔」

……蹴り破った。

ズンツと重い音を立て、粉々に砕け散る扉。

その先は闘技場のような、広い空間が広がっていた。その中心にリ力様が水晶のような物に閉じ込められ、目を瞑っている姿が見えた。そこから膨大な力を感じる。そして、その前に一人の全身を黒いロープで覆った者がいた。

「そこまでののね！ 私たちが来たからには、もうお前の悪巧みもここでおしまいなのね！」

私たちは詰め寄る。

半ばまで来て、あと百メートルぐらいのところまで、周囲に気配を感じた。

「ッ！ タバサさん」

「ん。背中合わせに」

「きゅい！？」

囲まれた。

杖や槍、剣に刀など、各々の武器で武装した男や女達が、私たち三人を取り囲むように転移してきた。

その数、十二人。

唯一の共通点は、全員が黒いロープを纏っていることと、並々ならぬ気迫を感じるところか・・・

私は【咸卦法】を発動。

右手に【デザートイーグルD】、左手に【P90D】を持つ。

.....

風船を破裂寸前まで膨らませて、更に息を吹き込むかのような、何時破裂するかわからないような、緊張状態。誰も何も話さず、ピクリとも動かない。

こちらの隙を探るかのような.....そんな感じだ。

「待て」

リカ様の目の前にいた奴が、話し掛けてきた。

たぶん奴が【救済者の集い】のリーダーだろう。

その声は、男とも女とも、少年とも老人ともとれるような、不思議な声だった。

「何故我々の邪魔をする？」

「私たちはそこにいるリカ王女に雇われた。雇い主を助けるのは当然。それに、私はどうこう言うつもりはないけど、あなたたち、何をするつもり？」

「.....ふふふ、我らは【救済者の集い】、その名の通り全ての生

命を救済するのだよ。 死と言う安息によってね」

「 そつ」

つまり、そのとんでもない魔力で次元世界を消していくと言っことなのだろうか？
リカ様はこの宮殿の力を使うための鍵だったわけね。

「この遺跡 . . . 【次元の宮殿】は文明発祥の地と言われる王都アスタの最奥部、桁違いに警備は厳重 だからわざわざ戦争を起こして、手薄にさせたの？」

「 ほう、そんな事まで。 その通りだ、小競り合いの戦火をここまで大きくするには苦労した。 しかし、それもより多くの生命を救済するため。 苦しんで死んでいった者達には尊い犠牲と言っことで納得して貰おう」

「」

『今の会話を録音した。 あとはリカ王女を救出後、離脱する』

『わかったのね!』

『 了解です』

流石はタバサさん……やり慣れてると言っかなんと言っか……

「ふむ、それでどうする？ 同志になると言っのなら……」

「断る」のね「わ」

「そうか、……残念だ。……殺れ」

飛び掛かってくる十二人の敵。

あのメガロポスのビルで戦った三人組と同等の手練れ達だ。

とてもピンチな気がするけど、大丈夫なのこれ！？と、内心かなりパニックっていた私だったが、次の瞬間に猛者達が何故か動きを止める。

タバサさんが右腕を掲げながら言った。

「いや、もう終わってる」

……おわるせかい

指を弾く音がこだまする。同時に一瞬で氷の彫像になり、碎ける敵たち……

「な……に……?」

「話し掛けたのが失敗。　いかに本物の域に達している達人だろうと、不意を突けばどうと言うことはない」

この魔法は……たしかエヴァ使っていた、広範囲氷結殲滅魔法!?

近くにいる私も気づかないほどの魔力制御、そして、本来は広範囲の効果範囲を十二人が立つ場所にピンポイントで……

しかも、今この瞬間にも、私は寒さを感じていないのだ……

究極技法と言われる【咸卦法】には耐寒効果もあるとは言え、凄まじい……

あまりの技量に言葉を失う。

「残るはあなただけ」

「観念するのね！　お姉さまにかかれば、お前なんか一ころなのね！」

シルフィが黒ローブに指を突き付けて言った。

……おかしい。

奴は同志が倒されたことに驚きはしていたが、焦った様子がない……ハッターリ？　いや、違う。

フードから僅かに見える口元は、笑ってすらいる。

『ティアナ、一旦扉まで下がって。シルフィもティアナと一緒に援護を頼む。たぶん庇いきれないから、自分の身は自分で守って』

その様子に何かを感じたのか、私とシルフィにタバサさんが念話してきた。

『了解』

『わかったのね!』

全力で下がる。

冗談をあまり言わないタバサさんが『庇えない』と言ったのだ。今の私では一瞬で殺られると判断したのだろう。

『邪魔だから、後ろから援護して』と言われたようなものだが、その事に怒りも何も感じない。

生き残るのに大切なのは、自分と相手の力量を正確に推し量れるかどうか、……そう言うことだ。

【レミントン700D】を構え、扉の付近まで下がった。離れてみてやつと分かる。

あまりにも大きすぎる魔力が、リカ様を閉じ込めている結晶から発せられる魔力に紛れ、感じ難かったんだ。

ミッドの时空管理局が定める魔力量に換算すれば、SSSランクオーバーと言ったところか。

S i d e ・ タバサ

予想していた力量を遥かに上回る、敵組織のリーダーと思わしき者。このままだと、勝率にしていきたい3〜5%と言ったところか。

・ ・ ・ ・ ・ やむを得ない。あまりあの姿にはなりたくないのだが・

「
ッ！！！」

心の中にあるスイッチを切る。

瞬間、メキメキと肉体が人間から魔の眷族へと変化しはじめる。

背中からは半透明の翼。 尾てい骨から竜種を思わせる尻尾。

爪は尖り、蒼い瞳は反転し、蒼と白が入れ換わる。

頭からは二本のV字に曲がった角が突き出る。

同時に抑えていたモノを解き放つような開放感。この魔物のような姿になるたびに、自分は人間ではないのだと思い知らされる。

・ ・ ・ 擬態解除完了。

溢れ出る力。

軽い興奮状態になっていくのを感じる。

「お前……は、ハハハツ人間のフリをしていたのか？」

「……………」

術式固定・おわるせかい……・掌握

「術式兵装【絶対零度】」

私の周囲がパキパキと凍結していく。

触れるもの全てを氷結し粉碎する、人型に竜種が混じった化け物。

そんな感じに見えるのだろうか？

青白く身体全体が発光していく。

今の私はほとんど氷の精霊のようなものだ。

生半可な攻撃など、とどきはしない。

「……………」
「いれ」

目に映らぬ神速の速さでタバサは間合いを詰め、爪を一閃させた。絶対零度の冷気が数十の風の刃と化し、黒いローブに迫る。

「その程度では・・・ッ」

眼前に迫る風の刃を障壁で防ごうとする黒ローブだったが、予想を上回る威力に容易く障壁が引き裂かれ、慌てて跳び下がる。

「貫け、【氷雨】」

片腕を伸ばし、真っ直ぐに黒ローブを指差すタバサ。それを合図に、三百六十度全方位から、鋼鉄すら容易く貫通する一メートル程の氷の槍がまさしく氷雨・・・雹のように降り注いだ。着弾と同時に炸裂音と凄まじい衝撃を撒き散らす。悲鳴すら上げずに、黒ローブはダイヤモンドダストの煙の中に消えた。

「くっ」

ティアナは衝撃と迫り来る冷気に、思わず顔を腕でガードした。百メートル以上離れているにもかかわらず、感じる衝撃に驚きつつ、口を開く。

「た、タバサさん、無茶苦茶じゃないっ」

その言葉に横にいたシルフィが答えた。

「お姉さま、本気なのね。下手すると、ここら辺一帯が氷河期に突入するかもなのね！」

着弾地点を見ると、凍結し、氷山が出来上がっていた。

「にしても、リカ様は大丈夫なんでしょうね？」

「……………」

「え？ ちょっと、なんとか言っつてよシルフィーーーーっ!?!?」

ティアナの叫びに呼応するかのように、氷山から紫色の輝きが溢れ出す。

と、次の瞬間に爆音が響き渡り、吹き飛ばす。

そこには多少ローブがボロボロになった黒ローブが見える。

「むっ」

特殊な捻りで内部破壊、そして凍結させる。
接触状態からの純粹物理攻撃。

障壁による防御にも、接触状態からでは限度があり、口元から血をこぼし、吹き飛ばされる。

しかし、吹き飛ばされながらも黒ローブは人間には聞き取れないほどの高速詠唱を呟いていく。

「……冥火・烈閃！！！」
エレナ エレ・ヘカテ

直後、直径十数メートルの業火球が現れ、タバサに突き進む。
同時に黒ローブの周囲に四つの魔力スフィアが展開され、チャージを始めた。

「ッ！！！」

大きさからは考えられないような、霞む速度で迫ってくる業火をタバサは障壁による防御でなんとか食い止めようとする。

氷精になっているタバサにとって、炎は弱点。

ダメージの無効化は出来ないのだ。
障壁とせめぎあう火球。

このままでは押しきられるとみたタバサは右腕に極低温の冷気を凝縮させ解き放つ。

あまりの温度差に空気が急激に膨張。

凄まじい爆発が起きる。

「ぬっつ!?!」

爆発の衝撃に煽られる黒ローブ。

その目の前に両腕に、物質を強制的に相転位させる【断罪の剣】を纏ったタバサが現れた。

所々、火傷したのが焦げている。

黒ローブはすぐさま、四つのスフィアにチャージした魔力を開放。四条の極太の紫光が放たれる。

同時にタバサも両腕に纏った断罪の剣を×字に交差させ、振り抜き、極大の斬撃が飛ぶ。

光の奔流が広場を包み込み、……弾けた。

同時に【次元の宮殿】が揺れる。

凄まじい衝撃波が撒き散らされ、この闘技場のように広い場所も、地面が軋みひび割れていく。

「きゃあああ—————ッ!!!!!!?」

「きゅいー—————ッ!!!!!!?」

いつの間にか、リカ王女を閉じ込めていた結晶を二人で抱えていたティアナとシルフィが、衝撃に巻き込まれ何処かに吹き飛ばされてしまった。

S i d e ・ ティアナ

い、いふあい……
は、鼻をぶつけちゃった……
タバサさんと黒ローブのミッドの常識皆無バトルを巻き込まれないように見ていた私とシルフィ。
ハッキリ言つて、援護とか無理でしょ？
と、観戦に徹していたのだが、ふと思った。

リカ様、巻き込まれたら死んじゃうんじゃない……？

と。

そして、衝撃波で結晶が広場の私たちがいる反対側の端まで転がったのを見て、タバサさんの言葉を思い出した。

リカ王女を救出して、離脱……

これは念話を使う隙すらないタバサさんが狙ってリカ様をあそこに

転がしたんじゃないかと思い、シルフィと共に、気配を殺し、なんとか移動。

やっとたどり着いて、二人で持ち上げたところで、宮殿全体を揺るがすような衝撃が襲って来たのだ。

リカ様は……

「あ、結晶が割れてる」

横にいた。

衝撃のせいか、閉じ込めていた結晶は割れ、リカ様が外に出ていた。それにしても、ここは何処だろう？

辺りを見回すと、太い石柱が無数に突き立つ瓦礫だらけの場所だった。

上を見ると、三十メートル程の高さがあり、ところどころ大きな穴があき、そこから光が差し込んでいた。

「……さっきの広場の床下？」

ズンツという炸裂音が響き、パラパラと天井の石が降ってくる。

と、巨大な岩も降ってきて……

「……って、危なっ！」

あわてて気を失っているリカ様を抱えて避ける。危ない危ない。

あと少しでペツちゃんになるところだった……

上に注意してないといけないわね。
そう言えば、シルフィは何処にいるのだろう？
まさか潰されてたりしないよね？

「……………」

……いた。

ちよつと探せばすぐに見つかったのだが、上半身が地面に埋まっている。

……漫画とかではよく見るが、どうやったらこんな風になるのだろうか？

「よつと」

足をもって引っこ抜く。

そこで気が付いたよつだ。咳をしながら息を整えている。

「じほつじほつ、すーーーは、きゅい、死ぬかと思ったのね。

お爺ちゃんとお婆ちゃんが、川の向こうで手を振ってたのね」

「……………そっか。よかつたわね、川を渡んなくて」

やれやれ、これからどうするかな？

上からの地響きがまだ続いているから、戦闘は終わっていないのだろうが……

「きゅい、ヘイズに連絡して、合流するのね！ お姉さまは大丈夫！
絶対勝つのね！」

「そつよね、あれは手伝えそうにないし、なんとか合流しないと」

念話でヘイズに呼び掛けた。 外の機械兵の群れに囿として突っ込んで行ったけど、大丈夫よね？

『ヘイズ、聞こえる？』

Side・ヘイズ

「荷電粒子砲、二番から四番、発射」

『一番から四番発射』

「・・・これで全部か？」

『はい、残敵機械兵ゼロです』

『まさか熱線まで撃ってくるとは・・・なかなか苦戦したわね』

「まったくだ」

とりあえず、空は押さえたな。

あとはタバサ達がつまくやってくれるといいんだが・・・

『ヘイズ、聞こえる？』

おっと、いいタイミングだな。

『ああ、そっちはどうだ？ リカ王女は救出できたか？』

時たま【次元の宮殿】から爆発が起き、閃光が外まで貫通して来るんだが・・・ どんだけの火力だよ？ 五キロ近くある遺跡が揺れてんぞ？

『今はタバサさんと、敵組織のリーダーが戦ってる。リカ様は気を失ってるけど、命に別状はないわ。シルフィと一緒に遺跡の地上部分に向かってる』

『了解だ。リーダーでお前らを探すから、さっさと上がってこい。かなり激しく殺り合ってるみたいだから、巻き込まれないように気を付けるよ?』

『わかった』

さて、それじゃあ待つとするか。

『ヘイズ! 前方に高エネルギー反応です!!』よ!!』

「なにして、うおッ」

ハリーとレッドクイーンの警告にあわてて船に回避運動をとらせる。なにかと思えば、紫色の極大の魔力弾だった。

当たってたら墜ちたな……
ティアナたちに注意しておいて、オレが巻き込まれたら洒落になんねえ。

警戒をしながら、宮殿の上部。

城のような建物が建ち並ぶ場所

まで船を進めて行った。

S i d e ・ タバサ

・・・強い。

ほとんどノータイムの高速詠唱からの魔法。

特に砲撃のような魔法は、障壁の上からでも消し飛ばされそうな威力を持っている。

本来の姿・・・

魔物のような姿を解放してすら正面からの撃ち合いでは分が悪い。凄まじい魔力量と出力・・・

接近戦は得意ではないようだが、設置型のバインドや果てには空間固定のような罠まで巧みに使い、なかなか近寄れない。

それに・・・

「あなた、人間ではない」

「ふふふ、気付いたか・・・ まあ、これだけ撃ち込まれて生

きている時点でバレるのはしょうがないか・・・」

そう、黒ローブはもう幾度も私の氷槍や風刃に障壁を突破され、貫かれ、切り裂かれている。
にも関わらず、未だに倒れないのだ。

「私を殺す気なら原形すら残さずに消し飛ばしでもしなければなら
ないだろうな。・・・やれるものならやってみろ」

・・・私の基本は氷と風。

どちらも鋭さに優れ、相手を切り裂くことに特化している。
つまり、消滅には向いていないのだ。

「・・・もうリカ王女は私の仲間が救出した。降伏するべき」

「ふん、お前を倒してからでも遅くはないさ。むしろここで邪魔
者に退場願えるなら、悪くない」

「・・・勝てるっても？」

私に有効な攻撃手段が、黒ローブには炎弾ぐらいししかない筈だ。
これまでの戦闘で使ってこなかったが、炎弾以外の火属性魔法があ
るのだろうか？

「その精霊のような状態のお前には、炎以外の攻撃でダメージを与えるのが難しいようだ……」

瞬間、数百の光弾が四方八方から複雑な軌道を描きながら、霞むような速度で襲いかかってきた。氷槍や風刃、両腕に纏った断罪の剣で回避し、迎撃していく。その迎撃を抜け一発の紫光弾が、障壁すら突破して、精霊化した私の腹部へ……

「かふっ……!？」

ありえない。

桁違いの一撃なら……最後の決め技のような一撃ならばまだしも、高威力ではあるがこの程度の魔力弾が、生身の私に直撃した……?

もともと、魔力や気に練り込まれ、絶大な耐久力を持つ私だが、メキメキと身体が悲鳴を上げる。

吹き飛び、崩れる体勢を翼を羽ばたかせる事で勢いを殺し、地面を足で抉るようにして止める。

「……不可能ではないようだ」

……どうやらコツをつかまれてしまったようだ。

『本物』のさらに上、『最強クラス』になると、普通に精霊

化を抜いてくるのは、ルイズや今までの強敵との戦闘で知っている。アイツもその次元に私との闘いで登り詰めてきたと言っわけか・・・仕方ない。備えあれば憂いなしと、この宮殿に突入する時から準備を始めていた『アレ』を使うしかないようだ。威力がありすぎて使い所に困るし、決して個人に使うような魔法ではないのだが・・・致し方あるまい。幸いにも【次元の宮殿】周辺十数キロは立ち入り禁止区域だ。人的被害はあまりでないだろう。

「それではそろそろ死んでもらおう。　私はリカ王女を追わねばならないのでな」

黒ローブの背後に巨大な魔法陣が展開。それと共に、こちらに突き出した片腕に、紫色の魔力光が竜巻のように渦巻き集束していく。その圧倒的な力に、空間すら揺らぎ始めた。あんなものをまともに乗けたら、防御とかに関係なく細胞の欠片も残さず消し飛ばされるだろう。回避のために足を動かそうとするが・・・

「ッ！？　空間固定！？」

身体が動かない。

いつの間にか足元には魔法陣。

・・・誘導された！？

「さらばだ、痛みを感じる間もなく安らかに逝け……」

天地波濤す終局の刻

ウト・ナビシユテム

「くっ！？ はあああああッ！！！」

迫る死の竜巻。

空間すら切り裂きながら突き進むそれは、次元断層が起きても不思議ではないと思ってしまうほどに強力だった。

・・・防御不可。

なら回避しかない！

術式兵装【絶対零度】を瞬時に完全開放。

兵装の解除を対価に、膨大な魔力を撒き散らし、空間固定を力業で打ち破る。

縮地を使い、全力でその場から離れるが・・・避けきれない！？

「ぐっ……」

左腕を肩の近くから巻き込まれ……消し飛ばされた。
吹き出る鮮血。

だが、そんなことに構ってはられない。

この大技後の僅かな技後硬直。その隙に『アレ』に繋げる布石をつたなければ……

腕はこの化け物の姿ならあとでどうとでもなる。

今は一刻も速くヤツの懐に飛び込まなければ……
右腕に【氷の投擲】と言う、巨大（十メートル程）な氷槍を投擲する魔法を装填し、即座に飛び込む！

「…………ツ！」

不味い！

黒ローブも保険を掛けていたのか、十数発の紫光弾が私の眼前に飛来する…………

右腕…………術式装填中

左腕…………破損

両足…………縮地使用中

…………尻尾！！！！

「あああッ！！！！」

蒼と漆黒が入り混ざった刺々しい尾を一閃させ、弾き跳ばす。

初めて尻尾があつて良かったと思つたかも……

そして、黒ローブの懐へ入り込む！

解放・障壁突破・氷の投擲！！！！

黒ローブの鳩尾を【氷の投擲】が貫き、地面に縫い止めた。

この時になって、背後から爆音と踏ん張らないと吹き飛ばされそう

な衝撃が襲ってきた。

おそらく、先程の空間断裂を引き起こした竜巻のような砲撃の余波だろう。

「はあ……はあ……」

「……それで、どうするんだ？ この程度では私は死なんぞ？」

貫かれていると言うのに、余裕そうな声だ。

たぶん、欠片も残さず消し飛ばされなければ死なないと言うのが本当なのだろう……
だが……

「これで……終わり」

私は氷の実体を持った分身を残し、ヘイズの船【Hunter Pigeon】へと転移した。

「……逃げるか？ 私が追跡出来ないとも思っているんじゃないだろうな？」

『安心して、あなたはここで死ぬ。その氷槍には強力な転移妨害

術式が組み込まれている』

「……つまりなんだ？　こんな物、数十秒もあれば取り除けるぞ？　それとも、それだけあれば逃げ切れれると思っただか？」

『……私があなたと会話しているのが既に時間稼ぎ。　もう充分。　あなた、なかなか強かった』

万象滅す浄化の彗星

アヌ

「なにを……ツ！？　な、まさか、バカな
ツ」

次の瞬間、【次元の宮殿】を含む、その半径五キロが消滅した。

S i d e ・ ティアナ

なんとかヘイズの船に拾ってもらった私たち。

タバサさんの帰りを待っていると、いきなりタバサさんが転移してきた。

かなりボロボロ。

と言っか左腕がないっ!？

「おいおい大丈夫か「全速力でこの空域をから離脱! 最低でも十キロ。あと、二十秒!!!」よ・・・? 了解だ」

いきなりのことにヘイズは混乱気味だったが、言われた通りに船を移動させ始めた。

移動中、何かタバサさんが呟いている。

「・・・妨害術式が組み込まれている」

「おい、離れたぞ!」

ヘイズの声に頷き、またさらに何かを呟く。

「・・・あなた、なかなか強かった」

『ヘイズ！！！ 上空に超大質量高速物体を確認しましたッ！』

「なに！？」

瞬間、世界が音を失った。揺れる船。

ヘイズがあわててモニターを出して、【次元の宮殿】の方角を映し出すが、そこはドーム状の巨大な結界と、中の砂煙が見えるだけで他は何も見えない。
一体何が……？

「つつ……」

と、魔物のような姿をしているタバサさんが、顔を歪めたかと思うと、腕が一瞬で生えてきた！？
そして、人間の姿に戻る。

「もしかしてお姉さま、『アレ』をつかったの？」

シルフィの言葉に頷くタバサさん。

戦闘と、腕の再生にかなり魔力を消費したようで、ふらついている。

「『アレ』ってなんのこと、シルフィ？」

「『アレ』……お姉さまの奥の手の一つ。対文明殲滅用究極奥義なのね」

対文明……

す、スケールがちがうな……スケールがちがうよ……大事だから二回言ったわよ。
こうして、私たちはリカ様を奪還し……【次元の宮殿】が地図から消えたが……無事、黒幕の討伐に成功したのだった。

Side・タバサ

まさか『アレ』を使うことになるとは……

対文明殲滅用究極奥義【万象滅す浄化の彗星^{アヌ}】

どこぞの天空神の名を冠するこの奥義。

ティアナやヘイズ、それに目を覚ましたリカ王女が説明して欲しい。そう、こつちを見ているので、すこし種明かしをしよう。

まず、地表から上空20～25?の成層圏下部付近に、直径二キロの超高密度まで圧縮し強度を高めた氷塊を作り出す。

そして、塊に幾つかの術式を組み込み、準備万端。ここまでで状況にもよるが、20～30分。私の全魔力量の約二割を費やす。

そして、発動キーワード【万象滅す浄化の彗星^{アヌ}】の詠唱と同時に落下を開始。

重力魔法や風の魔法を利用し、地表付近では時速三万五千キロに達する。

着弾と同時に落下地点から半径五キロに結界を展開。内側に『反射』の効果を持たせた五重の結界だ。

この結界により、巻き上がる土砂や衝撃を内側に反射。結界外には被害が出ないように注意すると同時に反射した衝撃により、完全に結界内を消滅させる。

しかし、落下の衝撃は完全には反射仕切れず、結界の外にほんの少し溢れる。

実はこの結界の維持に約四割の魔力を持っていかれる。

……以上説明終わり。氷や風系統になかなか相手を消滅させる技がないことを思い悩んだ結果、十五年歳月を掛けて術式を編みだした、私の魔法の中でも最も広範囲かつ凶悪な術だ。しかし、準備に時間がかかる上、広範囲過ぎて、さらには手加減をする余地もないので、最も使わない術でもある。

S i d e ・ テ ィ ア ナ

さて、なにやらスケールがズレ過ぎている説明を受けた私たちは、逃げるようにメガロポスまで行き、タバサさんが録音した黒ローブとの会話を『少し』加工したものをばら蒔いた。

何やらタバサさんの『対文明殲滅なんちゃらかんちゃら』による【次元の宮殿】消滅は全て黒ローブに擦り付けるようである。

親玉や幹部達が消えた【救済者の集い】は自然消滅して行くのだから。

そして、あの戦いから更に一ヶ月の時間が過ぎた。

「遂に依頼も終わりですね、リカ女王・・・いえ、リカ女王」

「うむ。これも全て主らのおかげじゃ」

「なに、報酬はたんまり貰ってるさ、気にすんな。それより良いのか？ こんな王族に相応しくない場所にいる？ この後すぐに終戦記念の祭事があるんだろ？」

ここは【アスタ】のとある高層ビルの屋上。この上空にはヘイズの船が光学迷彩をかけて浮かんでいる。

「なに、戦争終結の影の功労者達を見送るのじゃ、問題あるまい。主らには信頼できる仲間たちも探してもらったしの・・・」

「きゅい！ また何かあったら連絡するのね！」

「格安で受ける」

その言葉を交わしながら、一人一人握手をしていく。そして私の番。

「うむ。最初に出会った頃と比べ、見違えたの」

「そ、そうですね？」

「うむ、主の夢は管理局の執務官になることだったかの？」

「……………はい」

私の夢。

確かに誓いにはお兄ちゃんの夢だった執務官になることも含まれている……………けど……………

「……………内なる炎に、焼かれんようにの」

リカ様が耳元でそんな事を言ってきた。

何か私の返事から思う所があったのだろうか。

はっと顔を上げた。

そこには笑顔のリカ様がいる。

「では、達者でな」

……………こうして、私のSランク依頼は幕を閉じたのだった。

私はこの闘いで成長出来ただろうか？

目指す目標は【紅き翼】の……………私の家族達の背中。遠く

険しい道程を私はまた一歩踏み出せたのだろうか？

S i d e ・ ティアナ

3ヶ月とちよつと・・・

この3ヶ月とちよつとの間に、私は数年にも感じる程の濃密な時間を過ごしてきた。

こんなことをしている同世代の子供はそういないと思う。

・・・でも、私はまだまだ小さな子供だったようだ。

家を前にした今、こうしてどこか安堵し、涙を溢しているのだから・・・

「どうしたんだティアナ、ぼつと家を見上げてよ？」

扉の前で立ち止まる私にヘイズが声をかけてきた。

そのとき、私の涙に気付いたのか、無言で私の頭に手をのせて、クシャクシャと荒く、けれどどこか優しく撫でてくれた。

「・・・ありがとう」

涙を拭う。

みっともない・・・

ホームシック？になっただろうだ。
よし、入ろう。
玄関の扉を開け……

「ただいッ！？」

途端、目の前に十数の魔力弾が飛んできた。

反射的に飛び退き、壊れていない方のデザートイーグルDを右手で構え、撃ち落とす。

と、さらに空間に異常を感じた。

これは……重力の倍加魔法！？

あわててその場から転がる。タッチの差で立っていた場所が、見えない巨大な拳に叩き潰されたように、凹んだ。

深さ1メートル、直径5メートル程のクレーターに、冷や汗が出た。
きた。

……って、なんで私は攻撃されてんの！？

いきなりこんなことされる様なことは……たぶんしてないと思っただけど？

内心で毒づきながら、周りへの警戒は止めない。

すると、今度は私を包み込むように、三十センチ程の鋭利な氷塊が数十と飛んでくる。

「くっ……」

焦らず、慌てず、自分の間合いを球状の結界に見立てて、そこに入ってきたものだけを捌き、銃身やグリップで弾くことを、半ば自動

的にこなしていく。

幾つか掠め、ツーツと血が垂れる。

なんとかしのぎきったところで、背後から声を掛けられた。

その声は……

「うん、なかなか良い反応ね。七十点あげるわ」

「る、ルイズさん……さん？」

「ん、なに？ ああ、お帰りなさい。よくぞ無事に戻ったわね」

……銀髪をたなびかせ、腕組みをしてこちらに笑いかけるルイズさんだった。……まあ、ルイズさんが帰ってきた私を抱きしめ、涙するなんてキャラでないのは分かっていたけど、奇襲して成長を確かめるとは……

いや、ルイズさんだけじゃない。

アルとエヴァも屋根の上からこっちを見てるし……

まともな精神をしてるのはクーとレンさん……だけ？

「いやー、悪かったな。　けど、俺は止めたんだぜ？」

「私も」

ジト目でルイズさん達を見る。

タバサさんとシルフィは帰って速攻でご飯に鬨いを挑んで行ったし、ヘイズは苦笑している。

「なによ、まだ怒ってるの？　いいじゃないちよつとしたお茶目に、あなたの成長具合も分かって言う、一石二鳥の作戦だったんだから」

じー………

「そうだな、三発掠めたとは言え、3ヶ月前とは見違えたな。　前なら致命傷か、よくて重傷ぐらいは負っていたんじゃないか？」

じー……

「まあまあ、それにティアナ。　ルイズがあなたの無事に涙して・

・・・なんて、ドラマ的な展開があるとしても思っていたんですか？」

う・・・

「・・・はあ、もういいですよ」

「よし！ じゃあ行きましょうか」

「え、何処にですか？」

いきなりルイズさんが言い始めた。

「ふふふ、アンタ達が今日帰ってくるって聞いたから、アーチャーの店に予約しといたのよ。まあ、打ち上げね」

そして、【紅き翼】のメンバー+私で、アーチャーさんのお店に向かったのだった。

アーチャーさんのお店を貸しきりにして、私たちは依頼達成の打ち上げ?のような感じで、食べたり飲んだりしている。

時刻はいつの間にか、夜の八時に近い。

タバサさんやシルフィは家であれだけ食べたと言っのに、胃が宇宙につながってるんじゃないかと思う程のペースでフライドチキンやスパゲティ、e t c . . . などをかきこんでいく。

あれで太らないんだから、いったい体内はどうなってるんだか . . . あの食べっぷりを見ているだけでお腹いっぱいになりそうだ。

私はグレープフルーツジュースをちびちびと飲んでいた。

ほのかな酸味と甘味が舌に広がる。

. . . おいしい。

アーチャーさんのことだから、もしかしたら、このジュースも自分で搾って作ってたりしてね?

店内を見渡す。

ヘイズはルイズさんやクーにお酒を浴びる程飲まされたからか、突っ伏して寝ている。

タバサさんとシルフィはフードファイト。

ルイズさんとクーは酔ったのかは知らないけど、高速で『あっちむいてほい』をやっていた。

. . . ルイズさんとかタバサさんは確か肉体的なことで酔わないとか言ってた気がするのだが? 人間に擬態しているときは酔うのだろうか?

そして、レンさんは二人の近くでジュース? いや、チューハイかな? を飲みながら座っている。

エヴァとアルは私の近くで紅茶を飲み、まったりしていた。

そんな感じで過ごしていると、一通り料理を作り終えたのか、アーチャーさんが私のところにやって来た。

「楽しんでるか？」

「はい、今日はありがとうございました。とっっっつても、おいしいですー!」

「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいものだ。ルイズから聞いたが、銃が一丁破損したらしいな？」

「……すみません。強敵の隙を突くためだったとはいえ、自分で自分の武器を……」

「いや、構わんさ。それで生き残れたのなら、銃も本望だろう。見せてもらっていいかね？」

「はい」

懐から壊れてしまったデザートイーグルDを取り出し、アーチャーさんに手渡す。

「……ふむ、かなりボロボロだな。全体的にガタがきている。

「・・・よし、修理は可能だ。どれ、もう一丁の方も見せてくれ、
これの修理がてら整備しておこう」

「ありがとうございます。こっちなかなりガタが来はじめて、私
の整備だけじゃそろそろ限界だったんです。お願いしますね」

「了解。直すのはいいが・・・別に、グレードアップさせてしま
っても、構わんだろう?」

「え・・・?」

「・・・いや、忘れてくれ。そうだな、魔力刃でも展開出来るよ
うにしておくか?」

「・・・うん、あの世界で経験したけど、普通に接近戦になった。
そうになると、いくら気や魔力で強化したアーチャーさん製の頑丈な
銃でも、もたない。」

やはり、近距離用の装備は必須かな・・・

「それじゃあお願いします。強敵だと、普通に距離を詰められて
しまうんで・・・」

「そうか、それでは【ブレイドモード】を使える用にしておこう。」

魔力刃の長さはどの程度にする？ 短剣程か？」

「そうですね、長すぎても使いこなせなきゃ意味がないから・・・
三十センチぐらいの刀身でお願いします」

「分かった。一週間程で完成するだろう、その頃に来るといい」

「分かりました！」

こうして夜は更けていった。

1 2 2 ティアナの1日(前書き)

短いです。

1 2 2 ティアナの1日

Side・ティアナ

あのSランク依頼から数カ月、ここ最近はこれと言って大きな怪我（致命傷）はなかったし、平穏？な日常が続いていた……

朝五時起床。

顔を洗って歯を磨いて、目を覚ます。

その後、ストレッチから何時ものランニングへ。

最近は体力がついてきたから、だいたい十キロを強化なしで三十分程かけて走る。

「ふっふっ……ふっふっ……ふっふっ……」

完走後、今度はデザートイーグルDの【ブレイドモード】による体術鍛練。

素振りや身体を馴染ませてから、咸卦状態でシャドーを相手に二丁拳銃を操る。私の近接戦闘は銃や魔力刃だけではない。時には足、時には肘、身体すべてを使って、生き残ることを主軸に、使えるものは何でも使う。

魔力資質は、それほど優れていない。

ならば、その魔力の差を経験で、戦術で、そして私の貫通特化の弾丸で覆す。

今日のシャドーは人間状態のタバサさん。

狙いを定め、【居合い弾】で頭や脚を撃つ（実際は撃ってないよ、あくまでシャドー）。

簡単に避けられ、背後をとられる。

腕に纏った【断罪の剣】を振り下ろしてくる。

すぐさま【ブレイドモード】に移行。

引き金の辺りから銃身にそってほしい三十センチ程のオレンジ色をした魔力刃が伸びる。交差させ、なんとか受け止める……

【断罪の剣】はただの魔力刃ではなく、触れるとその場所が蒸発？するから要注意だ。簡単に死ぬる。食らわないように両腕に力を含めるが、いつの間にか鳩尾にそえられていた掌底からの【氷殺浸透掌】

内臓が根こそぎ破裂し、体内から氷の槍が突き出て、私は死亡。

……シャドーが相手なのに、いまだに誰にも勝てない。

クーヤレンさんとは良いところまでいくのだが、あの二人は【同契】してからが本領発揮だし……

さらに言うと、本物より私の想像だから数段弱い……はず……
・なんだけどな〜？

七時、シャワーを浴びて汗を流した後、新しい弾の開発に取り組む。最近では【炸裂弾】の作成を進めている。

【炸裂弾】とはアーチャーさんの【壊れた幻想】という、武器を爆発させる技を見て思いついた弾だ。

試作段階だけど、なかなかいい考えだと思う。

カートリッジ使用時、外殻である私の魔力をわざと破裂させ、圧縮されたカートリッジの魔力を圧力の急激な解放で爆発させる……のだが、ここで問題がある。

圧縮されたカートリッジの魔力が上手く爆発しないのだ。

例えると、雪を思いつきり固める。この時、固めている手が私の魔力、そして雪がカートリッジの魔力だ。

手を離しても、雪は固まったまま……そう言うことだ。

やっぱりカートリッジの魔力を加工して、固まり難くするか……いや、……うん……

八時、朝食。

この時間帯にはみんな起きている。

食事は当番制だから、それなりにみんな作れる。

今日は……クー特製、『漢の野菜炒め』らしい。

見てくれは悪いが、意外と味付けもすっかりしていて美味しかった。

九時、勉強。

陸士訓練校の入学試験がまだまだ先だけであるから、ちよつとずつやっている。はっきり言って、人材不足の時空管理局だ。それほど難しくはない……のだが……

『問題 a } c に入る語句を答えろ。』

管理局法第一条

時空管理局は(a)(b)の象徴であり、管理世界を(c)する。

『

・
・
・

(a)が犯罪者

(b)が死

(c)が……支配？

『答え

(a)次元世界 (b)平和

(c)管理

』

あ、あつれえ……？

一時間ほど勉強し、エヴァとのゲームを昼ごはんまでやる。やるのはだいたい格ゲーやプロヨヨ。

エヴァの熟練度は神がかっているから、なかなか勝てない。

……ま、負けた。

さて、昼ごはんを食べる辺りまでは健全な？十代の子供だ。

……が、ここから徐々にズレていく。

十三時〜十八時、地獄の基礎訓練。

ここで集束や圧縮を無意識に出来るほどまで精神に刷り込まれ、ま

1
2
3 ペット探し(前書き)

まさかの再登場！

1 2 3 ペット探し

Side・ティアナ

みなさん、事件です!?

なんと【紅き翼】にペット探しと言う、前代未聞のまともな依頼が来ました!

おそらく私が引き取られてから一番、便利屋として健全な依頼ではないでしょうか?

何でも、何処からか噂を聞いた十代前半の少女が、ペットの猫を探して欲しいと来たらしい。

そんな子供にも場所を知られるなんて、【紅き翼】のアジトとしてどうなんだと思うだろうけど、取り合えず家の前に『何でも解決』と立て札があるので、それを見て来たんだと思う。そして、その依頼を私が受けた訳だが・・・

「・・・ところでルイズさん。なんでこんなつまらなそうな依頼を受けたんですか?」

何故かついてきたルイズさん。

いつもは自分が興味あると言うか、Sランク以上の依頼しか受けないのに・・・

「ちょっと気になることが・・・ね、まあいいでしょ? ほれ、これが写真よ」

渡されたのは、中肉中背？の一匹の黒猫が写った写真だった。

「名前はクロ、手分けして探すわよ」

写真を眺める。

・・・ふと思ったが、この広いミッドの町で、猫一匹を探し出すなんて、かなり難しいのでは・・・

「ルイズさ・・・ いないし」

ついさっきまで隣にいたルイズさんが、いつの間にか消えていた。しょうがない、地道に探しますかね。猫がいそうな場所は・・・

目を疑った。

このペット探し……遙か昔、あのハルケギニアの夏休みに、私に不思議な鈴をくれた、あの黒猫に似ているような気がする。

……そう、あの時も小さな女の子がシエスタとダラダラしていた時に、ペットを探して欲しいと来たのだ。

名前もクロ……

これは偶然？

それとも……

S i d e ・ テ イ ア ナ

「おっと、ほっ、たっ……きゃっ!？」

Why!？ 何故に!？ どうして!？

猫と言えば路地裏……かなうと思つて、アーチャーさんの店がある、複雑に入り組んだ道に入ったが最後、野良猫の群れが襲い

かかってきた……いや、今この時も、おっと……襲いかか
られている最中だ！

「な・め・ん・じゃ・ないわよー！ー！ー！」

猫の爪研ぎスラッシュにイラッときた私は、懐から銃を取り出し、
猫に突きつ……

「ナ~~~~」

う、撃て……ない。

こんな猫に非殺傷とは言え、弾を撃ち込むなんて、私には……

「~~~~にゃあ~~~~」

「きゃあーッ」

いたい、痛いから……
さ、刺さってる、刺さってるから……
くっ、ここは一先ず……

「戦略的撤退……！」

まさか、『本物』の域に達していた銃使いからも逃げなかった私が・
・
つて、追ってくる!?
奥に逃げたのは失敗だったかな?

Side・ルイズ

白黒の一匹の猫が、私に着いてこいとも言うつかのように現れた。
何処かで会ったことがあるような雰囲気を出す猫に興味を持ち、着いていくと、路地裏に入っていく。
途中、認識障害の境界を抜けたような感覚があった。まさか、猫が張った?
・・・いや、もしこの先にいるのがあの時のクロならば、造作無いかしらね?
程なくすると、行き止まりになる。
路地の両端には、野良猫?が臣下の礼をとるかのように頭を下げている。
そして・・・段ボール箱を王座に見立てるように、一匹の黒猫が箱

の上に座っていた。

「……久しぶり……に、なるのかしら？　あなた、クロよ
ね。私に鈴をくれた」

「ぬ、……シエスタが誰を連れてきたかと思えば、【光と闇】
、お主か」

「……いろいろ聞きたいことがあるんだけど、取り合えず一
つ……あなた何者？　ただの猫が数百年も生きないし、次元
も越えないわよね？　それにシエスタ……ですって？」

「二つ聞いておるぞ？　……まあよい、我は猫の神クロ。あら
ゆる世界を渡り歩き、猫の楽園を造っておる。そして、シエスタ
は……お主の予想通りだ。ハルケギニアだったか？　そこ
にある楽園をお主らは守ってくれたのでな。その仲間であるシエ
スタと言う魂を猫に転生させたのだ」

ハードでボイルドな声で、とんでもない事を言い出す自称猫神クロ。
……マジ？

「そう言うわけです、ルイズさん。風の噂で貴女のことは聞いて
いました。本当に……本当に久しぶりです。あの後、ど
うなったかと、とても心残りだったんですよ？　……また会
うことが出来てよかった」

「……………え？」

猫に転生した……シエスタ？

クロが猫の神？

……………ふゝ、久しぶりに脳味噌がフリーズしたわ。

これほどの驚きは数十年ぶりだ。

へ……………って!？」

「……………マジ？」

「マジだ」

「マジです。あゝ、ルイズさん、信じてませんね？」

白黒の猫……………シエスタ？が、しょうがないな……………って感じで首を振り、真つ白に輝き始めた。

徐々に大きくなり、数秒後、そこに立っていたのは、猫の耳と尻尾を生やしたメイド服姿のシエスタだった……………これって俗に言う猫耳メイド!?　しかもリアル……………

「シ……………エスタ」

脳裏によぎるのは重傷の私に影の転移を施し、勝てる見込みのない

強大な敵に、一人立ち向かうって言うのに、笑っていたシエスタの顔……………

「はい……………ルイズさん」

「この……………」

「？」

「バカやるうーっ！…！」

「にやゼツ！？」

ふふふ、この私が涙を流しながら再会を喜び会つとも思ったのかしら？

顔面に掌底を叩き込んで、上空に吹っ飛ばす。

錐揉みしながら落ちてきたシエスタは体勢を一瞬で整え、足から着地した。

目を回しているのか、ふらふらしている。

「……………一人で犠牲になって……………私がどんだけ……………」

「る、ルイズ……………さん」

「もうあんのは無しなんだからね!？」

「は、はい!」

S i d e ・ テ イ ア ナ

「はあ、はあ、．．．．．なんなのよ、いったい?」

路地を奥に進むごとに、猫たちの力?が上がっていく。

なんか、コンクリートの壁が爪で抉れてるし．．．．．これが所謂、ギヤグ補正?　ギヤグ補正なのこれ?　でも、普通に掠れば血が出るし痛いんだけど?

．．．．．下手したら．．．

「死ぬッ!？」

引っ掻き傷だらけの身体が痛む。
と、人の気配が後ろからした。

「? って、ルイズさん」

「なんだ、ティアナか。 どうしたのよ、その傷? まるで猫の群
れに襲いかかられたみたいね」

「みたい、じゃなくて襲いかかられたんですよ! その
猫?」

ルイズさんの足元には白黒の猫が一匹いた。

「依頼は達成したわ。 あと、この猫はシエスタ。 新しい仲間よ」

「. シエスタ?」

何処かで聞いた事があるような?

「って、ルイズさんの昔の仲間にいませんでしたっけ?」

「. よく覚えてたわね? まあその通りよ」

「……?」

「はじめまして、シエスタです。今後とも宜しくお願いしますね。えっと……」

「この子はティアナ。まあ、弟子兼家族?みたいな感じね」

「なるほど。では、宜しくお願いしますねティアナさん」

「え? はい、宜しくお願いします?」

え?

死んだって言った気が……

それに猫?

何故に……?

なんだかよく分からないうちに依頼は終わった。

そして、シエスタと言う白黒の猫が新しく仲間……家族に加わった。

……今回、猫に襲われてしかいない気がするんだけど……
気のせい……よね?

1 2 3 ペット探し(後書き)

シエスタの設定

種族 狗族 猫族

性格 原作とそれほど変わらず。 性格 原作とそれほど変わらず。 性格 原作とそれほど変わらず。
そのためマタタビや猫じゃらしが・・・ 性格 原作とそれほど変わらず。 性格 原作とそれほど変わらず。
そのためマタタビや猫じゃらしが・・・ 性格 原作とそれほど変わらず。 性格 原作とそれほど変わらず。

強さ 『魔法先生ネギま』のカゲタロウ(3000)と同程度。 強さ 『魔法先生ネギま』のカゲタロウ(3000)と同程度。
強さ 『魔法先生ネギま』のカゲタロウ(3000)と同程度。 強さ 『魔法先生ネギま』のカゲタロウ(3000)と同程度。
強さ 『魔法先生ネギま』のカゲタロウ(3000)と同程度。 強さ 『魔法先生ネギま』のカゲタロウ(3000)と同程度。

その他

リクエストに答え再登場。 基本は猫の姿で、今後ティアナのお
目付け役の位置に置く予定。 基本は猫の姿で、今後ティアナのお
目付け役の位置に置く予定。 基本は猫の姿で、今後ティアナのお
目付け役の位置に置く予定。 基本は猫の姿で、今後ティアナのお

1 2 4 回収依頼 前編(前書き)

やっと原作キャラ登場。
長かった・・・

S i d e ・ テ イ ア ナ

新暦の71年4月15日。 とある筋から依頼が入ったと言われ、私とルイズさん、エヴァ、アルの四人組で第162観測指定世界の遺跡にあるという、ロストロギア古代遺物の回収に向かった。

弱冠・・・と言うか確実に、管理局の法律をぶち破っている気がする。

もしものために、変身魔法をルイズさんに掛けてもらい、今の私は十代後半の女の姿をしている。

髪の色もオレンジから真っ黒にしてもらい、更に認識障害のサングラスを掛けて変装は完璧だ。

で、半ば自棄になりながら遺跡に向かった私とルイズさん達だったのだが・・・

「・・・機械兵器？」

遺跡に向かっていた私たちを阻むように、丸っこいボディをした浮遊する機械が行く手を塞いだ。

「いかにも雑魚だな」

「何なんでしょうね？ 先を急がないといけないんですが……」

「エヴァとアルが愚痴る。 総数は何体ぐらいだろうか？
見えるだけで、五十体はいる。」

「よっ」

私はとりあえず試しにカートリッジなしで機械に弾を撃ち込んでみた。

すると、機械達は何かを展開した？

「……あれ？」

私の魔力弾は装甲を貫通したが、一体貫通したところで霧散してしまった。

不思議がっていると、ルイズさんが言った。

「……たぶんアンチマジックフィールド（AMF）ね。
まあ、【完全魔力無効化能力】とかじゃないし、相手じゃないでしょ？ 私たちは先に行くから、ティアナ。 ちゃっちゃと片付けて来なさいね」

「え、ちよつと待つ……」

「頑張ってくださいね」

「五分で片付ける」

そんな事を言つて、ルイズさん達は飛んでいってしまった。

……泣きますよ？　　つて、啞然としてる間に囲まれた！

「うわつと」

全方位から私に向けて、ビームが放たれる。

けどまあ、私からしたらぬるい。

ルイズさんの回避訓練を舐めんじやないわよ？

何時も死と隣り合わせよ？　　滅茶苦茶速いのに、誘導弾みた

いに追尾してくるし……

「ほつ、よつ……おつと」

でも困つた。

たぶん、AMFの範囲に入ったからだと思つけど、魔力の結合が上手くいかない。

……集束率が五割落ちぐらいかな？　　でも……私の

集束・圧縮力はこんなフィールドで完全に止められる程、あまくな
い。モードをカートリッジ使用に切り換える。

「ふっ！！！」

射つ。

カートリッジを使って、通常時と同程度か……

「まったくもう、面倒な！！！」

弾が切れたので、異空弾倉を発動しようとしたのだが……

「出来ないし……」

しょうがないので、腰の回りに装備している弾倉をリロード。
機械達はまだ三十体以上いる。

「ルイズさんのバカ~~~~~！！！」

S i d e ・ ア ウ ト

遺跡に向かったルイズ達。 数体の機械兵器がA M Fを展開しながら襲いかかってきたが、【完全魔力無効化能力】すら一瞬上回る力を持つ猛者達である。

そんなの関係ないとばかりに、魔法で吹き飛ばす。 更に言うくと、遠距離攻撃が効かなくても、接近せんで殴れば粉々になるのだ。 殆んど相手にせず、しかし全機破壊しながら進んでいく。 と、遺跡の方向から爆音が聞こえた。

「急いだ方が良さそうね」

「ああ」

「今の音から言って、遺跡は吹き飛びましたかね？ これは久々に面白くなってきました。 タバサさんもつれてくれば良かったですかね？」

「いや、たぶん無限書庫に忍び込んでるでしょうよ。 それより急ぐわよ」

「はいはい」

喋りながら、それでも景色が霞むような速度で進んでいくルイズ達。

数分後、遺跡に着くが・・・

「これまた見事に更地になってますね」

アルが苦笑しながら呟いた。

「・・・たしか【レリック】とか言ったか、その回収するロストロギアは」

「ええ。 依頼元は怪しそうだったけど、面白そうだったから・・・」

アルとエヴァが溜め息を吐く。

面白そうかどうかを基準にルイズは依頼を決めてしまうのだ。

「はあ。 それで、どうします？ このままだと依頼失敗ですが？」

「無論、依頼は達成するわ。感じる魔力から言って、管理局が動いてみたいだし、もう一ヶ所の【レリック】は回収してるでしょ？ そいつを頂くわ」

「ルイズ、管理局とやり合う気か？ 殺すなよ？ 後々うっとおしいからな」

「分かってるって。あんた達はティアナをお願い、私一人で行くわ」

「了解。また、程ほどにして下さいね？」

「ふふっ……」

笑みを残しながら、ルイズはエヴァ、アルと別れて感じる魔力の方向に飛んで行った。

S i d e ・ ティアナ

A M Fに気をとられて忘れていたが、咸卦法を使えば影響を受けないことに、残り十体ぐらいになってから気づき、【居合い弾】で秒殺した。

もつと早く気づけばよかった・・・

遺跡の方向に【縮地无疆】と言う、超長距離瞬動術を使いながら急いだ。

しかし到着すると、その場所には遺跡はなく、あるのは更地だけだった。

「やっと来ましたかティアナ」

「・・・まさかルイズさんがやったんですか？」

この更地・・・ルイズさんが何かの理由でぶっぱなしてできたんじゃない・・・あり得ないと言えないところが虚しい。

「流石に違いますよ。なぜか我々が到着するまえにこうなっていたんです」

・・・よかった。

「そう言えばルイズさんはいったい何処へ？」

私の問いにエヴァが呆れたような、どこか諦めたような顔で答えた。

「何時もの悪い癖だ。管理局が動いているようだから、自重してくれるといいんだがな……」

！！！？

……ごめんなさい、名も知れぬ管理局員さん。

私は止めることが出来ませんでした。

せめて生き残ってください……

と言うか、これで完璧に犯罪者なんじゃ…… いやまあ今までもかなり違法と言うか完璧に犯罪行為をしていた気もしくもないけど、……うん。ここに居るのはティアナ・ランスターではありません。通りすがりのしがない銃使いな魔導師です。

うん、そうだ。つまり私は違法行為なんて犯してません。以上。

そんな感じで自己完結していると、ふと気配を感じた。

「あちゃ〜、管理局員と鉢合わせですか…… ティアナ、逃げますよ。エヴァ、頼みます」

「ふん、しょうがないな」

すると、ピンクの髪をした剣を携えた女性と金髪のおっとり風な女性、赤を基調としたゴスロリ風な私と同じ年ぐらいの外見の女の子、そして犬・・・いや狼？の三人＋一匹が飛んできた。

「お前達、そこで何をしている！」

ピンクの女性が問い掛けてきた。 いや、尋問？

「いえいえ、観光ですよ？ それでは失礼しますね？」

「ッ！ ちょっと・・・アル！」

アルがいきなり管理局員らしき四人？組に特大の重力魔法をブチかました。

なんか、プチって感じで地面にめり込む。

ミッドとかでは重力を操作する魔法とかは、あまり見かけないから初見だと避けるのはほとんど無理だろう。

「よし、退却」

「・・・？ 【闇の書】の守護騎士か？ ……まあいい転移するぞ、こっちに來い」

エヴァが影に沈んで行く。 私も近づき一緒に転移した。

ふう、危ない危ない。 変装は完璧だし、私が誰かは管理局にはわからないだろう。

S i d e ・ シグナム

私の視線の先には、巨大なクレーターが出来ていた。

いったい何があったんだ？ あそこには遺跡があったハズ。

『・・・し・・・こちら・・・こちらアースラ派遣隊！ シグナムさんですか？』

「その声はなのはか？ そちらは無事か？」

『機械兵器の襲撃があったんですが・・・まさかそつちも？』

「こちらは襲撃ではなかったがな。危険回避のためにすでに無人だったのが不幸中の幸いだったが・・・発掘現場は跡形もない、先ほどシヤマルとヴィータを緊急で呼び出した。今日の任務、気楽にこなせるものではなさそうだな」

念話を終える。

シヤマルとヴィータがやって来た。

さて、何があつたか知らないが行つてみるか。

クレーターの中に入る。直径数キロはあるクレーターだ。

ヴィータがふと呟いた。

「ひでえなこりゃ、完全に焼け野原だ」

「かなりの範囲に渡っているが汚染物質の残留はない。典型的な魔力爆発だな」

「ここまでの話を総合するとー 聖王教会からの報告・依頼を受け たクロノ提督がロストロギアの確保と護送を三人に要請。平和な 任務と思つてたらロストロギアを狙つて行動しているらしい機械兵 器が現れて、こちらのロストロギアは謎の爆発・・・つてなが

れであつてゐる？」

シヤマルがモニターのフィニーノ通信士に確認をしている。

「聖王教会と言えば、主はやてのご友人の・・・」

「うん・・・ 多分、騎士カリムからの依頼ね、クロノ提督ともお友達だし」

その時・・・

『近くに生体反応があります！ 確認してもらつていいですか？』

・・・！ この爆発のクレーターに生体反応だと？
怪しいな。

なにか考え込んでいるヴィータに気合を入れて、私たちは生体反応があるという場所に向かった。

・・・いた、ローブの男に金髪の少女、そして黒髪の女。

・・・黒髪の女には見覚えがないが、後の二人は何処かで・・・

「お前達、そこで何をしている！」

声を掛ける。 何があるかわからんからな、警戒しておく。

「いえいえ、観光ですよ？ それでは失礼しますね？」

男の声と共に、私たちの周囲の空間が軋んだ。
不味い、と思った時にはもう手遅れ。
凄まじい重圧力を感じ、地面にひれ伏してしまった。

「くぐっ」

「きゅあっ」

「くそっ！」

「ぬっ」

この技、何処かで受けたことがあるような……
そんな気がした。

不味い、意識が……と……ぶ。

「【闇の書】の守護騎士か？ まあいい……」

ッ！

人形と戦ってもつまらないわね　　そう思わない？

ふん、【闇の書】の守護騎士か……まあいい、こんなもんだろ？

それもそうね。　　人形と殺り合ってもこう、心が震えないのよね　　あんた達、もっと人間らしく出来ないの？　　……
・まあいいや、主共々消えなさい。

「こちら観測基地！ シグナムさん、応答してください！ シグナムさん！ ヴィータさん！ シヤマルさん！ ザフィーラさん！ 誰か応答してください！」

『・・・・・・・・』

突然途絶えた通信に通信士のフィニーノは焦っていた。

「いったい何が・・・ 兎に角、なのはさん達に連絡を・・・」

「・・・・・・・・ 飛行や基礎防御もかなり妨害されちゃうし、リンなんか気を付けないと大変だよー」

「はっ！ そーです！ リンは魔法がないとなにもできないですー」

「いい機会だからそのへんの対処と……」

フェイト・T・ハラOWN執務官。

八神はやて特別捜査官。そして、不屈のエース・高町なのは二等空尉の三人はロストログアを護送しながら飛行ルートを飛んでいた。

その時……

『き……ますか……聞こえますか！ なのはさん！
フェイトさん！ はやてさん！』

かなり焦ったフィニーノ通信士になのはが答えた。

「聞こえるよ。 どうしたの？ なにかあったの？」

『それが、爆発地点に生体反応があつて……確認に向かったシグナムさんたちと、連絡が途絶えたんです！』

「……うそ」

「ッ！ そんなで、うちの子達はどうしたん？」

『わかり……なにこれ……結界……?……』

通信が途絶えてしまった。

なのは達が良く見ると、いつの間にか結界の中に取り込まれていたのだ。

「……………これは」

「うん。気を付けた方がいいね」

「ラインー!」

「はいですー!」

『ユニゾン・インッ!』

はやての中にラインが入り、髪や眼の色が変わる。

臨戦状態の三人の前に、一人の銀髪の女が現れた。

「そのロストロギア……………【レリック】だったかしら? 貰い受けるわよ」

絶大なプレッシャー。

なのは今までの強敵との戦いで、様々な相手と戦ってきた。しかし、今目の前にいる女の人は底が見えなかった。知らず知らずに汗が垂れる。

『・・・フェイトちゃん、はやてちゃん。最初から本気でいくよ』

『うん。この人、強そうだ』

『了解や』

「ふーん。私の威圧に耐えられる程度にはできると・・・
ま、せいぜい足掻きなさい」

続く！

Side・フェイト

「私の威圧に耐えられる程度にはできる・・・か、せいぜい足掻きなさい」

私たちの目の前に現れた、銀髪の女の人。

あの人が姿を現した途端、辺り一面の空気が死んだように静まり返った。同時に感じるビリビリとした威圧感。

・・・この人、絶対に強い。

すると、女の人は何かに気づいたように私たちの胸元を見てから、自分の胸に手をあてた。

「・・・あんたら・・・私に喧嘩売ってんの？」

何故か怒り出した？

『フェイトちゃん、はやてちゃん・・・行くよ』

念話と同時になのはが【アクセルシューター】で、数十の魔力弾を放つ。

はやては広範囲魔法の詠唱。

誘導性の高いなのは魔力弾を回避した銀髪の女は、すぐさま同じ数の魔力弾を放ち、撃墜していく。

ぶつかり合う魔力弾が火花を散らす。

・・・チャンス！

火花に気をとられている隙を突き、高速移動魔法【ソニックムーブ】を発動。

一瞬で背後をとり・・・

「ふっ！！」

バルディッシュの鎌状の魔力刃を首筋目掛けて一閃！意識を刈り取るうと・・・！！？

「甘いわね。砂糖菓子よりあまいわ」

止められた!？

しかも人指し指と中指のたった二本の指で、振り向きもせず・・・だ。

引こうとするもビクともしない。

それにしても、どうして気づかれたの？

私のスピードはほとんど

音速なのに・・・

「速さはまあまあだけど、『入り』と『抜き』が雑すぎ、そんなんじゃないただ速いだけ・・・よっと」

「ッ!? グウッ!!!」

瞬間、ものすごい衝撃が、お腹から背中に突き抜けた。吹き飛ばされる。

一瞬何をされたのかわからなかったけど、ただ蹴られたただけだった。バリアジャケット（BJ）ごしとは思えない衝撃。

もしかしたらアバラに罫が入ったかも・・・
だけど、時間は稼いだ。

なのはのバインドが女の四肢に絡み付き、固定する。

『フェイトちゃん、大丈夫!?』

『うん、なんとか・・・』

『カートリッジも使って掛けたバインドだから、そう簡単には・・・
ッ!』

念話でなのはが息を詰まらせる。

見ると、強固な筈のバインドにどんどん罫が入っていく。

『詠唱完了や! 二人共下がって!』

「遠き地にて闇に沈め・・・」

デアボリック・エミッション!!!

漆黒の球体が広範囲に渡って広がり、全てを呑み込んでいく。
もちろん女の人も例外ではない。
その光景を見ていたはやてが言った。

「あかん・・・ たぶん今でもダメや。　なのはちゃん、フェイトちゃん」

・・・あれでも倒せてないの!?

「バルディッシュ、カートリッジロード」

『Yes sir』

相棒から三発の空薬莖が排出される。

なのはは怪我の後遺症がまだある。

あまり長引かせたくない。

これで決める!

ブーストが掛かった魔力を砲撃へ・・・

と、煙の中から無傷（非殺傷だから当たり前だけど）でダメージを受けた様子がない女の人が出てきた。

「・・・まったく、非殺傷とか嘗めてるの？ まあ管理局じゃしょうがないか・・・」

どこかガツカリしたようにため息を吐いている・・・けど、それが命取りだ！

「トライデント

「エクセリオン

「響け終焉の鐘

驚いたように、目を見開くが、もう遅い！

スマッシュ！

バスターツ！

ラグナロクツ！

三条の奔流が光の柱となり、地面で私たちを見上げる銀髪の女人へと放たれた。

爆音と衝撃。

視界一面が私たちの全力砲撃魔法によって照され、大気が爆ぜる。

「とどめーッ！ 全力全壊ッ！！！」

って、只でさえオーバーキルなところに、なのはが集束砲撃の準備を始めてるッ！？

私たちが撃った砲撃の魔力すら集め、どんどん巨大化していく魔力砲。

「……私って、あれを食らったことがあるんだよね……？
よく生きてたなー本当。」

「スターライトブレイカーッ！！！」

放たれる超極太の砲撃。

再び視界が真っ白に染まり、爆風が吹き荒れる。

地面は隕石でも落ちてきたんじゃないかと思うほどクレーターだらけ。

ここまでやって生物が死なないんだから、非殺傷設定はスゴいと思う。

「ふー……」

「はあ、はあ、はあはあ……」

「はあー……」

なのはの呼吸が荒い。

怪我の後遺症があるのに、全力のエクセリオンバスター、それにスターライトブレイカー。大丈夫かな……？
早く休ませないと。

砂煙が晴れると、女の方はクレーターの真ん中に倒れていた。
直撃。

どう頑張っても耐えられる筈がない。

「倒した……の？」

なのはが呟く。

と……

「そんな……どうやって耐えたん……や？」

「え？」

「あああッ！」

全ての弾に追尾能力があるようで、撃墜し回避するのは達を執拗に魔力弾の群れが追っていく。

だけど、私は動けない。一瞬でも目を離せば、それでやられる。

いつ襲い掛かってきても、対応出来るように構える私だが、ふと、女の人が笑ったような気がした。

・・・消える。

「まず一人」

「きゃあああああああああッ！！！」

消えたと錯覚する程の高速移動で、なのはの目の前に現れ、シールドの上から殴り、吹き飛ばす。

吹き飛ばされたなのはは大地から突き出た大岩の一つに叩き付けられ、砂煙に消える。

高さ二十メートルはある大岩に亀裂が入り、半ばまで崩れた。

その亀裂に埋もれるように、気を失い、B Jが解除され、ボロボロになったなのはの姿を見つける。

「なのはッ！」

「なのはちゃんッ!？」

その姿を見た途端、頭に血が上った。

「フェイトちゃん、駄目やッ!」

はやての声が聞こえたが、私は何も考えず、自身の出せる限りの最高スピードでバルディッシュを大剣状にして斬りかかった。

「はあああああッ」

気合いと共に振り下ろした斬撃は・・・

「さっきも言ったでしょ？ いくら速くてもそれだけじゃダメだつてね」

空を切った。

背後から声。

首を掴まれ、地面に叩き付けられる。

「ぐうッ・・・!？」

さらに、ボールでも投げられるように投げ飛ばされる。

地面を抉るように五十メートル近く？ 転がされ、全身ポロポロ。

BJ越しなのに、体が砕けるような衝撃。

意識が一瞬とぶ。

ふと、なんでBJを抜かれていないのか不思議に思った。抜こうと思えば抜けた筈だ。全身ポロポロでそこらかしこに血が滲んでいるが、BJを抜かれていたらこんな程度じゃすまなかっただろう。

「ぐぐっ……くっ」

立ち上がるつもりでも、急に目眩を感じた。

……だめ……だ……くらく……ら……する……脳震

・邊……？

「……どうすればええんや？　なのはちゃんとフェイトちゃん
んは気を失ってるみたいやし。」

焦る頭を落ち着かせながらレリックがはいたケースをしつかり抱
える。私は広域タイプやから、前衛がいないと、この状況はめっち
やヤバイんやけど……？

「どうすれば、いったいどうすれば……」

「……
あれ、もしかしてもう詰んでるんやないか？」

そんなことを考えていると、襲撃してきた銀髪が話しかけてきた。
「……ここは何とか引き延ばして、応援を……いや、こ
の結界をなんとか出来れば、あるいは……」

「なかなかどうして、楽しめたわ。その歳でこの力……あ
なたたち、強くなるわね。もしかすると、私が立つ次元まで」

笑う。

子供が欲しい玩具を見つけた時のような無邪気な、それでいて残酷
な微笑みだった。

レリックをこんなよう分からん奴に渡すわけにはいかない。

結界を……

「この結界は入るだけなら簡単だけど、出るには相応の砲撃とかが
必要よ？　そんな時間、私上げるわけ無いけど」

・・・読まれとる。

ダメや、どう考えても詰んどるやんこの状況。

「ま、あれよ、『勇者一行が物語の最初の方でラスボス登場で負ける』みたいな感じで、ストーリー上絶対に勝てない戦いだっただとでも思っただけなさい」

「・・・く」

ここまでなんか、と諦めかけたそのとき・・・

『主、右に避けてください』

シグナムの念話!!!!

慌てて右に移動する。

目の前まで、ゆっくりと浮遊して近づいてきていた銀髪は訝しげにしましたが、次の瞬間目を見開いた!

「駆けよ、隼ッ!!!!」

シュツルムファルケン!!!!

飛来する矢。

空気を切り裂き、銀髪の鳩尾へ吸い込まれていく。

そのまま五十メートルぐらい離れ、突き出た岩石まで吹き飛ばし、銀髪は岩石の瓦礫に消えた。

「遅いで、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ」

……ヴォルケンリッター、私の家族たちがやって来た！

S i d e ・ ル イ ズ

「痛い」

いや、居るのは分かってたんだけど、思ったより威力が高かった。私は瓦礫を吹き飛ばして立ち上がる。

バインドされたのをわざと解かないで三人の砲撃＋集束砲をもろに
くらい、三十層ある私の超高密度多重障壁を二十七層まで貫通され、
あの矢で完全に抜かれた。　　と言っても、私の極限まで【気】と
【魔力】に練られた肉体には、三層の障壁を突破して勢いが弱まっ
た矢ではそれほどダメージを与えられなかったようだけどね。
服の鳩尾辺りに穴が空いて、ヒリヒリする。
直ぐに自然治癒した。

「……………にしてもアイツらって【闇の書】の守護騎士達よね？」
確か、数百年前にちよっかい出してきたから、主諸とも消し飛ばし
た気がするのだが……………転生でもするのかしらね？

『おいルイズ、聞こえるか？』

「なによヘイズ、今面白くなってきた所なんだけど」

『依頼人から連絡があつてな、管理局がレリックを確保していたな
ら、無理に奪わなくてもいいってよ』

「……………わかった、直ぐに戻るわ」

『了解』

……まあわざわざ管理局と争わなくてもいいか。
ちよつとばかり守護騎士達にあいさつして逃げよつと。
それに……

「あの子達とは、いつかやり合つ……そんな気がする」

S i d e ・ シグナム

ぎりぎり間に合ったか。

高町やテストロッサは気絶しているようだが、無理もない。

遙か昔の記憶にある金髪の少女、ローブの男、そして……銀
髪の女。

なぜ、この時代に生きているのか知らんが、あの時私たちは、銀髪
一人に敗北した。

おそらく、先程の私の一撃も、それほど効いていないだろう。

「シグナム」

「ああ、わかってる」

気を引き締める。

シヤマルが声を掛けてくるが、どこか不安そうな響きを感じる。

「あの銀髪が誰だか知つとるんか？」

「はい、主はやて。 ですが今は・・・」

「来たぞ」

ザフィーラが身構えて全員に警告した。

これ程身体が震える闘気だ、見ずとも感じた。

あの時は主を守ることは出来なかった。

しかし、主はやての元に来て、私は・・・いや、私たちは変わった。

今度こそ、守りきってみせる！

銀髪が私たちの前に姿を現す。

レヴァンティンの柄に手をそえ、居合い抜きの要領で何時でも斬りかかれるように構える。

「ああ、そんなに警戒しなくていいわよ？ こっちにも事情があつ

てね、そのロストロギアはもういいことになったのよ」

「……………それならなぜ向かってくる？ 自首するのか【光と闇の女帝】」

かつて聞いた奴の通り名を言うと、少しばかり驚いたようだ。

「ふーん、つてことは覚えてるんだ。まさか管理局に【闇の書の主】が居るなんてね」

「【闇の書】やない、【夜天の書】や！」

「……………？ まあいいわ、随分と懐かしい顔を見たから、取り合えずあいさつに……………ね」

「……………気安くあいさつするような仲ではなかったと思うが？」

「それもそうね。……………にしても、随分と人間臭くなったわね？」

その言葉に主はやてが気を悪くしたのか、眉を寄せる。

「ああ、別に貶してる訳じゃないわよ？ プログラム体だろうがなんだろうが、どうこう言うつもりはないわ。それに・・・人形とより人間と殺り合った方が楽しいでしょ？ 今のアンタらは人間よ」

アンタら、もう少し人間らしく出来ないの？ 人形と殺り合ってもつまらないわ

なるほど、確かにあの頃の私たちはまさしく人形だったな。

「いずれまた会いましょう。・・・その時、敵か味方が知らないけどね」

指を弾く。

同時に銀髪の女はゆらゆらと揺らめき消えた。

・・・幻影だったのか？

「・・・分かってたけどよ、とんでもねー手練れだな」

ヴィータが額の汗を拭って言った。

あの女、隙だらけに見えても、まったく斬り込めなかった。

こちらが手を出していたら、はたして切り抜けただろうか？

Side・ティアナ

迎えに来てくれたヘイズの船に乗り、ルイズさんを待つ。

・・・心配だ。

とても心配だ。

ルイズさんが心配なんじゃなく（いや、ある意味心配だが）相手の
局員が・・・だ。

悪のりして、ボロボロに・・・あまつさえ殺してなんかいない・・・
よね？

「そんな心配しなくても大丈夫ですよ・・・たぶん、きっと、
おそらく」

おおいつ!?

・・・根拠のない慰めは逆に怖いことを知った・・・

「ただいまー」

「帰ったか」

「大丈夫でしたか、ルイズ？ ああ、勿論相手の局員がです」

「ふんつ、これでも私は女なんだけど？」

口の端が上がってますよ、ルイズさん。 どうやら満足したよう
だ。

「って、服に穴が空いてますけど、大丈夫なんですか!？」

「ん？ ああ、問題ないわ。 ちよつと矢が直撃しただけよ」

「……ふふ、この人に、いやルイズさんだけでなく【紅き翼】
のメンバー全般に言えるが、常識がズレてるわね。

一見、理性的なタバサさんだって、考えが何処か物騒だし、ルイズ
さんにいたっては、内臓がやられて口から吐血しながら家に歩いて
帰ってきたこともあるし……

うん、深く考えちゃ駄目だね。

と言うか、私の陸士訓練校入学試験の勉強で、かなりズレたことを
解答しちゃうのも、この人達に影響されたから……か？

1 2 6 紅い二人(前書き)

2 連続投稿。

とある丘に、一組の男女がいた。

二人とも二十代前半と言ったところか？

男は褐色の肌に逆立てた短い白髪、深紅の外套の中に黒いボディー
アーマーを着ている。

女は腰まである黒い髪、そして黒い外套の中に紅い服、黒いスカ―
トにニーソックス。

そんな二人の周りに、倒れ伏し、血の水溜まりを作る屍が数十とあ
る。

その屍達のものだろうか、紅い二人の周囲には墓標のように数十、数
百の剣や槍が突き立っている。

「……………ここまで……………か」

男が呟く。

その口の端からは鮮血が垂れていた。

座り込む男と背中合わせに座る女も咳き込み、吐血と共に悪態をつ
く。

「……………つたく、二人相手に……………なんて数送ってくる…………
のよ……………」

剣、剣、剣、剣、剣

槍、槍、槍、槍、槍

墓標のように突き立つ武器は、二人の身体にも突き立つ。

とめどなく流れ出る鮮血の量が、二人の命が残り僅かであることを告げていた。

「……………」

「土郎？」

「……………なんだ、凜」

「分かってるでしょうね？」

「……………ああ、俺はアイツにはならない。契約は……………しな
い」

その返事に……………凜と呼ばれた女は満足そうに微笑んだ。

「俺の勝手に……………つき合ってもらって……………悪かった……………」

な

「なに・・・言ってるのよ？ 私が快樂主義なのは・・・知ってるでしょ？ 好きで・・・やってんのよ」

「そう・・・か、それじゃあ・・・ありがとな、凜」

「まったくよ。危なっかしくて・・・見てられなかった・・・わよ。そろそろ・・・ろ、限界・・・ね」

「だ・・・な。・・・もしも生まれ・・・変わったら・・・、今度は凜を・・・幸せ・・・に・・・」

かすれて聞き取りにくい男の声を女は聞き逃さなかった。すこし驚いたように目を開き、笑みを浮かべる。

「そ・・・れ・・・じゃ・・・来世・・・があつたら・・・また」

「ああ・・・ま・・・つ・・・て・・・ろ」

二人の目蓋がゆっくりと閉じていく。

もう十数秒後には心臓が鼓動を止めるだろう。

・・・と

いきなり二人の近くの空間が歪み、一人の老人が現れた。

「ほ、この世界のお主等はこんな最期を迎えおったか」

「・・・え？」

「が、死なすには惜しい。間桐の娘にも頼まれたしの。人形
に入れ換え、平行世界の彼方に跳ばすが、よいな？」

「ちよつ・・・」

「安心せい、ちと歳をとるのが遅くなるが、それ以外は人と変わらぬ。では、達者でな」

宝石で出来た剣を一閃させる。

すると、再び空間が歪み、・・・二人は姿を消した。

S i d e ・ テ イ ア ナ

回収依頼・・・あの違法ギリギリ・・・いや、完全完璧に違法な回収依頼からすでに二週間が過ぎた。あれから何かあったかと言つと、そんなことは無く、いつも通りの日々が続いていた。

時刻は午後一時。

つまり、何時もなら地獄すら生温い修業が始まる時間だが、今日は週に一度の休みだ！

この週一の休みを得るために、どれだけ苦労したか・・・もうすぐ陸士訓練校に行くつもりだから、最近は急に修業密度が数倍になったのだ。

只でさえいつも死にかけるのに、密度が数倍とか耐えられる訳もなかった。

このままでは精神崩壊するかも？ と思った私は、なんとか週一度の休みを勝ち取ったのだ。

そして、今日は初めての休み。

昼ごはんを食べた私は、アーチャーさんのお店になんとなく向かっていた。

たまに居ないときがあるが、今日はやっているようだ。ドアを開ける。

いつもはがらがらな店内に、今日は人がいた。
いや・・・お客じゃない？

「いらっしやいませー。お一人様ですか？」

腰まである黒い髪。

二十代前半くらいだろうか？

エプロンのようなものを着た女の人がいた。

・・・バイトさん？

「あ、・・・ええつと」

お客といったらお客だが、ただ遊びに来ただけなのだが・・・

「リン、その子がティアナだ」

アーチャーさんが女の人に言った。

「え、この子があのルイズに弟子入りした？」

・・・いったいルイズさんの評判はどうなっているのやら。

「はじめまして、よね？ 私はリン・スカーレット。 だいたいこの時間帯に、この手伝いをしてるわ。 まあ、アーチャーの相棒みたいな感じかしらね」

「はじめまして。 私はティアナ・ランスターです。 ええと、アーチャーさんには、たまに愚痴とかにつき合ってもらってます」

リンさん。

名前の通り、可愛いと言うより綺麗で凜とした感じの人だった。

「とりあえず、座るといいぞ」

アーチャーさんに促され、カウンターに座る。

話しによると、リンさんはまれに本店で働いているらしい。

詳しくは教えてもらえなかったけど、このお店は【紅き翼】同様に拠点の一つだそうだ。

いったい裏で何をやっているのだろうか？

……まあ、秘密の一つや二つや三つや四つ、誰でも持っているものだ。

【紅き翼】なんて、もう一年以上一緒に暮らしているのに、未だに謎だらけだ。

「それで、今日はどうしたんだ？ いつも来るときはだいたい十時頃だろう？」

「ああ、それはですね、そろそろ休みを入れないと、精神がまいっちゃうんで……」

私の言葉に、二人は苦笑した。

「どれ、そんなティアナに何か飲み物でもだすかね。何がいい？」

「ありがとうございます！ それじゃあ……ミルクティーで」

「私もお願いね」

「……リン」

「なによ？」

「いや……何でもないさ」

何故か苦笑し、アーチャーさんは店の奥に準備しに行った。

「それにしても、あのルイズが弟子をね〜、大丈夫なの？」

リンさんがカウンターに座り、言った。

「そう……ですね」

ルイズさんの修業……

ああ、視界一面、魔力弾の弾幕だ〜

あはは、非殺傷？ なにそれ美味しいの？

って感じの………駄目だ、身体が、身体が思い出すことを拒絶してる！？

ふ、震えが……

「あー、ごめん、今のなしね。忘れなさい」

「は、はい」

ふう、危うく精神が逝くところだった。

「……一つ聞いていい、ティアナ？」

「はい？ なんですか？」

「なんであなたは……そんなに精神的に追い詰められてまで頑張れるの？ ルイズもそんな無理矢理に、嫌がる奴に教えるような奴じゃないと思うんだけど？」

「それは……」

なんで頑張る……いや、頑張れるの……か。
なんで？

なんでだろうか？

……執務官になりたいから？

いや、今の私の実力でも、やりようによってはSランク魔導師相手でも、互角の戦いが相性にもよるが出来るだろう。

現実を見ていない訳じゃなく、事実として……だ。

でも、執務官は戦闘能力だけを見られる訳じゃない。

今の実力だけでも、戦闘面は十分だろう。

ならなんで、こんなボロボロになってまで、私は修業しているのだろう？

力を欲してる？

力を欲して、なにがしたいんだ？

ちがう

違う

チガウ

ちがう

違う

チガウ

ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが

ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが……
自分の気持ちを誤魔化すのはやめだ。
つまり、私は復讐したいのだろう。
お兄ちゃんを殺した。
何処の誰かも分からない。
強いが弱いか、男か女か、人間かすらも分からない、お兄ちゃんの
仇に、私は……!!

「……なかなか歪んでるわね。でも、土郎のように壊れている
訳じゃない……か」

「……土郎？
誰の事だろうか。」

「まあいいわ、それはあなたの問題。自分で折り合いをつけなさい」

「……え？」

それに歪みって？

「ほら、ミルクティーだ。冷めないうちに飲んでくれ」

アーチャーさんが二つのカップをリンさんと私の前に置いた。

「ありがとうございます」

そう言っつて口をつける。

・・・うん。

流石、アーチャーさん。

そんじよそこらのジャンクフード店で出される物とは桁違いだ。

「ふふ、感想を聞こうと思ったが、その顔を見ると、必要なかったな」

うう・・・、そんなに分かりやすい表情をしてたのかな？

「・・・やっぱり美味しいわね」

何処か悔しそうに呟くリンさん。

その後、しばらく世間話をした。

なんでも、アーチャーさんとリンさんは、引き取ったキャロって子と三人で暮らしているらしく。

なんの縁か、キャロが知り合ったらしい執務官の薦めで、管理局に誘われ、二人でその子を鍛えているらしい。

・・・この二人、強者の風格を感じるのだが、その子は大丈夫だろ

うか？

……ま、ルイズさんじゃあるまいしね。

まったりと過ごしていると、急に二人の表情が険しくなった。

「すまない、ティアナ」

「今日は店仕舞いね。　また遊びに来るといいわ」

そう言うと、『営業中』の立て札を裏返し、いきなり店が閉まった。外に出た私は、展開について行けず、呆然としていたのだが、そんな私を尻目に、二人は走り去って行った。

あの方向は何があったかな……？

確か……そうだ、空港があった筈だ。

何か、予定があったのだろうか？

燃える人々。

燃える建物。

何人も見殺しにした。

火傷や深い筈の切り傷。

何も感じない。

人が死んでいく。

目に映るのは、辛うじてまだ生きて立っている私に『助けてくれ』
と、苦悶の呻き声をあげながら死んでいく人々と、全てを燃やし尽
くす獄炎だけ……

もう嫌だ。

こんなの見せないで。

ティアナとのんびり話していた時、連絡が入った。

『空港火災が発生。 負傷者多数』

この通信はルイズのコネで、時空管理局の通信を傍受したものだ。すぐさま店を閉め、現場に向かう。

前の世界なら、俺は空港内の全員を助けようと躍起になっていただろう。しかし、この世界には時空管理局と言う、魔術・・・いや、魔法だったな・・・を使う巨大な組織が治安を守っているのだ。裏では人体実験やとても口には出せないような事をしている者も居るにはいるが、この場合は助かる。俺はどうしても管理局が助けられない一握り・・・十の内の一を救うことに、全力を注ぐのみだ。

BJと聖骸布を纏う。

さあ、行くか。

燃えていた。

まるで、俺の始まりの光景を思い出させるような火災だ。管理局も、次々と救助と消火にあたっているが、おそらく奥のエリアに取り残された者達は助からないだろう。魔導師も動いているようだが、如何せん人手が足りない。

「行くぞ、リン」

「オツケー」

局員の封鎖をすり抜け、俺たちは巨大な空港内部へと足を踏み入れた。

「酷いわね」

「・・・ああ」

獄炎の空港を奥へ奥へと進むと、発見したのは焼死体だけだった。

「くっ」

もう少し早く来ていれば……

「士郎、これはあんたの責任じゃないわ。それより先に進むわよ、まだ生存者がいるかもしれないわ」

更に進む。

俺たちはBJを装備しているから、煙りにまかれて死ぬようなことはなかった。かなり便利だ。

「誰かいないかー！ 生存者は誰かいないのかー！」

建物が燃える音に負けないように、声を張り上げる。……が、生存者はいまだ、一人も見つからない。

「士郎！ 微弱だけど、魔力反応！」

「……ッ！」

凜が魔力反応を察知した。魔導師がいて、結界のようなモノを張って、しのいでいるのかも知れない。急いで、魔力反応があった場所へ向かう。

「セット【氷】 凍てつけ、アイスグレネードッ!!」

凜が五種類ある魔力変換資質の一つ【氷】を使った。蒼い魔力弾が跳んでいき、弾ける。すると、その周囲が広範囲に渡って凍てついた。

「これでよしと、魔力はあっちから感じるわ。行くわよ」

走る。

一分、一秒でも早く。

こんな自分の得にも何にもならない事に命を賭けるんだから、俺は何処か壊れているのだろう。

だけど、アイツにも言っただ。

『誰もが幸福であって欲しい』って言う俺の願い。

・ 喻え、その願いが紛い物だったとしても、間違いなんかじゃないと・

「居たっ!」

青みがかった髪をもつ少女が、結界を張り、耐え忍んでいた。結界の中には、他にも三、四人の大人もいる。しかし、少女以外は意識を失っているようだ。

「大丈夫か！」

声を掛ける。

意識が朦朧としているようだ。

「あ．．．あなた．．．達は．．．．．？」

「助けに来た。もう大丈夫だぞ」

「お願い．．．い．し．ます．．スバ．ルを．．妹を．．助け．．奥に．．．．．」

そこで、少女も力尽きたように気を失った。

「．．．リン」

「．．．．．はあ、分かったわよ。この人達は私に任せなさい。合流はいつもの場所。それと、．．．もし死んだり．．．うう

ん、怪我なんかしたら、酷いんだからね？ 呪うわよ？」

「はは、それは怖いから、死ねないな。 って怪我也駄目なのか！
？・・・分かった、それじゃあその人達を頼むぞ」

リンなら本当に呪ってきそうで怖いな。

極力気を付けないと・・・

走る。

走る。

走る。

奥へと走る。

あの蒼い髪の少女の妹、スバルとやらを探して・・・

S i d e ・ ? ? ? ?

何も分からない。

ここが何処かも、何で燃えているのかも……

そして……

……自分が誰かすらも……

分からない。

燃え盛る建物から、空が見えるちょっとした広場に出た。

もう身体の傷は分からない。

火傷してる筈なのに痛くないし、切り傷からは血が出てるのに何も感じない。

もう……歩け……ない。

「はあ……はあ……はあ……」

遂に私の番か……

何十人も見殺しにした。

当たり前の結果。

「うつ……」

何かに躓いて転んだ。
地面とぶつかった。
なのに……痛くない。

「……私……死……ぬのか……な」

うつ伏せから仰向けになる。

見たのは、炎に照らされた……曇り空だった。

……自分が誰かすら忘れてしまった。

気が付けば、こんな生き物の焼ける臭いと、炭化した死体……ま

さに地獄のような場所だったけど……

空を見ながら死ねるのは良かった……

残念なのは、曇っているところだろうか？

……まあ、自分には十分かな……

ふと、頬に何かが落ちてきた。

ぽつぽつと水滴が続くように降ってくる。

「……あ……め……？」

雨だ。

この炎が呼んだのだろうか？

……徐々に鎮まっていくな。

雨の音が聞こえる。

その音に、ベキツと何かが砕ける音が混じった。

力を入らない身体に鞭を入れて、なんとか首だけ動かすと、私の近

くにそびえ立つ女神の巨像がこっちに倒れてくるところだった。
・・・身体は動かない。

「・・・ああ・・・死ぬの・・・は・・・嫌だ・・・な」

そんな事を呟いても、どうにもならない。
死が迫ってくる。

・・・どちらにしろ、遅いか早いかだ。

私はぼーっと、迫ってくる死を眺めて・・・

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d

我が骨子は捻れ狂う

「・・・え？」

偽・螺旋剣！

カラドボルグ？

一瞬、可笑しなほど捻れて、ドリルのようなになった、剣のような、
矢のような、私には分からないものが飛んできた気がした。

瞬間、迫ってきていた【死】が削りとられ、吹き飛ばされた。

雷撃と鎌鼬を纏った矢？のようなモノが、そのまま空へと飛んで行
った。

鎌鼬は私の周りの地面や建物に大きく深い爪痕を残したけど、私を傷つけないように上手く避けられていた。誰かの顔が見えた。

私が見た初めての生きてる人間の顔だった。

褐色の肌に、意思の強そうな鷹を思わせる、琥珀色の瞳、短い白髪を逆立てていた。

そして、何処か安堵した……幸せそうな表情だった。

私はその表情から目が離せなくなった。

良いな、と思った。

「君がスバルか？」

「……？」

ス・バ・ル……ル？

私の名前だろうか？

分からない。

けど、いい響きだと思った。

昂。

……星が一カ所に統べ集まる……

……うん。

私は今から『スバル』

首を縦に振る。

「そうか。 今から治療する。 安心して眠っているといい」

その人の胸から、黄金の輝きが見えた。
・・・そこで私は意識を失った。

S i d e ・ ア ー チ ャ ー

危なかった。

崩れてきた巨大な女神の像を【偽・螺旋剣（カラドボルグ？）】で、少女に余波が及ばないように吹き飛ばし、傷の具合を見た。ほとんど瀕死。

そんな言葉が浮かんだ。

今すぐ管理局が来て、治療を行ったとしても、最早助かるまい。

・・・だが、俺の持つ【アレ】ならば何とかこの状態から救う事が出来るだろう。

瞳を閉じ、集中する。

【全て遠き理想郷^{アウアロン}】の治癒能力なら・・・
黄金の鞘が姿を現す。

少女に抱かせるように押し付けると、徐々に裂傷や火傷が治っていく。

・・・それにしても、無事で良かった。

怪我の状態を見るに、生きていたのが不思議だった。

周りの火災も雨によって徐々に静まっている。あれだけ走って助けられたのはたったの数人だけ。

しかも、リンが居なかつたら、一人も助けられずにいただろう。

・・・情けないな・・・いや、助けられなかつた者達だけを見るのでなく、助けられたこの少女や少女の姉、そして数人の大人を見よう。

嘆いてもどうにもならないのだから・・・

・・・ここに局員が来るのも時間の問題だろう。

何より【偽・螺旋剣】の魔力もある。

・・・来た。

白いBJを纏った魔導師が空を飛んでいる。

俺は今でも指名手配されているからな。

・・・逃げるか。

この少女も、重い傷は粗方治した。

あとはあの白い魔導師に拾ってもらえるように何か渡しておくか・・・

「・・・ないな、しょうがない。リンから渡されたこれで・・・

」

取り出したのは魔力の補給用にリンからもらった小さなルビーがついたネックレス。

これを少女の首に掛け、時間差で魔力を消費して発光するようにする。

・・・よし、一分後には目も開けていられないほど光り始めるだろう。

発光時間は十〜二十秒だが、それだけあれば十分。

・・・それじゃあ、逃げるか。

- ・ こうして、重軽傷者約4600名、死亡者約1700名、空港施設
のほぼ全てが焼失すると言う、記録的な大火災は幕を閉じた・・・

アーチャー・リンの設定

魔術と魔法

世界による修正か、士郎や凜にはリンカーコアがある。魔術回路からの魔力には神秘が多かれ少なかれ含まれているのに対して、リンカーコアの魔力にはほとんど含まれていない。つまり、士郎の聖骸布や凜の外套は質量兵器や【気】による攻撃には頑丈な服ではないが、魔導師の純粹魔力攻撃（砲撃や射撃）には、同じ威力でも、神秘が極端に少ない魔力攻撃となり、高い防御力を有する。また、AMFなどの、魔力を打ち消すフィードは魔術回路からの魔力には、質の違いからか、ほとんど作用しない。

アーチャー（衛宮士郎）

・人物設定

魔術協会からの刺客に、凜と共に殺されかけるが、宝石翁に助けをもらい、人間とそれほど変わらない人形に魂を移し変えられ平行世界の彼方、次元世界へ跳ばされた。跳ばされた先で、次元震が起き、管理局に指名手配され、偽名アーチャーを名乗る。『全てを救う正義の味方』を目指し、自分の命より他人の命が大事と、どこか壊れていたが、凜と旅するうちに、それほど無理はしなくな

る。現在は管理局に十の内の九を救ってもらい、自分は今まで取り零してきた一を救うため、災害現場や大事件を奔走中。

魔術

- ・ 投影
- ・ 強化
- ・ 解析
- ・ 固有結界発動可
- ・ 全て遠き理想郷 有

魔法

- ・ 魔力量 A -

・ デバイス

非人格アームドデバイス【セイバー】カートリッジシステム内蔵
起動状態は二つあり、『約束された勝利』エクスカリバー似た形状の西洋剣と黒い弓。待機状態はブレスレット。 B Jは聖骸布の中に着る黒いアーマーとズボン。

- ・ 登録魔法

【射撃】

魔力を矢の形に固め、飛ばす。 誘導・追尾なし。

【高速移動】

加速。 一歩で最大五メートル。 連続使用は五歩まで。

【シールド】

三十×三十?の小さなシールドを同時に複数展開。
出力のわりには強固。

【足場】

ウイングロードのようにはいかないが、魔方陣を展開し足場を作る。

イメージは『魔法先生ネギま!』でタカミチや詠春、ラカンなど戦士系の人が使っていたやつ。

428

リン・スカーレット（遠坂凜）

・人物設定

士郎と共に地獄のような戦場を渡り歩いた。 自称、快樂主義。

殺ると決めたら躊躇わず、冷酷な一面も持つが、根は面倒見がよくお人好し。 アーチャーとの約束を守るため、士郎が世界と契約しないように戦場へと共に向かった。 管理局とのいざこざにてその場のノリで決めた偽名、リン・スカーレットを後にも名乗るようになる。 現在は士郎、そして拾ったキャロと言う少女と共に

に暮らし、災害や事件があると飛び出していく士郎をサポートしている。

魔術

- ・ガンド
- ・宝石魔術
- ・その他、結界 e t c
- ・第二『魔法』の限定使用（平行世界へ小さな穴を開け、無限の魔力による疑似エクスカリバーの真名開放のような斬撃）因みに、この時の無限の魔力はリンカーコアで活用不可。

- ・五大元素使い（アベレージ・ワン）

魔法

- ・魔力量 S +
- ・魔力変換資質

五大元素使い（アベレージ・ワン）だからか、五種類の属性に変換可能。

- ・デバイス

非人格アームドデバイス【ランサー】
カートリッジシステム有り。起動状態がゲイ・ボルグを模した槍色は蒼。待機状態、ブレスレット。八極拳を修めている凜は槍

も使える。 B Jは黒い外套のしたに着る紅い服と黒いスカート、
ニーソックスと、外見は変わらない。

・登録魔法

【高速移動】

瞬動術と変わらない。

【砲撃】

『管理局の白い悪魔』といい勝負。

【射撃】

・・・数打ちや当たる。

【誘導弾】

一度に十発ぐらいなら同時操作可。

【バインド】

それなり。

【集束砲】

強烈。

【転移】

次元間の転移も可能。

と、魔術と共に天才。 うっかりミスをする癖がなければまさに
完璧。

リンカーコアを介する魔法は次元世界特有の物で、平行世界へ渡ると、リンカーコアが使えなくなる。

また、士郎や凜の設定とはことなるが、ハルケギニアは次元世界。

『魔法先生ネギま!』の世界は平行世界と言う設定。

1 2 8 指名手配（前書き）

なにかと忙しく、一ヶ月以上投稿出来ませんでした。
申し訳ありません。
更に次の投稿もかなり間が空くと思われます。

それでは今回は三連続投稿です。

『 S級犯罪集団【紅き翼】リスト

リーダー・特S級犯罪者

・『銀髪』『光と闇の女帝』『死なない女?』『バカな確かに直撃した筈だ』『てかなんでデバイスを素手で碎けるんだよマジで』
ルイズ・フランソワーズ

幹部・S級犯罪者

・『笑う司書』

アルビレオ・イマ

・『闇の福音』

エヴァンジェリン

・『雪風』『絶対零度』

unknown

構成員・A級犯罪者

・『異端の空賊』

ヴァーミリオン・CD・ヘイズ

・『忍』『うさみみ空賊団団長?』

クード・ヴァン・ジルエット

・『旋風』 『うさみみ空賊団副団長?』
レン

・『蒼髪』 『無限の食欲』 シルフィード

・『双銃』

unkwon

以上9名』

S i d e ・ テ イ ア ナ

もうすぐ陸士訓練校の入学試験。

さて、そんなある日の朝、みんなで朝食を食べ終えまったりしているとところへ、ルイズさんが一枚の用紙を持ってきた。

「・・・指名・・・手配書?」

用紙に並ぶ名前。

これは管理局のデータベースにヘイズ、ハリー、赤の女王がハッキ

ングをかけてコピーしたものらしい。

「……………」

「……ルイズさん、特S級犯罪者って……いったい何をやら
かしたんですか？」

「と言うか、A級が一番上の筈じゃなかったっけ？
その更に上の上？」

「タバサさんにエヴァ、アルはS級……」

「また級が上がったわね……次はSSかしら？それともZ級
とか……………」

「ふん、級が上がるだけ面倒になるだけだ」

「ふふ、面倒ですね」

「……………S?」

「危機感もなにもあつたもんじゃないわね……」

「更にリストの下にはA級犯罪者……」

「これが普通一番上よね？私は間違つてないよね？」

「これでも管理局について勉強しているのだ。」

間違っていない……箒だ。

……なんだか自信無くなってきたけど。

「なんで俺がA級なんだ？ そんな凶悪なことした記憶はねえんだが……」

「なに！？ ルイズが特S！？ この前はS級だったじゃねえかよ。また負けたー」

「クー、私と一緒にだね」

「……！ レン」

「クー」

はい、二人の世界に逝っちゃった！。

「きゅい、なんなのね、この『無限の食欲』って！？ カッコいいけど、なんかやなのね」

「まあまあ、シルフィーさん。いっぱい食べてるのを見られてしまったんですよ、きつと」

「きゅいゅい　　そう言うシエスタは、なんでリストに載ってないのね？」

「まあ、私は猫ですから・・・ある意味」

「そう言えばそうだったのね」

・・・『無限の食欲』・・・カッコいい・・・？
そして、リストの一番したには・・・

『双銃』

unknown

「って、ちょっと待ったああああああ亞西唾姍鴉吾阿

（。・。）」

訝しげに私を見るみんな。って、そうじゃなくて・・・

「なんで私もリストに載ってるんですかッ！？　しかもA級犯罪者
！？」

叫ぶ。

それはもう心の底から叫んだのだが、その叫びを聞いたルイズさんは不思議そうに首を傾げた。

「なんでって・・・ え、なに言ってるの？ 依頼とか受けてるし、あんたも【紅き翼】の一員でしょ？」

・・・！？

あれって実践経験を積ませるためじゃなかったの？

・・・

いやいやいやいやッ

千歩譲ってリストに載るのはいい。

依頼の時は強力な認識障害サングラスを掛けているから、デバイスとかの記録機器には掠れて映っているだろうし、よしんば映っていても、それは変身魔法で元の私とは掛け離れた姿をしているだろう・・・でも！

私のデバイスは別だ。

管理局員と接触したのはこの前の回収依頼の時だけだ。

そして、手配書に映るのはデザートイーグルD。

・・・私のメイン武装。

訓練校のテストに受かったら、もちろん訓練とかそれで出ようとしていた。

・・・バカだった。

なんで局員の前で二挺拳銃を出していたんだろう。

管理局に入る以上、デザートイーグルDは怖くて使えなくなっちゃったじゃん・・・

もしかして・・・封印？

その事を言っと・・・

「・・・あゝ・・・なんて言うか、ドンマイ？　アーチャーに頼んでみたら？　気が回らなかつた私も悪かつたし、お金なら出すわよ」

「・・・お願いします」

基本的に、依頼とかの報酬が私のお小遣い？になっているから、同年代の子とは比べ物にならないぐらい貰っているだろう。

・・・食事代や光熱費、その他、そして弾代に消えるけど・・・

「つ・・・作れ・・・ない？」

「ああ、すまないな。　ティアナの銃に使っている素材がかなり特殊でな、数年単位で魔力を練り込ませたりと、かなり手間が掛かる代物なんだ。　修理程度なら出来るんだが、新しく一からもう一挺いや、二挺か？作るには足りないんだ」

「その素材以外で作れないんですか？」

「作れるには作れるが……それだと普通のデバイスと同程度の強度になるし、おそらくティアナの全力の集束や圧縮には耐えられないと思うぞ？　すぐにガタがくるだろうしな」

「……………」

き、鍛え上げた自分の持ち味に、デバイスが耐えられない……？

「……仕方ないな、簡単な造りでいいなら教えよう。自分でデバイスを組めれば、壊れても修理出来るだろうし、ストックしておくことも可能だろう」

か、管理局め……なんで私を指名手配したの……

「ありがとうございます」

はあ、もう諦めよう。

現実逃避してもどうにもならないしね。

でも、管理局にいる間はデザートイーグルDは封印か、残りの二つ、P90Dとレミニトン700Dは近接戦闘が出来ない訳じゃな

いけど向かないし、普通の素材で作った拳銃じゃすぐガタがくる上に私の全力に耐えられないらしいし……はあ。

「そう落ち込むな。 そうだな…… 完成品を幾つかと、作り方をまとめたものを用意しておくから、一週間後にまた来るといい」

「うう……ありがとうございます」

「すまんが造りが簡単な分、魔力弾を撃つことしか出来んと思うぞ。魔力刃は……使用不可だろうな」

「やっぱりそうですか……まあ、そこは簡易ですからしょうがないですよ」

なんとかするしかないか、嘆いてもしょうがない。

「では、一週間後にまた来ますから、お願いしますね」

「まかせろ。 ほら、土産だ。 これでも食べて元気を出せ。新作だが、かなりの出来だと自負している」

そう言って、アーチャーさんは取っ手の付いた箱（ケーキ屋さんで

ワンホールのケーキをいれるような）にワンホールのショートケーキ？（アーチャーさんによると、中身がスゴいらしいが・・・）を入れて渡してきた。

「いいんですか？ お金とか今持ってませんよ」

「はは、土産で金など取らんさ。 趣味で作った物だしな」

「・・・趣味？」

どう見ても趣味のレベルを逸脱しているのだが・・・

「それじゃあ、有り難くいただきます」

礼を言ってお店を出る。

強度に不安があるが、デザートイーグルDの代用のメドが立ったし、ケーキも貰えたんだから、ラッキー？ だったかな。

・・・まさかこの後、あんなことに発展するなんて、この時の私は全く予想していなかった・・・

「はあ、はあ、はあ……くっ」

鬱蒼と生い茂る草木の中をティアナは僅かな月明かりを頼りに跳ぶように走っていた。

瞬動術の連続使用。

足に蓄積されていく疲労を感じながらも止まらない、いや、止まらない。

何故なら背後から感じる追っ手の気配が未だに消えないからだ。

このままではじり貧になると感じたティアナは両手のグローブ型アーティファクト【弾切れ知らずの無限武器庫】を発動。

登録した二つの弾倉のうちの一つを二つ複製召喚。

空中でリロードしながら体を捻って後ろを向き、自身の手前十メートル程の地面にポイント、引き金を引く。

弾倉にセットされていた魔力が解放され、瞬時に圧縮、自身の魔力で覆う。撃鉄に打たれ、螺旋状の溝にそって回転が加えられ、空気を裂き超音速の弾丸が放たれる。

地面に着弾すると共に……

バースト・バレット
炸裂弾！！！！

……爆発した。

撒き散らされる閃光と爆音、そして衝撃。

其を無視して引き金を引く。

二つの銃口から次々と放たれた弾丸は合計十四発。始めに排出された空薬莖が地面に落ちるまでに撃たれた。立て続けに起こる爆発に紛れ、気配を極限まで殺してティアナは走り去った。後に残ったのは倒れた木々と穴だらけになり、ちよつとした広場になった森だけだった。

S i d e ・ ティアナ

「・・・・・・・・ふう、撒いたかな？」

なんでこんなことしてんだろ、私？森の中で見つけた川の畔で、疲れきった両足を休めながらふと思った。

膝に手をあて息を整える。まったく、こんなサバイバルじみたことになったのも、全てにおいてアルのせいだ・・・

私はケーキの箱を抱え、家に向かっていった。
結局、デザートイーグルDの代わりとなる二挺拳銃は手に入らなかった。
まあ、性能は落ちるが、量産型でなんとかやりくりするしかないだろう。

「ただいま・・・」

「お、どうだった？ 代わりの銃はあった？」

ルイズさんが話し掛けてきた。

「いえ、素材が特殊らしくて、強度とかがかなり落ちた量産型を使うことになりました」

そう言うと、何故かルイズさんは苦虫を潰したように顔をしかめた。

「ふふふ、やはり仮契約をするしかないですよルイズ？」

「アル、あんた……くっ、しょうがないの？ いや、でも……」

仮契約ってなんだろう？

ルイズさんの動揺の仕方を見るに、かなり危険な事なのだろうか？

「いや、でも私は仮契約の魔方陣を知らな「私が知っていますよ。くく、問題ないでしょう」……」

……？

さっきから話の内容が理解できないのだが、いったい……？

「あの、ルイズさん？ いったい何の話を「ティアナ」……なによアル」

「一瞬で終わると、時間が掛かるのはどっちがいいですか？」

……？

「早く終わる方がいいんじゃないの？」

「ふふふ、そうですね。ティアナがそう言うのでは決まりですね」

アルが私たちがいるリビングの床に手をかざす。すると、一メートル程の魔方陣が現れた。それを見てクーヤレンさん、シルフィにヘイズ、猫状態のシエスタが野次馬のように寄って来た。

「お、なにやってんだ、ティアア？」

「これは……」

「またなんか始めたな」

「あ、もしかして仮契約ですか？」

私は首をかしげて答えた。

ガツンとぶつかり合う歯と歯。
鈍い痛みにも口を抑えてうずくまるが、徐々に今起こったことを理解する。

つまり・・・私とルイズさんが・・・き、キキ・・・キ・・・
すしたの？

今？

ルイズさんを見る。

両手と両膝を床につき、ぶつぶつ呟いていた。

銀色の長い髪が顔を隠している姿が何故か怖い。

「・・・」

と、何処からかカードが一枚ヒラヒラと落ちてきた。・・・
うう、ファーストkissをかつさらわれたショックから、なんと
か立ち直ってカードを手取る。

其処には黒い厚手のインナーにスポン、そして紅いロングコートと
言った何時もの仕事服を着て、両手に黒い指出しグローブとデザー
トイールドを装備して構えをとり、苦笑い？している私が描かれ
ていた。

「・・・これは？」

「それは仮契約カードですよ。アーティファクトと言う魔道具を
契約した者に与えてくれるのです」

迫ってくるルイズさん。
目が、目が据わってるんですが？
こ、怖ッ！！！！

「コピーしましたよ。 『来たれ（アデアット）』で魔道具になります。 それとルイズ」

「なによ？」

「アーティファクトなんですから、たとえ銃が出ててもデバイスとして使える訳ないって、理解してますよね（笑）」

「……………あべしっ」

倒れるルイズさん。

クー達が引きずって行ったけど、大丈夫なんだろうか？
……………まあいいや。

「それじゃいきます！ アデアット！」

私の声に反応し、カードが光る。
そして銃が……………出てこなかった。

指出しの黒いグローブがいつの間にか両手に装備されている。

「……これは？」

「む……これは……」

何処から取り出してきた厚い辞典のような本を捲り、アルが言った。

「ええつと……【弾切れ知らずの無限武器庫】ですか」

辞典のかなり後ろの方を開き、私に見せてくれた。

効果を見るに……まあ、銃は出なかったが金欠が解消出来そうだからかなり嬉しい。

【弾切れ知らずの無限武器庫】

- ・銃使い専用アーティファクト
- ・三種類まで弾倉を登録
- ・登録した弾倉をコピーし、使用者の任意に合わせ手元に転移
- ・コピーの数量制限無し

だいたいこんなところかなー、あと服装が何着か登録出来て、瞬間
着装。

主人との念話が十〜十五？ぐらいまで可。

主人への転移（主人側への呼び出しのみ）
つてところだ。

おお、素晴らしい！！

弾倉コピー？

つまり弾代を気にしなくてOK？

……よっしゃあ！

……

その後、アーチャーさんからのケーキをみんなで食べようとしたの
だが……

「……これじゃあ、一人分が少ないわよネ」

そして何の脈絡もなく、いつの間にかケーキを賭けたサバイバルに・
・

ルール

・舞台はエヴァの巻物内、幻想空間に造られた半径十？、周囲を海

に囲まれた孤島。

・制限時間は24時間。

・ルイズ、タバサは魔法禁止、エヴァは肉体強化以外禁止。

・頭部または心臓が破壊されない限り、大怪我でも数秒〜数分で回復（痛覚は現実と変わらない）

・脱落者は自身を倒したものに、自分の持ちケーキを半分渡さなければいけない。

・脱落したら退場、敗者復活など無い。 以上

意味分らない？

大丈夫、なんでこんなことになったのか私も理解出来てないから。

・・・以上、回想終了。

まあ、やるからには少しでも多くのケーキをGETす……………ぞくり、と背筋が寒くなり、直感的に右に大きく跳ぶ。

「ッ!？」

刹那の差で立っていた場所が螺旋を描くように飛来した黒い衝撃波？によって、消し飛ばされた。

爆音が夜の森に響き、衝撃の余波に煽られ吹き飛ばされる。空中で一回転して着地。

やばいなー、今の誰の技だろ？

まだ開始二時間くらいなのに、こんなところでやられたらケーキ半分持っていかれて退場だ。

……流石に嫌だ。

絶対に生き残こ……

「ルイズ流刀術【龍旋】……よく避けたわね？」

……る？ え？ 初っぱなからルイズさん？

「見逃そうと思ったんだけど、ちよつとつとつとと機嫌が悪いと言っか、糖分が欲しいのよ」

そう言つて、背負った鞆に納められている黒い刀……確かルイズさんの愛刀【天上天下天地無双刀】だ……の柄を握る。……何だかすくすく邪悪なオーラが刀から立ち上っているよ。うな気がするのだが？

おっと、瞳が反転してますよルイズさん？
正気なんだろうか、いやいや断じて違っただろう。
今のうちに……

左手に【魔力】右手に【気】……合成……【咸卦法】！！

……よし、咸卦法は成功、魔法なしと言うもののルイズさん相
手にどこまで出来るか……
と、鞘からゆつくりと刀を引き抜いていく。
うん、完璧に呪われてるね、あの刀。
刀身から立ち上る禍々しいオーラがこう……ダメだ、なんか言葉
で表現するのが難しいけど、兎に角禍々しい。

「カカカカカカッ」

ヤバイヤバイヤヴァイ！！！！
壊れた奇声を叫びながら斬りかかって来た。

「くうおおおッ!？」

一瞬の間に襲い掛かってきた上段からの切り下ろし、下段からの切
り上げ、更に突きをギリギリ肉を斬らせて骨を守りながら回避。
咸卦状態の私の動体視力ですら、黒い刀身の影が掠れて見える程度。
……本当に魔法使っていないのこれ？と疑いたくなる。

このままじゃ確実に首をとばされる。
何とかしないと・・・

「クハハハッどうしたノ？ 受けテルダケジャスグに終わっチャウ
わヨ？」

「ぐづっ、くっ、ほッ」

何とか銃身に展開した魔力刃で受け流して耐える。
どうするどうする？

このままじゃ一分もしないうちに退場だ。

受け流し切れずに掠める切っ先による痛みをなんとか忘れ、考える。
・・・ルイズさんの武器である黒い刀は刀身だけで一・五メー
トルと非常に長い。

ここはセオリー通り、なんとかかすり抜け森の木々を盾に逃げ切るの
がベスト。

・・・よし、先ずはすり抜け・・・

ルイズ流刀術

・・・へ？

咆哮

ルイズさんが刀を地面に突き刺す。
すると……

「ッ!？」

巨龍の咆哮を目の前で聞かされたような、世界が揺れたと感じる程の爆音と、とんでもない殺気に身体が一瞬、硬直してしまった。そして、ルイズさん相手にその一瞬の硬直は致命的な隙となる。

「まっずっ」

気づくと既に目の前に迫ってきている刀の切っ先。

私の心臓目掛け空気を裂く。

回避は……不可能。

なら、今こそ密かに特訓してきたアレで……!!

「っっ……」

直後、体内に侵入してきた黒い刀身。

サクツとあっさり貫通したが、確かに私を貫いている。

もはや痛いと言うより熱い。

焼きごてを突っ込まれたような……そんな耐え難い痛みを感じながら、私は背後の川に落ちた……

「洋菓子戦争、それは己の命を賭けた争い。頭、心臓に活動不能なダメージを貰えばゲームオーバー。敗者は自身を倒した者にそれまで持っていた命を半分奪われる、究極のサバイバルゲーム。最後まで生き残った者はワンホールケーキ半分を得るだろう・・・ オハヨウ、コンニチハ、若しくはコンバンハ、司会のアルことアルビレオ・イマです」

「同じく司会、甘いもの嫌いのレン」

「・・・ヘイズだ」

「いやー、始めましたね洋菓子戦争」

「八割方お前のせいだな」

「ふふ、まあティアナにはいい刺激になるでしょう。もうすぐ訓練校に行ってしまうようですからね」

「やっぱりティアナの為だったんだ」

「その通りです（半分以上暇潰しですが・・・）ルイズにタバサは魔法禁止、キティ（エヴァ）も肉体強化以外は禁止にしたとは言っても、自分のケーキが賭けられてますからね、何時もの修業以上の緊張感で闘うでしょう」

「・・・つか、早速だがルイズがぶっ飛んでなかったか？ あれ、正気なのか？」

「・・・さて、高みの見物といきましょうか」

「はあ、お前もいい性格だよな」

開始六時間 生存者七名 残り時間十八時間

「あれ、お姉さまなのね」

「・・・え、どう言うことなのね？ ちょっと待・・・」

「お、あっちから気配が……」

一瞬だけ、この島の東側、大砂丘の方面で戦闘の気配を感じた。もう感じないけど、まだ誰かいるかもしれない。

「ふー……」

走りながら、徐々に【気】を身体に馴染ませ、充実させていく。そして砂丘に到着。其処に居たのは……

「タバサか！」

蒼い髪の女。

ハイネックのような紫がかった服にスカート、そんで黒っぽいニーソックス。

飾りつ気があまりけど、確か仕事の時はあの上にローブを羽織ってたっけ？　ま、アレがタバサの戦闘服なんだろう。

「クー、あなたも私の命^{ケイキ}を狙ってきたの」

自身の身長と同じか少し長いくらいの木製の杖を片手にポツリと一人立つタバサが咳くように聞いてきた。

「へっ、そんなのに興味は「残念だけど……」……」

聞いてねえ」

赤淵の眼鏡に手を掛け、ゆっくりとした動作で懐に仕舞う。
もう大部昔から変えていないらしい短く揃えた髪が、自分の発する
プレッシャーで揺めき始めている。

そして、両手で杖を持ち、バトンを回すように軽々と回転。
杖の先を下段、左足を前、右足を後ろの半身に……
その姿からは百戦錬磨、熟練の気配を感じた。

「面白れえ、相手にとって不足なしだ！」

S i d e ・ テ イ ア ナ

ルイズさんに刀で貫かれた私はいま、流れに沿って川底を泳いでい

る。

なんで私が生きてるか？

それには私が刺される直前で使った二つの魔法が関係している。

コツコツと練習を重ね習得した、ルイズさん達にも知られていないであろう……光学迷彩魔法【オプティックハイド】そして、

幻影魔法【ダミーシルエット】

先ず、【ダミーシルエット】で私の身体に重なるように幻影を作り、【オプティックハイド】で私本体を透明化する。

そして、ダミーに身体を反らせ、私はその逆方向に反らす。

するとあら不思議、心臓部分を貫かれたように見えても、本体である私は肺を片方潰されるだけですみました〜パチパチパチ……普通ならそれで致命傷だけど、この幻想空間では頭か心臓を潰されない限りは回復する。

川に飛び込めるかが心配だったけど、そこはルイズさんの愛刀、全く抵抗無く貫通してくれるもんだから心配無用だった……こうして、私は逃げ切ったのだ！

え？

ミッドの魔法なのに魔法陣が出てない？

いやいやそんなの隠すでしょ普通。

服の中に隠してみたら案外いける。

……息継ぎ息継ぎ……

ふー、ルイズさん相手に肺一つ潰される痛みで済んだんだから、なかなかの結果だろう。

「……？」

ん、なんか水が落ちるような音がしたような……？

ふと前を見ると……川が無かった。

投げ付ける。

合計八の針が、まるでクナイのように閃光となりタバサへ殺到する。

「しっ」

が、構えた杖をマシンガンの連射じみた速度で突きだし、一瞬で撃ち落とすタバサ。

そのまま瞬間移動を思わせる速度で自身の間合いへクーを入れ、突きのラッシュを浴びせる。

もはや杖は見え、強化のために纏わせた【気】が、微かに光の線となつて見えるだけだ。

「くっ!?!」

予想を上回る神速の突きに焦りながらも、クーは必死に懐から取り出した二つのアンゲル（釣り針を巨大化させたような武器？ 鎌に見えないこともない）で紙一重で捌き、合間をぬって蹴りを出す。しかし、杖を盾に防がれ、再び距離をおいた隙の探り合いになった。

「ふ……」

「……」

二人にとって、刹那で詰められる距離。

ジリジリと距離を詰め、自身の間合いにクーを入れようとするタバサ。

一見拮抗しているように見える戦いは、実際にはタバサが優勢だった。

杖術を主体に巨大な間合いを誇るタバサに対し、クーの武器は己の肉体とアンゲル。

遠距離からの攻撃は、タバサの技巧の前に意味を成さず、杖の間合いを突破し超近距離戦に持ち込まなければならぬのだ。

・・・ちなみに、タバサは体術にも優れているため、超近距離戦になろうとも、そう簡単にはいかない。

「・・・やるな。 なら、これならどうだ！」

言葉と同時にクーが十二人に分身した。

タバサを囲むように散り、全員が両手にアンゲルを構え、投げ付ける。

投げられたアンゲルの取っ手から伸びるワイヤーには、等間隔で御札のような物が付いていて、タバサを包み込むようにそれぞれが弧を描く。

計二十四のワイヤーが、まるで繭にでもなるかのような軌道で・・・

「爆ッ」

縛鎖爆封陣！！！！

一斉に大爆発を起こした。 衝撃に砂煙がまきあがるが、まだ倒しきれていないと感じたクーは気にせず、本体と変わらない密度の分身三体と自身の計四人で、タバサの気配がする場所へ向かい、四方向から突撃する。

「「「「「おおおおおおおおおっ！」「」「」」」」

全力で【気】を纏わせ強化した手刀を叩き込もうとする。

四つ身分身・陽炎十字！！

四方向からの手刀が振り切られ……

「ふっ！」

……なかった。

「「「「「なっ」「」「」」」」

雪風流・雪月花

杖を超高速回転させながら、全方位をカバー。すべての手刀を弾くと同時に回転に巻き込み、強烈な打撃を叩き込む。

分身は全て消え、クーも海辺の方向へ吹き飛ばされた。砂丘にぶつかり砂煙を巻き上げながら、浅瀬に叩き付けられ大きな水飛沫を上げる。

「ぐツ・・・くそっ」

すぐさま起き上がるクーだが、その両腕があらぬ方向へ曲がっていた。

咄嗟にガードした腕が耐えられなかったのだ。

幻想空間のルールで、数秒で元に戻る。

現実ならもう戦闘不能だろう。

顔をしかめるが、気を取り直し追ってきたタバサに視線を向ける。

「・・・頭か心臓を潰さないとダメ・・・面倒」

「はっ、ホントならさっきので終わりだったかも知れないけどな。

ルールはルール、まだ終わってねー！」

足に【気】を集中させ、海面に立つクーとタバサ。

今は無傷に見えるタバサだったが、吹き飛ばされる直前、服が破れ腕から出血している姿をクーは見た。

攻撃が届かない訳ではないと気合いを入れ直し、再び構える。

「おおおおっ！！」

「しっ！！」

Side・シエスタ

私は今、猫状態で前方を行く金髪の少女エヴァさんを尾行している。流石はエヴァさんと言ったところでしょうか？

隙が全然ありませんね。

隙をうかがいながら森を進む。

・・・まったく関係ない話しになりますが、ハルケギニアのトリステイン魔法学院でメイドとして働いていた私が、いつの間にかこんなことをしているのですから、人生つてのは分からないものですね。

なんだかんだ言って、人間・・・狗族の先祖がえりでしたが・・・

として生きてきた時間より、猫として、いや、猫神様の眷族として
生きた時間の方が永いですし……

あ、メイド服はそれでも標準装備ですよ？

本当に何かがあるか分からないものです。
そのうちリンさんが言っていた平行世界の私と入れ替わったり、跳
ばされたりするんじゃないでしょうかね？

まあ、楽しければいいですが……おっと、かなり思考が脇道
に反れてしまいました。エヴァさんが森の中にあつた巨大な湖の
畔に向かいました。

もしかして、休憩するんでしょうか？

これはチャンスです！

さあ！

隙を！

隙を見せなさい！

ふふふ、一瞬で決めて、ケーキGET!!

「そこにいる奴、出てこい」

ッ!?

しまった！邪念が隠せてなかった!?

Side・アウト

「しっ！」

「くおおお！」

タバサの閃光のような突きの嵐の中をクーは両手のアンゲルでギリギリ捌きながら進んで行く。
体に掠らせつつも、ついに突きが出せない懐まで飛び込むことに成功。

「らあああッ！」

二つの斬撃がタバサを左右から同時に襲うが……

「私に苦手な距離はない」

杖を回転させるようにして二つの斬撃を同時に捌き、鞭を思わせる

蹴りをクーのわき腹目掛けて叩き込む。　しかし、なんとか膝をわき腹と蹴りとの間に滑り込ませ、ギリギリガード。吹き飛ばされる。

「ぐうっらあああつ」

飛ばされながらも、体勢を立て直したクーはアンゲルを杖に向かって投げ付け、ワイヤーを絡ませた。

「もらつったあああツ！！！！」

そして、おもいつきり引つ張る。すると杖がタバサの手からすっぽぬけ、クーの後ろ、砂浜に突き立った。

「……………これが狙いだっただの？」

「ああ、これでその突きの嵐は封じたぜ」

そう言ってアンゲルを構えるクー。しかし、タバサは焦るところか、面白そうに口の端を微かに上げた。

「……………ふッ」

「ッ!？」

一瞬で目の前まで移動し、膝蹴りを放つタバサ。驚きながらも、両腕を交差させなんとか防ぐ。

メキメキと嫌な音を聞きながら、クーは海面の上を転がるように跳ばされた。

さらに背後に気配。

「なっ!？」

迫る拳の嵐に、なんとか対応するが、捌き切れずに幾つかもらっ。疾い……………だけでなく重い。

雪風流・氷柱抜き手

タバサは右手に【気】を集中。

凄まじい捻りを加えられた抜き手がクーの心臓目掛けて放たれる。その抜き手に対しクーは……………

「おおお!」

内側に捻りきつた拳を抜き手の側面に入れ、一気に捻り上げ筋肉のポンプと螺旋の力で受け流しつつ、拳を突き出した。

白刃流し!!!

「ぐっ」

「……!!」

しかし、突き出した拳はタバサが顔を傾げることで避けられ、受け流し切れなかった抜き手が、クーの腕を半ばまで『斬り』とった。仕留めきれなかったことに、少し驚いたタバサは飛び退き、再び何度目かの隙の探り合いへ……

「……よく凌いだ」

「ぐ……ったく、お前の抜き手は日本刀かなんかなのか？」

【魔力】や【気】で刃を纏っているわけでもないのに、抜き手で自分の腕を『斬った』ことに、信じられないと言ったように呟くクー。

「鍛練の成果。 . . . このままだときりがなし。 次で最後」

「確かに。 現実ならとくに致命傷を受けて終わってるだろうし そろそろ終わりにするか」

「 」

クーの言葉を最後に、互いに十五メートル程離れて向かい合い、構える二人。

ギシギシとした緊張が辺り一帯を包み込み、心なしか波の音も小さくなったように感じる。

「 ツ! ! 」

まったくの同時に二人は動いた。

クーのアンゲルに【気】が集中。

【気】を練って型どった直径一メートルの黒い剣が二振り現れる。そしてその黒刀を交差させ . . .

黒翼十字! ! ! !

タバサを四等分にしようと、一気に振り抜く。黒い斬撃が刀身から伸び、タバサを

(・・・おかしい。 何で動かないんだ？ このままだと無抵抗で切り裂かれるぞ？)

・・・すり抜けた。

(ッ！？ まさか、威圧による・・・)

「フェイントかッ！」

「正解」

そのまま飛んでいく十字の斬撃の上に現れたタバサ。しかし、それに気付いてもクーは渾身の技を放った直後のため、動けない。

雪風流・氷柱抜き手

「がふッ・・・」

今度こそ、タバサの抜き手がクーの心臓を貫いた。

血を吹き出しながらアンゲルを落とす。

「くっ……ま、まさか幻影魔法……いや、それ以上の錯覚を……威圧だけで……見させる……なんて……な」

「鍛練の成果」

「……完敗だ」

光の粒子となつて、クーは消え去つた……

「あなたの敗因は、正々堂々と私の誘いに乗ってしまったこと。フェイントは勝負の基本。内虚外実を鍛えなおしてくるといい」

1 3 1 洋菓子戦争？ 「永く生きてると、ちょっとした楽しみが生き甲斐に

二連続投稿。

1 31 洋菓子戦争? 「永く生きてると、ちょっとした楽しみが生き甲斐に

Side・アウト

息を殺す・・・

周りの木々に溶け込むように・・・

必要以上に殺してはいけない。

今から狙うのは、最強クラスの怪物だ・・・

ボトルアクションのライフルに弾丸を装填。

レバーを引き、構える。

およそ千五百メートル・・・

ギリギリのラインだ。

標的は激しく動き回りながら戦闘中・・・

Side・エヴァ

「ネコつつっパンチッ！」

「ぬおっ!?!」

シエスタの拳が白く輝いたと思うと、嵐のような突きのラッシュが襲ってきた。

どうでもいいが、【ネコパンチ】などとふざけた名前の癖に威力がおかしいだろうが。拳圧だけで巨木が空を舞ってるぞ？

魔法障壁すら禁止されているこの状況で、一発でも受けたら、退場もあり得るな……。だが。

「なめるなッ！」

「ッ!?! きゃあ」

頬の横を通りすぎていく拳を逸らし、一瞬で腕を取り投げた。大木を何本もへし折りながら、ようやく止まるシエスタ。

「くっ……やっぱり強いです……ねっ」

疾空黒豹牙！！！！

漆黒の豹が弾丸のような速度で飛来。

上に跳んで逃げると、すでにシエスタは目の前にいた。

「はああああっ」

「ぐっ……ぬっ」

咄嗟に【虚空瞬動】で避けようとするも間に合わず、腹に突き刺さる拳。

そのまま地面に叩きつけられそうになったが、空中で一回転してなんとか着地した。

シエスタも十五メートルほど前に着地した。

すでに闘い始めて十数分が経過しているが、辺りはボロボロだ。

木々は薙ぎ倒され、湖は氾濫。この区画だけ爆撃でもあったんじゃないかと思いたくなるような光景だ。

「ふん、お前とここまで本気でやるなんて初めてかもな、シエスタ。なかなかどうして、思ったよりやるじゃないか」

「はあ、はあ、はあ・・・まったく、息も乱さずよく言いますね？ あなたこそ肉体強化だけで・・・見事としか言えません」

「フフフ・・・それじゃあそろそろ本気で行くつか」

「挑むところです」

猫族獣化

シエスタの身体がメキメキつと音をたてて猫のように体毛が生え、着ているメイド服の腕の部分がはち切れた。爪が伸び、その姿は白い虎を思わせた。そして、今までの比ではないプレッシャー。これは・・・

「・・・なかなか」

四つん這いになり、隙をうかがうシエスタ。
・・・強いな。

「「・・・」」

ピクツとシエスタの筋肉が僅かに動いたのを合図に、私は距離をゼロにした。

顔面に向けての抜き手。

あと1?のところで、腕を横から掴まれ止められる。

どうやら筋力、反応速度ともが上がっているようだな。

腕一本で投げ飛ばされるが、大木に着地。

縮地を使い、すぐさま飛び掛かるも、シエスタはすでに目の前に迫ってきていた。

「はあああああッ」

「ぐうっ……くくっ……」

縮地の連続行使による、超高速移動に着いてくるか……だが……

「ッ!? 消え……ッ!?」

あと一步、私にはおよばないな……

敵に動きや重心を錯覚させる、独特の動き。その動きを相手の目の動きよりも早く行い、あたかも消えたように錯覚させ、死角から投げる……

「ぐうッ!？」

爪を振り回し、私を捉えようとするシエスタだが、・・・当たらない。

そもそも近年のミッドチルダ式魔法や近代ベルカ式魔法などは、魔力の運用に目を向けたことにより、繊細な武術の技法をいくつも取りこぼしていった。

なぜならば、習得の難易度、それにかかる時間や努力が桁外れにかかるからだ。

遠距離からの魔力弾や砲撃において、まったくの無力であったこの技法だが・・・それ故に、近接戦闘において私やルイズ、タバサは一步も二歩も先を行くのだ。

つまり何を言いたいかと言うと・・・

「お前の身体能力、そして魔力や気の運用は素晴らしい。・・・だが、私を相手に近接戦闘を仕掛けるには、少しばかり技法が足りなかったな」

「ぐ・・・まだ終わってません!」

地面にめり込み、木々に叩きつけられ、ボロボロの筈のシエスタが立ち上がった。

・・・そういえば、心臓か頭を潰さなければダメージは無効になる

んだったな。 骨の四、五本は折った感触があったんだが・・・
お互いの距離は十メートル弱。
立ち上がったシエスタは構えたまま動かない。
・・・いや、これは技撃軌道を読んでいるのか？

「ふー・・・」

「・・・なるほど、お前もだてに猫神とやらの元に居たわけではなかったということか？」

「・・・」

近接戦闘・・・いや、武術は極めれば極める程に詰め将棋のようになっっていく。

もし相手がこう攻めてきたらこう出そう・・・
その駆け引きの極みが技撃軌道戦だ。
お互いの軌道を脳内で先読み、牽制し合う。

「ふー・・・」

「・・・ほっ」

右を出せば払いのけて一閃。

左を出せば搦んで首を折りに来るか……？

死角に回り込んだら、全方位に疾空黒豹牙。

それで止めきれなければ地面を打ち抜き地割れを起こして防ぐ……
踏み込めば、渾身の一撃で迎撃。

さらに右の蹴りならetc……

しかし、……これは動くに動けんな……どうにか懐に入っ
て、確実に仕留めたいところだが……

ふっ、魔法なしで闘えとはとんだ無茶を言っと思っただが、ここまで
本気で技撃軌道戦をすることになるとはな……悪くない。

「……懐には入れさせませんよ」

「そうか。なら……」

あえて踏み込む！

縮地で加速し、シエスタの左前方から鞭のようにしなる蹴りを側頭
部目掛けて放つ……

「ッ！ もらっ」

白虎爆碎拳！！！！

……と見せかけて、縮地に入ったのは一瞬。

距離を半分に詰めたところで、今度はそのまま前進したと見せかけ

て、独特な歩法で全力で後ろに下がった。
放たれるシエスタの右ストレート。
強大な気と集束した猫神の眷族が込められた一撃は、私の長い髪を
強風であるだけに終わった。
これで魔力による肉体強化すらなかったら、吹き飛ばされてミンチ
になっていたな（笑）

「しまっ!？」

「当たらなければどんなに強大な力も零……懐に入られてしまっ
たな？」

そして私の抜き手がシエスタの胸を貫いた。

「こ……ふ……」

血を吐きながら倒れるシエスタ。
予想以上に苦戦したな。
そして一瞬、気が緩んだのかもしれない。
後方から私の心臓目掛けて飛来した、かなりの力が込められた弾丸
に気づくのが遅れた。

「があッ……バカな!？」

ギリギリ身体を反らし、致命傷は避けた。
狙撃……ティアナか！

こちら辺一带の木々はシエスタとの戦闘でほとんどへし折れている。
早く離れるか。

足を動かそうとして……

「なっ」

足首まで影に沈み、動けなくなっていた。
更に腕や腰に巻き付く影……

「は、はは……やられっぱなしじゃ、後味が……悪い……です
からね」

最後の力を振り絞り、影でバインドのように私の身体を拘束するシ
エスタ。

ちっ、こんなバカな！？

ええい、肉体強化だけではこの拘束を解除するのに数秒はかかって
しまうぞ！？

そして跳んでくる二射目。

解除に手間取る私の胸を今度こそ、弾丸が貫いた……

S i d e ・ テ イ ア ナ

ふう、なんとか狙撃成功つてところかな？

シエスタが抑えてくれなかったら、距離を詰められて殺られてたかもしれない・・・まだまだ未熟だな、わたし・・・

いや、背後から、しかも一・五キロも離れた遠距離からの狙撃に反応するエヴァがそもそもおかしいんだけどね？

・・・つといけない、何時までもここに居たら、射撃音を聞き付けて、誰かが来るかもしれない。

はつきり言つて、今のわたしがルイズさんやタバサさんを正面から相手するのは自殺行為だ。

素早く気配を殺し、背の高い巨木の上から飛び降りる。

「さてと、ルイズさんたちはいつたい何処に居るのやら・・・」

小声で呟きながら、あらかじめ決めておいたルートを一目散に走る。一分程走り続け、ようやく辿り着いたのは島の中心部、何十と突き立つ巨大な岩石のうちのひとつだ。

膝立ちで【レミントン700D】を構える。

「……………」

先にこちらが見つけれれば良いのだが……

Side・アウト

ティアナがスコープで覗いているのとは真逆の方向一キロの場所。

森が切り開けた……いや、『切り開いた』直径にして百メートル程の広場の中心で、ルイズとタバサはお互いに向かい合っていた。

距離にして二十メートル。両者とも様子を見、息が詰まるような隙の探り合いが続いている。

「……………あなたと本気で殺り合うなんて、何十年ぶりかしらね、タバサ」

「百七十年ぶり。あの時は私が負けた。ちなみに百十五勝百二十三敗六十八引き分けて、私が負け越してる」

「そうだったっけ？ って、全部数えてたの!？」

「そう」

「……それじゃあまた一勝させてもらいましょうか」

「……面白い」

話している間にも、二人は技撃軌道を先読みし、脳内で激しくぶつかり合っていた。

もし一般人……いや、並みの魔導師がこの闘いを見ていれば、瞬きの間に二人の立ち位置が逆になっていたり、地面が抉れたりして驚いたことだろう。

と、ルイズの右手が急に消えた。

それと同時にタバサが構えていた杖と両腕が消え……

ルイズ流・音超え居合

雪風流・雪月花

鏝なりの音がした時にはすでに相手を斬っているという、神速の居合い斬り。

その連撃をタバサは杖を回転させるように、全て捌いていく。何も無い空中で火花が散り、衝撃が地面を粉々に砕く。

「ずりやッ!!!」

「ふッ!!!」

静・・・と思った次の瞬間には動・・・二人の技量は拮抗していた。

1 32 洋菓子戦争? 「あれ? わたしの出番は? なんてチビスケに数行

Side・ルイズ

流石はタバサ、強いわね・・・
私の斬撃が悉く捌かれ、杖による変幻自在な攻撃はかなり回避が困難だ。

まったく『突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀』とはよく言ったもんだわねッ

「・・・? のわッ!!!?」

一瞬、遠くからの視線を感じ、それに気を取られて何発かいいのをもらってしまった。

【気】に練り込まれた肉体を突破し、アバラが数本折れた感触を感じる。

詰めよってくるタバサに向かって、【天上天下天地無双刀】に【気】を喰らわせ、巨大な漆黒の斬撃波を放つ。

警戒したのかタバサは距離をとった。

「こぶっ・・・ふふ、ティアナ、まだ生きてたの・・・?」

視線を感じた方向を見ると、ここから一キロ程の岩山に、ティアナが狙撃銃を構えているのが見えた。
あの時はちよつとばかし刀と共鳴していて、バーサークモードっぽくなくていただけ、確かに胸を貫いた筈・・・ まあいい、狙撃されてはたまらない。
先に片付けておくか・・・

「タバサ、この一撃を避けられるかしら？」

「・・・・・・・・？」

S i d e ・ ティアナ

やっと見つけたルイズさんたち。 とんでもない速度で動き回り、全然狙いが定まらなかったところをルイズさんがなにやら大技を放

つためか、動きを止めている。

「・・・チャンス到来・・・かな？」

頭にスコープの十字を合わせる。

おそらく、ただ撃つても簡単に回避されるだろう。
なら、大技後の技後硬直を狙う。

「すー・・・はー・・・」

細く長く息を吸い込み、同じだけの時間をかけて吐き出す。
揺れ動く照準。

風を読みむ。

距離は千メートル・・・いける。

私の必中距離は最大で一・五キロメートル。

雑念を消し、腕の中のレミントンと一体化したような奇妙な感覚を感じる。

「はー・・・えっ？」

スコープの中のルイズさんと目が合った気がしたんだけど、まさか
気付いて・・・って、えええッ!!？

ルイズさんの一撃は、一条の黒い柱となって、私がいる岩山・・・
・と言うか私に迫り、一気に両断した。

……まさか、こんな長距離まで斬撃が届くなんて！？
全身に凄まじい衝撃を感じて、私の意識はブラックアウトした……

S i d e ・ ア ウ ト

「ま、こんなもんかな」

島を半ばから両断したルイズは刀を鞘に収めながら呟いた。
細いが深い溝が、遙か彼方地平線まで続いているのだ。
そんな一撃をギリギリ回避したタバサが口を開く。

「……ティアナを狙った？」

「あれ、気付いてたの？ 狙撃されても面倒だし、今の私たちって魔法障壁ないからね」

「……………第2ラウンド」

「オツケー」

「……………ッ」

少しの沈黙のうちに、二人は同時に動き始めた。舞台は木々を切り開いた広場を離れ、森の中へ。

縦横無尽にルイズが切り払い、タバサが突く。

上空に舞う巨木の群れすら足場にして、二人は乱舞した。

常人の目では影さえ捉えられない速度。

魔法による飛行が禁止されているため、虚空瞬動を駆使し、空中でもぶつかり合う。

ルイズの刀とタバサの杖が組み合い、同時に周囲に衝撃が吹き荒れた。

両者とも地面を抉りながら十メートル程距離をあけ構える。

「……………ずあっ！！！」

ルイズ流・黒龍一閃

ティアナを襲った漆黒の斬撃を刀に纏わせ、ルイズが踏み込む。

下方から斜め上へと弧を描く必殺の一撃に、タバサは同じく自身の必殺を繰り出した。

「……はあっ！……！」

雪風流極意・地獄氷

極限まで練り込んだ【気】が杖の先に集束。神速の突きが放たれ、ルイズの刀とぶつかり合った……

S i d e ・ テ イ ア ナ

ドゴオオオオン……というとてもない爆音に、私は意識を取り戻した。

あれ？

どうしたんだっけ？

えーと、たしかルイズさんと目が合ったと思ったら、私に向かって黒い斬撃の柱が迫ってきて……

「ッ……」

激痛。

痛すぎて、何がなんだか分からなかったが、下半身が消し飛んでいた。　　だくだくと流れ出る鮮血。　　現実世界ならとつくの昔に死んでるわねこりゃ。

流れ出た鮮血が、光の粒子となって消えていく……流石に心臓も頭も潰されてないって言っても、肉体のほとんど半分が吹き飛ばば、死亡扱いになるわよね……

「ぐ……くくっ……ああ」

もうどうにもならない。

私はこれから死ぬ。

後から思い返したけど、この時の私はあまりの痛みで、どうやらおかしくなっていたようだ。

なにせ、本当に死ぬと思い込んでいたんだから。

二メートル程先に、レミントンが落ちているのが見える。

ちよつとでも体を動かす度に、凄まじい激痛が襲ってきたが、それはどこか遠くのことを感じた。

ルイズさんに斬られ、粉々になった岩山の上を這って動き、手に取る。

あと何分間……何秒間持ちこたえられるか分からないが、最後の

足掻きだ。

爆音のした方向へ銃を向けた・・・

S i d e ・ タバサ

ぶつかり合った私の極意とルイズの一閃。

結果は両者とも痛み分けだった。　私は杖を彼方まで吹き飛ばさ

れ、ルイズも刀を飛ばされた。

・・・やはり最後は体術になるか・・・

「私の【黒龍一閃】を・・・やるわね？」

言いながら、ルイズは半身になり構えた。

・・・隙がない。

威圧によるフェイントもルイズ相手では効果があまりない。
ならば・・・

「……！」

小手先無しの捨て身技。

この幻想空間では少々のダメージなど無意味。

ならば命を掛け

金に、相手にも命をペットして貰おう。

「なるほど、そう来るとは……面白いわ」

「……次の打ち込みで、どちらかが死ぬ」

……空気が死んでいく。

ギシギシと空間が軋み、小石が【気】の圧力だけで浮いていく。

「かはー……」

「こほー……」

構えた抜き手にこれでもかと【気】を練り込んでいく。
そして……

雪風流・真氷柱抜き手

ルイズ流・霸裏剣掌

交差は一瞬。 百分の一秒にすら満たない。
次の瞬間、・・・・心臓がズグンと高鳴り、破裂した。

「じ・・・・ふ・・・・」

「ぐッ!?!」

私の抜き手はルイズの右肩を抉るに終わったようだ・・・・

「無・・・・念・・・・」

倒れる。

暗くなっていく視界、薄れていく意識の中でルイズの声が響いた。

「ぬぐッ! ば、バカな・・・・」

S i d e ・ テ イ ア ナ

二五メートル。

私がスコープの目盛りを基準に割り出した標的への距離だ。

レーザー測距儀もなければ、観測手もないが、間違いないだろう。

二五メートル……

だめだ、届かない。あと四百五十メートル前に進めればどうに

かなるのに……

スコープの中には此方に背を向け、タバサさんと向かい合っているルイズさんが映っている。

どうにも……ならないかな。

『イメージするものは常に最強の自分だ。戦う相手とは自身のイメージに他ならない』

……そうだった、戦う相手は自分のイメージ。

たった四百五十メートル必中距離から離れてるからって、まったく問題ない。

一番安定する伏せ撃ちの姿勢でレミントンを構える。　　と言つよ

りも、伏せ撃ちしか出来ないんだけどね……

意識を保っていられるのはあと何十、いや何秒だろう？

こうしてスコープを覗いているだけでも、深い闇に呑み込まれていくような感覚に襲われる。

ストックを肩に密着させ、グリップを握り、ストックの下部をちょうどあった岩の割れ目に引っ掛けて固定する。

左手で右肩を抱き、上体をうずくませる。

右の頬にフレームを付け、右目とスコープを一直線に……風を読む。

もちろん温度と湿度、空気抵抗、魔力弾の精製、タンプリングと呼ばれる弾頭の横転・前転によるズレ……etc それらすべてを勘案して最終的な照準を決定する。

コンピューターでは不可能なほどの複雑な計算。

そして、それらの要素を頭に入れた上で、きれいさっぱり忘れる。

イメージするものは弾道だけだ。

タバサさんとルイズさんが一瞬交差し、動きを止めた。

これが、最後にして最大のチャンス。

時間がゆっくりと流れているように感じる。

導き出されたイメージに従い、標的から何メートルか離れた空中にスコープの十字線を合わせる。

……まだ不十分だ。不規則な呼吸のせいで、十字線が上下左右に揺れ動く。

僅かな誤差も命取りになる。これから求められる集中は、針の穴に糸を通すどころじゃすまされない。

針の穴の中に描かれた、超極小の肖像画に瞳を入れるようなものだ。普通に考えて、出来る筈がない。その筈なのだが……私の脳

裏には、漠然と『当たる』と言う言葉が浮かんだ。驚きも喜びもなく、ただそう感じた。

これまで見えなかったものが読み取れる気がした。

まるで世界のすべてが掌にあるかのような万能感。

弾道のイメージが鮮明になり、周囲の分子一つ一つが把握できる……気がする。

今がふざけた理由から始まった、サバイバルの途中だったことも、いま狙っている標的のことも、なにかも分からない。いや、別にいいか。

私はただ、あそこに弾丸を撃ち込むだけだ。

ああ、近いなー、まるで目の前で狙いを定めてるみたいだ。も

っと遠くも狙えるのに・・・勿体無い・・・

いつの間にか指が引き金を引いていた。

魔力弾精製。

撃発。

すべてイメージ通り。

銃身の中を回転しながら弾丸は進んでいく。その回転すら、私

は見える気がした。

それは大気を切り裂き、完璧に風を読んで放物線を描き、まるで吸い込まれるように標的へ……………

命中するのはもう分かっている。

最後に私は『大当たり』と、声にならない声で呟き、光の粒子になった……………

背後から心臓を撃ち抜かれた。

あり得ない。

私の策敵範囲はおよそ二キロ。それにかからないとは……

ティアナは退場にさせた筈だったんだけどなく、私もあまかったか

・

かろうじて残った背筋の力で振り返り、はるか彼方、ティアナを消し飛ばした筈の方向を見た。

「がふッ……そう……」

どうやらティアナは銃使いとして、一段階上の段階に進んだようだ。

届く筈がない弾丸。それが私の命を奪った。

どこか満足した気持ちで、私は倒れた。

ここは現実世界。 洋菓子戦争の景品、アーチャー特性ケーキが
安置されている冷蔵庫がおかれた台所。
そこに、人影が一つ……

「きゅい、あつたあつたなのね！」

青い髪をした女……人間形態のシルフィードだ。 彼女は
序盤でタバサに問答無用でやられ、いち早く現実世界に戻ってき
いた。

「ふふふ…… 私を怒らせた対価はしっかり貰っちゃうのね」

そして、ケーキを取り出し、豪快にワンホールケーキをまるごと食
べようと……

「シルフィード。 ナニをしてる」

動きを止めた。

背後からはタバサの声。 滝のように流れ出る冷や汗。

ギシギシとまるで錆びてしまったようにゆっくりと後ろを見る。

そこには……ッ……………

……………

……………

……………

!.....!
!.....!

「~~キ~~.....
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
.....」

.....シル
フィード.....死す.....?

1 33 単独任務 前編（前書き）

二連続投稿！

次の投稿は二月末を予定。

モニターの中には、ガラスの筒のようなものが映し出されている。

臃げな輪郭が浮かび上がってきた。

小さな体を丸めたような姿勢。

頭部には既に形を形成し始めた目と口がモニターの向こうから見つめてくる。

数ヶ月の後、この世に新たな生を受け生まれてくるはずの胎児の姿・

S i d e ・ テ イ ア ナ

「単独任務……ですか？」

「そ、単独任務。 あんた、一人で依頼を受けたことないでしょ？」

訓練校に行く前の締めとして……ね」

あの洋菓子戦争から数日経ったある日、ルイズさんが私に依頼を持ってきた。

初の単独行動。ハッキリ言って、やることは執務官と変わらないんじゃないかな？

「危険度は控え目にしておいたわ。明日には発つように」

そう言つて、私に書類を手渡してくるルイズさん。

なにに、『危険度AAクラス依頼資料』

……AA？

「ちよつ、ルイズさん！ これって結構危なくないですか!？」

「えー」

「いや、えーじゃなくてっ！ AAクラスって言ったら、いつぞやかヘイズと行った、ゾンビモドキの地下研究所並みですよ!？」

そう、管理局の武装局員、しかも最前線で危険度Bなのだ。どのくらいヤバイかわかりになるだろう……

「大丈夫大丈夫。それは目安で、本当のところは行ってみないと分からないって。Aクラス程度の可能性もあるんだからさ」

「……………」

それって、AAAあまつさえSクラスもあり得ると……？

「生き残るために必要な技術はすべて叩き込んだわ。師匠を信じなさい！」

「ルイズさ……………いえ、マスター師匠……………分かりました！絶対に解決してきます！」

……………こうして私は明日、とある管理外世界に向かうことになったのだ……………

「……………どうしてこうなったかなー……………」

見渡す限り、砂、砂、砂……………

砂漠のど真ん中に埋もれるようにして突き出た、ビルらしき建物の屋上に隠れなが、私はため息を吐いた。　いや、資料の中に【I・ウイルス】って単語が出てきた辺りからあやしいとは思ってたよ？でもまさかこんな事態になってるなんて……………
依頼内容は意外と単純だった。

『ある世界にある地下研究所から研究データを入手、それが無理ならば、確実に破壊する』

この『ある世界』って言うのが、いつぞやかのクーランシティがあった世界と同じだと気付いたんだけど……………来てみれば、世界全体が砂漠化していた。

そして動き回る死体……………おそらくはI・ウイルスの感染者。

絶対夢に出てくること確定だ。

と言うか、あの研究所の入口らしき小屋を発見するまで、生き人間に遭遇していないのだが……………

はは、同封されていた、なんか緑色をした【抗ウイルス剤】はこの為か〜と乾いた笑いがこぼれてしまう……………

いくら【抗ウイルス剤】があるとと言っても、噛まれたくはない。

で、今から侵入する研究所の入口……………小屋の周りには金網が張られ、その更に周りを何千体というゾンビモドキが蠢いているのだ。

「……………虚空瞬動で金網を越えて、その後は……………臨機応変に行くしかないかな？」

ちなみに資料には『二日後には世界を消毒するため、巻き込まれないように』とか書いてあったのだが……『消毒』って、もしかしてこの世界を消すのかな？
……と言っか、この依頼をしてきた相手って、かなりの犯罪者……いや、犯罪組織なんじゃ……
……深く考えないようにしよう。あまりにも突っ込みどころがありすぎる。

「……っし、行こうかな」

目標の小屋まで約八百メートル。
十分届く。

両足に【気】を集中させ、一気に爆発させる。

縮地无疆!!!

踏み台にしたコンクリートが粉々に砕けた。
同時に加速する景色。
たった数秒で距離を零にして、地面を抉るように着地。
フェンスの中に入った。
おそらく小屋の中に何かの仕掛けがあつて、地下に行ける筈だ。
小屋のドアを開けて、中を見渡す。
……特にこれといってスイッチらしき物は見当たらない。

「……………本棚かな？　前も赤い本を持ち上げたら、入口が出てきたし」

案の定、本棚には背表紙のない一冊の本があった。
やっぱりね。

「……………？」

本を持ち上げる。　すると、ガチャンとなにかの仕掛けが作動したような振動があった。　しかし、変化がない。

「あれ〜おかしいな？　ッ!？」

と思ったら、いきなり小屋が真っ二つに割れ、地下からエレベーターらしきものがせり上がってきた。

「……………手が込んでるわね」

私は【デザートイーグルD】を両手に取り出し、エレベーターに乗った。

エレベーターの中で、今回のために用意したサングラスの暗視機能とナビシステムを起動。
視界にマップが映し出される。
ガクンと軽い揺れ、エレベーターは止まった。

「ふー……」

二挺拳銃を構え、何時でも撃てるようにする。
静かに扉が開いていく。

「……」

薄暗い廊下。

ナニもいなかった。

研究所の中もゾンビモドキたちでいっぱいだったらどうしようかと思っただが……大丈夫かな？

いや、油断は死に繋がる。　　気を引き締めなければ！　　神経を
極限まで研ぎ澄まし、どんな予兆も見逃さないように警戒する。

サングラスのナビに従い、研究資料があるらしいデータルームへ進

んでいたその時……

「……………」

背後に気配を感じた。立ち止まり耳をすますが、なにも聞こえない。が、確かにナニかがいる。

射撃音が響くのはよくないから、サイレンサーモードに切り替える。今曲がったばかりの曲がり角。その向こうに、ナニかがいる気がする。

「……………ふー……………」

狙いを定め……………

リフレクト・ショット

引き金を引く。

撃つ

撃つ

撃つ

撃つ

撃つ

撃つ

撃つ……………

カートリッジの装弾数ギリギリまで。 七発×二挺で、計十四発の障壁貫通AAAランクの魔力弾が壁に反射して曲がり角の向こうへ……………

「ぎゃあんッ」

絞り出すような鳴き声と共に、曲がり角の向こうからナニかが倒れる音。

瞬動まで使って、一瞬で十メートルほどの距離を詰め、曲がり角の向こうを確認。

……いた。 クーランシティの地下研究所で襲ってきた化物だ。全身の皮膚を剥がされたようなグロテスクさ百点満点、二メートルほどの体躯。 蜥蜴に人間を掛け合わせたような感じだ。

頭に当たったらしく、ビクビクと身体を痙攣させている。

が、コイツは首をへし折って、頭に鉛玉をぶち込んでも、後を追ってきた異常な回復力を持っていた。

念のため、頭部に殺傷設定の魔力弾を撃ち込んでおこう。

「……………ゴメンね」

引き金を引き絞る。

軽い反動と同時に、高密度で圧縮された弾丸が化物の頭を吹き飛ばした。

「ぶ…………… コイツみたいのがウヨウヨいたらどうしよう」「

確か、この化物はAAAランクの障壁を張るのだ。あの時は切り札の【アンティケイメノイン・ショット】で、障壁を破り止めを刺したのだ。ヘイズも居たし……

未だに咸卦法は全力戦闘で五分、維持するだけなら三十分しか持たない。

「……ま、なんとかなるか」

異空弾装でリロードし、先を急ぐ。

私が今居るのが、本棟の非常階段地下七階。マップによると、この研究所は四つの棟から成り立っているようだ。

一番大きいのが本棟で、地下三十七階まである。そして本棟の地下二十階から分岐しているのが三つの棟、A、B、C棟だ。

その三つはそれぞれ地下七階まであり、私の用があるデータルームはB棟の地下四階だ。

まだまだ先は長いな……

あれ以降、ゾンビモドキやグロテスク百点満点の化物とは出くわしていないが、油断は出来ない。
さくつとデータを入手して地上に戻るとしよう。

「……………それにしても」

ここでナニがあつたんだろうか？ 私たち【紅き翼】に依頼が来ると言うことは、自分達の組織じゃデータの入手は無理だと判断したからだろう。

現在、地下九階。

ここまで来るのにそこまでの障害があつたとは思えない。確かに化物はいたが、それなりに場数を踏んでいれば対処できる程度の脅威でしかない筈だ。

いったいこの先になにが待ち構えているのやら？

薄暗いなか、非常階段を警戒しながら降りて行った私は【レベル1 9】と壁に描かれた地下十九階まで辿り着いた。
しかし……………

「・・・いかにもヤバそうね」

二十階との間に、鋼鉄で出来てるっぽい扉が立ちはだかっていた。スライド式らしく、ドアの近くにはパスワード入力の為らしきスクリーンがある。

・・・この向こうから、嫌な気配を感じるような感じないような・・・兎に角こっからが本番みたいだ。

あらかじめ資料に記載されていた八桁のパスワードを入力する。

「えーと・・・B・K・2・2・8・8・4・G・・・っ」と

すると、ドアが重々しい音を立てて、スライドし始めた。

ナニが急に飛び出してくるか分からないから、距離をとって銃口を向ける。

「・・・」

ドアの向こうは非常階段の続きだったが、今まで弱々しいけれど照らしてくれていた、薄暗い青い非常灯がところどころ壊れ、点滅していた。

慎重にドアをくぐる。

と、急にスライドドアが閉まってしまった。

一定時間が経つと自動で閉まるのだろうが、何処と無く気味が悪い。そのまま先へ進もうとして、鋼鉄の扉にもたれ掛かっている人影を

見つけた。

一瞬、気配もなく後ろをとられたッ！？と慌てたが、どうやら違ったようだ。

「……………死んでる」

気配がなくて当たり前だった。

でも、危険は減らすに限る。 もしかしたら動き出すかもしれな
いたため、頭に一発。

「……………ッ」

……………どうやらゾンビモドキではなかったようだ。 よく見
ると、どこかの特殊部隊のような装備をしている。 依頼してき
た組織の一員だったのだろうか？ それならゾンビ化への対策も
してある筈だから納得だ。

「……………この傷、鋭利な刃物で心臓を突きつてところかな？」

確実にヤバそうなのが、この先にいるようだ。

階段を降り、地下二十階に入る。

戦闘があっただろうか、薄暗く青い非常灯に照らされて、廊下の
床や壁に魔力弾を撃ち込んだような痕跡が見えた。

「……………」

無言。

時折、バチバチツと壊れた非常灯が火花を散らす。

その音が余計に精神を削っていく。

しばらく進んでいくと、二十メートル程の開けたロビーのような場所に出た。

天井は高く、十メートルはあるだろうか？

そして、何故か鉄臭かった。

「うつ……………」

広間のすみに、非常階段で見付けた死体と同じ装備をした人間の…

…死体？

腰から真つ二つになっている者や、首が無いもの、原形をとどめていない者など、……………自分で言うのもなんだが十歳ちょっとの私が見ていいものではないだろう。

あまりの生々しさに、思わず喉の奥が酸っぱくなった。

……………あのSランク依頼で行った戦場でも死体は見たけど……………これはちよつとグロ過ぎやしないだろうか？

私の正面には三つのスライド式の扉があり、それぞれA、B、Cと扉の上の壁に刻まれていた。

……………ここで問題。

広間の端には死体の山、目の前には三つの扉があります。さて、

この状況から考えられるのは何でしょうか？

答え・奇襲が来る？

「……………」

・・・突然だけど、ある一定以上の近接戦闘術を修めた者は自身の間合いに球体状の結界を張り、そこに入った敵性体に半ば自動的に反撃が出来るそうだ。
そして、私もまだまだ未熟ながら間合いの結界を張ることが出来る。
つまり……………」

「はあっ！！！」

背後、後頭部を狙った斜め上からの飛来物に、私は反応することが出来た！

一メートル弱程の魔力で編まれた槍のような物の側面を銃身に展開した魔力刃で逸らし、直ぐさま反撃。

魔力弾を天井に隠れていたらしきグロテスクな化物に浴びせる。
が、まるで獣のように（実際、獣だが）四つん這いで俊敏に動き回り、回避されてしまった。

「ちっ」

どうやらクーランシティにいたヤツと同等かそれ以上のようだ。

体軀は一回り小さいが、その分小回りが効き素早い。

「ガアアアアッ」

床、天井、壁を目に映らない程の速度で縦横無尽に跳ね回り、魔力の槍を投げ付けて来る。

「くっ」

勿論、バリバリの殺傷設定。

私の銃撃を警戒してか、動きを止めず駆け回っていることから、知能もそれなりにあるみたいだ。

………だけだ。

「見えてるわよっ！」

「ギヤウツ!?!」

確かに一般魔導師……いやかなりの高ランクだったとしても、室内であんな風に立体的で素早く動かれたら、対処しにくいだろう……

だ・け・ど、私は目に映らない程とんでもない速度に師匠やタバサさん、クーとかとの模擬戦で慣れてる。

後は縦横無尽に跳ね回る軌道を読んで撃てば、それほど難しいことじゃない。

ま、相手が悪かったわね。

そんなに強固なシールドを張るわけでもなかったし、私としては前の方が手強かった。相性の問題かな？

「頭に一発撃ち込んだだけじゃ駄目か・・・」

震えながら立ち上がる化物。・・・いや、コイツは確か胎児の

段階で【E・ウイルス】を使われ、実験されてしまった成れの果て・・・か。

「・・・せめて安らかに逝きなさい」

異空弾装でリロードし、十四発全て頭部に撃ち込んでやった。

・・・目を背けていたが、コイツや上の通路にいたヤツだって、生きていたんだ。

だからって殺されてはやらないけど、せめてそういう存在が居たことだけは覚えておこうと思う・・・

「・・・」

さて、先を急ごう。

目的の階は近い・・・

パスワードを打ち込み、B棟へと向かった私だが、思っていた程、棟の状態は悪くなかった。

自家発電がまだ生きているのか、それとも撤退する時に電源を落とさなかったのかわからないが、薄暗い非常灯ではなく、普通に明るかった。

地下四階のデータルームに到着。

資料を納める為の棚が無限書庫を思わせる程無数に並んでいる。そして、広い空間の中心にコンピュータが鎮座している。

「あつたあつた、これを入れてつと」

資料と共に渡されたディスクを入れて、コンピュータの電源を入れる。

パスワードをカチャカチャッと打ち込んでコピー開始。ディスプレイには残り時間十五分と示された。

「・・・・・・・・」

本当にこのデータを組織に渡してもいいのだろうか？ あんな化物や恐ろしいウイルスを開発する組織に……いや、これも仕事か。

私たち【紅き翼】は正義の味方ではない。

受けた依頼は確実に遂行する……でも、時空管理局にもうすぐ属する予定の身として、これはどうなのだろうか？

「うん……」

このデータが元で、また新たな生物兵器が生み出される可能性があるわけだ。

いいのか、私？ いやでも、そうするとルイズさんの顔に泥を塗ることに……

『無理なら確実に破壊』

……（……）キラリ

そうだ、壊しちゃおっかな。せめてもの抵抗だ。

異空弾装で【炸裂弾】用の弾装を召喚。

いやー、アーティファクト【弾切れ知らずの無限武器庫】のおかげで、弾代もストックの量も気にしなくてよくなったから、撃ち放題だ。

実際、お金がかなり掛かる戦い方だから、出費が激しかったんだよね……

撃つ。

撃つ。

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

ア一〇二

撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・ハッ」

気が付けば、辺り一面が消し飛んでいた。

ちよつと妙なテンションでトリガーハッピー・・・・・・・・？になっていたようだ。

「・・・・・・・・ま、いつか。 依頼内容に違反してる訳じゃないしね・
・・・・？」

おかしい。

何で私の視線の先、あの壁の一部分だけボロボロになっていないの
だろうか？

ちよつと彼処がホログラムによる立体映像のように・・・・・・・・

「・・・・・・・・壁がない」

思った通りホログラムだった。

ちょうど本棚の裏側で隠れていた場所だ。

私が【炸裂弾^{バースト・バレット}】を連射したせいで出てきたのだろう。

「……………」

気になった私はホログラムの先へ進んだのだった。

……………この先になにがあるのかも知らずに……………

1 3 4 単独任務 後編

偶然見つけた隠し通路。

その先で私が見たものとは……

S i d e ・ ティアナ

ホログラムに隠された通路の先は、今までの研究施設と何処か作りが違った。

通路をそのまま進むと、ライトの淡い白光に照らされた広い部屋に出た。

壁一面に大きな棚。

一つ一つに薄い板状のコンピュータがぎっしりと詰め込まれた端末の塊を見つけた。

埃のかけり具合から見て、地下研究所が破棄されるより以前に破棄されたようだ。

「……………実験……………0415?」

0415……………脳裏に何かが掠めた。

0415……………

日付に直せば四月十五日……………お兄ちゃんが殉職した日だ……………
……………ツ!?

「……………つ」

息を呑んだ。

『新暦 六年四 五日』

予測通り、の 確。 I・ウ に
よる実験体No.0113を へ投入。 不可視の障

世界の

不可

管局

究所とは違うようだ。パスワードを受け付けない。時間を掛ければどうにかなるかも知れないが、明日にはこの研究施設は世界と共に塵と消えるだろう。残念ながら、持ち運ぶことは不可能そうだし……

「……しょうがないか。早く地上に出るとしよう」

そう呟き私は部屋から出たのだった。

Side・アーチャー

ここはミッドチルダ。正確にはその東部十三区の複雑に入り組んだ路地裏にある隠れた名店……と、自負している。

そんな店のカウンターに座り、アーチャーこと俺、衛宮士郎は、テイアナから依頼された銃型デバイスの最終調整に入っていた。

その名は【ブレンテンD】装弾数は今までの感覚を考慮して、【デザートイーグルD】と同じ七発。

強度はアームドデバイスと同じ素材を使用しているため劣るが、それでもベルカ式の近接戦闘デバイスと同等だ。

しかし、これでもティアナのカートリッジ魔力を異常圧縮・集束した魔力弾の使用には心もとない。おそろく一ヶ月・・・いや、二週間ほどでガタが始めるだろう。

【咸卦法】を使用すれば更に負担がかかり、もっと短いかも知れない・・・

いや、管理局に入ったあとは奥の手として使用を控えると言っていたからそこまで心配しなくていいかもな。

「ふう、こんなもんかな？」

とりあえずは完成か。あとはティアナ自身に試射してもらい、微調整するだけだ。

ちなみにリンは今居ない。おそらくキャロに中国拳法を教え込んでいるんじゃないだろうか？ ルイズに対抗して、何かと息巻

いてたからな・・・

・・・つと、客か？

店の前に気配を感じた。

・・・二人、珍しいこともあるもんだな。

「いらっしやい」

入ってきたのは男女の一組だ。

「失礼するよ」

「……ドクター、本当にここで正しいのですか？」

「何を言っているんだウーノ。君の情報に間違いなどないさ」

男は白衣という微妙に場違いな格好をしていた……

「……どのようなご用件かね？　ここは喫茶店なのだが？」

この男……何処と無く魔術師と同じようなニオイを感じる。
目的の為なら人権など気にもしない、懐かしのニオイだ。

「……そう警戒しないでくれ。少しばかり手伝って欲しいことがあるのだよ」

「……？」

「君は人を助けることを命題としているんだろう？　……正義の味方」

1 3 5 試験二日前（前書き）

不定期から週一回の投稿にしてみます。

毎週日曜日、もしくは月曜日に更新予定。

遅れてしまったらすみません？

1 3 5 試験二日前

S i d e ・ ティアナ

さて、入学試験を明後日に控えた私は自室で机に向かい、復習をしていた。

まあ問題ないだろう。

常識を問われる出題で、それほど難しい訳じゃないし（いや、ルイズさんたちのお陰でだいぶ常識が崩れていたが……）六割取れば余裕で合格らしい。

「んー、こんなもんでいいかな？」

背伸び。

さて、もう夜も遅いし寝ようか……

「あ……ハ……クシUNKシUNツ……ハツク
シUN」

……まさか？

「ハツクシヨイツ……クシUN……ゲホゴホゴホ

「ゴホッ」

「三十九度四分・・・こりゃ寝てるしかないわねティアナ」

「ゲホガフツゴホ・・・そ、そんな〜ゴホ・・・ルイズさんの魔法でなんとかありませんか？」

「あー、診断魔法ってのはあるけど一発で風邪を治す魔法ってのは無いわね」

ベットに寝かされ、頭に氷嚢をのせる私。間違う余地もなく風邪である。

頭がぼーとする。

ゴホッゲホッゴホン

くっ、まさかこんな・・・子供は風邪の子って言う古い言い伝えは嘘だったと言うの・・・？

「良く効くクスリを調合してくるから、大人しく寝てなさい」

「うつつ・・・良く効く・・・クスリ？」

「ああもう、喋らなくていいから。寝てなさいって。エリクサーって言うってね、かなり強烈な万能薬よ。昔、その改良に携わったことがあって、作り方を知ってるの」

「なる・・・ほ・・・ど」

【エリクサー】とは・・・これまたファンタジーゲーム定番の秘薬が出てきたあるね

それは助かるぞます

あれりゃあああ　　なんか語尾がおかしいでございませすですか

・・・

「今日中に作ってあげるから、しばらく寝てなさい」

マスタールイズの言葉が頭に響くでがんす

でも、その気づかいがとても嬉しいぽよ

ルイズさんが部屋を出ていくのを見送りながら、我輩は目を閉じたのである。

でもでも、あんまり熱いからなかなか寝付けないの　　私、大丈夫なの？

「おーすティアナ、生きてるかー？」

「大丈夫、ティアナ？」

「ふん、風邪とはなさけないな」

「ふふふキティ、素直じゃありませんね」

「.....」

「お粥作ってきたから食べるのね！」

「ちょっと皆さん、寝かせておいてあげまじょうよ。ほら、ハイ

ズさんも何か言っただけです」

「あー、まあいいんじゃないか？」

クーにレンさんにエヴァにアル、タバサさんにシルフィにシエスタにヘイズがお見舞い？に来てくれたなりー・・・

「うう・・・み、みんな・・・」

「完全にダウンしてんなこりゃ。ルイズのクスリ待ちか？」

ヘイズの音が、妙にボヤけて聞こえるっす。

「ルイズのエリクサーか・・・ 待てよ、そう言えば秘伝の妙薬が確かあったか・・・」

「・・・こんな時は卵入りワイン」

「・・・ツ！？」

「おお、ならそれにこの妙薬を・・・」

い、いったい何を作っているんでござるか？
心配してくれるのは嬉しいけれど、かなり怪しい……

「きゅい！ エヴァちゃんとお姉さまの合作、秘伝卵入りワインD
Xなのね！ ティアナ、一息にグイツと飲むのね」

「ゴホ……い、いや……ちよつと……待つ……」

流れ込んでくる未体験のワイン？ いやこれはワインなんかじゃない
そうこれはまさしく自然と人間との究極のカチチだその未知なる液
体Xはまずわたしの嗅覚を粉碎したまさしく超新星爆発のごとき一
撃はわたしの意識を宇宙の彼方へ光の速さで飛ばしたもはや嗅覚は
死んだ制御できない衝動が脳天を直撃し突き抜けていく舌にある味
蕾が崩壊していくのを感じる一万はあるという味蕾の九割を消し飛
ばし液体Xは食道に差し掛かる熱い痛い寒い駄目だ今までに感じた
なかでも最大級の死の予感あれお兄ちゃんなんで？ え？ この川を渡
ったらダメなの？ でももう半分まで来ちゃったよ？ まだわたしには
早い？ うん分かったよ……
意識が……とぶ……

「ハッ！ あれ、ここはいつたい……………」

見渡す限りの砂漠。空には太陽がさんさんとわたしを燃やし尽くさんと輝いている。

「…………？ 私は確か風邪で……………」

その時、遙か彼方から巨大な紙飛行機が現れた。その上に、二人の人影が見える。

「おーす、ティアナー生きてるかー」

五、六歳ぐらいの少年と少女だ。……………クーとレンさんに似てる？

「……………クーそれにレンさんも、何やってんの？」

「へっ、俺はクーなんて名前じゃねえぜ！ うさみみ空賊団団長！

キャプテンドー!!!!」

「あたしはうさみみ空賊団副団長のレンだよ!」

・・・ちょ、可愛いッ!

「よっしゃレン! お宝が俺たちを待ってるぜ!」

「おーッ」

そんなことを言いながら、紙飛行機は遙か彼方へ再び飛び去っていった。

いったいどうやって飛んでるんだか?

やっぱりこれって……………

「夢、だよな? なんてこんな「きゅいーッ!」!」

今度は地面の下からシルフィが飛び出してきて……………っ!?

「きゅいきゅいー」

口から無数の卵を吐き出した!?

「・・・風邪には卵入りワイン」

「なぬっ!？」

シルフィの上に乗っていた、これまた小さいタバサさんが杖を振るう。

すると、いつの間にか私は巨大なワイングラスの中に赤ワインと一緒に浮かべられていた。

卵が雨あられと頭上から降ってくる。しかも普通の卵じゃない、直径二十センチはある特大卵だ。

「風邪とはなさけないな、ティアナ! わたしの妙薬をくれてやるう!」

何故かワイングラスの縁に座っていたエヴァ(小)がお猪口を傾けると、紫色をした禍々しい液体が、ワインに大量に混ざっていく!

「ハハハハッ」

勝手に渦巻きを作り出したワインに巻き込まれ、溺れかける。すると・・・私はガラスの筒の中に閉じ込められていた。

「ゴホツゴホツ……こ、これは研究所の……?」

足元からワインが溢れだして、溺れそうに……なっただとこるで、
ガラスが砕け散った。

「大丈夫、ティアナ?」

「ゴホツゲホツ……る、ルイズさん」

よかった、ルイズさんは小さくなってない。

「さあ、脱出するわよ」

走り出すルイズさん。

もう何がなんだか、状況に着いていけない。

「きゃあっ」

って、ルイズさんが何も無い所で転んだ!!!!!!??

「うっうっ」

「だ、大丈夫ですかルイズさん？」

あれ、なんでルイズさんの髪の毛が銀色から桃色に……？
それになんだか小さく………

「ん？ 誰よあんた？」

だあああああああつ貴女もですかー！！！！
ついでに周りが湖になってるし、小舟に乗ってるし、しかも、なに
さあの城みたいのはっ！！？

「ぐすっ、ぐすっ……どうせわたしには魔法なんか使えないもん
……」

「はい？」

「こんな世界、消えちやえー……」

太陽落とし！！！！

「うああああっ、あつい……あつ……うう……うーん……」

「ちょっとティアナ、大丈夫!? ティアナ!」

「うーん……ハッ」

「ここは……私の部屋のベットだ……」

「大丈夫? ずいぶんうなされてたわよ」

「ルイズさん…… なにか、とてつもなく変な夢をみた気がします……」

「……うーん、どんな夢だったっけ?

この後、なぜか熱が下がっていたため、ルイズさんに使わなかった

【エリクサー】を貰った。

なんだろう、妙に味覚がおかしい気が……」

城が燃えていた。

無数に大地に突き刺さる武具の数々は血に汚れ、辺り一面に『死』が充満している……

そんな燃え盛る、今なお焦土と化している地獄のなかで、幾人かの人影が現れた。

「ぐ……はっ……はっ……はっ……はっ……数が多すぎるわ。い

つたい何処からわいてくるのかしらねオリヴィエ？」

「はあ……はあ……はあ……はあ……っ息が乱れてますよ、ルイズ？ 少し休んだらどうです？ 私が残りを一掃しちゃいますよ？」

「ふんっ、冗談！ アンタこそ休んでなさい！ まだまだいけるわよ。 アンタはクラウドス？」

「はあ……はあ……はあ……はあ……ふっ……僕もまだまだ余裕ですよ。 ……エヴァンジェリンとアルビレオはどうしました？」

三人は背中合わせになりつつ、各々の剣に籠手、刀を構える。

そんな彼らを囲むように現れる、無数の異形。 全身が甲冑で覆われていながら、頭部に見えるのは二つの紅い点のみだ。 一斉に飛び掛かってくる甲冑達を三人は一撃で吹き飛ばす。

「「「おおおおおおおおおっ！！！！」」」

一息つき、クラウドの問いにルイズが答えた。

「……………エヴァとアルは『ヤツ』に殺られたわ。 二人とも生身って訳じゃないし、復活は出来ると思うけど……………」

「問題は『ヤツ』……………ですね。 ……クラウド、ルイズ」

「なによ?」

「なんですか?」

「……………」 『ゆりかご』を使いましょう。 私が行きます」

「……………ッ本気なの? 確実に死ぬわよ?」

「待つてくださいオリヴィエ！ 僕たち三人なら『ヤツ』にも勝てます！ 貴女が『ゆりかご』に乗る必要はない！」

「……………二人とも分かっているのではよ？ 『ヤツ』には今の私たちがどう足掻こうが勝てません」

「……………」

押し黙る二人。

「ルイズ、クラウド……………今まで本当にありがとう。 アナタたちは私の掛替えのない親友であり、ライバルでした」

「……………負ける気で……………」

「え？」

「最初から負ける気で行くんじゃないわよ。 ……必ず生きて帰ってきなさい。 アンタとの決着はまだ着いてないんだから」

「ッ！……………そう、ですね。 ふふ、ルイズには驚かされて

ばかりです」

オリヴィエは手に握る西洋剣をルイズへ差し出した。

「私の愛剣、必ず取りに戻ります。預かっています。……
……イクス」

『OK, My lord』

黄金の剣が一瞬輝き、掌に乗るほどの十字架に姿を変えた。

「クラウドス」

「……オリヴィエ、僕は……」

「あなたはどうか良き王として国民とともに生きてください。この大地がもう戦で枯れぬよう、青空と綺麗な花をいつでも見られるような、そんな国を」

「待ってください！ まだです！！ 『ゆりかご』には僕が」

その言葉は最後まで口にされなかった。

なぜならクラウドの唇をオリヴィエが人差し指で抑えたから……

「……私は生きて帰ってきます。だから……あなた
は生きて……」

そしてオリヴィエは煙の奥へと片手をあげながら消えていった。

「オリヴィエ!! 僕は ……!!」

『あたらしいあつさがきた きぼうのあ……』

「うーん……朝、か」

目覚まし時計が壊れていないのが不思議なほどの力でボタンを叩き、
ルイズはベットから起き上がった。

「ふあゝ……今日は……ティアナのテストだったっけ？」

Side・ティアナ

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッ！！
!?」

おはようございます、ティアナ・ランスターです。

今日の日付は0072年の3月14日。　只今ビルの屋上や屋根の上を絶賛暴走中です。

え？　なんでこんな事になったか、ですか？

ふ、ふふ、ふふふ、全てはアルの、あの宴会のせいです。

風邪の完治祝いと言って始まった宴会……。最初はその心遣いに感謝していた私だったが……。エヴァが『別荘』からお酒を出してきた辺りからおかしくなり始めました……。記憶がないが、きつとろくでもないことがあったのだろう。

起きたら朝の九時・・・
試験開始は10:00・・・
会場はミッドの首都クラナガンで、家からバスやらなにやら乗り継いで一時間半は掛かる。
・・・九・・・時・・・？
・・・事情はお分かりだろうか？ まさかの遅刻で受験出来ずに不合格と言う大ピンチな訳で・・・
直線距離で自分で走った方が早い？と、瞬動やら縮地無疆、何でも使ってなんとか間に合わせようと奮闘中だ！！！！

「くっ、足に限界が！？ いやあと少し、あと少しだけでも私の身体！」

悲鳴を上げる筋肉。

確実に瞬動や縮地無疆の疲労が溜まっていくのが分かる。 だが止まらないや、止められない！

「ぐああああああおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおッッッッッ！！！」

途中、管理局の魔導師が邪魔してきたが振り切った。
・・・ヤバイかな？
いやいや今は遅刻しないことが最優先だ。

「見えたああああああああああっ！」

時間を確認。

現在09:57・・・まだ間に合う!

試験開始十分前を切っているが、気にしたら負けだ。
私は勝つ!

見えてきた会場に指定されたビル。

受付に立つ係員に受験票を・・・

「・・・・・・・・ツない!!!!!!?」

・・・オーマイゴツト。

受験票を・・・・・・・・受験票を忘れた・・・・の?
茫然と立ち尽くす私。

なんかもう、今日は厄日だホントに・・・・
と、後ろから声を掛けられた。

「ティアナ、受験票忘れてるわよ?」

「る、ルイズさん!??」

まさかの登場である。

この時、ルイズさんの背後に後光が見えたのは気のせいではないだ

るつ。

「ありがとうございます！ ホントにありがとうございます！
・・・あのく、どうやって此処へ？」

追われている気配はなかったはず。

「え？ そりゃ転移魔法でだけど」

ティアナ、私が言う前に家を飛び出しちゃったんだからく、と言っ
ルイズさんの声が遠くに聞こえた・・・

「まったく、念話で呼び掛けても反応しないし、焦りすぎでしょ？
深呼吸しなさい深呼吸」

「はい・・・」

ま、まあ、試験を受けられるのだから良しとしよつ。
確かに焦りすぎだった。

依頼なら死んでいたかもしれない。
自重自重・・・

試験結果は……まあだいたい出来た。

おそらくは余裕で合格だろう。

試験会場のビルから出る。

この後はどうしようか？　今は午後二時ぐらい、少しあそんで行

くとしよう！

ふふふ、なんとたつて【弾切れ知らずの無限武器庫】を手に入れてから、それまで弾を買うために消えていった依頼の報酬が貯まっているのだ。　だいが余裕があるから、ショッピングでも楽しもうかな？

『臨時ニュースをお伝えします』

ん？　いきなりビルによくある宣伝用の巨大モニターに、若いお姉さんが……

『本日正午、ミッドチルダ東部12区内『パークロード』において、正体不明の魔力爆発が発生しました。　幸い怪我人は……』

画面が煙を上げる森林公園に映りかわった。上空から撮影したのか、爆発で薙ぎ倒された範囲がよく分かる。半径五十メートルにわたって、巨大なクレーターが出来ている。

爆発と言うよりも、戦闘痕にも見えたくない気がするが、

『一年程前から定期的に起こっているこの爆発。時空管理局では、違法魔導師の暴走との発表がなされていますが、ハッキリとしたことは分かっていません。怪しい人物に心当たりがある方は、時空管理局へ……』

ま、気にしなくていいかな。この事件を解決しろって依頼がきたなら調査もするだろうけど、私には来てないし。

「よし、試験も終わったし今日は遊ぶぞー！」

と意気込んだが、非常に残念ながら修業三昧の私、しかも一人じゃ盛り上がるわけもなく、このあとすぐに家に帰ったのであった。

Side・アウト

ミッドチルダ南部の山あい、アルトセイム

「我が骨子は捻れ狂う……」

I am the born of my sword

「接続、解放……」

Eine / Zwei……

「偽・螺旋剣（カラドボルグ?!?!）」

「大斬撃（Rand Verschwinden?!?!）」

黒き弓から放たれた、空間すら捻りきる莫大な魔力を宿した矢。
七色に輝く短剣から放たれた黄金色、極大の大斬撃。

その二つが同じ標的に命中し、大爆発を起こす。
爆風とともに白一色に染まる視界。
揺れる山脈。

どちらも必殺と言っていていい威力を有した技を同時に二つ。
果たして全次元世界を見渡しても、生き残れる者は何人いるの
だろうか？

「……………ふう、片付いたな」

「そうね。あの変態の言った通りになるなんて……………ああも
うやんなっちゃうわ、宝石翁ももうちょっとましな世界に跳ばして
くれても良かったのに」

「ま、まあ流石にあの爺さんでも、これは予想してなかったんじや
ないか？」

「いえ、あの人のことよ、絶対分かってて送ったに違いないわ！
士郎は分かってないわね」

「そ、そうか？ でもまあ知っちゃった以上はどうにかしなくちゃ
だろ」

「はあ、にしては相手が悪すぎよ。……………ま、今さらよね。
とことんやってやるうじやないのよー！」

「・・・悪いな、凜」

「ふん、好きでやってんのよ、アンタにお礼を言われる筋合いはないわ。さ、戻りましょ、キャラの自然保護隊行きも近いんだから、出来るだけ詰め込むわよ」

Side・ティアナ

試験から早二ヶ月、五月も半ばまできている。
試験結果は合格。

この【紅き翼】のアジトで暮らすのも、あと半月と言ったところだ。

六月には訓練校の寮で暮らすことになる。

なんだか悲しいような、もう修業で死にかけなくていいんだと、喜ばしいような……そんなよくわからない気持ちだ。

「ふー……」

時刻は午前六時半。

習慣となっているトレーニングメニューを消化した私は家の庭で立ち尽くしている。

「左手に【魔力】右手に【気】」

咸卦法。 アルテマ・アート 究極技法とまで呼ばれる、超高難度技法だ。

これのおかげで私は今まで生き抜いて来たと言っても過言ではない。
……が。

「……ふっ」

両手に拳銃を構え、二十メートル程離れた缶目掛けて撃つ。

一発。

二発。

三……発目を撃とうとしたところで、銃が煙を上げた。
合計二発。

二挺使っているのだから、一発ずつ撃っただけでガタがきた。

「……量産型【ブレンテンD】……か」

どうしよう？

私の魔力を圧縮するだけなら数百発撃っても、ちゃんと整備すればある程度大丈夫。

だけど、カートリッジの魔力を集束・圧縮すると、五〜六発。咸卦状態では一発でガタガタだ。

「……ま、どうにかなるでしょ多分きつとおそらく。そ

う、カートリッジを使わなければいいんだ」

カートリッジを使わないと、Aランク魔導師の障壁を貫通するのがやっとです。

お話になりません。

ドンマイっ……

「うーん……」

素材自体は近接戦闘用のアームデバイスと同じらしいし、……
・どんだけ異常なのよ、私の圧縮力……

「お、いただいた。ティアナ、ちょっといい？」

考え込んでいると、背後からルイズさんがやって来た。
「いったい何だろう？」

【別荘】

それはエヴァが持つ大きなボトルシップのような瓶の中にある異界だ。

中での一日は外の一時間となり、巻物とは違い過ごした時間の分岐をとる。

成長期の私はあまり使わなかったのだが……

「準備はいいかしら？」

「……はい」

今、私は【別荘】の中にある塔の頂上に立っている。

目の前にはルイズさん、そしてアル。

なにやら仕上げに稽古をつけるついでに、私に宿題として新しい技？を授けてくれるらしい。

「では行きますよ。制限時間は五分、凌ぎきることが出来れば貴女の勝ちです」

アルがアーティファクト【イノチノシヘン】を出した。

螺旋状に浮かぶ無数の本の中から一冊を手に取り、棊を挟む。

それを引き抜くと共にアルの身体が光に包まれ、いつぞやか【咸卦法】の見本として変身してくれた、ハードボイルドな中年男性に姿を変えた。

「私の手が上がった瞬間からスタートよ」

十五メートル程離れた私とアル（たしかガトウさんスタイル）の横にルイズさんが立ち、腕を突き出した。

私は両脇のホルスターに収まっている【デザートイーグルD】に手をかけ構え、アルは両手をポケットに突っ込んだ。どうしようか？

実力差は歴然。咸卦法の熟練度も天と地ほど差があるだろう。ならば……開始と同時に居合い弾を放ちながら距離をとり、咸卦法……かな？ カートリッジは集束の関係で居合い弾と併用出来ないから、アルの障壁を抜けるか心配だが……いや、ガトウさんって人の戦闘スタイルで来るのかな？

考えても始まらない。とにかく五分間だ。

「それじゃあいくわよ……始め！」

ルイズさんが手を上げた。

「しっ」

ほとんど同時に私は瞬動で距離を取りながら居合い弾を放つ。

一息に六発。空気を引き裂き跳んでいく魔力弾が……なんと空中で不可視のナニかに打ち落とされた。

「ッ!？」

今まで回避されたり、防がれたりにはあったが打ち落とされるってこ

とはなかった。

視認がほとんど不可能な、銃口の見えない弾丸をどうやって打ち落とすんだか？

「右手に【魔力】左手に……………」

しかし、伊達に全次元世界ビックリ人間ショーを地で行くルイズさんたちと暮らしている訳じゃない。

咸卦法を発動させ、先程の威力とは桁違いの居合い弾の雨を浴びせようと構え……………」

「え……………」

不意に莫大な威圧を感じた。

ルイズさんの技【咆哮】、Sクラス依頼でのタバサさんと魔力量SSS化け物ローブ男の戦いの時に感じたレベル。

見ると、両手を合掌させアルが咸卦法を発動させていた。

極めれば私もあんな馬鹿げたレベルまで到達出来るのだろうか？

硬直は一瞬。　　すぐさま数十発の居合い弾を放った……………」

AAAランク魔導師の障壁すら貫通する力を秘めた魔弾はアルに向かって跳んでいき……………」

圧倒的な光の奔流に吞まれて、消え去った。
光の壁が私に迫る。

「くっ！！！」

咄嗟に地面を蹴って上空へ。

今のは【豪殺居合い拳】のバリエーションだろうか？

私が入っていた場所が消し飛び、塔の屋上半分が瓦礫になって宙を舞っている。

「ふふ、避けましたか」

ハードボイルドな声でアルが喋っているのに大分違和感があるのだが、その事を口に出す余裕がない。

瓦礫を足場にいつの間にかアルが背後にいた。
つて、もうモーションに入ってる！

早く虚空瞬動で・・・

「ぐっ！？」

顔、両手、鳩尾に衝撃。

おそらくは居合い拳だろうが、ほとんど見えないから対応が遅れる。

吹っ飛ばされそうになる両手の銃をしっかりと持ち・・・

豪殺居合い拳

次の瞬間、とんでもない衝撃が身体全体を襲い、ボロボロになっていない残りの屋上部分に叩き付けられた。

アバラが何本か逝った。

咄嗟に咸卦の気を腹部に集中していなかったら、今で終わっていただろう。

と言っか、咸卦法を使っていなかったら、今で死んでたと思う。

「かふっ・・・ぐ・・・ぬ・・・」

敵わないとは思ってたけど、まさかここまで一方的になるとは・・・いや、一矢報いたい。まだ私は動ける！

瓦礫が轟音を立てて落ちていくのと一緒に、アルが私の十メートルほど前に降り立った。白いスーツは全く汚れていない。

「ほう、立ちますか。 なかなかどうして・・・」

撃ちながら転がる。

けど、撃った弾は居合い拳で逸らされる。 転がった後を追うように地面が陥没していく。

「ぐっっっ・・・ああああっ」

折れたアバラが痛い。

内臓を傷付けたのか、喉の奥に血がせり上がってくるのを感じる。

叫びながらも、バク転。

実力差がある相手に距離をとってもじり貧だ。　　ここは一撃に賭ける。

回転しながらも咸卦の気を銃にチャージ。

二つの銃口をアルに向けるが、アルもすでに大技らしきモーションに入っていた。

咸卦の射撃

アンティケイメノイン・ショット!!!

七条大槍・無音拳

私の視界が白く染まって……

「……………」

はっと気がついて目を開けると、真っ青な大空が広がっていた。

身体のふしぶしが痛い、ルイズさんかアルが治療してくれたのか、重傷と言うほどではなくなっている。

最後の光景が脳裏によぎる。　圧倒的な七条の奔流に呑み込まれて……

「お、目を覚ましましたか？　私が治療したとは言え、素晴らしい回復力です」

真っ青な視界にアルの顔が横から割り込んできた。

「当たり前でしょ。　なんとたつて私の弟子よ？　内功はちゃんと練ってるんだから回復も早いわよ」

上半身を起こすと、ルイズさんが宙に浮いた筈に足を組んでまたがり、紅茶を啜っているのが見えた。

「えーと師匠、私はどのくらい気を失ってましたか？」

「だいたい二十分弱ね。　アバラ六本と右腕が骨折。　その他裂傷

などなど、まあ重傷だったわね。　ガトウ相手にそれなりに健闘した方じゃないかしら？」

「…………でも掠り傷一つ、スーツに汚れすらつけられませんでしたよ？」

流石は究極技法咸卦法…………

まさかあんな圧倒的な出力、そして戦闘のバリエーションがあるなんてね。

アルが変身したガトウさんと言う人の戦闘スタイルもその一端に過ぎないのだろう。

つまり宿題と言うのは…………

「その顔じゃ分かったようね。　咸卦法には大きな魔力は必要ないわ。　どれだけ上手く【魔力】と【気】を反応させ合って大きな力を得られるか……　熟練は必須だけど、極めれば極めるほど引き出せる力も大きくなる。　あなたの【咸卦の射撃】アンティケイメノイン・ショットだっけ？　あれもなかなかの威力だけど、まだまだ改良の余地がある」

…………。

咸卦法は殺傷設定に強制的になっちゃうから、管理局に属するからには控えなければいけないんだけど…………　やっぱり単純な射撃しか技がないってのは勿体ないかな？

「…………分りました。　私だけの技を編み出してみます」

「ん、よろしい。まあ訓練校の訓練なんて、私の修業に比べたら欠伸が出るくらい軽いだろうし、時間はあるんだからじっくり考えなさい。……せつかく鍛えたんだから鈍らないようにね?」

「は、はい……」

確かに……そこら辺を考えておかないと駄目だ。

「ん〜ま、こんなもんね。とりあえず教えられることは全部教えてたわ。明日からは軽めに修業をつけてあげるから、訓練校の準備でもしなさい」

「え、でも荷物をまとめるだけですよ?」

「ん〜、【気】とかをどうやって誤魔化すのか、それとも管理局員として働く間は使わないのか決めたりいろいろあるんじゃないの?」

「……え?」

「だから私たちがみたいな便利屋とかならまだしも、【気】とかを管理局で使ったら面倒よ? 調査の為〜とか言われて、最悪、身体

中解剖されるかもだし」

「……た、確かに。」

何時も何気なく使ってたから考え付かなかったけど、ミッドチルダでは【気】って言う概念がないんだっただ……

身体能力は肉体強化の魔法だから良いとしても、ミッド式や近代ベルカ式の肉体強化だと、瞬動が使えないから【気】に頼っているのだ。

【魔力】と【気】は普通反発する。けど、咸卦法をある程度修めると同時使用が可能になる。

で、気の運用が駄目となると高速移動の術が無くなるというわけで

……

「……なんてシバリプレー」

「ん？　なんか言った？」

「いえいえ、現実って厳しいなーって話ですよ……はは……

」

あれ？　私って弱い？

局員としての能力は……

- ・ 魔力量並（Aランク魔導師の平均未満Bランクの平均以上）
- ・ 異常圧縮力（特殊デバイスじゃないとすぐに壊れる）
- ・ 幻術（ちよつと適正があつたからかじつた程度）
- ・ 光学迷彩（継続時間5〜10秒。ちよつと適正があつたからかじつた程度）

．．．．だ。

あれ？

思つてたよりも大分シヨボい．．．．

「ま、休みがあれば来なさい。仕事持ってきてあげてあげて。持つてる才能の限界より上を目指すなら、命を賭けないと一定の水準を越えられないからね」

「．．．．了解です」

まあその意見には賛成だ。

私が一段階上に進めたのは何時だつて極限状態の時だったのだから．

．

．．．．それは兎も角としてだ。

誘導弾とかある程度は使えるようにしておかないといけないのかな．．．？

2 0 ? ? ? (前書き)

第一章『ティアナ修業編』がようやく終わり、次回から第二章『訓練校編』に入っていきます。

それではどうぞ？

そこは次元世界の何処かに隠された秘密の基地……

一人の白衣を着た男が居た。

周囲をうめつくすように高く積み上げられた書類、そして器機の数々が立てる微かな駆動音が、静まり返った部屋のなかで響いている。十数と浮いている空間モニターには、怪しげな機械や、人の胎児、グラフや意味不明な文字の羅列が並び、次々と映り変わっていく。

「ドクター」

ドアが静かにスライドし、何処かの制服を着た女が部屋の中に入ってきた。

その胸元には【?】の文字。

「No. ? から No. ? までの最終調整が完了しました。【紅き

翼】、そして例の二人への協力を得ることに成功。計画は概ね順

調に進んでいます」

「そうか、ご苦労だったねウーノ」

「はい……少し休まれてはいかがですか？ もう何日も寝て

いらつしやらないでしょう？」

「くく、なに大したことじゃないさ。私は今、とても楽しんでい
るんだよ？ 古代ベルカ、そしてアルハザードですらなしえなかつ
た事に挑戦するのだからね」

ウーノと呼ばれた女に背を向け、男は片手を振るだけで答えた。

「……そう、ですか。お身体には気を使ってくださいね。
私たちと違って、ドクターは生身なのですから」

「ふふ、君たちもほとんど生身さ。なんせ私の最高傑作なのだか
らね。まあいい、そろそろ休憩をはさもうと思っていたところだ、
紅茶でもいただこうかな」

「かしこまりました」

ドクターは一先ず手を止め、椅子にもたれ掛り、ウーノに言った。

「くく、ははは、あはははははははははははははははははははははは
ははははははははははははははははははははははははははははははははは
いか。完成までの道のりは険しいが、必ずや成し遂げて見せる。

さて、管理局の無能どもはいつたいどんな反応を見せてくれる

のかな？」

狂気すら感じさせるドクターに、ウーノは紅茶を用意しながら答える。

「その前に【紅き翼】の計画通り、まずは管理局にその資格があるのかを確かめなければ……ですよ」

「そうだったね。次元世界の管理を囁く組織に向かって、戦う資格があるのか試すとは……あの女は本当に恐ろしいな。いや、そもそも時空管理局自身が自分の首を絞めた結果なのだろうがね」

「どうぞ」

「ありがとう。ん、この前より大分おいしくなったんじゃないかい？」

「はい、アーチャーさんに教わりました」

「ほー、アーチャー君にかい？ ……まあいいさ、今しばらくは準備に勤しむとしよう」

モニターには何かのブレスレットのような物が映し出されていた・・・

2 1 入学（前書き）

2 連続投稿。

そろそろ2連続がキツくなって来たので、来週はどのようになるか分かり
ません・・・・・・・・

それではさようば。

2 1 入学

0072年6月

時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校

「……試験をクリアし志を持って本校に入学した諸君らであるからして、管理局員武装隊員としての心構えを胸に、平和と市民の安全のための力となる決意をしかと持って訓練に励んで欲しい。以上！ 解散！ 一時間後より訓練に入る」

「……はいつ！」「」

Side・ティアナ

「各員、仮割り当て部屋へ移動！ 二人部屋のルームメイトは当面のコンビパートナーでもある。試験と面接の結果から選ばれた組み合わせだ、円滑に過ごせるよう努力するように！」

長かった修業も一区切り、私はようやく訓練校に入学することが出来た。

部屋は・・・32号室か。

訓練もすぐあるみたいだし、早速行こうかな。

そう思って、モニターにあった32号室に向かっていると、道すがら何処かで見えたことがある少女を発見した。

どこで会ったんだっけ・・・

思い出せない。

同じ方向に向かっているみたいだし、ちょっと話しかけてみようかな？

「・・・32号室？」

「あ、はいっ！ そうです！ 私、スバル・ナカジマ十二歳です！ 今日からルームメイトでコンビですね！ よろしくお願いしますっ！」

・・・完全に初対面的な反応。

・・・思い出した！

旅行に行った時、石柱のモニュメントに押し潰されそうになって、クーに助けってもらった女の子だ！

「ティアナ・ランスター十三歳。よろしくね。・・・覚え
てない？ 何年か前に、【エデン】で会ったよね？」

「あ、えーと……ごめんなさい。わたし……」

戸惑ったような顔のスバル。

って、少し話したただけだし覚えてないか。

「まあいいわ。ちょっと話したただけだったし、覚えてないのもしようがないわ。荷物置いて着替えて行こう。準備運動しっかりやりたいから」

「はいっ!」

………ん?

私をばーと見てる?

「………なに?」

「あ、いえ、なんでもないですっ!」

「あと立場は対等なんだから、丁寧語じゃなくていいわよ」

「はい………じゃない、うん」

さて、どんな訓練なんだろう？

少し楽しみだ。

Side・アウト

とある管理外世界……

アーチャーこと、衛宮士郎とリン・スカーレットこと、遠坂凜は雪山の深奥にある巨大な広場の一歩手前で、ある少女の帰還を今か今かと待ちわびていた。

「……やっぱり様子を見に行つた方がよくないか？」

士郎が落ち着きなくそう言った。　普段の性格からしたら考えられないほど焦っている。

「駄目よ。　契約を結ぶために、あの娘には一人……いえ、一人と一騎で立ち向かわなきゃいけないんだから」

「しかしな……」

「分かってるわよ！ 私だって心配なんだから！ ヤバそうだったら助けに行くわよ」

……

雪山深奥部

そこには桃色の髪をした一人の少女と子犬ほどの大きさの飛竜の子供が居た。

「いくよ、フリード」

「キュクーツ」

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ」

竜魂召喚！

フリードリヒと呼ばれた、子犬ほどの飛竜の足元に魔法陣が現れ、光に包まれる。

光が収まると、そこに居たのは、体長十メートルに達する白銀の飛竜だった。

その背に飛び乗り、桃髪の少女キャロは前方に向かって話しかけた。

「行きますよ、白き雪の神と呼ばれし者よ」

『よかろう。 竜の巫女、ソナタの力を見せてみよ。 我を従えるに相応しいかを……………』

吹雪の中から顕れたのは、最早、巨大としか表現出来ないであろう竜の姿。

大地が鳴動し、大気が荒れ狂う。

古よりこの世界で【神】と崇められてきた存在。

思わず息を飲むキャロ。

(……………ヴォルテールと同等……………ううん、それ以上)

ヴォルテールとは、キャロの故郷アルザスを護る【真竜】クラスの竜である。

その力は人間の魔導師に換算できない程に強大……………例外もあるが……………なのだ。

優れた召喚術師であるキャロだったが、任意でのヴォルテールの召喚はまだ不安定なため出来ない。

「……………いきます！」

S i d e ・ ス バ ル

「では一番から順番に訓練用のデバイスを選択。ミッド式は片手杖か長杖。近代ベルカ式はポールスピアのみだ」

過去の私と会ったことがあるらしい、ティアナ・ランスターさんと相部屋になったわたし。

あの地獄のような火災から救ってくれた『あの人』みたいに人を助けたい。そう考えて選んだこの道……………

わたしは夢への第一歩を踏み出したんだ！

……………それにしてもランスターさん、なんかキレイなひとだなあ……………

「スバルだっけ、デバイスは？」

「あ、わたしベルカ式でちょっと変則だから……………」

鞆の中からデバイスを取り出す。

「持ち込みで自前なの！」

……………もしかして、変に思われるかな？

「ローラーブーツと……………リボルバーナックル！」

ローラーブーツはわたしが自分で組んで、リボルバーナックルは……………忘れてしまったけど、お母さんの形見……………のようなモノだつて父さんやギン姉は言つてたっけ。

「インテリシステムとかはないタイプだけど、去年からずっとこれで練習してるの」

「へえー結構な高級品……………格闘型……………前衛なんだ」

「うん！ ランスターさんは？」

「……なんか私だけ名前で呼んでるし、スバルも私のことはティアナでいいわよ」

「え、ホントに？ それじゃあ……ティアナは？」

ランスターさん……ティアナは鞆の中からケースを取り出して、開いた。

中には二挺の拳銃……？のようなデバイスが入ってる。カッコいい。アクション映画とかでしか見たことなかったけど、こんなふうになってるんだ！

「あたしも自前。ミッド式だけどカートリッジシステム付き。ちよつと問題があつてたまにしか使わないけどね。ほかに自作持ち込みはないみたいだし、変則同士で組まされたんでしょうね」

「わあ……銃型！ 珍しいね。かっこいい！」

「……」

ん？ なんかわたしを見てる？

「あ、え……………」

「いや、カッコいいって言われたことは今までなかったから、反応が新鮮で…………… やっぱり、スバルみたいな反応が普通なのよね？ …………… まあいいわ、並びましょ」

「う、うん……………」

…………… あれ、なんかティアナの目に涙？ が光ったような？
首から下げている、『あの人』がわたしに残してくれた小粒のルビ
ーに服の上から触る。

なんだか力が湧いてくるような気がするんだ。
さて、訓練に行こつと。

「次！ Bグループ。 ラン&シフト！」

うひゃー、みんな頑張ってるな！。

「障害を突破してフラッグの位置で陣形展開。 わかってるよね？」

「うんっ」

地面から壁みたいなのがいっぱい突き出でて、その向こうにカラーコーンがある。 彼処まで行けばいいんだよね？
よし、魔力全開だ。

「前衛なんでしょ？ フォローするから先行して」

「うん！」

「32・・・セット」

魔力をローラーブーツにこめて……………っど。

「ゴー！」

「おおおおっ」

フラッグまで壁を避けながら全速前進！

「フラッグポイント確保ッ！」

「よっと、陣形展開完了！」

突き出た壁の上を足場にして、ティアナもわたしのすぐあとから背後に着地。

うん！ 息ピッタ……

「32！ 馬鹿者なにをやってる！ 安全確認違反！ 視野狭窄！ それと、壁の上を跳躍しながら進むなど、常識はずれも良いところだ！ 腕立て三十回ッ！」

……あれ？

S i d e ・ ティアナ

「常識はずれも良いところだ！ 腕立て三十回ッ！」

じよ、常識・・・はずれ？

常識はずれ〓常識がない〓ルイズさんたち・・・

「は、はは、あははは・・・私、常識はずれ・・・」

いや、自分でもちよつとそうなのかな？って思ってたけど、直に言われるとかなり心にダメージが・・・

所詮、血塗られた道か・・・ルイズさんに弟子入りした時点でこうなることは明白だったんだ・・・ははは。

いや、でも陣形展開は出来たんだし別にいいんじゃない・・・

「い、ごめん・・・わたしが安全確認ぜんぜん出来てなかったから・・・」

腕立てをしながらスバルが謝ってきた。 けど、私も人のことを
言えないなー

「あんたが謝ることじゃないわよ。 私もやっちゃったし、次から
気を付けよ」

「はいッ!」

・・・

「次は垂直飛越。 これは簡単でしょ？ 相手を押し上げて・
・・・」

「上から引つ張ってもらおう!」

「そう、私から先にいくわね」

スバル、気合い入ってるな!。 さっきのダッシュも中々だった
し、才能あるわね。 環境によっては化けるかも・・・・

「届かないとぶつかって痛いから、しっかり勢いつけて、上まで飛
ばせてよ」

「うんっ!」

「いち にーの・・・」

おお、すごい力込めてる？

「さんっ!」

「ぬおっ!?!」

高さ三メートル、厚さ五十センチぐらいの壁を越える筈が、上空十五メートルは飛んでるわね。 まったくなんて馬鹿力・・・ まあ、問題はないかな。

空中で体勢を整える。

くるくる回転する視界の中で五十センチの足場目掛けて着地。 膝

のバネを上手く使って衝撃を殺す・・・
ふう、危ない危ない。

「はい、スバル。 引っ張り上げるから手を掴ん・・・」
32ッ
訓練中断! 一度引っ込めッ!」
・・・なにゆえ?」

「は、はいっー!」

Side・アウト

とある管理外世界・雪山深奥部

「はあ、はあ、はあ……フリード!」

ブラストレイ!!!!

「G A A A A A A ツ」

フリードの口に集束し、放たれる灼熱の砲撃。
それに合わせるように、白き雪神もとてつもない魔力を秘めた白銀の閃光を放った。

正面からぶつかり合う砲撃と砲撃。
拮抗は一瞬。

すぐさま力負けしたキャロとフリードは白銀の閃光に呑み込まれてしまふ。

「きゃあああっ!?!」

「キユクーツ!?!」

深く積もった雪を掻き分けるように叩き付けられ、キャロはボロボロ、フリードも小さな姿に戻ってしまった。

「くっ……はっ……はっ……」

『なかなか健闘したな。よかるう、ソナタに力を貸してやる』

「……え? でも、わたしはアナタに勝っていませんよ?」

『我は力を見せてみると言ったただけだ。そして、ソナタは我を従えるに足る素質、そして意思を持っていると我は感じた』

「……分かりました。ありがとうございます、白き雪の神様」

『我はそんな名ではない。我が名はウカムルパス、白き雪神の代弁者だ。好きに呼ぶがいい』

S i d e ・ ティアナ

「訓練初日から反省清掃……油断するんじゃないわ」

ははは、常識がないだってさ、そんなこと言われてもね？

「あ、あのホントにごめん……」

「謝らないで、確かにあなたに原因はあったかも知れないけど、私にもあるんだからさ」

「掃除が終わったらまた訓練の続きだから。あたし、もっとちゃんとやるから…… ティアナに迷惑かけないように!」

……それは違うんじゃないの？

「あのね、気持ちひとつでちゃんとやれるんなら苦労しないっての。あんたは自分の力を上手く制御出来てない、そこら辺をきっちりしなさい!」

「……うん」

「ま、私も付き合ってるわよ、当面のパートナーだし……遊び半分で冷やかに来たんじゃないんだっただらね」

頂垂れていたスバルが顔を上げた。その瞳には何かを決意している者特有の気迫……これは伸びる。そう感じた。

「あ、あたし、遊び半分なんかじゃない!」

「……結果で表してよね。掃除が済んだら反省の旨を教官に伝えて訓練復帰よ」

「あ……うん……あたし掃除用具取ってくるっ！す
ぐ戻ってくるから！」

ふう、発破かけてみたけど、必要なかったかな？

2 2 決意

S i d e ・ スバル

前略…… お父さん、ギンガお姉ちゃんへ。
あたしが陸士訓練校に入校してからもう2ヶ月。

「そう！ 落ち着いてルート守って！」

「うん！」

仮コンビでルームメイトのティアナさんは……

「ポジションキープ！ そのままよ！」

「うん！」

たまに変な時もあるけど、朝の自主練に付き合ってくれたり、いろいろ教えてくれたりします。

・・・

「これで来月分までの予習終了！ それなりに自分の力を制御出来るようになってきたわね」

「えへへ・・・ごめんね、要領悪くって・・・」

ジュースをティアナに渡す。　ちなみにこれはわたしのおごりだ。それにしても・・・

「あれだけ動いたのに、息切れしないなんてティアナはすごいね！」

ホントにすごい。　ローラーブーツを使っているわたしと同じくらい動き回ったのに、軽く汗をかいただけみたいだ。

「は、はは・・・　まあ、ちょっとばかり鍛えてるだけよ・・・
・・・　ちょっとね」

缶ジュースに口をつけながら笑うティアナだけど・・・どことなく目が泳いでるのは何でかな？
つと、もつこんな時間だ。　急がないとシャワーが混んじゃう！

管理局員、ましてや魔導師採用や武装隊入りを目指すような人たちは、いろんな理由や思いを持っていて、あたしもやっぱり夢と憧れと目指していることがある。だから、あたしの隣にいるひとつ年上のこのキレイな子は、どんな思いがあるのかなーとか、ちょっと聞きたいんだけど、ときたま見せる暗い瞳がそれを妨げる。なんと言うか、ある程度まではすぐに仲良くなれるけど、一定以上は自分の心に人を近づけさせないと言うか……あたしにも『あの』ことがあるし、人のことは言えないんだろうけど……

夜、寮の一階ロビーにある大きなモニターの前に人だかりを見つけた。
いったいなんだろう？

「これが本日までの訓練成果発表だ。教官判断の総合成績だが、各自参考にするように！」

ふえー、そんなのがあるんだ。

そうだ、ティアナと一緒に見てみよ！

部屋に居るのかな？ この時間帯になると、いつもどっかに行っちゃうんだよね。

.....

部屋に戻ってみたけど、ティアナは居なかった。

「うーん、どこに居るんだろ？」

今はだいたい午後八時ぐらい。

訓練が終わって夕飯を食べ終わると、いつの間にか居なくなって消灯時間の十時半頃に帰ってくるんだ。

今までにも、何処に行っていたのか聞いたことはあるんだけど、はぐらかされちゃうし.....

「…………野外訓練場……かな？」

ありえる。訓練でティアナが息を乱しているところをわたしは見たことがない。物足りなくて、夜に一人で訓練してたりして・

……

うん、とにかく行ってみよう。

おぼろげに輝く寮の光で、足下に自分の影が伸びるのを眺めながら、わたしは訓練場への道を歩いていった。

なんとなく訓練用のズボンシャツに着替えてきちゃった。

もし、ティアナが居なくても、自主練していこうかな。

そうこう考えているうちに、訓練場に到着。

「…………あらためて見ると本当に広いや」

野外訓練場。

芝生が敷地の半分ほどを覆っていて、残りは砂の

丘陵、岩石地帯、荒野、木々が生い茂る森。 いろんな環境を備えた特殊仕様になっている。

雨を防ぐ屋根とかはないけど、その時は雨天時を想定した訓練になるだけだ。

そんな敷地が昼の喧騒とは違って変わってひっそりと暗闇の向こうまで続いている。

もちろん人影なんかなくて……

「……ん？」

今、なにかが光ったような…… 普通の人なら見逃してしまっただろうけど、わたしはちょっと普通じゃない。 訓練場の奥

の方、木々が立ち並ぶ森のエリアで、断続的に光が瞬いているのを見つけた。

たぶん魔力光だと思う。

なんとなく気付かれないように静かに光のところまで進んでいく。

木の陰からこっそり顔を覗かせて……

「……っ！」

息を飲んだ。

いつもとは違ったデザインの銃型デバイス。そこに魔力で形成された銃剣を展開し、漆黒の空間を切り裂いていく。 頭の中で、仮想の敵と闘っているのか、目で追えないほどの速さで身体をさばき、いつもどこかぎこちなく作っている魔力弾とは違う、とても小さく、傍目から見ても物凄く集束されているのが分かる魔力弾を放

つティアナがいた。

その光景にわたしはしばし目を奪われた。

ティアナの銃剣や魔力弾の技術にじゃない。どこまでも真剣に、ただ黙々と二挺拳銃を振るう・・・そんな、直向きさにだ。

ティアナがあの実力をつけるには、きっと途方もない努力があったのだろう。

目の前の、あの訓練を見ていればそれぐらい痛いほど分かる。

ふと、ティアナが動きを止めた。

「はっはっはっ・・・・・・・・・・ダメ、こんなじゃ全然ダメだ・・・」

滝のように流れ出る汗を拭いもしないで、ティアナは自分を責めるように言った。

なにがダメなんだろう？

今の動きを見れば、この訓練校の中で、一番強いかも知れないし、教官にも勝てるかも知れないのに・・・

「こんなじゃ、何時まで経っても・・・・・・・・」

・・・・あぁ、分かっちゃった。わたしが『あの人』に、あの何処か貴い笑顔に憧れているように、ティアナにもナニか絶対に成し遂げたいことがあるんだ・・・

それじゃあ、今のわたしがここから出て行って、ティアナの訓練に付き合うことは出来ない。きっと、ううん、絶対に邪魔になるもん。

「……わたしも頑張らないと」

訓練の成績なんか気にしないし関係ない。

ティアナのパートナーとして、恥じないぐらいの実力をつけなくちゃ！

「よし、そうと決まれば特訓だ」

小声でそう呟き、わたしはその場を後にした。

2 3 二人一組（前書き）

二連続投稿。

次回からは一話ずつになると思います。

それではごじや。

2 3 二人一組

「昨日の訓練終了時にも言ったが、本日十四時より二人一組の模擬集団戦を行う！」

野外訓練場に、教官の怒号めいた声が響き渡った。

「各自、それまでに対戦相手と対戦場を確認。それを終えた組から十四時まで休憩とする」

芝生のエリアに集められた百人以上の訓練生たち。そのなかにティアナとスバルは居た。

「うー、模擬戦かゝ楽しみだね！」

「はいはい、分かったから落ち着きなさいって」

S i d e ・ ティアナ

私、ティアナ・ランスターが陸士訓練校に入校してはや三ヶ月。

訓練は……まあ順調だ。　　急ぎ足で基本と応用を詰め込んでいく訓練。　　ミッドとベルカで、個別でのトレーニングも増えてきた最近、その成果を確認するために、今日は二人一組での集団戦だ。

「……………あれ？」

対戦相手がモニターに記載されてない。

故障？　それとも教官側の手違いだろうか？

「あれ、わたしたちの名前が載ってないね？」

スバルも不思議そうに首を傾げている。

ん、まさか私たちの組が余りになっちゃったとか……かな？

「32番、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ！　こっちに
来い」

「はいっ」

周りの訓練生を掻き分けて、教官が近づいてきた。

「お前たちの対戦相手なんだが……学長であるフアーン・コラード三佐が受け持つことになった」

……！

「ええっ！？ な、なんですか」

え？ なぜ？ なんで訓練生にすぎない私たちの模擬戦相手が学長に！？

「あー、この前の訓練成績でお前たち一位だっただろ？ 毎年あれで一位を取ったペアの相手は教官の誰かがやることになってるんだが、今年はコラード三佐が立候補なされてな」

……

「・・・スバル」

「なに、ティアナ」

「あなた、一位だったの知ってた？」

「あー、その・・・ごめん見てなかった」

「いや、私も知らなかったんだけどね・・・」

教官に連れられたのは、校舎内の室内訓練場だった。

その中央に位置する、スケートリンクみたいな楕円形のフィールド。そこにコラード三佐は立っていた。

一見、人の良いお婆ちゃんだが、私の感覚は『彼処に立つ者は強い』と告げていた。

魔導師ランクはAAらしいが、何年か前にAAAランク二人を相手に勝利したと言う噂がある。

・・・おもしろい。

【咸卦法】なし、異常圧縮の魔力弾なし。 付け焼き刃で最近やつとまともになってきた誘導弾と体捌きだけで、どこまで戦えるか試すいい機会だ。

「あと二分ほどで開始の笛が鳴る。 それと同時に試合開始だ」

フィールドに入る。

「今日はよろしくお願いします！」

「はい、よろしく。良い試合にしましょうね」

三佐はにっこりと笑って返事を返してきた。

「……どうしようか、ティア」

「ちょっと、なによその呼び名は？」

「んー、こっちの方が親しみやすい？」

「……まあいいわ。そうね、あんたが前衛、私が後衛のオーソ
ドックス。あとは臨機応変に行きましょう」

「オツケー」

スバルの後ろに少し下がる。

実際、三佐がどんな攻撃を仕掛けてくるのか予想がつかないから厄介。
ルイズさんたちのレベルならいざ知らず、私たちのレベルだと情報はとても大事だ。
いろいろ考えているうちに、時間になり開始の笛の音が天井のスピーカーから響き渡った。

「スバル！」

「うんっ！」

ローラーブーツの加速で、スバルは一直線に三佐の元へ。
その動きはなかなか速い。入校当初と比べ物にならないくらいだ。

が、いくら速いと言っても三佐がそのまま近づかれるのを見ている訳もなく……………

「良い動きね。でも……………」

「ツバインド!?!」

上手い……………いつ仕掛けたのか分からなかった。

同時に放たれる魔力弾。

その数、五。

「くっ、間に合え！」

魔力を圧縮し過ぎない程度に集束し……実際にこれかなり私にとってムズい……放つ。

『スバル、バインドブレイク早くっ！』

『うんっ！』

なんとか飛んでくる魔力弾を相殺。

しかし、ふと違和感を感じた。　　なんで私の魔力弾で三佐の攻撃を凌げているんだろう？

付け焼き刃がここまで通用する相手じゃないはず……っ！
上！？

「スバル、回避ッ！」

バインドを破ったスバルの頭上にいつの間にか魔法陣が描かれていた。
あれは……

フォールスマツシャー

・・・遠隔砲撃魔法！？
まずい。

スバルも咄嗟に気付いたのか、身体を投げ出して、地面を転がるが・
・余波に吹き飛ばされて、フィールドを覆う防護シールドに叩き
つけられてしまった。

『ごめん、ティア。あとはよろしく・・・』

気絶はしてなさそうだけど、戦闘は無理か・・・

「・・・・・・・・くっ」

どうするか。

私の射撃魔法じゃ三佐に通じないだろうし・・・
しょうがない、使いたくなかったけど、手札を一枚こころ辺で切る
かな。

「はあああっ」

魔力弾を撃ちながら三佐に向かって走る。

そして、ある程度まで近づいたら跳び蹴りを放つ。

もちろん、そんな正直な技は三佐に通じない。
射撃魔法が放たれ……すり抜けた。

「なっ」

つまり、洋菓子戦争の時にルイズさんにやったことの応用だ。
自分に迷彩を掛けて、幻影に攻撃の振りをさせた。

「もらった!」

魔力弾を周囲に展開し……

クロスファイヤー……

「少し驚いたわよ。なかなか良い筋をしてるわね」

頭上に魔力反応!?

さつきスバルに放った魔法陣が、いまだに展開されているのに気付いた。

なるほど、一度攻撃をした魔法陣を維持することで、相手の意識の外から撃つてことか。この人、本当に戦い方が上手い。

……やば、これは回避が間にあわ……

S i d e ・ ア ウ ト

「二人とも、とても良い動きだったわ。この調子で訓練に励んで、経験を積んでいってちょうだいね」

「はい！ありがとうございます！」

試合終了後、ティアナとスバルの二人にねぎらいの声をかけてロード三佐は去っていった。

「うー・・・惜しかったねティア！」

防護シールドに叩き付けられてからあまり時間もたっていないのに、元気いっばいに声を出すスバル。
そんなスバルのため息混じりにティアナは返した。

「は、分かってないわね？ コラード三佐、全然本気なんて出してなかったわよ」

「そうなの？・・・ううん、それでもティアは凄かったよ！わたし、ティアが幻影魔法なんか使えたなんて知らなかった」

「・・・まあ、ちょっとかじってるだけよ。『本物』の実力者には通用しないと思うわ。それにしても、あんたもかなり動きが良くなってたじゃない」

「ティアが教えてくれたからだよ。訓練校の訓練じゃなかなか勉強出来ない、実践的なことも教えてくれたしさ！でも、まだまだティアが夜中にやってた訓練には及ばない　　ッ」

しまった、と口に手を当てるスバルだったがもう遅い。

知られなくなかった事柄だったのだと気付いたのは、真正面のティアナが悲しみとも怒りともつかない激情をその双眸に灯したからだ。唇を噛み締め、うつむいたままスバルに背を向けるティアナ。

「あ、あの・・・ティア」

「来ないでっ！」

着いていこうと足を動かしたスバルは、ティアナの張り裂けそうな声に止められてしまう。

何処か焦ったような、イラつきが混じった声だった。

「……………今日の訓練は終わったわ。もう、休むわね」

「ふー、今日の自主練終了っ」と

疲れもあいまって、スバルは自室のベッドに倒れ込んだ。

時刻は既に十一時をまわっている。

なのに、ティアナはまだ帰ってきていなかった。空いているベツトを眺めるスバル。

「…………ティアに悪いことしちゃったかな…………」

ティアナの夜の訓練を覗き見たこと。訓練生とは思えない程に、

熟練した体術。そして凄まじいとしか言えない圧縮魔力弾。

人にはそれぞれ一つや二つは触れて欲しくない事柄があるものだ。

ティアナにとって、夜中の訓練はその一つだったのだろう。

(…………でも、別に訓練場は立ち入り自由だし、夜だからって誰にも見つからないって決まってる訳じゃないんだから…………いや、でも覗き見たのはいけないかったかな。見られなくなかったみたいだし、あの時わたしが……………)

「ああもうっ！ 考えるの止めっ！ キチンと謝ってこよ。誰に

でも知られたくない事ってあるんだし……わたしにも……
「」

顔をブンブンとスイングさせ、スバルは立ち上る。

そして部屋から飛び出し、森のエリアへと全速力で向かったのだった。

夜空に輝く星光を雲が覆い隠すなか、スバルは訓練場への道を急ぎ足で進んでいた。

「一雨くるかな？」

今夜は通り雨がどうたらこうたらと、朝、食堂にあるテレビの天気予報で言っていたなとスバルは思いながら、野外訓練場の暗い芝生、そして森のエリアを先へ先へと進んで行く。

……と、奥に瞬くオレンジの魔力光を見つけた。

オレンジ色の頭髪をツインテールにまとめ、凜とした雰囲気少女が一心不乱に双銃を振り、体を捌き、動きまわっている。

銃から伸びた銃剣が夜の闇に斬撃の跡を刻み付けるかのように、虚空を切る様は流麗で、ある種の芸術と言っても過言ではない。気づかれないように木陰に隠れるスバル。

謝ろうと意気込んでいた元気は、いつのまにか何処かへ行ってしまった。そんなスバルの気配に気がついたのか、ティアナが手を止める。

「……………居るんでしょ。出てきなさい」

心臓の鼓動が早まるのを感じるスバル。

（そつだ、謝らなくちゃ）

そして、木陰から姿を表した。

ふと、スバルの気配を感じた。
殺氣を向けられていないにしても、こんな近くまで気づかないなんて、私もまだまだ未熟ね。

「……………居るんでしょ。出てきなさい」

そう言うと、やっぱりスバルが木陰から出てきた。
どこか緊張しているのが分かる。

……………模擬戦の後のアレよね？

なんで夜中の修業を覗かれたぐらいで怒っちゃったんだろ？ むしろ、気づかなかったことを恥じるべきだったのに……………いくら最近、強くなってる実感がなくて、ルイズさんの宿題の『咸卦法』のバリエーションが思い浮かばなかったからって、みっともなかったわ……………

「あ、あのティア。その……………ごめ」

「悪かったわね」

「……………え？」

「だ、だから、わたしが悪かったって言うてんの！ あんたに非は

ないわよ」

「……なんで声を張り上げてんだろ、わたし？

顔が熱い。

赤くなってるんじゃないでしょうね？

「え、いや、ううん、わたしの方が謝らなくちゃだよ。ごめん。秘密の特訓みただったのに、なんか覗き見ちゃったりして」

スバルが頭を下げる。

わたしが悪いって言ってるのに。

「「「「「「「」

無言で見つめ合う。

「「「「「「「ぶっ」

「「「「「「「くっ」

「「「「「「「あははははははっ」

些細なことでも、こんな夜中に見つめ合っているのがどこか面白くて、笑いが込み上げてきた。

「……ふう、そっか、それじゃお互い様ね」

「そうだね。　お互い様だね！　……あ、雨？」

ぽつり、ぽつりと水滴が笑い合っていた私たちの顔にかかった。徐々に雨足が強くなっていき、ザーザー強く降り始めた。

「……そう言えば今夜は雨だったっけ？」

「うん、天気予報だとすぐに止むらしいけどね」

うーん、雨に濡れて風邪引くのは嫌だしな

「……ちょっと雨宿りして行こっか」

「そだね」

大きな木の幹に二人で腰掛け、雨が弱まるのを待つことにした。しばらく続く無言。

地面を水滴が叩く音が心を落ち着ける。

同時に、あの墓地でのルイズさんとの出逢いを思い出させる。

哀しかった兄さんの死、悔しかった侮蔑の言葉。

そして、誓い。

兄さんの夢はわたしが……そして仇も……

「……」

……なんか、スバルと一緒に生活していて、こんなに静かに過ごしたことは今まで無かったかも知れない。

横に座る青い髪をした少女、スバル。

ここ三ヶ月、一緒にコンピを組んだ初めての同世代の女の子。

そう言えば詳しいことは何にも知らない。

ゆっくりと過ぎていく時間。

野外訓練場にある夜光灯の弱い光に照らされたスバルの表情は、なにかを思い出しているのか無表情だった。

「……言おうか迷ってたんだけど、やっぱり教えとくね。パートナーだしさ」

「……なにを？」

「わたしが特別救助隊を目指す理由」

・・・特別救助隊。
陸士隊の中では門戸が広い、災害担当の救助隊の中でもエリート中のエリートが配属される部隊だ。
執務官試験程ではないが、それに迫る難易度、そしてとんでもないハードワークで有名だ。

「へー、災害担当志望とは聞いてたけど、・・・・・・特別救助隊とは」

「まあ、あたしは人助けが出来る部署ならどこでもよくはあるんだけど・・・・・・」

そう言うスバルの瞳はどこか遠くを見ていた。

「去年の空港大火災って覚えてる？」

「ええ。未曾有の大災害だって、しばらくニュースがもちきりになつてたわよね」

「わたしね、その時から前の記憶が全部ないの。真っ白けっけ」

「・・・・・・・・」

「わたしさ、あの火事の真っ只中にいたの。空港の大分奥の方みたいで、助かる確率はほとんど零。周りには焼け焦げた人間だったモノと、『助けて』ってわたしに助けを求める声ばかりでさ。

そんな地獄みたいな場所に気が付いたら立ってたんだ。多分、前のわたしはそれに耐えられなくて居なくなっちゃったんだと思う」

かなりへヴィーな事を言っているんだけど、スバルの顔は無表情でしんしんと降り続ける雨の向こうを見ている。

「それで、歩き続けたんだ。死ぬのが怖かったんじゃないかって、どうしてわたしは生きてるんだろうって不思議に思って。力尽きたのか何かに躓いたのか・・・・・・・・倒れて仰向けになったら、ちょうど雨が降ってきて・・・・・・・・こんな雨だったよ」

「・・・・・・・・」

「でもそこまで、気が付けば大きな石像が倒れてくるのが見えて、わたしに向かってきてた。一步も動けないわたしは潰されるだけだったんだけど・・・・そうはならなかった。目に映らないぐらいの早さで、矢みたいなのが飛んできて、石像を吹き飛ばしたの。

凄かったよ、ぐるぐる渦巻いて雷とかも纏ってて・・・・・・・・男の人が駆け寄ってきて、その人のあの顔が何処か哀しそうだけど、

幸せそうで……憧れたのかな。あの人みたいに人を助けたいって思ったんだ」

……そっか。

初訓練の時に感じた決意はそう言うことか……記憶を無くして、それでも見つけた憧れを目指して進む……か。強いわね、スバル。その心の在り方が。

「は、はは、なんかごめんね。暗い話しになっちゃって」

「ううん、別に気にしないわよ……でも、いいの？ そんな大事な思い出をわたしに話して？」

「うん。パートナーだし、それになんとか隠し事してるみたいで嫌だったしさ」

「……そう」

雨足が弱くなってきた。

多分もう少しで止むだろうけど……なんだかスバルにだけ喋らせるのも悪いと言っかなんと言っか……

「……はあ、しょうがないか。あんただけに言わせるのは

気が引けるし、少しばかり私の話しでもしてあげるわよ」

「え？ 良いの？」

「何よ、その驚いた顔は？ 別にいいわよ。隠すことでもないしね」

そんなに秘密主義だと思われてたのかな？

……うん、スバルに私のことを話したことないわね。

「執務官志望って言うのは言ったわよね？」

「うん」

「わたしね、兄さんがいたの」

「……いた？」

「そ、『いた』 わたしが十歳ぐらいの時だったかな？ 両親は物心ついた時には居なかったし、唯一の肉親……だったかな。

兄さんも執務官を目指してて、身内贔屓じゃないけど、かなりのエリートだったわ。ある日家で帰りを待っていると、兄さんの同僚

の人が来て……違法魔導師追跡中の事故……だった
そうだね。可笑しい奴ねあんた、なに泣いてんのよ？ わたしは
あんたの話して一滴も涙なんて流さなかったわよ？」

「ぐすつ……泣いて……なんて……ない……汗だよ……
ひくつ……心の汗……」

……心の汗って。

「まあいいわ。それで、埋葬式で兄さんの上司に『無能』とかな
にやら言われて……兄さんの雪辱を晴らすためにも、妹のわた
しが執務官になってランスターは無能なんかじゃないって上司にギ
ヤフンと言ってやるうと思ってるさ。そして……」

「そして？」

「……ううん、それだけ。これが執務官を目指す理由よ。ど
う？ つまんなかったでしょ？」

そして……仇は必ず私がす。

「つまんないなんて、そんなことないよっ！ 少しだけティアと親
しくなれた気がするもんっ」

「はあ？ もうルームメイトで三ヶ月も過ごしてるのに、今更なに言ってるのよ？」

「だってティア、ある程度まではすぐに仲良くなれるけど、そこから先は踏み込ませないでしょ？」

「う．．．」

否定は出来ない．．．かな。

「ちょっとだけ、親密度がアップしたかな」

「ふ、ふんっ、あんたが知らないことなんてまだまだ山ほどあるわ
「よ」

「うん。 わたしにも、人に知られたくないこととか、いっぱいあるもん。 人と人が完全に分かり会えるなんて無理だよ。 家族でもね。 でも、寄り添うことは出来るでしょ？」

「．．．．．そうね。 って、なんか詩人みたいなこと言うわね」

「えへへ、そう?」

「ええ、脳筋のあなたにしてみればね」

ガクツとこけるスバル。

「も、もうティアってば、持ち上げてすぐ落とさないでよ」

「ふん。・・・ま、よろしくね、スバル」

「こちらこそよろしくね、ティア」

いつの間にか雨は止んでいた。

雨雲の切れ目から見えた二つの月と、輝く星たちが何時もよりキラキラ輝いて、わたしには見えた。

2 5 週末（前書き）

投稿です。

そろそろ無理になってきたので、週一の更新から不定期に戻したい
と思います。

それではごっご。

2 5 週末

早朝、まだ街が寝静まっている頃に、一人の老人が森の中の一本道を歩いていた。

その手には花束を抱えている。

森の道を抜けると、そこにあるのは広大な面積を誇る、時空管理局の共同墓地だ。ここには数多くの殉職者が眠っている。

突き立つ墓石。

無数とも思える墓石のひとつひとつに事件や事故を解決しようと奔走した管理局員が眠っているのだ。

その中でも、ひときは大きな墓石があった。

老人はその墓石へと、歩を進めていく。

すると先客が居たのか、二人の人影がすでに墓石の前に立っていた。

「遅くなってすまないな、ラルゴ、ミゼット」

立っていたのは老人と老女。

「私たちも今来たところよ、レオーネ」

墓石の前に立つ老いた三人。

この場に管理局員が居たならば卒倒しただろう。

こんな朝早く

に管理局の三英雄と呼ばれる

レオーネ・フィルス

ラルゴ・キール

ミゼット・クローベル

の三人が揃っているのだから。

レオーネは持つてきていた花束を墓石の前に置き、黙祷した。

「……もう、六十年になるんだな。アイツが死んで」

ラルゴが言った。

「そうね、私たちも年を取る筈だわ」

ミゼットは苦笑し、墓石を眺める。そこには……

『四英雄の一人、パーチエ・ペルマメントここに眠る』

……と、彫られていた。
目を瞑り黙祷していたレオーネは目を開けると、懐かしむように空を見上げる。

「ああ、あの戦争から、もう六十年経つんだな」

六十年前、それはミッドチルダで起きた反時空管理局勢力との最後の戦争が終結した年。そして……ミッドチルダを揺るがす程のテロ事件が起きた年……ラルゴが言う。

「次元航行エネルギー炉の制御不全……俺たちがもつとしっかりしていれば……」

「過ぎたことはどうしようもないわよ。今はあの予言をどうにか阻止しないと、パーチェ君に申し訳がたたないわ」

ミゼットの言葉にレオーネとラルゴが頷く。

「とは言え、私たちはもう若くない。八神はやて二等陸佐には頑張って貰わなければ……」

S i d e ・ テ イ ア ナ

「・・・グラウンド整備が入るから、週末の自主練が禁止なのは分かるわよ」

「うん」

「で、なんであたしはスバル、あんたに付き合わされてるのよ！断ったわよね！？ 思うに、あんたのその異様なワガママさと強引さだけは見習うべきところがあると思うわよっ」

「ほめられたー」

「ほめてないっ」

週末。 気付けばスバルに連れられて、ミッド東部十二区の『パ

「クラウド」にわたしは来ていた。

そう言えば、爆発があったらしいけど直ってるのかしらね？

……って、何か月も前の話しか。　確か入学試験の時にテレビでやってたし。

「あたしは挨拶だけしてすぐに帰るからね！　と言っか、午後から用があるから姉妹水入らずでゆっくりしてきなさいよ！」

「うん」

「で、お姉さんは何処に居るの？」

「えーとねー　あ！」

「スバル！」

前方から、スバルと同じ青い髪を腰ほどまで伸ばした女の人が、手を振りながらやって来た。

あの人かスバルのお姉さんかな？

走り出すスバル。

「ギン姉〜！」

「スバル」

そして、全身の勢いを乗せた右ストレートをスバルが放つ……！

「一ヶ月ぶり」 元気だったー？」

その拳を掌で受けとめ、続く左と右のコンビネーションを捌きながら会話していく。

……

「もちろん！ スバルも元気そうね」

「そうだギン姉、こちらティアナ・ランスターさん。コンビを組んでるんだ！」

「ど、どうも……」

「はじめまして、スバルがいつもお世話になってます」

……ま、まだ常識的な内かな。

ルイズさん達とか、わたしが長期依頼を終えて帰ったら、魔力弾（殺傷設定）や氷槍（殺傷設定）をわんさかプレゼントしてきて、さらには重力倍加で押し潰そうとしてきし……

ギンガさんと少し話をしたあと、アイスを食べて別れてきた。気さくな好い人だったな……いけないいけない、これからお仕事タイムだ。少しの気の緩みが死を招く……気を引き締めなきゃ！

「えーと、集合場所は……」

確かこの近くのオープンカフェだったはず……あ、いたいた。そこにはメイド服姿で席に座る、シエスタさんが居た。……と言うか、かなり目立ってる。

「久しぶりですね、シエスタさん。待たせちゃいましたか？」

「はい、久しぶりです。来たばかりですよ、ティアナさん。ルイズさん達は別件で忙しいので、今日はわたしだけです。早速、幾つか依頼を持ってきたので見てみますか？」

「あ、お願いします」

さてさて、今回はどんな依頼が来てるのかな？

『NO.1 【巡回】 内容・警備 場所・ミッドチルダ、クラナガン 危険度・C』

『NO.2 【巨龍討伐】 内容・竜の討伐 場所・第61番管理世界スプールス 危険度・AA』S』

『NO.3 【捕獲or殺害】 内容・隠れ家に居る殺し屋を捕獲または殺害 場所・第18管理外世界イスタ 危険度・AAA』

「この三つですね」

「.....」

うーん一番の警備は論外として、二番の竜退治か……でも、危険度AA〜Sってのが非常に気になるんだけど……ここは三番でいこうかな？

「三番でお願いします」

「三番ですね？ それじゃあ、行きましようか。ヘイズさんが待ってます」

こうして、わたしは第18管理外世界イスタへと、向かったのだ。た。

S i d e ・ ア ウ ト

鳴り響くアラート。

モニターに写し出される測定器の値はレッドラインをすでに越えて

いる。

「こ、これは・・・」

白衣の男、ジエイル・スカリエッティは事態を把握しようと躍起になって両の手を動かす。

すると背後のスライドドアから、彼が最高傑作と呼ぶ『ナンバーズ』の【？】ウーノが焦った様子で入ってきた。

「ドクター、いったい何が!？」

「・・・」

「ドクター？」

返事を返してこないスカリエッティにウーノは首をかしげるが、それも一瞬、駆け寄る。

「・・・ウーノ、すぐに奴等に連絡をしてくれ。まだ確実とは言えないが、本命が来てしまった可能性がある」

「っ!？ まさか、そんな・・・ まだ数年の猶予があつた筈です

！ 確かなんですか？」

「ああ、急激に数値が跳ね上がった。人為的なナニかが手を加えたんじゃないかと疑う程にね。 兎に角頼んだよ」

「分かりました」

場所は変わって第18管理外世界イスタ。

高温多湿の亜熱帯地方が多く存在する自然溢れる世界。 独自性

の高い野生動物や植物の宝庫であると同時に鉱山資源にも恵まれており、それらの輸出が主要産業であると知られる。 ティアナとシエスタがやって来たのは、そんな世界の廃村だ。

木造建築の家があちこち倒壊し、荒れ放題になっているなかを二人は歩いていく。

ティアナがデザートイーグルDの撃鉄を起こしながら言った。

「……シャドーでしたっけ、標的の名前は？」

「ええ、かなりの腕利きみたいだから気を付けてね。まあ、その辺はルイズさんに叩き込まれているでしょうけど」

「……骨の髄まで叩き込まれましたよ。……それじゃあわたしは村の東側から見ていきますから、シエスタさんは西からお願いします」

「了解です。ここから見える大きな家で落ち合いましょう。では……」

そう言うと、シエスタは音もなく消えた。

一人残されたティアナは半径二キロほどの廃村を東側から探索するため、足を急がせたのだった。

「……」

(この村は相手のテリトリー。おそらく私たちが来たことはもう気づかれてるから、いつ奇襲されてもおかしくない……)

警戒しながら建物の中を見回っていくティアナ。

と、十数軒目を探し終えたその時、頭上から微かな気配を感じた。

「っ！」

同時に感じる寒気、そして自身の間合いに高速で侵入してくるナニか。

咄嗟に頭を左へ……

ティアナの頭が一瞬前までであった場所を黒い糸が通り過ぎ、地面に突き刺さった。

頬に感じる生暖かい液体。そして、引き吊るような痛みで、ティアナは自分の頬が深く切り裂かれたことに気付く。

(危なっ！ 今の、反応が一瞬遅れてたら死んだわね、わたし)

そんな事を頭の角で感じながら、両手に構える二挺拳銃を屋根の上に構え、引き金を引く。

銃声が二度、三度と響く。

が、そこには誰も居なかった。

「……………」

(今、一瞬だけ黒いコート？の端が見えた。さっきの攻撃は紐・
・・・ううん、糸？ 魔力で編まれた糸を伸ばして突いてきたのか
な？)

冷や汗が遅れて出てくるのを感じながら、ティアナは冷静に分析していく。

今の一瞬の攻防でも、死ぬ可能性は十分にあつた訳だが、そこは毎度毎度修業で三途の川を渡る一步手前まで散歩するように気軽に行き、ルイズや紅き翼の面々に寄つて集つて鍛えられたティアナだ。

驚きはすれど、恐怖で身体が動かなくなると言つたことは皆無だった。

「シャドー、よね？ 貴方を捕まえるように依頼が来たわ！ おとなしく出てくるって言つんなら、ケガをせずにつ！？」

前後左右から襲い掛かつてくる魔力の糸を紙一重で回避するティアナ。

「ああ、そうですか！ ま、期待なんてしてなかつたわよ！」

糸による刺突だけでなく、巻き付かれて切断されないように注意し

ながら移動するティアナ。村の中心に建つ大きな家の屋根に黒いコートを着た男が立つのを見つめる。

先手必勝とカートリッジを使った圧縮魔力弾を放つ。

音速を凌駕する弾丸が男へ向かい、なんと真つ二つに両断された。疑問に思いながらも更に連射。

額、両肩、両手、両足を狙いすました射撃で撃ち抜こうとする。
が……

「えっ!？」

全ての魔力弾が男に当たる前に真つ二つにされてしまった。驚きながらもティアナは思考を止めない。

(……多分だけど、魔力の糸で切り裂いてる……普通の魔力弾なら細過ぎる糸に切り裂かれても、そのまま跳ぶんだろっけどわたしのは硬いからな。なら、これで)

【弾切れ知らずの無限武器庫】を発動し、バースト・バレット炸裂弾用の弾倉を複製召喚。リロードするティアナ。

たとえ切り裂かれても、それが爆発すればあるいは倒せないまでも隙を見せてくれるかも知れないと考えたのだろう。

男までの距離は五十メートル程。

狙いを定め引き金を引く。

バースト・バレット

驚異的なクイックドロワーで、一瞬にして全弾を撃ち尽くし、十四発の爆弾が跳んでいく。鳴り響く爆音。

バースト・バレット一発では半径二メートル程の空間に魔力ダメージを与える程度だが、それでも数を撃てば脅威だろう。もともとボロかった大きな家の柱や何やらが衝撃でへし折れ、崩壊していく。

「…………ま、廃村だし問題ないでしょ。右手に魔力…………」

合成、咸卦法！

倒しきれないとティアナは確信し、今のうちにと咸卦法を発動した。

瞬間、煙の中から魔力系が殺到してきた。四方八方からの取り囲むような斬線。逃げ場などどこにもない。

が、咸卦法を発動させたティアナに居合い弾の弾数制限はない。両脇のホルスターに銃を納めたかと思うと、次の瞬間にはティアナの周囲に星が瞬くかのような射撃の残光が煌めいた。

が、ティアナの脅威的なクイックドロワーをもってしても、処理が追いつかない。ティアナは回避のために動き続けながら、コート
の男目掛けて居合い弾をなんとか放つ。

しかし、動きが遅いからか、もしくは動く必要がないと考えたのか、男はその場を微動だに動かず、魔力系を複雑に絡み合わせ強固な防

壁とすることで防いだ。　ティアナの状態が違うことを見抜いたのか、射撃を警戒してまともに弾を受け止めめるのではなく防壁を傾けることによって滑らせていることから、抜け目のなさが感じられる。

（強い。まるでルイズさん達と戦ってるみたいだ。　いや、まだわたしが生きてるってことは、ルイズさん達よりも弱いんだろうけど、隙が見付けられないんだから同じだ・・・　いったいどうすれば・・・　って言うか、この人どう考えても『本物』のレベルだよな？）

魔力系に切り裂かれ、徐々に血に染まっていくティアナの服（黒のインナーに赤いコートなんだから外見からはあんまり分らないが）BJ以上の強度を持つ筈のティアナの仕事服を切り裂くのだから、凄まじい切れ味だ。

実戦。

殺しに来る本物の殺意。

ルイズとの修業でも味わえない背筋が凍るような寒気を感じるティアナだったが、その身体は恐怖に怯み震えるのではなく、不思議と滑らかで隙のない動きとなっていた。

精神が一点に集中し、洋菓子戦争の最後、本来不可能な距離での狙撃をしたときのような空気分子の一つ一つが読み取れるかのような万能感に近いものを感じていた。

ティアナは前に出た。

襲い掛かってくる魔力系を展開した銃剣で、居合い弾で捌いていく。右手で銃剣を振り回し、左手で居合い弾の雨を浴びせる。

あつという間に全身が切り刻まれ、擦り傷のような痛みにも包まれた。
二秒。

黒いコートの男が両手を素早く動かし、何かを編んでいく。

三秒。

ティアナが弾丸の生成を完了し、自分から十五メートル程のところ
に立つ男へ銃を両手で構える。

四秒。

男もティアナに向かって両手を突きだし、開いていた手を握った。

グレネード・バレット!!!

線糸術・貫銃

ティアナの銃弾は空気を切り裂き、男の魔力糸で編まれた巨大な計
五本の銃は霞むような速度でティアナに跳んだ。

ぶつかり合う銃弾と銃。

瞬間、音が消えた。

撒き散らされる衝撃と閃光。

その余波で、回りの家屋が倒壊していく。

ティアナそしてコートの男もその爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされ
た。

S i d e ・ テ イ ア ナ

ヤバい、身体に全然力が入らない。

血を流しすぎたのと、咸卦法を限界ギリギリまで使ったからだと思
うけど、このままだと殺られる。

あのコートの男はどうなったんだろ？

仰向けの身体をなんとか起こそうとするんだけど、ダメだ。

「な、なんのこれ・・・し・・・きー！！！」

気合いで立ち上がった。

「あ、ダメだ」

膝をついて、こんどはうつ伏せに倒れそうになったけど、手を着い
て身体をなんとか支える。

ヤバい、血が止まらない。

それにあの男はいつたい何処に・・・

「・・・お前、なかなかやるな」

「・・・どうしようか？」

目の前に居たけど。

黒いコートの男。

真っ黒な髪を無造作に短く刈った、中肉中背の男だ。

多分、二十代後半ぐらいで、アーチャーさんと同じか少し年上くらいだろう。

「・・・って、どうすればいいのよ!？」

咸卦法はもう使えないし、いや、たとえ使えてもそんな隙はないだろうし。

さらに反動で体力零に等しいし、とてもじゃないけど挽回は難しい。

「・・・」

死ぬ？

いや、まだだ。

最後の最後までわたしは諦めない!

「・・・親友の仇を討つために、この道に入った」

「・・・?」

何を言ってるんだろう?

「お前にはオレと同じニオイを感じた。は、ははは、これがその道を最後まで進んだ者の末路・・・だ」

男は魔力の糸を自分の首に巻き付け……

S i d e ・ ア ウ ト

「ごめんなさいね、ティアナさん。ルイズさんに死ぬ寸前まで手助けはダメだって言われてて……」

「いえ、ルイズさんの事ですからそんな感じだとは思いましたよ」

「……でも、まさか自害するなんて」

「……」

「あ、本当にごめんなさい！ 思い出させちゃったわね」

「いえ、大丈夫です。 経験がない訳じゃないですから」

（『その道を最後まで進んだ者の末路』・・・か、それでもわたしは・・・）

あの男の最期の言葉を思い出すティアナ。

「・・・それにしても何かあったんですかね？ ヘイズがこんなに遅れるなんて」

「そうね。 でもヘイズさんですよ？ 何かあったって、いったい何が・・・」

考え込むシエスタ。

予定時刻をすでに一時間はオーバーしている。だが、いったい何が？

（まさか、『あれ』ですかね？ でもこの考えが正しければ、ルイズさんが・・・ いえ、まだまだわたしでも対処出来るレベルだった筈です。 そんな筈は・・・）

「何か心当たりがあるんですか？」

「え、いや、考えすぎですね。 きっとヘイズさん、寄り道してる
んですよ」

2 6 規格外V S規格外(前書き)

2 連続投稿。

次回から第三章に入っていきます！

2 6 規格外VS規格外

S i d e ・ ? ? ? ?

封時結界。

それは通常空間から特定の空間を切り取り、時間信号をズラす結果魔法だ。

術者が許可した者が侵入する魔法を持つ者以外には結界内で起こっていることの認識や内部への侵入も出来ないため、魔法戦や訓練が周囲に被害を与えたり、目撃されたりしないように使われる事が多い。

『アラル港湾埠頭、廃棄倉庫区画にて、正体不明の広域結界を探知。陸士第125部隊に出動要請。繰り返す。アラル港湾埠頭、廃棄倉庫区画にて……』

突如出現した巨大な封時結界。

廃棄倉庫区画をまるごと覆ってしまう程の結界の外周部に二人の人影が見えた。

一人は紅いジャケット、黒のインナーと言いつつも格好をした青年、クー。

もう一人は黒いドレスのような服、そして青い髪をリボンで纏めた少女、レンだ。

ふたりは結界を気にしながらも、これからやって来るであろう管理局の部隊のことを考えていた。

「いくぞ、レン！」

「うん」

紅かる心　風を　纏いて　契り籠ん！！！！

ふたりが風に包まれたかと思うと、次の瞬間にはレンが風を纏った大剣となり、クーの右手に握られていた。

「……………でだ。 どうしたらいいと思うっ？」

『近づかせなければいいんだよね？ それなら……………』

「……………だよな。 よし！ 規模は違っけどやってみるか！」

合図は不用。

ふたりは示し合わせたかのように謳い始めた。

昨夜覚し真人に 何くれとも 触ればい かを棚んば

かち落えん!!!

良の鎧リジエクトアウト!!!

風がまるで鎧のようにクーを包み込む。

「はっ」

気合一閃。

瞬間、風の鎧が竜巻のように吹き荒れ巨大化し、直径にして五キロちかい封時結界をその上から包み込んだ。

この状態で封時結界の中に入ろうとしたものは生き物のように結界の外を覆う竜巻に吹き飛ばされるだろう。

「……これでよしと。あとはルイズ達に任せるしかないな」

『信じるしかないよ。 私たちは私たちはの役割を果たそ』

結界内部。

廃棄された倉庫が並び立つ港湾に、男女合わせて三人が立っていた。

「『セイバー』 セットアップ」

「『ランサー』 セットアップ」

光が三人のうち二人を包み、一瞬で弾けた。

すると、包まれた二人は先程までの普段着？から戦闘服に変わっていた。

短い白髪を刈り上げ、紅い聖骸布とその内に黒いアーマー状のBJを着て、鞆に入った西洋剣を握る男、アーチャーこと衛宮士郎。

黒い髪を腰まで伸ばし、紅い長袖の上着に黒のスカート、黒のニーソックスそして黒いBJの外套を着て、蒼い槍の調子を確める女、リン。

そんな二人を見て銀髪の女、ルイズは言った。

「へー、なかなか似合ってるじゃない。デバイスカー、わたしも今度使ってみようかしらねー」

「ふん、止めておけ。デバイスマスターが可哀想だ」

「まったくよ。あんたのバカみたいなトンでも魔力を受けきれないデバイスがそうあるもんですかっての」

「ま、そうでしょうね。でも私にはコイツがあるから別に要らないわね」

そう言ってルイズが手を翳すと、空間が歪み鞆に納まった野太刀と言っても間違いでないだろう日本刀が現れ、手に跳んできた。

「……さて、そろそろ時間ね。リン、それにアーチャー、作戦はさっき言った通り？」

「ええ、私たちが先に殺り合って、手に追えないようなら交代するわ」

「……ま、そう言うことだ。君の分まで出番を残せるからだが、その時はすまんな」

そう言っで武器を構える二人。

二人が視線を向ける先は同じ場所。

何ら変わったところのない、何十と廃棄された倉庫のうちの一つの出入口。

画面越しに見ても分からない。この場にいる者のみが感じるこゝとが出来る違和感。

あそこにナニかが居る……いや、近づいて来ている？

それは唐突に始まった。

ある空間の一点を支点にガラスを割るような高い音が響き、漆黒の亀裂が走っていく。

めきめきと。ナニかが脈動するように、亀裂が向こう側から膨らんでいく。そんな光景を目の当たりにし、アーチャー……土

郎は西洋剣状態の『セイバー』をブレスレットの待機状態に戻し、自身の魔術回路の撃鉄を上げた。

「……トレスオン 投影開始」

いつの間にか真紅の槍がその手に握られていた。

士郎はその……かつて自分の心臓を貫いた男の槍に魔力を込めていく。

一方、リンは槍を構えたままピクリとも動かない。

いや、分かるものが見れば、その身体に濃密な魔力が渦巻き、今か今かと爆発の時を待っていることに気付いただろう。

そして、亀裂が広がりを終えた次の瞬間、ベキリ、と、亀裂が一気に広がり、空間に穴が開いた。

ゴツツツ！！と。開いた穴から三人に向かって、槍のようなモノが無数に殺到した。

「ゴツツツ！！」「」

視界一面に広がる槍の面制圧。黒曜石を思わせる光沢を光らせ、音の壁を容易く凌駕する。

傍観する気だったルイズは自分にも襲い掛かってくる槍の群れを愛刀でなんとか捌く。数えるのが億劫になる程の槍群に真っ向か

ら挑み、身体に数ヶ所掠らせたのみなのは流石と言ったところか。

一方、リンと士郎。

二人は一瞬目を合わせ、頷きあった。
士郎を守るように前に出るリン。今か今かと爆発の時を待っていた魔力を解き放ち、

「はああああっ！！！」

【ランサー】を振り降ろした。
無論、ただの振り降ろしではない。魔力を込めた斬撃だ。
ただそれだけのあまりにも基本的な技だが、それ故にその威力と精度は極めて高い。しかも、リンは五大元素使い……五つの魔力変換資質を持っている。
斬撃は、かつて古代ベルカの聖王が纏っていたという七色の虹と化し、槍の群れを蹴散らした。

S i d e ・ アーチャー

襲い掛かってきた槍の群れをリンが薙ぎ払ってくれた。

今がチャンスだろう。

あの空間の穴から今まきに出てこようとしているナニか。それに向かって、俺は握る真紅の槍へ魔力を叩き込み、投擲の構えをとる。

この封時結界の四方では、ルイズの仲間が結界強化の為に陣を張っているのだ。全開でやっても問題ないだろう。

槍の壁が薙ぎ払われ、敵の姿が見えた瞬間を狙う。

穴から足が出て来て……………今だ！

「ゲイ……………」

突き穿つ

……………ボルク！」

死翔の槍！

渾身の力で投げる！

刹那のうちに魔槍は音速を超え、赤い閃光となった。空間の穴を削り取るかのように世界を軋ませ、着弾。

……………倉庫が余波だけで二三消し飛んだが、まあ問題はないだろう。

さて、敵はどうなったか……………ッ

S i d e ・ リ ン

士郎の投影した【ゲイボルク（突き穿つ死翔の槍）】が、穴から出てこようとしていたナニかに直撃した。

普通ならひとたまりもない。　　今までの奴等と同格程度なら消し炭も残っていないだろうけど……あの変態が言っていたことが確かなら、そう簡単に終わりはしないだろう。

もしかしたらまだ生きているかもしれない。

私は倒壊した倉庫の瓦礫を見る。

煙でしっかりと見透せないが……と、ルイズが楽しげに話しかけてきた。

「ふふっ、なかなか今回の相手は出来るみたいね」

「？　どつと言っ……ッ」

急に突風が吹き荒れ、煙が吹き飛ばされた。

そして見えてきたのは……

男か女か性別が曖昧な人型。身長は170前後だろうか？

黒い長髪を後ろで束ね、執事服？のような制服を着ている。こ

こまでなら、まあなんとか迷い込んできた一般人と言えなくもないけど……

…… 士郎が投擲した筈の紅い魔槍を片手に握っているのだ。

一般人の筈がない。

「……ハッ、なんて出鱈目」

因果を逆転させ、心臓に刺さった結果を生み出してから刺さる必殺の槍【ゲイボルク（突き穿つ死翔の槍）】を無傷で……いや、余波で所々傷ついてはいるが……受けきったのだろうか？

宝具レベルの呪いをはね除けるとかどんだけよまったく……

でも、本当に驚いたのはこの後だ。

男だか女だかよく分からない奴は、硝子玉みたいな瞳で私たちを見ると……

「排除リスト上位三名を発見。

損傷軽微。

排除開始」

……喋った。

男だか女だか、いや、子供か大人かすら……機械音声とすら思える声だが、喋ったのだ。

私たちは敵の正体に大体の見当をつけていた。だが、その考えだと彼処に立つ【アレ】が喋るわけがないのだ。

士郎が念話で私とルイズに話し掛けてきた。

『……………どう言うことだ？』

『私に聞いても分かるわけ無いでしょうが』

『ま、あれよ、とりあえず倒してから考えましょ。…………私たちは何処か思い違いをしたのかも知れないわ』

『……………』

『ねえ、二人で考えるのは良いけどさ。アレ、どうする？』

どうするって…………

あんな規格外の化物相手にガチンコするなんて割に合わなすぎですよ？

ここはもちろん…………

『ルイズ、頼んだ(ぞ)わよ』

規格外(化物)の相手には規格外(最強クラス)でしょ、やっぱり。見た感じ、士郎と私が二人で組んで全力で挑めばギリギリ…………

て感じかしらね？ 正確なところはやってみなくちゃ分からないけど。

ルイズが居るんだから無理に闘わなくても良いわよね？

ピクツと、敵が動き始めようとした瞬間・・・

壊れた幻想

握っていた槍が大爆発を起こした。

倒せはしないまでも、ダメージは喰らっているだろう。

あとはルイズに任せるのみだ。

S i d e ・ ア ウ ト

ゲイボルクの神秘を爆薬とした【壊れた幻想】が辺り一面に衝撃波を撒き散らすなか、ルイズと『それ』は三十メートルの距離を空けて対峙した。

『それ』は半身が吹き飛び所々に傷を負っていたが、数秒の後には復元と違っていい速度で服ごと再生していた。

刹那。

ルイズの眼前に迫る拳。 右のストレートが光の線になるが、ルイズは首を傾げるのみで紙一重で回避した。

爆音。

拳圧のみで廃棄倉庫の一つが倒壊した。

続く左ストレートが放たれる100分の1秒の間に振るわれる大太刀。

物理法則なんぞ関係ないと言わんばかりに走った斬線は、一瞬と言えぬ間に千を超えた。

バックステップで回避を試みた『それ』だったが間に合わず、腕一本を粉微塵にされる。

Sランク魔導師の張るシールド並みの障壁がまるで紙のようだ。

再び二十メートルの間を空け対峙する二人。片腕を飛ばされたにもかかわらず、『それ』の瞳はガラス玉のように、いつさいの感情を表さない。

すでに腕を再生し、ルイズの弱点を探るようにギョロリと動いている。

黒い長髪を振るわせ、まるで機械のような動きで今度は右手を空に突き上げた。

描かれる魔法陣。

それも一つや二つではない。 空一面を覆い尽くすように数百、数千と描き出されていく。

その光景を見て、ルイズは阻止しようと動くのではなく……

「……………ふっ」

微かに笑みをうかべた。
瞬間、

絶望宿す破滅の魔槍

黒曜石の槍が集中豪雨のごとくルイズへ襲い掛かった。
音を置き去りに向かって来る一つ一つが1〜2メートル程の槍だ。
その槍の雨に向けてルイズも手を翳す。

術式解放・魔法の射手・光と闇の11111矢

放たれる魔弾。

ぶつかり合い相殺していくなかをルイズと『それ』は駆け抜けていき、上空で激突した。

片方はルイズの愛刀。 もう片方はいつの間にか『それ』に握られていた黒曜石の大剣だ。

爆弾が爆発した・・・と、錯覚する程の衝撃波が無尽蔵に撒き散らされ、倉庫の瓦礫が吹き飛んでいく。

飛行魔法を使い、空中戦特有の360度全方向からの応酬が始まる。ゴツゴツゴツゴツと、大剣と大太刀がぶつかり合っているとは考えられない轟音と衝撃が撒き散らされる。

「はあああああっ!」

「……………」

ドゴツと、一際大きな轟音が響いたと思うと、二人はすでに構えを終えていた。

黒龍一閃！！

希望刈り取る失意の邪剣

二人の斬撃から放たれる漆黒の柱。

巨大な爪痕を残しながら、直径約五キロの結界を両断するかのよう
に、境界面へ斬撃が直撃した。

揺らぐ結界。

四方をエヴァ・アル・タバサ・シルフィードが陣を敷き、結界強化
に励んでいなければ今ので容易く引き裂かれ、現実のアラル港湾埠
頭に被害が出ていただろう。

交わることなく互いの背後に消えていった斬撃。 ルイズは数本の
髪を切られるだけにすぎなかったが、『それ』は片腕を切り飛ばさ
れていた。

しかし、切断面から血の一滴すら溢れない。

その事を気にながらも、ルイズは切り飛ばされたことによつて
出来た『それ』の僅かな・・・100分の1秒にも満たない僅かな
隙に強烈な回し蹴りを叩き込んだ。

腹部に決まり、吹き飛ぶ『それ』。

ガリガリとコンクリートの

地面を抉り取り着地。 二本の抉られた線が五十メートルに渡って
出来上がった。

よく見るとボロボロに切り刻まれ片腕すら無くしている『それ』と、
目立った傷の一つも負っていないルイズ。

これが力量の差なのだろうか？ しかし、数秒の後にはまたもや服
ごと再生する『それ』。

「……………あんだ、身体の中に核があるわね？ それを壊さない
限り死なないってやつかしら？」

「……………」

ルイズの問いへの返答は大剣での斬撃だった。

五十メートルの距離を刹那のうちに詰める、その速度は神速。

振り下ろす大剣は、受ければ死を免れないであろう剛力。

しかし、ルイズはその場から動かなかった。

ズンツ！という巨大な物が落下したような音と共に撒き散らされる
衝撃。

その場から動かなかったルイズは、死を免れない筈だった……………

はじめて『それ』が目を見開き驚いたように、何が起きているのか
を解析するように、ガラス玉のような瞳を動かす。

「……………!？」

「……軽いわね。信念も何も感じられない……ったく、あなたの親玉はこの程度で私が倒せるとでも思ったの？」

……愛刀を地面に突き立て、ルイズは右手一本で大剣を止めていた。

片手白刃取り

飛び退こうとする『それ』だったが、何故かピクリとも大剣が動かない。

「……」

ならばと放たれた右ストレート。
神速と剛力を併せ持つ拳は……

「軽い。そんな見せ掛けだけで、中身のない拳が……」

あっさりと、左の掌に止められ、掴まれる。

「……!?!?」

バキッと、大剣をその握力だけで握り潰すルイズ。

「このレベルで通じると……」

震脚。

地面がひび割れ、砲弾でも着弾したような爆音が響く。腰から胸、胸から肩へ、肩から肘、そして肘から拳へと、莫大なまでに増幅され練り上げられた勁（全身の一致でまったくロスのない力）と魔力、そして気が『それ』の胸に叩き込まれた。

「………思ったのかしら？」

まるで風に飛ばされるチリのように、『それ』は吹き飛ばされたのだった。

S i d e ・ ル イ ズ

地面を百メートルぐらい抉って、ようやく仰向けに倒れて止まった敵。

手応えはあった。

歩み寄っていく。

すると、『それ』は何かを喋りだした。

「・・・k・きよ無の・担い手・・・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール・・・お前が居るべき・世界・・・は・・・ここでは・・・ない。 在るべき世界へ・・・戻れ」

「ふんっ、ヴァリエールの名はとっくの昔に捨てたわ。 それに『在るべき世界』ですって？ はっ、私が居る場所が私の居るべき世界よ、笑わせんじやないわ」

愛刀で核を突き刺す。

体内だろうと力が集中しているんだから、私レベルなら素で何処にあるのか見つけるのは容易い。

核の消滅と共に『それ』は砂になって消え去った。

「・・・にしても、いったい何処から来たんだか？

生け捕りにするべきだったかしらね？

でも、流石にそこまで生半可な相手じゃなかったし・・・うん、あの変態ドクターに任せるとしますかね」

2 7 動き出す物語

どことも知れぬ研究施設の一室で、白衣を着た男がモニターヘデータを打ち込み忙しなく動いていた。

「……まったく、何なんだねいつたい。ようやく『アレ』の完成まであと半分という所で……」

デスクの上に積み上げられた書類、書類、書類、書類書類書類、書類書類、書類書類、書類書類……それらには、次元の穴がいったい何処に繋がっていたのか？など、様々な疑問、資料、グラフ、データ等々が記述されている。

なぜ紙媒体を使用しているのかは謎だ。

「くつくつくつくつ、良いだろう面白いじゃないか、私の研究を邪魔したいようだねくつくつ、ク・クク……ク、クククククククケケケケカカカカカカカカ……この私を誰だと思っているんだい！？ 私は『無限の欲望』ジェイ「ドクター、どうしたんですかそんなに取り乱して。ちよつと笑い方が怖いですよ」……ああ、ウーノ。いや、少しばかり徹夜が続いてね、いい加減限界みたいだ。仮眠室に居るから何かあれば起こしてくれたまえ」

「分かりました」

S i d e ・ テ イ ア ナ

もっと力が欲しい。

陸士訓練校の自室で、ふと思った。
もう真夜中、スバルの寝息が聞こえてくる。

「・・・痛ッ」

いかに優れた回復魔法でも、完治させるには時間がある。
『本物』クラスが相手だったから身体中ボロボロだ。
今回は

相手がその気だったら、私は今ここに居ない。
いや、シエスタさんが居たしギリギリ助かったかも知れないけど、
負けたのは確かだ………完敗だったな！

「……もつと力があれば………つて、なに言ってるのわたし
？」

『力は必ずかざした者自身に返ってくる。だから常に力と共に心を磨かなければならない……byタバサ』

そうそう、ここで良いこと言っただけで小さくガッツポーズしなければ決まってるだけだよタバサさん。

「……あの状態に意識して成れば」

そう、あの狙撃の時のような『超集中状態』とでも言うべき万能感を意識的に発動できればな

意識が一点に集中して迷いがなくなり、感じるのはただ『私』と『強敵』だけ………

うん！　なんか良く分からないけど、何かを掴んだ気がしてきた！
あの感覚をヒントに次の段階に進める……かな？

「………寝よ」

今日はもう疲れた・・・

S i d e ・ ア ウ ト

新暦0074年9月

管理世界61番「スプールス」

自然保護区画

管理局自然保護隊ベースキャンプ

「ふッ」

流れるように突き出される拳。

掌底が大気を裂く。

バシッと震脚が地面を叩き、僅かに凹んだ。

滞りなく続いた動きは、一際大きな震脚の音と共に突き出された拳で止まる。

「ふー……」

そんな演舞を舞っていたのはピンク色の頭髪、十歳前後の女の子だった。

深呼吸をして息を整える少女。
と、そこへやって来たのは……

「小娘、ネイトの奴が呼んでいたぞ。朝食の準備が出来たそうだ」

黒紫色をした、翼をはやしたトカゲ？だった。
大きさは子猫ほど、しかしハードでボイルドな声を発した辺り、ただの生物ではないだろう……

「あ、えっ、もうそんな時間ですかっ、アーマさんっ？」

「うむ」

アーマと呼ばれたトカゲ？が首を縦に振る。すると、少女は慌てて森の方を向くと、大きな声で何かを呼んだ。

「おーい、フリード〜。ごはんの時間だよ〜」

すると、アーマと同じぐらいの大きさをした白銀の飛竜……
の子供がやって来た。

「早く行くよ、フリード！ ネイトさんとクルーエルさんを待たせ
たら失礼だよ！」

「キユク〜！」

【紅き翼】のステータス（前書き）

なにかと忙しく、1ヶ月以上更新が滞ってしまいました…

今回はFate風のステータスと、本編2話を投稿します。

それではごっご。

【紅き翼】のステータス

E D C B A E X

ティアナ・ランスター

・主武装【デザートイーグルD】

・ステータス

筋力 C+(B+)

耐久 C(B)

敏捷 B(A)

魔力 C-(B-)

幸運 D(C)

()内は咸卦法時

・スキル

咸卦法 (B)

『気』と『魔力』を融合させることにより、身体能力・耐毒・耐熱・耐寒その他諸々を爆発的に強化する究極技法。アルデマニアート まだまだ練度が

足りない。

気の運用 〔B〕

瞬動・長距離瞬動術が使用可能だが、縮地のレベルには達していない。

射撃 〔A+〕

近・中・遠距離全ての間合いでの射撃を高いレベルで習得している。

ガン⇨カタ? 〔B+〕

二挺拳銃を用いた近接戦闘術。 もう少しで達人の域。

超圧縮 〔A++〕

魔力弾を極限まで集束・圧縮し、高い貫通力を持たせることが出来る。
このスキルが高いと、誘導弾などの習得が難しくなる。

ルイズ

・主武装【天上天下天地無双刀】

・ステータス

筋力 A+ (?)

耐久 A+ (?)

敏捷 A + (?)

魔力 A + + + (?)

幸運 E (?)

() 内は闇の魔法時

・スキル

虚無の魔法 [C -]

少しかじっただけ。 使えるのは『爆発』『解除』『世界扉』のみ。
詠唱が長いため、あまり使わないようだ。

擬態 [A]

肉体を変化させる。 ランクが高ければ高いほど長い時間継続出来る。

肉体再生 [A]

魔力を消費して、肉体を即座に回復させる。 頭か心臓を潰されると回復は難しい。

魔族化 [A + +]

肉体を魔の眷族へと変化させる。 全ステータスがワンランクアップ。

気合い〔EX〕

最強クラスと呼ばれる、ある種の化け物が持つ特殊スキル。あらゆる難行が『不可能なまま』『実現可能な出来事』になる。あら

気の運用〔A++〕

縮地を完璧にマスター。武器に纏わせ遠距離に放つことも自由自在。

気の鎧〔A〕

極限まで肉体に練り込まれた気は生半可な攻撃を無効化する。

ルイズ流戦闘術〔A+++〕

ルイズ我流の戦闘術。+++なら、達人の中の達人と呼べるレベル。

闇の魔法〔EX〕

エヴァンジェリンが十年の歳月をかけて完成させた技法。適正がなければ習得過程で死に至り、習得したとしても最終的には魔の眷族へと堕ちる。

タバサ

・主武装【形見の杖】

・ステータス

筋力 A(?)

耐久 A+(?)

敏捷 A++(?)

魔力 A++(?)

幸運 B(?)

()内は闇の魔法時

・スキル

気の運用 [A++]

縮地を完璧にマスター。

武器に纏わせ放つことも自由自在。

雪風流戦闘術 [A+++]

タバサ我流の戦闘術。 +++なら、達人の中の達人と呼べるレベル。

魔族化 [A++]

肉体を魔の眷族へと変化させる。 全ステータスがワンランクアップ。

肉体再生〔A〕

魔力を消費して、肉体を即座に回復させる。
と回復は難しい。 頭か心臓を潰される

食事続行〔EX〕
せんとう

胃袋の体積を無視した暴食が可能になる。 食料の貯蔵は十分か？

エヴァンジェリン（人造霊）

・主武装

・ステータス

筋力 A-

耐久 B+

敏捷 A+

魔力 A+

幸運 D

・スキル

合気柔術〔A++〕

『どんなに大きな力も、受け流せばどうと言うことはないわ』

人形使い 〔A+〕

魔力があれば周囲三キロ、三百体の人形を操れる。

肉体再生 〔EX〕

致命傷を負ったとしても、しばらくすれば回復する。 本体である
巻物を破かれると死ぬ・・・？

ゲームマスター 〔EX〕

人智を超越したボタン連打力。 その力は次元を越える……………

アルビレオ・イマ

・主武装

・ステータス

筋力 B+

耐久 A-

敏捷 A-

魔力 A

幸運 C

・スキル

体術 [A++]

近接戦闘術。 ++なら最上級の達人。

おちよくり [EX]

相手のペースを引つ掻き回す。 耐性がなく、一定以上親しい者は回避不可。

肉体再生 [EX]

本体である魔導書が破損しない限り、致命傷でもしばらくすれば回復する。

シルフィード(イルククウ)

・主武装

・ステータス

筋力 A

耐久 A-

敏捷 B+

魔力 A -

幸運 C -

・スキル

竜の魔力炉 [B +]

消費した魔力の回復が早くなる。

竜の治癒力 [A]

行動不能なダメージから短時間で回復する。

暴飲暴食 [EX]

まるで胃が宇宙に繋がっているかのような食欲。 空腹になると、
全ステータスがワンランクダウン。

シエスタ

・主武装 メイド服？

・ステータス

筋力 B (B +)

耐久 B + (A)

敏捷 A (A+)

魔力 E - (E)

幸運 C (C+)

() 内は猫族獣化時

・スキル

掃除 [EX]

散らかったお部屋が瞬く間に！
メイド歴数百年は伊達じゃない！？

獣化 [A]

猫族の姿へと変化。 全ステータスに+補整。

戦闘続行 [A]

致命傷を負っても、気合いで戦う。

体術 [A]

一般的に達人と呼べるレベル。 上には上が……

ヴァーミリオン・CD・ヘイズ

・主武装【質量兵器の銃】オートマチック

・ステータス

筋力 C

耐久 D+

敏捷 B+

魔力 E+

幸運 D-

・スキル

情報解体〔EX〕

情報の海からの物質解体。本来、思考能力を有するモノは情報
防御が硬く解体出来ない筈だが、EXの場合は可能。

心眼（偽）〔EX〕

I・ブレインによる短期未来予測。物理的に回避不可能でもな
い限り、相手の攻撃は掠りもしない。

気の運用〔B〕

ある程度は使いこなせる。

クード・ヴァン・ジルエット

・主武装【アンゲル】

・ステータス

筋力 B+(A+)

耐久 B+(A+)

敏捷 B+(A+)

魔力 D-

幸運 C(B)

()内は同契時

・スキル

青空の航海者 [A]

船と認識できるモノを乗りこなす才能。

同契者 [EX]

エディルレイドと同契し、力を引き出す技能。
とのシンクロ率は120%!

相棒であるレン

気の運用 「A」

縮地レベルにもう少しで手が届く。

レヴェリー・メザランス

・主武装【指輪型デバイス】

・ステータス

筋力 D

耐久 B+

敏捷 B-

魔力 A

幸運 B+

・スキル

風の加護 「A+」

飛来物に対し、風が自動的に逸らしてくれる。
通用しない。

狙撃などはまず

同契 「EX」

七煌宝樹であるレンはクーとの同契で自然災害を超える力を発揮する。

魔力変換資質 (B)

『風』の魔力変換資質を持っている。

【紅い二人】のステータス

E D C B A E X

遠坂

リン・スカーレット
凜

・主武装【ランサー】

・ステータス

筋力 B -

耐久 B +

敏捷 A -

魔力 A +

幸運 C

・スキル

中国武術 [A +]

武術をどれほど極めたかの値。
ル。 + は達人の中でも上位。

Aで一般的に達人と呼ばれるレベル

第二魔法行使 [B -]

並行世界へ小さな穴は開けられるが、まだまだ一端に過ぎない。

うっかり 「A+++」

ここぞと言つときにつっかりミスをする。 もはや呪い。

魔力変換資質 「EX」

まさかの五種類。 流石は五大元素使い（アベレージ・ワン）。

衛宮 アーチャー
士郎

・主武装【セイバー】

・ステータス

筋力 B+

耐久 A

敏捷 B

魔力 C

幸運 E

・スキル

心眼（偽） 「B」

修行・鍛錬によって培った洞察力。 窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘理論。

執事 「A++」

骨の髄まで染み込んだ技能。 むしろ本職？

無限の剣製 「EX」

武器ではなく一つの魔術、固有結界の名称である。 固有結界とは術者の心象世界を具現化し、一時的にせよ現実を書き換える魔術の総称。 固有結界は大禁術と言われる特別な魔術であり、修得している者は極めて少ない。 『無限の剣製』は剣を鍛えることに特化した魔術師が生涯をかけて辿り着いた一つの極地である。

この固有結界には士郎が観た『剣』の概念を持つ兵器、そのすべてが蓄積されている。

3 0 S t a n d b y R i o t

新暦0075年3月

ミッドチルダ中央区画湾岸地区

古代遺失物管理部『機動六課』本部隊舎

L o n g A r c h

湾岸部に建設された巨大な建造物。多種多様な機材などが運び込まれている。

そんな隊舎の前に二人の女性が立っていた。

「・・・なんやこーして隊舎を見ると、いよいよやなーって気になるなー」

「そうですね、はやてちゃん・・・いえ、八神部隊長」

「あはは」

機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐と、機動六課所属のシャマル医務官だ。

「いい場所があつてよかつたですねえー」

「交通の便がちょうど良くないけど、へりの出入りはしやすいし機動六課にはちょうどええ隊舎や」

「なんとなく海鳴市と雰囲気もにてますしね」

「あはは、そつえばそーやなー」

「隊長室はまだ机とか届いてないんですよね？」

「ライン用のデスクでええのがなくつてなー エイミーさんに探してもらつてるんよ」

場面は変わり、ここは『機動六課駐機場』

「へりの実機はまだ来てないんだな」

そう言ったのは機動六課のフォワード部隊『ライトニング分隊』副隊長のシグナム二等空尉だ。

そんな問いに、隣に立つ青年？へりパイロットのヴァイス・グランセニツク陸曹が答えた。

「今日の夕方に到着ッス。届くのは武装隊用の最新型！前から乗ってみたかった機体なんで、これがもう楽しみで！」

「隊員たちの運搬がお前とへりの主な任務だ。お前の腕からすれば物足りなくはあるかもしれんが……」

「いやなに、へりパイロットとしちゃ操縦桿を握れるだけでも幸せでしてね。めいっばい、やらせてもらっつスよ」

L i b r a r y

ミッドチルダ西部21区
管理局市民窓口センター

「モンディアルさん。 エリオ・モンディアルさん」

「はいっ」

係員と呼ばれ、席を立ったのは十歳前後の男の子だった。

「IDカードの更新でよろしかったでしょうか？ 更新事項は武装
局員資格と魔導師ランク陸戦B。 役職は陸士研修生改め三等陸士。
お間違いないですか？」

「はいっ、大丈夫です」

「ではこちらから正規の管理局員としての新しいIDカードです」

「はい、ありがとうございます！」

係員からIDカードを受け取ったエリオ。すると、後ろから話しかけられた。

「エーリオー」

「シャーリーさん！」

「更新、終わった？」

「はいっ」

「ふっふっふっ……それじゃあ……ファイトさんから
お祝いメッセージ」

そうシャーリーが言うと、空間モニターがひらき、エリオの保護責任者ファイトが映し出された。

『エリオ！ 正規採用おめでとう！』

「フェイトさん！」

『あたしもいるぞー』

「アルフ！……あれ？でもフェイトさん、お仕事中じゃ……それにアルフも……」

『いま食事休憩中』

『あたしはちょっとおつかいがあってな』

『エリオのことだから大丈夫だと思ってたけど、試験も研修も無事に終わってよかった』

『がんばったなー』

「ありがとうございます！」

『出会った頃はあんなちっちゃかったエリオがもう正規の管理局員なんて……わたし、なんだか感慨深いやら寂しいやら……』

「すみません、フェイトさん……」

『なんで謝るの……いいんだよ、エリオが選んだ夢なんだから』

「はい」

『わたしとの約束も、エリオはちゃんと守ってくれるもんね』

「友達や仲間を大切にすること。戦うことや魔法の力の怖さと危険を忘れないこと。どんな場所からも絶対元気で帰ってくること」

『そう。六課では同じ分隊だから、来月からわたしや新しい仲間たちと一緒に頑張ろうね』

「はいっ！」

管理世界61番「スプールズ」
自然保護区

旅行カバンを持った桃髪の少女、キャロが二人の保護隊員にお別れを告げていた。

「じゃあキャロ、忘れ物ないね？」

「はい。本当にお世話になりました。ネイトさん、クルーエルさん、それに・・・アーマさん。召喚魔法のコツ、絶対に役立てみせます！」

「うむ。小娘にしてはいい筋だったぞ」

「怪我しないように気を付けてね」

「じゃあ行っておいで、キャロ。気が向いたらいつでも帰ってきてなさいね？ もちろん仕事は手伝わせるけどね！」

「はいっ！ 行ってきますっ！」

S t a r s

ミッドチルダ南部陸士386部隊 本部隊舎

災害担当部 配置課 応接室

「ええ、二人ともうちの突入隊のフォワードです。新人ながらいい動きをしますよ。二年間でしっかり実績も積んでますし、いずれはそれぞれの希望する転職先に推薦してやらんとは思っていましたが……」

テーブルの上に置かれた二枚の書類にはそれぞれティアナとスバルの顔写真が載っている。

「本局から直々のお声がかかりとは、うちとしても誇らしいですな」

担当者と同じ向き合うように座る二人は高町なのは一等空尉とヴィータ三等空尉だ。

その二人へ担当者の男は説明を続けていく。

「スバル・ナカジマ二等陸士。うちのフォワードトップ……武装隊風と言えばフロントアタッカーですな。とにかく頑丈で頼もしい子です。命令違反で、相棒の子と絶望的な状況の現場へ飛び込んで行くこともあります……足も速いしタテ移動も優秀です。インドアや障害密集地なら下手な空戦型よりよっぽど速く動きますな。突破力もある。本人の希望は特別救助隊ですね」

「なるほど」

「で……二人目、シューター……放水担当ですね。ティアナ・ランスター二等陸士。武装隊向きの射撃型な上に、本人も将来的には執務官志望とかで、正直うちではどうかと思っただけですが、訓練校の学長先生から推薦もありまして。射撃型だけあって、シューターとしていい腕ですし、なんと言っても基礎体力や危機回避能力がずば抜けてまして……今やるべきことを完璧にこなすって気概があります。ナカジマもランスターも魔導師ランクは現在ですが、来月、昇格試験を受けることになってます」

記録映像を見ていたなのはが言った。

「あ………両利きですね？」

「ええ、魔力カートリッジ用のデバイスですね。知り合いのデバイスマイスターに作って貰ったそうです。何より訓練校からコンビ三年目ってことで、この二人の技能相性やコンビネーション動作はなかなか大したもの……… ああいや、航空教官のヴェータ三尉や戦技教官の高町一尉をご覧になれば、穴だらけだとは思いますが………」

「いえ、少し見せていただいただけでも、魔導師ランクが陸戦だととはとても思えないような動きです」

「はは、そう言っていただけでと幸いです」

「交替申し送りは以上です」

「よろしく願いますっ！ おつかれさまでしたっ！」

・・・

「ティアおつかれー」

「んー」

がやがやがや「本局航空隊の方がきたんだって、何のようだったんだ？」がやがやがやがやがや「さあ？ もう帰られたみたいですよ」がやがやがや

「Bランク試験来月・・・っていかもう再来週ぐらいだけど、準備オツケーだよね？」

「まあねー。ま、わたしは兎も角、あんたでも今の実力が有れば受かるわよきつと」

「うんっ。・・・それにしてもゴメンね」

「なによ？　またなんかやらかしたの？」

「ううん。　何時も何時も無茶な現場に突っ込んだりして・

」

「はー、またそれ？　いいのよ別に、上から瓦礫がわんさか降ってくる中を突っ切ったり、爆発寸前の施設の中に突入したりするぐらいね」。　そんな位じゃ死なないし、万が一死んじゃったとしても、その時は私とその程度の実力だったって事よ」

「・・・そっか」

「うん。　・・・という訳だから、なんか奢りなさいよね」

「うっ・・・ま、まあいいけど」

「ふふふ・・・じゃあ三ツ星レストランの・・・」

「ちよ、ティア手加減？」

「・・・は、冗談で、何時ものバイキングで良いわよ」

3 1 Bランク試験

Side・ティアナ

「ふんっ！ しっしっ・・・はあっ！！！」

スバルの拳が空をきる。

軽快なリズムで繰り出される拳打はなかなかに熟練した動きだ。

「スバル、あんまり暴れてるとそのポロローラーが試験中に逝っちゃうわよ」

わたしがそう声をかけると、スバルは手を止め言った。

「大丈夫大丈夫！ 油もさしたし、経験上あと1週間は壊れないよ」

「そ、ならいいけど」

問題ないとは思ってたけどね。

自分の装備の状態くらい把握してなかったら、この2年間であっけなく殉職してただろうし……

そんなことを思い、苦笑しながら腰に巻いたベルトにいくつもさしてあるマガジンを1つ引き抜き、手に握るブレンデンDに装填していく。

もう一挺はすでに脇の下のホルスターだ。

今のわたしたちは原作通りの白を基調としたジャケット姿？だと思ってもらえればいい。

……原作？ なに言ってんだろわたし？

っと、時間ね。

『おはようございますー！』

廃棄都市区画で、ビルが建ち並ぶ光景を背景に、空間モニターが開いたと思ったら、試験官らしき女性……女の子？……が映し出された。

『さて、魔導師試験の受験者さん2名、そろってますか？』

「「はいっ」「」

『確認しますね。 時空管理局、陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士』

「「はい!」「」

『所有している魔導師ランクは陸戦Cランク。 本日受験するのは陸戦Bランクで間違いないですね?』

「「はい!」「」

『はい。 本日の試験官を勤めますのはわたし、リインフォース・ツヴァイ空曹長です。 よろしくですよ』

「「よろしくお願いします!」「」

次々と映し出されていくモニターで、リインフォース空曹長が説明していく。

『2人はここからスタートして各所に設置されたポイントターゲット

トを破壊。 ああ、壊しちゃダメなダメージターゲットもありますよ。 妨害攻撃に気を付けてすべてのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指してくださいです！ なにか質問は？」

「「ありません！」「」

『では、スタートまであと少し。 ゴール地点で会いましょう』

すると、モニターが閉じ、代わりに3つの丸が信号のように並んだ画面に切り替わった。

効果音と共に1つずつ消えていく。

さーてと、試験開始もまもなくだ。 最後に確認しておこう。

「スバル」

「うん！ 中をわたし、外をタイヤが潰す。 で、最後の大物は・・・」

「オツケー。 ……行くわよ！」

「おー」

最後の1つが消えた。

試験開始だ！

ウィンググロード！

開始とほぼ同時に一直線に掛けられた青い帯状の足場。

それは第1関門のビルへのショートカットだ。

スバルとわたしはその上を走る。

ガラスを突き破って中へ侵入するスバル。

わたしもささつと外側から撃ち抜くとしますか。

S i d e ・ スバル

廃棄ビルの窓ガラスを突き破って中に入ったわたしに、さっそく3つのオートスフィアが狙いを定めて魔力弾を撃ってきた。

だけど、狙いは甘いし速度も遅いうえに誘導性もない。

回避しながら接近して……

「しっ！」

1つ

「ふっ！」

2つ

そして、少し離れたスフィアに……

「リボルバーシュート！」

苦手な射撃魔法を撃ち込む。

吹っ飛ばすスフィア。

少し拍子抜けと言っかなんというか……

まあ、自殺行為って言われるような事故現場に何度も突っ込んで、命懸けで人助けをしてきたんだから、このぐらいは当然だよな。

って、ゆっくりしてたらタイヤに置いてかれちゃう！？

S i d e ・ テ イ ア ナ

ターゲットが配置されたビル。

その隣のビルの屋上の縁を走り、二挺拳銃のトリガーを引く。カートリッジを装填したのは良いけど、5発かそこら撃ったら圧縮に耐えられず壊れちゃうから、今はわたしの魔力だけを撃ち出している。

足を止めない。

いや、止める必要がないだけけど……

簡単すぎるから、人型のパネルターゲットの頭と胸にコロラド撃ちで2発ずつ撃ってるけど、もう終わっちゃう。

「ほっと」

ビルの屋上から飛び降りる。

虚空瞬動・・・は使えないから、足の裏に小さな足場用の魔法陣を展開し、身体強化を足に一瞬集中させる。

すると、ミッド（ベルカ）版・虚空瞬動の出来上がりだ。

以前、ミッドやベルカの身体強化だと、瞬動が出来ないみたいなのを言ったが、あれは間違いだった。

正確には『熟練しないと出来ない』だ。

気やルイズさん達の使う身体強化はかなりアバウトなところがあるのだが、ミッドとかはデバイスを使用すること前提に魔法が組みられているからか、機械的なのだ。

だから出力の調整が感覚で出来ない。

『騎士』を名乗るベルカ式の使い手なら、普通に瞬動みたいなことが出来る。

まあ、高速移動魔法の方がポピュラーな訳だが・・・

さてと、そろそろスバルとの合流地点だ。

着地。

同時にスバルが角から現れた。

2人で並んで走る。

「いいタイム！」

「当たり前よ！」

しばらく走っていくと、妨害用のオートスフィアとターゲットの群れが行く手を阻んできた。

普通なら物陰に隠れながら少しずつ数を削っていくんだろうけど・・・

「・・・やる？」

「うん！ どっちが多くオートスフィアを倒すか勝負だよ！」

「上等！ こっちは飛び道具だし、そっちのカウントは2倍でいいわよ。ま、勝つのはわたしだけど」

「負けないぞー」

突っ込むスバル。

この2年間、少しアドバイスをあげただけで凄い伸びた。

まったく、才能の塊かっつての。

もう咸卦法なしの近接戦闘じゃどっこいどっこいかもしれない・・・

「1つ、2つ、3つ、4つ、おっと5つ、6つ、7つ!!」

やば、ぼさつとしてたらスバルに負ける!?

こつという勝負はわたしたちの暗黙の了解で負けた方が勝った方にこ飯を奢らなきゃいけない。

・・・スバルはタバサさんやシルフィード並みに食べるから、銃のストックを買う為にかなりお金がもってかれるわたしとしては・・・負けれない!!!

ハイウエー沿いに配置されたスフィアとターゲットを止まることなく撃破して行く。

「26、27!」

「49、50、51つと、52、53・・・！このわたしが負ける！？54、55！2倍はちよつとキツかったかな？」

「前言撤回は無しだよ！久しぶりにティアに奢ってもらうんだ！28！」

スバルの拳による一撃で、最後のスフィアが吹っ飛ばされ、あらかた倒し終えたから一息いれることにした。

「ふっふっふっ、今回はわたしの勝ちかな？ふふん、なに奢ってもらおっかな？」

ヨダレを拭ってにやけるスバル。

冷や汗が出てきた。

今までさんざん奢ってもらった手前、断れないし・・・と言っか魔導師試験がいつの間にかどっちが奢るか勝負になってるんだけど？

くっ、ここまで追い詰められたのは何時ぶりか・・・

「ふん、勝負はまだまだこれから・・・ッ」

「勝利の女神様はわたしに……ッ」

「「そこっ!!!!」」

煙の後にスフィアが隠れていることをほとんど同時に察知したわたしたち。

距離的にスバルの方が近い。

スバルの拳がスフィアを殴り飛ばすまで、あと0.5秒ってところかな？

だけど……

「56!」

……わたしの弾の方が速い!

刹那の差で圧縮魔力弾がスフィアを破壊した。

「ほらほら、あんたに並んだわよ」

28の2倍だから、スバルのポイントは56点。

わたしと同点だ。

「ぐぬぬ。 まあいいや、次はなんだっけ？」

「うん？ 次は大型スフィアね。 これ、けっこう手強いらしいけど、どうにでもなるでしょ。 前に話した通り、わたしが囷であったが撃破。 これ倒しても点数加算はなしよ」

「え〜」

「なし！」

「了解〜 ……よし、行くっ！」

ハイウエーを2人で疾走する。

そろそろ……来たっ大型スフィアの大出力狙撃。

けど、音速にも達してない、数も微妙、誘導性も微妙……その程度の弾なんて……

「無駄無駄無駄」

すべての狙撃をクレー射撃のように撃ち落とす。

大抵の魔力弾は中心を撃ち抜かれると霧散する……『本物』レベルの人達は含まないからね。　ここ注意。

「流石ティア、相変わらず凄いねー！」

「この程度、出来る奴なんて山のようにいるわよ。　それじゃスバル、作戦通りにね」

「うんー！」

わたしたちは一旦別れ、大型スフィアが設置されたビルの両端へ移動した。

8階建てビルの6階。

そこに設置されている。

足場を魔法陣で作って……

「さて、行きますか……ね！」

壁に向かってトリガーを引きまくる。

ちょうど人が通れるぐらいの円を描いたところで……蹴る。

「おりゃ」

ドゴツと、鈍い音を立ててビルの壁に穴が開いた。

そこから侵入……つと魔力弾来た！

回避回避回避。

目の前にはわたしに狙いを定めようとする大型スフィア。とりあえず撃ってみるけど、弾かれてしまった。

カートリッジを使えば楽勝だろうけど……銃が勿体無い。

『スバル、オツケーよ。引き付けとくからキツいの一撃叩き込み

なさい!』

『うん!!!』

2秒後、壁をぶち破ってスバルが突入してきた。

その腕には既に帯状の魔法陣が巻き付き、ドリルの回転を思わせる魔力が渦巻いている。

「スクリュー・・・ッ」

スバルの気合いと共に、空間をねじ曲げるが如く回転数を上げていく魔力。

話によると、空港火災で助けてくれた人が放った矢?のイメージを元に組んだ魔法らしい。

「バスタアアアーツ!」

突き出される拳から放たれた螺旋。

その一撃は大型スフィアのシールドを突破し、スフィア本体を貫通。

そのまま壁を突き破り大穴を作って消えていった。

短く中距離砲撃。

わたしの魔力じゃなかなか出来ないわね。

「スバル」

「ティア」

パンツと、かざした互いの手のひらを打ち合わせる。

「時間はあとのくらい？」

「えーと、8分ちょいあるわね。　おっおっゴールするわよ」

ハイウエーを一直線に駆け抜けるわたしとスバル。

オートスフィアが出てこないから、勝負は引き分けだ。

ふう、今回はなかなか追い詰められた（スバルとの勝負的な意味で）

最後のターゲットを破壊して、オールクリア。

かなりの余裕を持ってゴールした。

「ゴールです！ お疲れさまでしたね」

「……………」

空から試験官の女の子？が降りてきたのだが……………

「小つな」

「妖精さんっ!?!」

300?くらい?

は、ははははは……………もはや幼いとかそんなレヴェルじゃない
わ。

そして、ラインフォー스空曹長に続いて空から降りてきたのは……

「とりあえず、試験は終了だね。お疲れさま」

「うわあ〜い！ ありがとうございます、なのはさん」

……高町なのは一等空尉。

航空戦技教導隊所属。

管理局の若手ナンバーワンにして、エースオブエースであり……
・死合ってみないとわからないけど、おそらくは『本物』クラス。

いや、紅き翼のメンバーは全員が『本物』かそれ以上だから、そこに驚きはない。

ないけど……なんでこんな大物がたかが陸戦魔導師Bランクの試験に……？

ふと、近くにへりが飛んでいることに気づいた。

……あれは、フェイト・T・ハラオウン執務官？

そのわきに居るのは……八神はやて二等陸佐……か？

この3人、高町なのはにフェイト・T・ハラオウン、八神はやては

友人でありそれぞれが強力な魔導師だと有名だ。

しかし、だからこそたかだかBランクの試験に3人が揃うなどあり得ないのだ。

……なにかキナ臭くなってきた。

そう思うわたしだった。

3 2 機動六課(前書き)

短いですが・・・どうぞ？

3 2 機動六課

S i d e ・ ティアナ

試験日の翌日。

わたしとスバルはさんさんと輝く太陽の下、芝生に寝そべっていた。

「……………機動六課……………か。あんたはどうするの、スバル？」

そう言つて、視界の端に見えた部隊隊舎を見上げる。

あそこに呼び出されたと思ったら、試験結果発表後、新部隊のフワードとしてスカウトを受けたのだ。

勿論、結果は合格だったけどね。

特定遺失物……………ロストログアの捜査と保守管理が主な仕事らしいが……………だからと言って、1つの部隊にオーバーS2人にSSランクが1人も詰め込めるのだろうか？

聞けば、他にもニアSやSランクが数人いるようだし、確実に裏がありそうだ。

いや、そんなこと言ったら『紅き翼』なんて、SSS（測定不能）

管理局の歴史上、人間がこのランクに到達したことはない。ま

あ、ルイズさんやタバサさんは人間じゃないけど……（）や魔力なしで実質SSランクの出力以上の力を出すあいつやあの人とか……メイドのあの人だつてSランク魔導師並みの戦闘力を持つてそうだし、果てにはどんな原理か知らないけど、指パッチンで物を分解する人とかもいる訳だが……

「わたしは行くよ。ロストロギアのせいで傷つく人達を少しでも減らせるなら……人をより多く救える可能性があるなら、わたしは行く」

そう言うスバルの瞳はどこか遠く、過去を振り返っているようだった。

空港火災で助けてくれたと言う、『正義の味方』の姿を思い出しているのだろうか？

「……………」

危うい。

この2年間の無茶でうすうす気づいてはいた。

……………スバルの生き方は……歪だ。

自分の命より、何処の誰とも知れない他人を優先する。

マンガやアニメのキャラクターが、自分の命を捨てて、仲間やあるいは世界その物を救うってストーリーは割りとよくあるだろう。

だけど、スバルは違う。

まるで息をする・・・は言い過ぎでも、それに近いぐらいあっさり
と自分の命を危険に晒す。

まるでそれが当たり前のように・・・

一度、そんな生き方をして楽しいのかと聞いたことがある。

苦笑して、みんなが幸せなら自分も楽しい、と返されたが・・・

まあ、わたしも人のことは言えないか・・・何処の誰とも知れない、兄さんの仇へ復讐するためだけに、経験を積み、牙を研いでいるのだから。

「ティアはどうするの?」

「わたしか・・・?」

どうしようかな。

遺失物管理部の機動課って言ったら、エキスパートとか特殊能力持ちが勢揃いのはえぬき部隊だし、わたしがちゃんと働けるかどうか……とは思わない。

ルイズさん達並みにぶっ飛んだ人はいくらなんでもそう居ないだろう。

……行くか。

ちよつとばかり裏がありそうで、キナ臭いけど、ゾンビもどきが蠢く研究所よりヤバくはないだろう。

……比較対象がおかしいかな？

「ま、ティアのことだし、答えは出てるんだろうけどさ」

「……まあね。執務官になる近道だってんなら、行かない手はないわよ」

「ふふふ、フェイト執務官にも、内心ではライバル意識メラメラでしょ？」

「そ、そんなことないわよ。あ、あはははは〜」

「……凶星だったんだね」

フエイト・T・ハラオウン……か。

殺す気で殺り合えば五分五分つてところかな？

切り札の1つや2つは持ってそうだし、実際に死合ってみないとわからないけど。

「ま、当面はわたしたち2人で一人前なんだしさ。まとめて引き取ってくれるなんてラッキーじゃん」

「…………ふと思ったんだけどさ」

「なに？」

「わたし達、単独でもけっこう強いわよね？ 少なくとも並みのBランクよりは。なんでコンビで試験受けられたんだろ？」

「…………きつと、いろいろあるんだよ」

「……………そっか」

Side・アウト

『ヴィータちゃん、ザフィーラ、追い込んだわ。 ガジェット？型。 そっちに3体』

夜。

ミッドチルダのとある街角に封時結界が張られていた。

その中のビルの屋上に立つ白衣の女性、ヴォルケンリッターの1人、シヤマルが仲間であるヴィータとザフィーラへ念話を送る。

「おおおおっ！！」

ザフィーラの雄叫びと共に白い柱が次々と地面から突きだし、丸いボディーをしたガジェットを1体串刺しにした。

ほとんど同時に上空から降下し、ハンマーでガジェットを仕留めた

赤い髪の少女ヴィータ。

「アイゼン！」

『Schwalbfliegen』

掛け声と共にヴィータの手に握られる拳大の鉄球。

「らあっ！！！」

それをハンマーで打ち付けて跳ばす。

霞む速度でガジェットへ向かった鉄球は、AMFをなんなく貫通し打ち抜いた。

「・・・片付いたか」

「シャマル、残りは？」

「残存反応なし。全部潰したわ」

「出現頻度も数も増えてきているな」

「ああ、それにだんだん賢くなってきたる」

「でも、これくらいならまだ私達だけで抑えられるわ」

「そうだな」

「ド新人に任せるにはちょっとめんどい相手だけどな」

「仕方あるまい。我らだけでは手が足りぬ」

「そのための新部隊だもの」

「はやての……いや、私達の新部隊……」

「……………機動六課……………か」

空間モニターに映し出された文字を読み上げる土郎。

「ここはミッドのとある裏路地を抜けた先にたたずむカフェ、その店内だ。」

「なに見てんのよ土郎？ メール？ 猛勉強の末ようやく一般人並みに機械を操れるようになった私への当て付け？」

「……………凜、空間モニターの使い方教えなかったか？ まあいいや。フエイトさんからだよ」

そう言っつてモニターを見せる。

「えーなになに、……………へ〜キャロがねー。で、どうするの？」

「いや、俺たちこれでもお尋ね者だからな……………ん〜ルイズんとくに依頼すれば、管理局からデータを消せるか？ 顔さえデータから消してしまえば、そこまで有名じゃないし……………魔力は前に使った

魔力殺しを使えば……いけるか？」

「いけるんじゃないの？ あいつに借りを作るのはいしゃくだけど……」

思案顔で考え込む2人。

「借りもなにも、偽造戸籍作るのに手を貸して貰ったんだし、そんなことを言ったら借りっぱ……」

「何か言ったかしら『遠坂士郎』さん？」

「……いや、なんでもないぞ『遠坂凜』さん」

なぜか魔力を手に込め始める笑顔の凜。

冷や汗を滝のように垂らす士郎。

そんな2人に挟まれたモニターには『料理』の文字が見えたとか見えなかったとか……

3 2 機動六課（後書き）

ハルケギニア全土を襲った謎の混乱と襲撃。

『大災厄』と名付けられた大事件から早一年。

ようやく復興を終えた人々は元の生活へ戻っていったのだが……

・
【虚無の魔法使い】～【次元世界最強の弟子】、空白の数百年を埋める物語。

『エピソード・オブ・ハルケギニア』

何時か投稿……する可能性が無くはない！

3 3 集結

ピカピカで新築の隊舎。

そのなかにあるホールにスバルとティアナ、そしてこれから同僚となる局員たちは整列していた。

ここは機動六課。

これから1年間、彼ら彼女らが働くことになる職場だ。

と、局員たちの前に設置された台の上に1人の若い女性が歩み出た。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

そう挨拶するはやて。

局員たちから拍手が沸き起こる。

「平和と法の守護者。時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことが私達の使命でありなすべきことです。全員がいちがんとなって事件に立ち向けていけると信じています。

ま、長い挨拶は嫌われるんで、以上！機動六課部隊長および本部長、八神はやてでした」

S i d e ・ テ イ ア ナ

八神部隊長の挨拶の後、わたしたちフォワード陣は高町教導官について行つた。

それにしても、まさかあとの2人が10歳の子供だったなんて・・・
・・・いや、力の強さに年齢は関係ない・・・かもしれないけどさ。

さつきした軽い自己紹介によると、赤毛の男の子がエリオ・モンデ
イアル、そして桃髪の女の子がキャロ・ル・ルシエだそうだ。

・・・キャロ？

何処かでそんな名前を聞いたことがあつたような・・・？

「そう言えばお互いの自己紹介はもうすんだ？」

と、教導官・・・高町さんが尋ねてきた。

「名前と経験やスキルの確認はしました」

「あと、部隊分けとコールサインもです」

お、エリオだったっけ？

年のわりにしっかりしてそうだな

「そう、じゃあ訓練に入りたいんだけどいいかな？」

「「「「はい！」「」「」」

早速かー、どんな感じなんだろ？

訓練服に着替えた後、連れてこられたのは海辺だった。

はて、こんなところで何をするのやら？

そんなことを思っていると、隊舎の方から女の人が1人走って来た。

「なのはさーん！」

「シャーリー！」

シャーリーと呼ばれた人はケースを持っている。

そのなかにはわたし達が預けたデバイスが入っていた。

返されたので、調子確かめる。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるから、ちよつとだけ大切に使ってね。それと、メカニックのシャーリーから一言」

ウェーブがかったロングヘアー。

眼鏡を掛けたシャーリーがわたし達の前に立つ。

「えー、機動六課メカニックデザイナー兼通信主任のシャリオ・フイニーノ一等陸士です。みんなはシャリーって言うんで、そう呼んでね！ みんなのデバイスを造ったり調整したりするために、時たま訓練を見させてもらいます。あ、それとデバイスについての相談があつたら遠慮せずに言っつてね」

「」「」「はい！」「」「」

「じゃあ早速訓練に入るよ」

「……………つてここで？」

「ここで、ですか？」

スバルの言葉を待ってましたとばかりにシャリーが空間モニターをピコピコいじりだす。

「ふふふ、機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の陸戦シミュレーター。ステージセット」

すると……………

「「わっ」」

「す、すい……」

「……お金かかってそ……」

海上にビルやらなにやらいっぱいのが姿を現した。

このシミュレーターを作るのにいったいどれだけのお金が掛かったことやら……ブレンテンD何挺分かな……

Side・アウト

海上の訓練場。

それを隊舎のテラスから見守るヴィータ、そしてシグナム……

の遙か下、コンクリートの地面に目回ぼっこするまじろくろぐべー匹の猫がいた。

口を大きく開き、欠伸をしたかと思うと、毛繕いをはじめ。

「ナ」

そじやってくつろぎながらも猫は海の上の訓練場を眺めていた。

Side・ティアナ

海の上に突如として現れた訓練場に移動したわたし達。

さーて、どんな訓練が襲い掛かってくるのやら？

ルイズさんの修業ほどではないにせよ（と言うかあんなだと死者が出る）実になる訓練だといいわね。

『じゃあさっそくターゲットを出して行くっか。　まずは軽く8体から』

すると地面に魔法陣が描かれ・・・

『私達の仕事はロストログアの保守管理。　そのために私達が戦うことになるのは・・・』

出てきたのは・・・

『自立行動型の魔導機械。　近づくと攻撃してくるタイプね。　攻撃は結構鋭いよ』

『では、第1回模擬訓練、ミッション目的は逃走するターゲット8体を破壊、または捕縛、15分以内』

「「「「はいつ「「「」

ザコだった。

『それでは』

『ミッション』

『スタート!』』

「……どうしようか、あんなのたとえ100体出てきても対処出来る自信がある。」

「って言っても、わたしが使ってるのはブレンテンDだから、カートリッジを5発も使ったら壊れてしまう……」

「ま、取り合えず……」

「撃ってみますかね」

「トロイトロい、あんなの止まって見えるっての。」

「カートリッジは未使用。」

「自前の魔力だけでやっただろうじゃない!」

「両手に握った銃を流れるように動かして、トリガーを高速で引きまくる。」

1体につき2発。

丸っこいボディーをしたいかにもザコキャラなターゲットに向かい、計16発の魔力弾が風を切る。

狙い変わらず直進した弾は……

「……無理か」

そのボディーを大きくだが、凹ませるだけに終わった。

かなり前だけど、あのターゲット……ガジェットだっけ？……に周りを囲まれて、ルイズさん達に置いてかれたことがあったっけ。

その時はカートリッジを使ってようやく通常弾と同じ程度の威力だったのだ。

あるときより威力が上がってるとしても、大幅なものではないのだから、破壊出来なくてもしょうがない……しょうがないんだけど……あんなザコすら……はあ。

魔力結合を解くAMF。

カートリッジを使うならまだしも、わたし程度の魔力じゃいくら圧縮しても無理があるってことかな……？

そのまま逃げ出すガジェット達。

「魔力が消された!？」

『つて、AMFを突破したの!？』

『シャーリー静かに。ガ、ガジェットドローンにはちょっと厄介な性質があるの。攻撃魔法を掻き消すAMF。アンネキワザルド普通の射撃は通じない・・・筈なんだけどな』

逃げるガジェットを追うため、スバルがウイングロードを展開し、エリオが走り出す。

「こんのバカスバ! 魔力が消されるって言われてるでしょ!」

『それにAMFを全開にされると・・・』

「バカスバって何よティア・・・つて、えっ? うわ、うわわわわわわ・・・」

空中でいきなり消えたウイングロード。

そのままスバルはビルのガラスを突き破って中に転がっていった。

『足場作りや移動魔法の発動も困難になる。大丈夫、スバル？』

「な、なんとか」

『まあ、訓練場ではみんなのデバイスに細工して、擬似的に再現してるだけだね。でも、現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ』

『対抗する手段は幾つかあるよ。 どうすればいいか素早く考えて、素早く動いて』

「……さてと。」

「キャラ……だっけ？ 手持ちの魔法とそのチビ竜で、なんとかする方法ある？」

となりのキャラに話し掛ける。

「……幾つかあります」

「オッケー。 わたしもあるわ」

取り合えず、前衛の2人に足止めしてもらおっかな。

『スバル、エリオ、あいつらを逃がさないように先行して足止めお願い』

『了解！』

『分かりました！』

走り出すスバルとエリオ。

スバルはバカパワーでガジェット4体を蹴り飛ばし、殴り飛ばし、ビルの壁にぶち当てた。

……流石は脳筋、そのまま倒せそうじゃん。

エリオは……っと、ビルの渡り廊下を崩して足止めたみたいだ。
柔軟な思考力ねー

「それではわたしから行きますね。フリード、ブラストフレア」

「キユクー」

子犬ぐらいの大きさをした竜の子供、フリードリヒが炎を口にタメ・

・

「ファイヤ！」

吐き出した。

結構なスピードで飛んでいく火球は小さな見た目とは裏腹に、かなりの範囲を焼き払う。

ショートしたように動きを止める2体のガジェット。

エリオが足止めた奴等だ。

残りの2体は瓦礫に潰されたようだ。

続いてキャラの足元に描かれる魔法陣。

「神の刃を手にする者は、神殺しの咎を負う………覇爪招来・
アムルカムトルム！」

現れたのは漆黒の魔剣。

キャロの周囲を漂うその数、4。

かなりの……いや、アレはルイズさんの愛刀と同格か!?

……召喚に使った魔力からは考えられない強力さじゃない……
・なんかずるい。

わたしも異空弾倉とかで使うけど……月とスッポンぐらいレ
ベルが違う……

ガジェットを指差すキャロ。

「……フリーズアウト、ソードバレルフルオープン!」

と、カッコ良さげな掛け声と共に、4本の魔剣が空気を裂く。

成す術なくガジェットは串刺しとなった。

「す、すごいわね」

「ありがとうございます!」

キャロ……その年で、その召喚魔法。

凄まじいわね。

そのうち巨龍とか喚び出しても驚かないわよわたしは・・・

「……………今度はこっちの番ね」

見ると、すでに2体のガジェットをスバルはスクラップにしている。

どうしようか・・・と、言ってもわたしはAMFを抜く手段なんて
そうない。

1つ、カートリッジ。

2つ、咸卦法・・・

ま、却下ね。

そして3つ、カートリッジ魔力の代わりに自前の魔力を使い、銃弾
を外殻と内殻にわけける。

うん、3に決まりね。

魔力は2倍掛かるけど、この方法なら通るだろう。

狙いを定め、トリガーを引き絞る。

「しっ」

やってることは、カートリッジ弾とそれほど変わらないから、大して難しくない。

銃口から飛び出た弾丸はあっさりとガジェットの装甲を貫通した。

「ナイス、ティア！」

「ま、こんなもんでしょ」

とまあ、こんな調子で訓練は進んでいった。

3 4 ファーストアライト(前書き)

三章の4話、投稿。

それではおしまいー

3 4 ファーストアラート

それは簡単な護送任務だった。

親しい友達や知人、みんなそれぞれが兵。

未確認の機械兵器が襲ってきたけど、ものともしなかった。

そう……銀色の髪をした女性が現れるまでは……

一目見て只者じゃないと感じた。

だからこそ、わたしは全力を出しきった。

もちろん、その時一緒にいた親友2人と力を合わせて……

負けた。

完膚なきまでに負けた。

今までにも負けたことはあったけど、あそこまで一方的にやられたことは無かったと思う。

結局、わたしはそうそうに気を失ってしまった。

護送品のロストログアは奪われなかったみたいだけど、それも相手の気が変わったからだ、最後まで意識を保っていた親友の1人から聞いた。

自惚れていた訳じゃない。

なにも、自分が世界で1番強いなんて思ったことはなかった……
だけど、それなりの力は持っていると思えばいいのだ。

それこそ、何かの思い違いだったようだけど。

銀髪の女性について、独自に調べてみた。

なかなか資料は見つからなかったけど、幾つかのことが分かった。

紅き翼

それが、あの人が所属しているらしい、Sランクの犯罪集団だった。

受けた依頼は100%達成すると言う、裏の世界でも伝説的な便利屋。

メンバーの1人1人が最低でもSランク魔導師と同等かそれ以上と言ふだけの集団だ。

管理局の上層部にも、その集団へ依頼する人が幾人か居るらしく、
ほぼ黙認されている。

その事を知ると同時に、表の舞台にはめったに出てこない『本物』や『最強』クラスと呼ばれる、超越的な達人の存在を知った。

魔導師ランクに換算すると、

『本物』 オーバーS

『最強』 SS〜???

資料からの情報のため、確信は持てないけど、だいたいこんなところだろう。

上には上が居る。

漠然とは感じていたけど、データとしてその存在を知ってしまうと、少なからずショックを受けた。

このままじゃいけない。

いつ、そんな相手が自分の前に立ちはだかるか分からないのだ。

強くならなきゃいけない。

強くないわたしなんて、必要とされない。

強くならなきゃ・・・

前から少しずつ考えていたアレを完成させよう。

机上の空論。

今はそうかも知れないけど、近いうちに必ず……

とある日記より

S i d e ・ テ イ ア ナ

機動六課に来てから早2週間。

毎日毎日訓練漬けの日々だ。

内容は基礎的なことを中心にそれなりの量と密度がある。

あるのだが・・・朝から晩までヘトヘトになって（わたしはそうでもないが）そんなところに出動要請があったらどうするのだろうか
と、ちよっとした疑問がある。

……まあ、その辺は考えがあるのだろう。

そうじゃなきゃおかしいでしょ？

うん。

「はい、整列！」

おっと、集合のようだ。

「ふっふっふ……」

息を整える。

ほどよく身体が温まってきたところで、早朝訓練はラストのようだ。

「本日の早朝訓練ラスト1本、みんな頑張れる？」

「」「」「」「」「」

「じゃあ、シュートイノベーションやるよ。レイジングハート」

『All right・Accel shooter』

宙に浮く高町さんの足元に描かれる魔法陣。

桜色の魔力弾が数十と現れ、周囲を縦横無尽に駆け巡り始めた。

いいなー、誘導弾をあんな自在に操れて。

わたしなんて4発が限界だし、動きもぎこちないし……

「わたしの攻撃を5分間、回避し続けるか、わたしにクリーンヒットを入れればクリア。誰か1人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

「「「はい！」「」「」

……さて、どうしましょ？

「このボロボロ状態で、高町教導官の攻撃を5分間、捌ききる自信あるっ？」

「それなり」

「ないです」

「数が変わらなければ・・・」

上からスバル、エリオ、キヤロ。

・・・あれ、回避派多数？

いやいやいや。

「・・・早く終わると遅く終わるの、どっちがいい？」

「早く早く」

「オツケー。なら1発入れましょ」

「いくよ、エリオ！」

「はい、スバルさん！」

「準備はオツケーだね？ それじゃ・・・レディーゴー！」

掛け声と同時に襲い掛かってくる魔力弾。

わたし達は四方に散開した。

まず、スバルが魔力弾を無視して、ウイングロードを展開。

突っ込んでいく。

『ティア、援護！』

『了解！』

複雑な軌道を描いてスバルに向かう魔力弾、計4発に狙いを定める。

トリガーを心で引く。

なんとも形容しがたい感覚だけと、撃つ前に弾丸が的を撃ち抜くイメージが明確に思い浮かべることが出来れば、その弾は必ずと言っていい程、標的にヒットするのだ。

狙撃のイメージと少し似てる。

・・・引き金を引く。

イメージ通り、わたしの弾丸は桜色の魔力弾を撃ち抜いた。

『ナイスっ！』

『当たり前よ！』

スバルの拳。

リボルバーナックルを回転させ、突き出す右ストレートが高町さんのシールドに防がれ火花を散らす。

脇を見ると、キャロがエリオにブーストを掛けている。

「我が請うは駆け抜ける翼……」

桃色の魔力光がエリオを包み込む。

「かなり加速がついちゃうから、気を付けてね」

「大丈夫、スピードだけが取り柄だから……行くよ、ストラ
ーダ！」

槍型デバイスのストラードから、ロケット噴射のように火花が吹き
出る。

高町さんはスバルとフリードに足止めを食らっていた。

だが、このままだとエリオの突撃が回避されるかも……ほら、高町さんもこっちに気づいてるみたいだし……

『キヤロ、拘束!』

『はい!』

「詠唱破棄……・錬鉄召喚・アルケミックチェーン!!!!」

高町さんを囲むように桃色の魔法陣が4つ姿を現した。

「っ!?!」

流石に少しは驚いたみたいだ。

次の瞬間には、凄まじい勢いで鎖が高町さんの手足に巻き付き、縛り上げていた。

『天の鎖よ』

何処からかそんな声が聞こえたような・・・

つと、エリオの突撃を阻止しようと、魔力弾が向かってきた。

高速でエリオに迫る10発の魔力弾をクレー射撃のように撃ち落とす。

「いつけええええ〜！」

エリオがロケットのように翔んだ。

ストラダーの先端がアルケミックチェーンで身動きできない高町さんの腹に・・・直撃する。

「くくくッ!?」「くくく」

衝突の衝撃で巻き起こる煙。

その煙が晴れると、鳩尾のBJが少し破れた高町さんの姿が現れた。

『Mission complete』

「お見事、ミッションコンプリート」

「よっしー！」

「やった！」

「ナイスだよエリオ」

「ふ〜」

「いやー、疲れた疲れた。」

「じゃ、今朝はここまで、一旦集合しよ」

「」「」「はー！」「」「」

「さて、みんなもチーム戦にかなり慣れてきたね」

「」「」「ありがとうございます！」「」「」

「ティアナの指揮も、筋が通ってきたよ。指揮官訓練、受けてみる？」

「い、いやー。みんながよく動いてくれるお陰ですよ」

「みんないい動きしてるわよね、ほんと……と、なんか焦げ臭いような？」

「って、ヤバッ!?!」

スバルの焦った声。

いきなりローラーブーツを脱ぎ捨て……放物線を描いたローラーブーツが空中で小さな爆発を起こした。

そう、煙だけじゃない。

小さいながらも爆発を起こしたのだ。

「あっちゃー、もう限界だったか」

「いやいやいや、限界来ても、普通は爆発しないからね？」

「お、オーバーヒートかな？ 後でメンテナンススタッフに見てもらおう。ティアナのデバイスは大丈夫？」

「はい。 予備も幾つかありますから」

「………30挺前後。」

異空弾倉を応用すれば、戦闘中でも召喚出来る。

「そっか………そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな………」

「新………」

「……デバイス？」

デバイスのメンテナンスルームに行くと、ハイテンション……？のシャーリーが迎えてくれた。

あれは徹夜明けのテンションだ。

4つのデバイスが待機状態でフワフワと浮遊している。

「これがわたし達の新デバイスですか？」

「そうです。設計主任はわたし、協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

カード型の待機状態。

これがどうやらわたしのデバイスらしい。

「みんなが扱う4機は六課の前線メンバーとメカニックススタッフが、血と汗と涙を流して造った最新型です！ただの武器と思わないで、大切に、だけど性能の限界まで思いっきり使ってあげて欲しいです

「！」

「この子達もね、きっとそれを望んでるから」

そして各々の手に、新たなデバイスが握られた。

起動してみる。

すると……

「……おお」

現れたのは白いオートマチック。

それが2挺だ。

シャーリーが話し掛けてくる。

「ティアナのデバイスはどうか？ 注文通り、AIは省いてそのかわりに出来る限り頑丈にしておいたよ。理論上はティアナの圧縮にも十分耐えられる筈だよ」

「あ、ありがとうございます」

目の下の隈は、わたしのデバイスフレームの強化で眠れなかったかな？

「もう。ティアナの集束や圧縮力は異常だよ。なのはさんのSスターライトブレイカーLBでも、デバイスにそこまで負荷は掛からないのに……」

スターライトブレイカー

高町なのはの決め技にして必殺。

Sランクに当たる集束技術が必要らしいけど……

……集束技術？

ならもしかして、わたしにも出来るんじゃない……

いや、時間が掛かったら駄目……か？ でも、かりに時間が稼げる状態ならあるは……

「おまたせ」

と、そんなことを考えているうちに、高町さんがやって来た。

「なのはさん！」

「ナイスタイミングです！」

この後、出力リミッターがどうか、隊長陣は本人にもリミッターがどうか、リミッター解除は上司じゃないと〜とかか……ま、聞く必要ないわね、きつと……ん？

『ALERT』

ビービー鳴り出す警報。

モニターに大きく映し出された『警戒』の文字。

確かこれは……

「第一級警戒体制！」

エリオに台詞を持っていかれた。

そう、一級警戒体制だ。

一体何があったんだろう？

「グリフィス君！」

『はい。教会本部から出動要請です』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、こちらはやて。教会騎士団の調査部で追ってた【レリック】らしきものが見つかった。場所は山岳地帯。対象は山岳リニアレールで移動中』

『つまさか』

『そのまさかや。侵入したガジェットのせいで、コントロールが奪われとる。リニア内に最低でも30体、大型や飛行型の未確認タイプも出てるみたいや！なのはちゃん、フェイトちゃん、いきなりハードな初出陣や、行けるか？』

『わたしは何時でも』

『わたしも大丈夫だよ！』

『スバル、ティアナ、キャロ、エリオ、みんなもオツケーか？』

「『はい！』『』『』」

『いい返事や！ はんなら、機動六課フォワード部隊、出動！』

そんなこんなで、わたし達はへりに乗り、現場へと飛んだのだった。

3 5 「不幸になってもいい。」

自分の道は自分で決める」by キャロ（前

三章の五話、投稿。

それではどうぞー！

3 5 「不幸になってもいい。自分の道は自分で決める」by キャロ

わたしの新しい居場所。

大好き………と言うほどでもないけど、優しい人達がいる場所。

だけど、あの人達との食卓が恋しい。

あの人達と過ごしたあの時間が愛しい。

不器用でいてとても優しい、剣のようなあの人。

完璧そうできて、実はうっかりなあの人……

でも、わたしじゃ一緒に居られない。

あの人の理想に着いていくには、わたしの力じゃまだまだ足りないから。

一生懸命な？先輩たちと、きっとわたしと同じ思いを持つてる……
と思う優しい子。

迷いはない。

この場所なら、わたしはもっと力を磨ける。
そして何時か、あの人達と……

召喚術師マジカルキャロ、始まりません……

S i d e ・ キ ャ ロ

強すぎる力は争いと災いしかうまん

そう言われて、わたしは村から追い出された。

何処かで静かに死んでしまおう……。そんなことを思ってた。

そんな心が冷えきっていた時、あの紅い2人に出会った。

力は力でしかない

そう言って、わたしを引き取ってくれた。

2人に恩返しをしたい……。ううん、ただ2人と一緒に

居たいだけ。

遠慮なんてしない。

遠慮して、ただ言われるままにした結果、村を追い出されたんだから。

でも、邪魔には・・・お荷物にだけはなりたくない。

2人の道に着いていく。

そのためには、こんな出動に臆してなんかいられない。

フリードもいる。

エリオ君もいる。

それに何よりわたしには召喚魔法、そして、あの人達から学んだものがあるんだから・・・

Side・ティアナ

なにやら騒がしい。

どうやら飛行型のガジェットが出てきたらしいが……さて、
どうなることやら。

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張つてズバツとやっつ
けちゃおう!」

へりの後部が開く。

それはいい。

それはいいんだけど……高町さん？ あなたもしかして六課
の制服のまま飛び降りるつもりじゃ……

はは、まさかね〜 テレビの戦隊モノじゃないんだから、変身中は
敵が攻撃してこないとか思ってるんじゃないわよね？

おおっと、開かれた扉に近づいてったけど、まさか……

闘う道を行くならば、常に最悪の事態を予想しろ。世の中
に『絶対』なんて事はほぼないと言っても過言ではないからな。

ふと、アーチャーさんの言葉が脳裏に…….と思つたら、高町

さんはB」を展開せずに飛び降りた。

「……っ!？」

いやいやいや、死にたいのかしら彼女は!？

ううん、そんな筈ない。

そうだ、きっと死ぬか生きるかのギリギリのラインを見極めるゾクゾク感を楽しみたいからに違いない!

きつとそうだ!

「任務は2つ。ガジェットを暴走させずに破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること。ですから、スターズ分隊とライトニング分隊の2人ずつで車両の両端から中央に向かうです」

ライン曹長が任務の説明をする。

「レリックはここ」

モニターが開かれ、車両の見取り図が出る。

「7両目の重要貨物室です。スターズかライトニング、先に到達した方がレリックを確保ですよ」

「「「はい!」「」「」

すると、ピカーと光って、ライン曹長がBJ姿になった。

「わたしも現場に降りて、管制を担当するですよ」

「さーて、隊長たちが空を抑えてくれるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ」

ヘリパイロットのヴァイスさんが景気のいい声で言った。

「クロスミラージュ、セットアップ」

返答はない。

わたしの声に反応して、クロスミラージュがカード型の待機状態から起動した。

体をB Jが覆い、両脇の下に、クロスミラージュがおさめられた。

B Jは白を貴重とした、隊長のデザインと似通った形態だった。

スバルもセットアップを終わらせたようだ。

わかってるじゃない。

当たり前のことだけど、DEAD or ALIVE のゾクゾク感を楽しみたいとかじゃない限り、武装は早めにしとくべきよね。

へりから飛び降り、リニアの屋根に着地。

「さてと、ミッションスタートよ、スバル!」

「うん!」

S i d e ・ ア ウ ト

ここは六課本部のオペレーションルーム。

何人ものオペレーターがモニターに向かい、状況を逐一報告、現場のサポートをしている。

「スターズワン、ライトニングワン、制空権獲得。 ガジェット？
型散開開始。 追撃サポートに入ります」

するとドアがスライドして、はやてが入ってきた。

「ごめんな。 お待たせ」

「八神部隊長！」

「おかえりなさい」

「ここまででは比較的順調です」

「ライトニング分隊、8両目に突入。」

シャーリーが息をのむ。

「エンカウント！ 新型です！」

Side・キャロ

エリオ君と車両のガジェットを倒しながら進んでいると、突然一際大きなガジェットが現れた。

わたしの身長の2倍うっん、3倍はある。

先ずは様子見・・・

「フリード、ブラストフレア！」

「キュクー！！！」

フリードが炎弾を放つ。

でも、それはガジェットから伸びた2本の太いアームに弾かれてしまった。

と、間を置かずに飛び込むエリオ君。

「うおりゃあああ！」

エリオ君のデバイス、ストラダーダに魔力を纏わせて、降り下ろすけど・・・

「くっ、硬い・・・」

装甲に止められてしまった。

援護しないと！

「神の刃を……」

詠唱を開始……したその時、ガジェットから発せられるAMFが……強化された!?

足元の魔法陣が掻き消されていく。

エリオ君も、ストラダに纏わせていた魔力が霧散してしまったみたいだ。

「AMF?」

「こんなに遠くまで……」

ついけない、エリオ君がアームに抑え込まれそう!

ガジェットのアームと、ストラダが、火花を散らして拮抗する。

いや、少しずつエリオ君が押されてるみたいだ。

身体強化の魔法はあんまり影響を受けないみたい……なら。

「ケリユケイオン、身体強化全開」

』Roger』

軽くなる体。

「ふっ
」

活歩。

凜さんに習い、自然保護区の森の中で、ずっと練習してきた歩法。

一瞬でトップスピードに入って、エリオ君とガジェットの間へ。

「っキャロ!？」

驚いた声を背後に……

震脚。

ズシン、と床が鈍い音を立てて凹む。

勢いを殺さず、踏みしめた力も乗せて、右肘を突き出す!

「はっ！！！！」

裡門頂肘

直撃。

ガジェットが後ろに吹き飛んで、リニアの壁にぶつかった。

「痛っ……………」

やっぱり硬い。

身体強化を全開にしたわたしの裡門頂肘でも、装甲を少し凹ませただけみたいだ。

……………と言っても、元々召喚魔法を使用中に狙われても、攻撃を捌きながら時間を稼いで、あわよくばカウンターを入れる……………
・と言った狙いで練習してきたから、一撃でガジェットを倒せるなんて自惚れてなんかいない。

エリオ君を助けられたから、それで十分だ。

「「っ！」」

襲ってきたアームをわたしとエリオ君はほとんど同時にジャンプで避けて、屋根の上に飛び上がった。

「キャラ、今は……………」

「？ わたし、召喚とブーストしか出来ないなんて言っただけ？」

「そ、そっか」

笑顔で返すと、エリオ君は慌てて目を逸らした。

なんでだろ？

それは置いて……………どうしようかな？

覇爪招来を使えば、すぐに終わるんだろうけど、このAMFの中じや、何倍も魔力を消費して、やっと1本出来るかどうかだろうし……………

そう考えていると、ガジェットが屋根に登ってきた。

「キャラの攻撃で凹んだ所を僕が一点突破で突いてみるよ。ブーストお願いできる？」

「エリオ君……うん、分かった」

ブーストするんだったら、わたしが召喚魔法で倒しちゃった方が早
い気がするけど……

うん。 手の内は出来るだけ隠して、出来るなら切り札は2つや
3つは用意しておけて、土郎さんや凜さんも言ってたしね。

わざわざ、わたしの手の内を明かす必要もないか……それに
エリオ君、男の子だもんね。

「……行くよ、エリオ君」

「了解、キャロ！」

「ツインブースト・スラッシュアンドストライク!!!」

「だああああっ!」

突っ込むエリオ君。

桃色の魔力光が、ストラダーの穂先に宿る。

そして……

「でりゃあああ！」

裡門頂肘で凹んだ装甲の一点を貫通。

そのままガジェットを真っ二つにした。

爆発。

BJの白いコートが、爆風に煽られる。

槍を空に向かって突き上げる姿が、ちょっとカッコよかった。

「やったね、エリオ君」

「うん。ありがとう、キャロ」

S i d e ・ ア ウ ト

『刻印ナンバー？、護送体制に入りました。 追撃しますか？』

ここは次元世界の何処かにある、秘密の研究所。

白衣の男、ジェイル・スカリエッティは周囲を機材や書類に囲まれた中で、報告を聞いていた。

「……………いや、止めておこう。 あるに越したことはないが、無ければないでどうにでもなるからね」

ニヤリ、と不適に笑うその顔、目の下には、非常に濃い隈を作っている。

……………なんと言うか、体がフラフラと揺れている。

こここのところ、激務が続いているようだ。

『……………ドクター。 しっかりと睡眠は取っていますか？』

「ん？ なーに、すっかり1日3時間も眠っているよ」

『っ!?!?』

「大丈夫だ。人間、3時間も眠れば生きていけるさ」

『…………それは【生きて】は行けるかも知れませんが…………』

モニター越しのウーノが、息をのむ。

「…………それにしても、この案件は実に素晴らしい。オードブルとは言え、好奇心を刺激されるよ。…………プロジェクトFの残滓に、『正義の味方』と行動を共にしていた召喚士、タイプゼロ…………おまけに紅き翼の『双銃』まで…………誰かが図ったんじゃないかと疑いたくなるメンバーだよ」

『……………そうですか。そう言えば、ルーテシアお嬢様はどうしました?』

「うん? ああ、ゼスト達と一緒にだ。『正義の味方』に脅されて、せつかく人間としてメガーヌを蘇生したのね。何でも、早く心が欲しいそうだ」

『そうですか…………』

「ああ、話しはわかるが、近いうちに例の計画を実行に移すことになったよ」

「！ 座標の割り出しに成功したのですか！？」

「成功……と言えば成功なんだが、予想通り厄介な場所に繋がっていてね。『ゆりかご』はまだ動かせない。ヘイズ君の船と力を借りることになったよ。虚数の海を越えられるか微妙なところだが、なに、私に掛ければ不可能ではないさ。……さて、私はそろそろ研究に戻るとするよ」

「わかりました。お体に気を付けてくださいね、ドクター」

「なに、心配するな。君こそ老人達の世話を頼んだよ。まだ死んでもらっては困るからね。あと、各地に設置したFTシステムだが……」

「わかっています。準備は万全です。あとはドクターのアレが完成するのを待つばかりです」

「……そうか。なに、残すところ継続時間だけだよ。稼働実験は成功しているんだからね」

『そうですか・・・では、失礼します』

モニターが消える。

「・・・・・・・・楽しくなりそうだ。管理局か我々か、それとも・・・
果たして勝つのは何処になるやら。予想できないね・・・
まあ・・・」

予想出来なければ出来ないほど、人生は刺激があつて楽しい。

「君もそう思わないかね？」

誰もいない空間で、独り言のように呟くスカリエッティ。

「・・・・・・・・」

当然、返事など返ってこない。

疲れから、幻覚でも見たのだろうか？

だが、その瞳は正気を保っているように見える。

・ 機械が立てるわずかな駆動音に、
・ 眩きは溶けるように消えていった。

3 6 「お湯は熱し続けなければ、すぐに冷めてしまう。 なら、

とある次元世界の1つ。

自然豊かな深林の中に、2つの人影があった。

「まったく。こんな所に研究所を建てるなんて、ご苦労なことだよ」

【うさみみ】と背中に刺繍された赤い半袖のジャケット、その中に黒いインナー、そして赤いズボン、黒いブーツ姿の青年、クード・ヴァン・ジルエット 通称、クー。

「うん。おかげで2人の視線の先には、直径10メートル程の洞窟の入口が、ポツカリと口を開けている。その周りには、杖型や剣、槍など各々のデバイスで武装した数人の見張りらしき者達が

「 そうですね、ティアナが管理局に行つて、もう2年になるんだよな」

「そうだね。機動六課で頑張ってるんじゃないかな?
バレないように」

「はは。それじゃ、オレ達もいっちょ頑張るか！ダンボール箱は持ってきてるよな」

「うん。デバイスに収納してあるよ。・・・今回は強奪された物を取り返すだけだし、潜入作戦で行くんだよね？なんでダンボールなんかを？」

「ん？知らないのか、レン。潜入って言ったら、やっぱりダンボールだろ」

「はつくしつ！！！！・・・」

「どうしたのティア？風邪？」

「ん、大丈夫よスバル。誰かがわたしの噂をしてみたみたいね。この感じは・・・誰かしら？」

S i d e ・ ティアナ

この2年間、自分の力を磨いて磨いて磨き抜いた。

戦闘理論、危機察知力、射撃精度、近接戦闘の練度、そして咸卦法の継続時間。

すべてにおいて2年前を上回ってると思う。

思うのだが……それだけだ。

編み出した技は必殺には遠く及ばず、小手先の技を脱していない。

ここが限界なのだろうか？

今のわたしの全力戦闘は、高く見ても『本物』の下の中ってところだろう……しかも時間制限付きでだ。

わかってはいた。

わたしは天才じゃない。

『命懸け』と言う諸刃の剣、実戦につぐ実戦に身をさらすことで、ようやく此処まで辿り着いたのだ。

……管理局に属する以上、依頼を受ける頻度は自ずと減ってしまう。

このままじゃ、駄目だ。

戦闘技術とはお湯と同じ、熱し続ける火……実戦や日々の鍛練が無ければ、すぐに冷め、劣化していく。

とくに凡人のわたしには、それが顕著だ。

勿論、六課での訓練はある。

だけど、そんな弱火じゃ、実力を保つのが精一杯……ヘタをすると保つことすら出来ないだろう。

ダメだ。

ダメ。

ダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだ
ダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだ
ダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだ
ダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだ

個別訓練。

スバルはヴィータ副隊長と、エリオとキャロはフェイト隊長、そしてわたしは高町教導官と、それぞれの相手と訓練に励んでいる。

曲線やら螺旋を描き、迫りくる魔力弾。

それをわたしの実弾並みにまで圧縮した弾が撃ち抜いていく。

「うん、いいよティアナ。その調子！」

「はい！」

「ティアナみたいな精密射撃型は、いちいち受けたり避けたりしてたんじゃ、仕事が出来ないからね」

「・・・・・・・・」

わたしは貴女みたいに装甲が厚くないし、シールドとかも硬くない。紙とまでは言わないけど、ダンボール程度の装甲なんだから、もっと違う指導を！

と、言いたいところだけど相手は目上だし、生意気な奴だと思われるのもどうかと思うし……行動でしめすしかないかな？

背後から魔力弾、数は3。

咄嗟に前転跳び。

上下が入れ替わった視界に、3発の弾を捉え、トリガーを引く。

着地。

バシユツ、と背後で撃ち抜いた音が響く。

「ほら、そうやって動いちゃうと後が……」

「続きます!」

教導官が撃ち出そうとしていた2つの魔力弾を動き出す前に撃ち抜き、意思アピール。

伝わってれば良いけど……

「足を止めて視野を広く。チームの中央に立って、誰よりも早く中、長距離を制するのが、私やティアナのポジション、センターバツクの役目だよ？ 動いちゃうと視野を広く持てないよ」

「…………はい」

……………今ので理解した。

この教導官の考えと、わたしの考えは違う。

わたしは今まで1人で戦ってきた。

そりゃ、最初は紅き翼の仲間につき添ってもらってたし、管理局に入ってからスバルと組んでたけど、あいつはあいつで動いてくれたし、阿吽の呼吸でコンビネーションだって出来た……………けど、それはチーム戦じゃない。

わたしは、自身が強くなりたい。

けど、教導官はチームで戦うこと前提で考えている。

確かに足を止めれば、自分のことだけじゃなく、チーム全体に視野を向けられるかもしれないし、そうすることによって、得られる力もあるだろう……………

だが、それはわたしが欲しい力じゃない。

……………どうやら、わたしは自分で思っていた以上に師匠達……………
……………紅き翼的な私の強い思考に染まっていたようだ。

足を止める。

「そう！ 射撃型の真髄は、あらゆる相手に的確な弾丸をセレクトして命中させる、判断速度と命中精度だよ！」

目をつけられても鬱陶しいだけ。

言う通りにするとしよう………実践でも、チームを組んで戦う時は中央で足を止める。

そうすればいいんですよ。

そのかわり、極力訓練で疲労しないようにして、夜の自主練で自分の力を高めるだけだ。

………うすうす気付いてはいた。

こんなぬるま湯………死の危険も付きまとわない訓練じゃ、凡人のわたしが才能以上の水準に達するなんて、夢のまた夢だったってことかな。

S i d e ・ ア ウ ト

音の壁を軽々と突破し、周囲の木々をその余波のみで吹き飛ばす、
1本の魔力で編まれた槍。

膨大な魔力が凝縮されたそれは、白銀の軌跡を空間に刻みながら地面に着弾。

瞬間、地面が揺れた。

冗談のように粉々に砕け、宙を舞う瓦礫。

放射状に衝撃波が撒き散らされる光景は、さながら隕石の落下のようだ。

砂煙でハッキリとは確認出来ないが、少なくとも着弾点から半径100メートルは木々が薙ぎ倒され、クレーターになっている。

と、砂煙の中から2人の人影が飛び出してきた。

「げほっ、げほっ………ったく、あんなの聞いてねえぞ!？」

「けほっ………うん、これはちょっと予想外………」

身体中すすだらけになった、クーとレンだ。

・ 2人はそのまま立ち止まらず、その場を去ろうとするのだが……

「おっと、こっから先は通行止めだ。通りたかったらブツを置いてきな」

黒い髪を無造作に短く刈り、褐色の肌をした長身の男が立ちほだかる。

黒く、肘まで捲り上げられたジャケットと青いジーパンが、ガツシリと、しかし無駄なくついた筋肉に押し上げられている。

「何処までついてくる気だよ！ しつこいと嫌われるぞ、おっさん

「！」

「しつこい」

「はっはっはっ、つれねえこと言っなよ。俺はこれで飯食ってんだからよ〜 それに……俺はまだ28……だ!!」

「「!!!?!」」

男が消えた……と思った時には、すでにクーとレンの目の前には迫っていた。

ただ速いだけじゃない、認識と認識の『間』を縫うような疾さだ。

しかし、驚きながらも2人はなんとか反応した。

クーは自身の拳で迎撃、レンはシールドを張る。

手甲型のデバイスが光る男の剛拳と、クーの『気』に強化された拳が交差した……

ズンツ、と重たい音を立てて撒き散らされる衝撃。

「ぐあっ」

「はっ」

男とクーの拳は両者の頬に突き刺さった。

その場に男は踏み止まり、クーは吹き飛ばされる。

レンは衝撃を利用して、距離をとった。

「なめんじゃねえよ……!」

縛鎖爆封陣！

「ぬおっ！？」

吹き飛びながらも、クーが叫ぶ。

いつの間にか男の四方をクーの分身体が取り囲み、起爆符が大量にサービスされたアングルのワイヤーを巻き付けていた。

爆音。

男を中心に爆発が起き、周囲が火の海にかわる。

『レンー！』

『まかせて』

「はあああああっ！」

カッター・サイクロン

ほとんど間を開けない絶妙のタイミングで、レンが爆炎に向かって真空の刃が混じった竜巻を何十も放つ。

「・・・・・・・・」

火は消えたが、男が居た場所を中心に広範囲・・・半径50メートル程にわたって、森が焦土と化した。

しかし・・・・・・・・

「・・・・・・・・アイツ、最強クラスに片足突っ込んでるよな、絶対」

「クーと私の技を受けてこれだわ。 久しぶりに本気で行かないとダメみたい」

2人は身構える。

何故なら、男の放つプレッシャーが未だに消えていないからだ。

「レン」

「うん」

紅かる心

風を纏いて

S i d e ・ ティアナ

「スバルさん、あの空港火災に巻き込まれたんですか!？」

場所は食堂。

山のようにつまれたスパゲッティをわたし達フォワードメンバーの4人はテーブルについて食べていた。

身の上話の途中、スバルのふとした言葉にエリオが反応する。

「うん、そうだよ。その時、紅い外套の人に助けてもらったんだ」

エリオとスバルの会話を聞き流して、もくもくとトマトソースが良
い味を出している、ナポリタンを口に詰め込む。

……にしてもこの味、どっかで食べたことがあるような……？

話しは変わるが、キャラがスパゲッティを食べ始めてから、何処と無くソワソワしている気がする。

どうしたんだろ？

「へー、どんな人だったんですか？ やっぱり救助隊のエースの人とかですか？」

「ううん、それが違うみたいなんだよね。あとから父さんに救助隊のメンバー全員が載った資料を見せてもらったんだけど、どこにも載ってなかったし…… いったい、誰だったのかな？あの白い髪に日焼け？した人は」

……！？

紅い外套。

白髪。

日焼け？した肌。

……まさか！？

「けほっ、けほっ、けほっ」

「だ、大丈夫、キャロ？ ほら、ジュースを飲んで」

「ちよっ、ティア大丈夫？」

「けほっ、だ、大丈夫よ…… それよりスバル。あなたの憧れの人が白髪とか、日焼けしてたとか、初耳なんだけど？」

「え？ うん、だって聞けなかったから」

まさかあの人？

特徴が全て一致してるんだけど…… いや、でも次元世界は広大だし、似たような人の1人や2人は居てもおかしくない…… わよね？

Side・アウト

時空管理局首都中央地上本部。

その中にある資料室の端末に、2人の女性の姿があった。

1人はシャーリー、もう1人はフェイトだ。

「レリックのデータは以上です」

「封印はちゃんとしてあるんだよね？」

「はい、それはもう嚴重に。それにしても、よくわからないんですよねー、レリックの存在意義って。エネルギー結晶体にしては良くわからない機構がたくさんあるし、動力機関としても、なんだから変だし……」

「まあ、使い方がわかるような物なら、ロストログア指定はされな
いよ。……それと、もう1つの件は？」

「はい、調べてみましたよ。レリックの護送任務で襲ってきた、

銀髪の女……ルイズ・フランソワーズですね？」

画面に映されるのは、片手をあげ、背後に何十何百もの魔力弾を浮遊させる、ルイズ……フェイトのデバイス『バルディッシュ』が、襲撃時に記録したものだ。

「ガジエットの残骸にあった、『ジェイル・スカリエツィ』の名前。他人ならミスリード狙い、本人なら挑発つてところかな？ そして、裏では伝説的な便利屋『紅き翼』……この2つが繋がっていたら厄介だ」

「でも、どうですかね？ 噂では、そうとう悪どい依頼じゃないかぎり、受けてくれるらしいですよ……と言っても、何処に本拠地があるのか不明ですけど」

「……とにかく、一度データをまとめて隊舎に戻ろう。隊長達を集めて、緊急会議をしなければ」

「はい、いますぐに」

カチャカチャカチャ、とシャーリーはすさまじい処理速度でデータをまとめ始めた。

「『歩く不条理』 『死なない女』 『光と闇の女帝』 ルイズ・フラン
ソワーズ……調べれば調べるだけ、物騒な二つ名に事欠かな
いな。できれば間違いであってほしいけど……」

いずれまた会いましょう。 その時、敵か味方が
知らないけどね。

はやてから聞いたルイズの去り際の言葉をフェイトは思い出した。

あるいはこの状況を見越して、あの女はそんな言葉を残したのかも
知れない。

そうフェイトは思うのだった。

3 7 ホテルアグスタ攻防戦（前書き）

約半年ぶりの更新です。

待ってくれていた方々。

タイトルも覚えてねえよっと言う方々。

いろいろ居るでしょうが、お待たせしました！

しばらくは更新速度早めで行きたいと思しますので、暇があれば読んでみてください。

3 7 ホテルアグスタ攻防戦

S i d e ・ テ イ ア ナ

わたし達フォワードの四人と高町隊長、ハラオウン隊長、そして八神はやて部隊長はヴァイスさんが操縦するヘリに揺られ『ホテルアグスタ』という場所に向かっていた。

「ほんなら改めて今日の任務とここまでの流れのおさらいや。これまで謎だったガジェットドローンの製作者、そしてレリック収集者は現状ではこの男……違法研究で広域指名手配されとる次元犯罪者、ジエイル・スカリエツィの線で捜査を進める」

モニターに映し出される白衣の男。

広域指名手配ね……実はわたしも『双銃』って通り名で指名手配されてるのよね。

ルイズさんの変身魔法に認識阻害のサングラスを使ってるとは言っても、バテて逮捕されないか心配だわ。

そんなことを考えながら、モニターに映る男の姿をぼーと眺める。

そして、半ば無意識のうちに頭文字を……

「ッ！！！！」

ジェイル・スカリエッティ

頭文字はJ、S・・・その事に思い至った瞬間、

せ

わたしは、

赦すな

暴れだしたい

八裂きになる

衝動に

殺

駆られた。

殺せ！！！！

「……………」

歯を強く噛み締め、堪える。

「？ ティア、どうしたの？」

隣に座るスバルに気づかれてしまったようだ。

隊長がホテルアグスタについて説明中のため、念話で返す。

『大丈夫よ。……………何でもないわ』

精一杯のポーカーフェイス。

正直、あまり自信がない。

知らず知らず握り込んだ手のひらに、僅かな痛みを感じた。

みると、爪が食い込み出血している。

それを他人事のように眺めたわたしの脳裏には、Sランク依頼の最後、リカ女王に言われた言葉がよぎった。

心の内の炎に焼き尽くされないよう気を付けるように言われた気がする。

あの時はわからなかったが、もしかしたらこの事だったのかも知れない。

ふふ………仇………じゃない。

仇の可能性がある奴の名前を見つけただけで、これだ。

もう………手遅れかもしれない。

ホテルアグスタのオークションで解説役を依頼された僕は一般客より一足先に会場に打ち合わせに来ていた。

「ユーノ、こっち」

「ん？ ああ、ごめん。今行くよ」

あ、僕の目の前を歩いているのは、無限書庫司書長である僕の秘書、シャルロットさんだ。

身長は僕より頭一つ分ぐらい低く、肩まで伸ばされた透き通るように蒼い髪が特徴的だ。

年齢不詳。

いつの間にか僕の秘書になっていた。

秘書と言っても、無限書庫で何時も読書しているだけなんだけどね・
・
・
・

見かけは十代半ばから後半・・・くらいだと思うけど、話してみるととてもそうは思えない程大人びている。

僕も時たま人間関係について相談にのってもらうことがあるんだ。

今日のオークションには管理局員が警備に加わるみたいだし、もしかしたら知り合いに会うかもな・
・
・

S i d e ・ ティアナ

六課の戦力は無敵（笑）を通り越して明らかに異常だ。

隊長格全員がオーバース、副隊長でもニアスだし、他の隊員達だって前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。

そうね……もしかしたらルイズさん達と正面からぶつかっても十数分、いや数十分は拮抗出来るかもしれない……あくまで可能性だけ。

え？

勝てないか、ですって？

はは、バカ言っちゃいけないわよ。

あの人達を本気で倒すなら、管理局の全戦力で向かってアルカンシ

エルを乱れ撃ちするくらいじゃないと安心できないわね。

わたしの主観がかなり混じってるから正しいとは言い切れないけど、間違ってるとも言いきれないのが怖いわ……

S i d e ・ ア ウ ト

ホテルアグスタ周辺の深い森の中に二人の人影があった。

一人は黒いコートを羽織り、フードをかぶった男。

もう一人は薄紫の髪を腰まで伸ばした少女だ。

「あそこか」

男が言った。

「母親のもとに居なくてもいいのか？ ……あの男の言っているに従わなくてもいいんだぞ」

「……うん。 わたしは……」

と、小さな羽音が響いてきた。

「……ドクターのおもちゃが近づいてきているって」

S i d e ・ ティアナ

『前衛各員へ。 状況は広域防衛戦です。 ロングアーチワンの総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮をとります』

「スターズフォー、了解。 クロスミラージュ、セットアップ」

面倒だ。

クロスミラージュを起動させ、バリアジャケットを装着する。

両脇のホルスターに収まった二挺の拳銃を手に取り、状態を確認。

「. . . . うん、問題なし」

すると、準備運動で体をほぐしていたキャロが声をかけてきた。

「ティアナさん、どうやら敵に召喚魔法を使う人がいるようです」

屈伸や伸脚をしながら、結構重要なことを流すように言ってきたんだけど.

すでにフォワードの四人は揃い、ホテルの正面で敵のザコ（ガジエツト）を待ち構えている。

目の前に現れる、紫色の魔法陣。

その数、二十以上。

キャロとスバルが先制攻撃をかける。

「神の刃を……覇爪招来！」

「おおおっ スクリユウー……バスター!!」

強大な魔力を宿した十の魔剣と、螺旋を描く中距離砲が魔法陣から出現したガジェットたちに直撃し、吹き飛ばす。

だけど……

「まるで、Gね……」

そう、生命力豊かな黒光りするGの如く、次から次へとガジェットがわいて出てきた。

「……」

流れ作業を思わせる淡々さで引き金を引き絞る。

誘導弾の練習も兼ねて四発の魔力弾を操り、ガジェットどもをスクラップにかえていく。

わたしの魔力程度じゃAMFに掻き消されそうだけど、スバルやキヤロ、エリオの頑張りでフィールドを展開する隙すら与えず叩き潰されていくから、特に問題ない。

と、その時……

「う……ひっく……お母さん、どこ……」

幼い女の子の泣き声が、わたしの耳に聞こえてきた。

方向はホテルアグスタ、そのエントランスホールへの出入口。

非常用の装甲防壁がありたそこに、うずくまった幼い女の子の姿を見つけた。

「……………」

息を呑む。

おかしい、わたしがついさっき確認した時には居なかったのに……

いや、そんなことを考えるのは後だ。

瞬間、視界の端に女の子目掛けて迫る、ガジェットの放った三発の

ミサイルが映り込んだ。

「やばっ!?!」

なんで外に客?がいるのか知らないけど、あんなのモロに直撃したら、いや、爆風を受けただけで女の子の命が危ない!

咄嗟に放った圧縮魔力弾。

しかし、撃墜できたミサイルは二発だけ。

「くっ」

わたしじゃ間に合わない。

キャロもエリオも、正面のガジェットに集中してて、気づいてないっ!

次の瞬間……

「————っ!?!?!」

ミサイルと少女の間に、

「……………ッッッ!!!」

スバルが滑り込んできた。

そして、シールドをあるうことか女の子に施す。

っ!?

あいつ、自分はシールドなし、拳とBJだけで耐える気!?

下手すりゃ死ぬわよ!

加速された思考の中で、世界がスローに動いていく。

そこで見たスバルの瞳は、これから迫るミサイルの脅威ではなく、女の子を助けられたと言う、安堵だけが感じられた。

………そっか。

魔法が使えない、ただの幼い女の子じゃ、すり抜けた爆風だけで危険。

だからこそ、女の子に直接シールドを張ったんだ………自分の安全を度外視して………

「……」

そうよね、スバル。

あんたの信念は助けを求める者の救済。

救助隊で散々思い知らされてたのに、忘れてたわ。

ミサイルが霞む速度で突き進む。

普通なら、自分を犠牲にしてまで他人を助けようとするあいつを気持ち悪いと感じるのかもしれない。

けれど、わたしはあいつを応援しよう。

それが、自身の命を賭けるに値する信念なら、わたしはあいつを否定なんか絶対にしない。

何故なら、思い（信念）を否定する（砕く）ことは、相手を殺すことと同義だから……

それが、あの日……アーチャーさんに銃を返しに行った日……
・戦うことが怖くなって、銃が重く感じるようになってしまったあの時……

Sランク依頼で、戦場に立った時、……夜、星空を眺めながら考え出した答え。

笑いたければ笑え。

スバルの為にならないかも知れない。

あんな生き方をしていたら幾ら命があっても足りないだろう。
けど、わたしはスバルを殺したくない。

だからスバル、必ず生き残りなさい。

あんたはわたしが背を任せた・・・相棒なんだから。

ミサイルがスバルに迫る。

わたしの弾丸でも間に合わない。

そして・・・

「だあああっ」

横から飛んできた鉄球に、ミサイルは打ち落とされた。

ドンツ、と爆風がスバル達を襲うが、あの程度なら無傷だろう。

同時に響き渡る罵倒。

「このバカ！ スバル、てめえなに考えてんだ！！？」

・・・グイータ副隊長が間に合ったみたいだ。

・・・助かった。今のはけっこうヤバかったわ。

S i d e ・ な の は

「えっと・・・報告は以上かな？ 現場検証は調査班がやってくれるけど、みんなも協力してあげてね」

フォワード四人の前に立つ、私とフェイトちゃん。

「しばらく待機してなにもないようなら撤退だから」

「」「」「はい」「」

報告によると、みんな良くやってくれたみたいだ。

ホテル内へのガジェット侵入の阻止。

うん、一癖も二癖もあるメンバーだけど、予想を超える働きぶりだ。でも……ヴィータちゃんから聞いた、スバルのことが少し気にかかる……

「スバル、ちょっと私とお散歩しようか」

「……はい」

森の道をスバルと二人で歩きながら話し掛ける。

「……失敗しちゃったみたいだね」

「はい……女の子が居ることに気づけませんでした。トラ
ウマになってなければ良いんですが……」

……え。

「違うよ。スバルは身を挺して女の子を助けようとしたんでしょ？ その事じゃなくて、ヴィータ副隊長が間に合わなかったら、危

なかつたんでしょ？」

「あ……そうですね。でも、あそこからだと自分を守っていた女の子を完璧に守れるかわかりませんでしたから……」

……ナニかが噛み合っていない。

そう感じた。

スバルのやったことは、とても偉いこと……身を挺して他者を守るなんて、凄いことだと思うけど……ちよつと度が過ぎる。

そんなことを続けてたんじゃ、何時かあの時の私みたいに……ううん、もっと酷いことになりかねない。

それに……私の教導が疑われかねない。

人を助けるなどとは言えないけど、

「スバル、一生懸命人を助けようとするのは良いことだよ。でも、自分のことももっと考えてね？ スバルが怪我したら悲しむ人がいることを忘れちゃダメだよ」

「……はい」

もう、あんな思いはしたくないから……

3 8 嵐の前の静けさ

S i d e ・ テ イ ア ナ

隊舎の近くにある森の中。

わたしはそこで腕組みをして佇んでいる。

常人が、・・・いやかなりの実力者でも視認は困難だろうがこれは構えだ。

断続的に響く銃声と、落ちてくる木の葉が弾ける様を見れば気づくだろう。

今やっているのは『居合い弾』の修行だ。

始めてからすでに四時間。

辺りはもう夜の闇に包まれているが、それはそれで間合いの結界を確実にする鍛練になる。

ただただ黙々と木の葉を撃ち抜き続ける。

そうしていると、どうしても頭の中で浮かび上がってくる思考。

・・・わたしは本当に執務官になりたいのだろうか？

考え始めると止まらないのだ。

確かに、兄さんの墓の前でわたしは誓った。

汚名を返上するために執務官になると……だけど、それはただ自分が犯人を見つけ出したかったからなんじゃないか、と。

最近、わからない。

汚名返上のために執務官を目指していたのが、それとも仇を討ちたかっただけなのか……

「……つと」

弾が外れた。

引き金を引き絞る指からはズキズキとした痛みと、赤い血が出ている。

「今日はここまでね……」

額に浮かんだ汗を拭い、わたしは隊舎へ戻っていった。

S i d e ・ ス バ ル

自分はどこかおかしいのかも知れない。

自主訓練中、体を動かしながら思った。

ううん、うすうす感じてはいた。

ただ、なのはさんの言葉で再確認させられただけだ。

「はっ
」

夜の闇をわたしの拳が引き裂く。

続けざまに放った回し蹴りも、全て想像したティアの影に避けられてしまった。

「
」

なのはさんはわたしが怪我したら悲しむ人がいることを忘れたらダメだと言った。

多分、遠回しに女の子を助けるために無茶したことを怒られたんだと思う。

だけど・・・やっぱり同じ場面に十回遭遇したら、十回とも無茶するんだろうなと思う。

わたしは、あの炎の中に、ナニか大切なものを落としてきちゃったのかも知れない。

・・・それでもいい。

わたしが命を賭けるだけで人が救えるなら、よろこんで危険に飛び込んでいこう。

ティアには迷惑ばっかかけてるし、お父さんやギンねえにも心配かけっぱなしだけど、わたしはこのまま進むよ。

ごめんね、・・・

「だあッ」

拳を繰り出す。

……足りない。

「はあ!?!?!」

ダメだ。

こんなんじゃ、全然足りない。

森の中で何度も何度も拳を突きだし、蹴りを繰り返す。

次に助けを求める人を必ず救えるように……

こうして、夜は更けていった。

S i d e ・ ア ウ ト

外部ディスプレイを埋め尽くす、膨大な数の異形。

百五十メートル級高速機動艦『Hunter Pigeon』操縦室。

操縦席の上で軽く足を組んで、ヘイズはディスプレイを睨み付ける。

「……………ハリー」

『なんですか、ヘイズ？』

と言うハリーの声は、どこかなげやりだった。

「音声記録を頼む。……………
……………つと、以上だ。送信しといてくれ」

『……………了解しました。では、あとのことはお任せしましたよ。
絶対に生き残ってください』

その言葉を最後に、三本線で描かれたハリーの顔が消える。

ヘイズは一人、苦笑した。

「さてと……………」

ゆっくりと静止していた機動艦が動き出す。

これから先はコンマ一秒のミスが死に直結する、天国と隣り合わせの世界だ。

予測演算成功。 『破碎の領域』 展開準備完了

「……………じゃ、やるか」

S i d e ・ テ イ ア ナ

ベッドに近づく妙な気配で目が覚めた。

反射的に枕の下に隠してあるクロスミラージュを握り……

「わわわっ！？ た、タンマタンマ！！ わたしだよティア〜ッ」

「……なんだ、スバルか」

突きつけていた銃を下ろし、時計を見ると、もう五時をすこしまわっていた。

昨夜は修行に熱が入りすぎちゃったわね。

わたしがスバルより遅く起きるなんて……

「け、けして如何わしいことをしようとした訳じゃないんだよっ！
？ そう、ティアを優しく起こそうと思って……」

「あー、はいはい。 おっぱい揉めなくて残念だったわね」

何故か知らないが、スバルのスキンシップは時に過激になるのだ。

捌く身にもなってみろっての。

背筋を伸ばし、固まった体をゆっくりと解す。

そしてトレーニングウェアに手をかける。

着替えながら、どうしても尋ねたかったことを口にした。

「……………ねえ、スバル」

「……………なに？」

お互いに背を向けあっているから顔は見えないけど、声の調子から真面目な話だと気づいたのだろう。

スバルの真剣な声。

「昨日の出動の時、アンタ、自分からミサイルの射線に入ってたわよね」

問いではなく確認。

「うん」

「副隊長が割り込んでなかったら、重傷、下手すると致命傷だったわかってたわよね」

「……………うん」

「そっか」

「ごめんね」

「バカ。なにアンタが謝ってんのよ。アンタ、これっぽっちも自分が決めた道を曲げる気ないんでしょ。だったら行けるとこまで突き進んじゃいなさいよ」

「……………ティア、ごめ」さ、自主練にいくわよー」……………あ、待ってよティア！」

スバルの生き方が歪なことはわかりきってる。

でも、わたしは相手の思い（信念）を砕く以上、それは殺すことだと考えている。

わたしにスバルを殺す意志がないからには、その生き方を叩いて直す……………直るかは兎も角……………ことは出来ないのだ。

だけど、それ以上に、わたしにスバルの道をどうこう言える資格なんてこれっぽっちもないことも、わかりきってる。

敬愛する兄さんの、仇。

何処の誰かも知れぬ仇に向けて、血と汗にまみれて牙を研ぐ日々。

考え直せ、

その生き方は歪だ、

復讐なんて忘れて、前向きに生きるんだ・・・

何て言われたら、わたしは正気でいられる自信がない。
自分で決めた道なのだ。

不幸になるのが、どうなるのが、全て自己責任。

他人にどうこう口出しされて、自分の思い（信念）を否定されるのは我慢ならない。

ただ、今のわたしはスバルのパートナーなのだ。

だから、相棒が自分の道を進む手助けくらいするのは当然だろう。

間違っているかも知れない。

後悔しか残らないかも知れない。

だけど、わたしはそう思っているのだ。

S i d e ・ スバル

力が欲しい。

なのはさんのように強大な、

テИАのように研ぎ澄まされた、

そんな誰かを、誰をも救いえる力が欲しい。

世界中の全ての人を助けたい、なんてわたしは言わない。

けど、助けを求める声が聞こえたなら、どこにだって助けに行く。

わたしが見える範囲で命が消えることなんか、何がなんでも許さない。

でも、わたしは弱い。

わたしはバカだ。

だから、強くなりたい。

昨日の襲撃から、より一層そんな思いが強くなったように感じる。

何かなんでも、戦闘が始まる前に女の子を見つけるべきだったのだ。気配に敏感なティアでも気づけなかったけど、それでもわたしは気づくべきだったのだ。

怖い思いをしただろう。

助けを心から望んでいただろう……それなのに、わたしは気づくことが出来なかった。

「集中しなさい！ 死ぬわよっ」

「くっつっ!?!」

上段回し蹴りを両腕でガード。

体を突き抜ける衝撃に耐えて、裏拳を放つが、そこにティアは居なかった。

「しっ!?!」

短い呼吸。

下!?!

「わっ!?!」

気づけば足を刈り取られて、体が宙を浮いていた。

何処までも広がる青空に少しだけ見とれ、次の瞬間には地面に叩き付けられる。

受け身をとって起き上がった時には、

「はい、死亡。これが実戦だったら、十回は死んでるわよ、アンタ」

ティアの銃口がわたしの額に押し付けられていた。

「くっ……負けたあっ」

訓練校時代はティアに触れることすら出来なかったのだ。

クリーンヒットこそないけれど、それなりに近接戦なら渡り合えるようになってきた。

最初の頃より成長しているのだ。

「ふう、……ま、だいぶ良い動きになってきたんじゃない？
近接戦とは言ってもここまでわたしを追い詰めるなんて……
うかつかしてらんないわね」

「あははは……は？」

六課から支給されたティアのデバイス、クロスミラージュには近接
戦用の魔力刃がない。

まだリミッターの関係上、そのモードが出てきてないのか、それと
も元々そんな形態は存在しないのか……わかんないけど、デ
ザートイーグルD、だっけ？

そっちのデバイスを使われたら、ここまで拮抗は出来なかったと思
う。

そう言えば、わたしとの訓練以外で使つてるとこ見たことない。

何か使えない事情でもあるのだろうか。

「と言うか、ティアってセンターガードだよな？」

「なんか言った？」

「え！？ ううん、ティアって強いなーと思って」

ま、ティアはティアか……

そんなことを考えていると、隊舎の方からエリオとキャロ、そしてフリードが走ってくるのが見えた。

「おはようございます、ティアナさん、スバルさん！」

「おはようございます」

「キユク」

厳しいけどためになる訓練と、気の良いチームメイトたち。

わたしはこんな生活が一年間ずっと続くのだと思っていた。

まさか、あんなことになるなんて、今のわたしに知りえる筈がなかったのだ……

3 9 君臨する魔王（前書き）

なのはファンの方は戻った方がいい……かも知れません。

まあ二次創作の一つですから大目に見てください？

3 9 君臨する魔王

S i d e ・ ティアナ

今日は2対1の模擬戦のようだ。

宙に浮遊する教官、高町隊長の指示で、まずはわたしとスバルのペアが廃ビルが乱雑な建ち並ぶ街中を意識したステージで、隊長を相手に戦うことになった。

「行くよ、ティア！」

「まあ、ぼちぼちね。スバル、力みすぎても実力はでないわよ」

「わかってるっ」

二人揃って隊長と対峙したわたしたちはそれぞれの武器を構え、開始の合図を待った。

「それじゃあ始めるよ。レディー……」

そんな掛け声に目を細め、脇目でスバルを見た。

この前のホテルアグスタでの襲撃から、スバルはどうやら焦っているようなのだ。

どこか危うい雰囲気を感じる。

……何事も起こらなければいいけど……

「ゴーツー!」

合図と同時に、スバルはウイングロードを空を埋め尽くさんばかりに展開し、突撃。

わたしはバックステップで距離をとった。

まずは接近！

マツハキヤリバーが唸りをあげる。

ウインググロードの上を風のように駆け抜け、わたしは一直線になのはさんを目指す。

もちろん、そう簡単になのはさんが接近を許す筈もなく、どこからともなく何発もの魔力弾が現れた。

曲線や螺旋、三次元的な動きと霞む速度をもって、わたしを迎撃しようとする襲いかかってくる。

二、三発ならともかく、十発ちかい弾を捌ききる技量はわたしにまだない。

けれど、

「おおおおおっ」

速度をあげる。

なのはさんが目を丸くしている。

だけど、心配は無用。

だって後ろにはティアが居るんだから。

「ッ！ やるね」

咳く、なのはさん。

わたしに当たる数十センチ手前で、桜の誘導弾がオレンジ色の同じく誘導弾によって相殺されたのだ。

……ティア、誘導弾なんて無理！とか言って、ぜんぜん出て来てるじゃん。

そんなことを一瞬考えたときには、すでに一呼吸の距離。

握り込んだ拳を

「でやああっ」

躊躇なく鳩尾めがけて繰り出す。

理想的な軌道をたどり、命中を確信した次の瞬間には、なのはさんが消えた。

視界の端にとらえた白い防護服。

瞬間加速魔法で、上空へ回避されたんだ！

「まだっ」

ウイングロードを曲げて、なのはさんへの道をつくる。

ここがチャンス！

回避先を予測したティアの魔力弾がなのはさんに襲いかかっているからだ。

カートリッジを一発ロードして拳を強化。

実力で劣っているわたしたちが勝つには不意を突くしかないし、長引けばそれだけ不利になる。

だから、

「てりゃああああっ！！！」

これで決める！

放つものは『スクリューバスター』

狙いは無防備な背中。

わたしの青い魔力が螺旋を描いて拳に絡み付いて、回転数をあげて

いく。

まだまだ、もっと強く！

拳の命中と同時に零距离で解放するんだ。

そうすれば、いくらなのはさんの障壁でも突破できる筈！

あと、五メートル。

魔力弾がわたしに迫ってきた。

数は五。

ティアの誘導弾じゃ抑えきれなかったんだろっ。

全力で突き進むわたしに回避なんて無理。

ゆっくりとスローになっていく視界の中で、わたしは迷った。

どうしよう？

被弾覚悟で飛び込む？

いやそんなに甘くない。

……これがもし、実戦だったなら、周囲に被害が出る前に迅速に犯人を無力化しないといけない。

そうだ。

練習で出来なくて、本番で出来るわけがない。

多少のリスクを背負ってでも、

「おおおおおっ」

わたしは止まるわけにはいかない。

同時に、根性論でなんでも押し通せる訳じゃないこともわかってる。

ウイングロードの限定的な足場で、迫る五発の魔力弾を突破して、
なのはさんに拳を突き立てるのは不可能だ。

だから・・・

「スクリューバスター！」

零距离解放は即座に取り止め。

渦巻き、ドリルのように回転する砲撃で魔力弾を消し飛ばす。

砲撃に反応して、なのはさんが半身になると共にシールドを張った。

轟音が鳴り響き、大気が震えた。

手応えはあった、けど防ぎきられた。

予想通りだ。

大きく跳躍したわたしの体はすでになのはさん目掛けて落下を始めている。

砲撃でフェイントをかけた直後の奇襲。

拳が唸りをあげ、脳天へ突き進む。

拳（本命）が、

「っ!？」

捌かれた。

角度がついたシールドで拳打の威力が流されたのだ。

体が流れ、崩れる体勢を必死に立て直して、ウインググロードの上へ着地。

「ダメだよ、スバル！ そんな無茶な機動」

「すみません！ でも、ちゃんと防ぎますからっ」

確かに、少しのミスが大ケガにつながるかもしれない。

けど、今のわたしの実力じゃ、格上を相手に出来るほどの手段がない。

多少の無茶は承知で、挑戦しなくちゃ、強くなてなれない。

次の攻撃を仕掛けるため、わたしはウイングロードを疾走した。

Side・キャロ

フェイトさんがごうりゅうして、わたしとエリオくん、そしてヴィータ副隊長が見守るなか、ティアナさんとスバルさんのペアがなのはさんと激しい戦いを繰り広げている。

そんな中、スバルさんの動きが何時もより荒々しいのが目についた。

それはフェイトさん達も感じているようだった。

「……どうしたんだろう、スバル。 さっきから……」

「そうだなー。 あのバカ、なに焦ってやがるんだ」

と言う会話を耳にして、わたしは模擬戦から目を離さずに言った。

「わたし、わかるような気がします」

「？ キャロ？」

「エリオくんもわかるんじゃないかな？ 自分が決めたことをやり通すには力が必要。 でも、自分にはまだそんな力はないって分かって…… だから、少しでも、ちよっとでも早く強くなるために、無茶をするって気持ち……」

「そう……、だね」

エリオくんが小さく頷く。

この気持ちはフェイトさんやヴィータさんにはわからないかも知れない。

フェイトさんは小さな頃からAAAランクの魔導師、ヴィータさんも似たようなものだと思う。

だから、力が欲しいって渴望したことがないんだと思う。

わたしはシロウさんとリンさんに着いていくために、力が欲しい。

エリオくんも、大好きなフェイトさんを守るために力が欲しい筈だ。

「……………」

何も起こらないように願いながら、わたしは戦いから目をそらさないように、見つめ続けた。

Side・なのは

どうすれば、いいの!?!?

内心で叫び出したい衝動を何とか呑み込んで、わたしは優しく、どうやってスバルを諭そうかを考えていた。

先ほどの注意にスバルは従う気がないらしい。

危ない機動。

ちょっと間違えれば、死に繋がるかも知れない。

わたしの攻撃に対する防御を全てティアナに任せて、突進してくるスバル。

こんな動き、わたしは教えてない。

いや、むしろ戒めてきた筈だ。

わたしの訓練。

わたしの教導。

その全てが否定されているような感覚を覚える。

役立たずになるの？

今までの教えはなんだったの？

役立たずな、教えるのが下手な教導官……ひとりぼっち……？

嫌だ。

ぐちゃぐちゃの心を押し隠して、わたしはスバルへ叫んだ。

「なんで・・・ どうしてそんな無茶するの、スバル!!」

シールド越しに拳を叩きつけてくるスバル。

「わたしは、もう誰も見捨てたくないから・・・」

「え？」

眩く。

理解できない。

何を言ってるの？

わたしの教えと真逆のことをしておいて、コイツは今、なんて言った？

「だから、力が欲しいんですっ!!」

呆けている間に、力の拮抗を崩したスバルが接近してくる。

迎撃しようと放った弾は、ティアナの魔力弾によって相殺された。

「・・・・・・・・」

なんだか、もう、疲れちゃったな・・・・・・・・

手のひらに小さな障壁を展開して、スバルの拳を受け止める。

「ッ!？」

息を飲む音が聞こえたが、もうどうでもいい。

「ちゃんと、練習通りにやろうよ・・・・・・・・」

そうしてくれれば、何も問題なかったのに。

誰も傷つかないし、強くなれる。

わたしは更に必要とされる。

良いことばかりじゃないか。

どうすれば、いいのかな。

……ああ、そうだ。

口で言っただけなら、体でわからせるしかないよ……
ね？

「そうだ。　そうしよう……」

スバルが体を震わせて、飛び退く。

その隣にはいつの間にかティアナが立っていた。

二人とも、いい勘してる。

けど、もう手遅れだ。

「くっ!?!」

「ティアナ!?!」

ティアナをバインドで拘束。

うん、関係ないもんね。

ティアナはわたしの言うことをちゃんと聞いてくれる。

悪い子のスバルには、お仕置きしなくちゃ。

「少し、頭を冷やそうか……」

「ッ！ スバル、回避……！」

抜き打ちぎみにチャージ時間を短縮した『ディバインバスター』をスバル目掛けてわたしは放った。

3 10 機械仕掛けの勇者見習い（前書き）

あけましておめでとじいぢわいませす！

今年、初投稿です！

3 10 機械仕掛けの勇者見習い

Side・スバル

「スバル、回避！」

頭に響く、そんな声。

気がつけば、なのはさんの『ダイバインバスター』が眼前まで迫っていた。

様子のおかしい、なのはさん。

まるで、感情が抜け落ちたように冷たい瞳がわたしを睨んでいる。

回避は困難だと悟り、後ろに飛びながら、シールドを張る。

瞬間。

「くうツツツ!?!」

衝撃。

体の上下が何度も逆転して、わたしはビルの壁に叩きつけられた。

とびかけた意識を頭を振ってもどし、

「……………っ!？」

慌ててその場から転がった。

地面に前回り受け身をした直後、桜色の魔力弾がわたしが叩きつけられたビルの壁に直撃。

「スバルがいけないんだよ？　ちゃんと言うことを聞いてくれないから」

そんな呟きが、背後から聞こえた。

振り返れば、十五メートルほど距離をあけて、なのはさんが佇んでいる。

「教官の命令に従わない、そんな部下なんて必要ないの。もう見捨てたくない？　そんなこと、知ったことじゃない。スバル、あなたは…………邪魔なの。だから、」

何時ものなのはさんからは考えられない、心を抉ってくるような言葉。

それと同時に、十、二十、三十、と強大な魔力を有した弾丸が形成されていく。

そして、

「消えて」

一斉に加速。

逃げ場なんて何処にもない。

「あ……………」

殺意が壁となって押し寄せてくる。

「あ……………あ……………」

どうする？

ぼつり、と浮かぶ思考。

今まででもなのはさんに訓練してもらってきた。

その戦いを間近で見たこともある。

けど、正面から相対したのは始めてだ。

とんでもない魔導師だ、わたしは思った。

何十の弾丸を同時に展開出来る者はいるだろう。

だけど、その全てに誘導性を持たせるとなると、いったいどれだけの思考分割が必要になるのだろう。

なにより、ここまで圧倒的な力を見せつけておいて、それでも手を抜かれているのだ。

本来ならS+がAAまで落とされているのだから……

わたしはひたすら動き続ける。

逃げ回る以外に対処が出来ない。

「あ……ああ……ああ……」

どうする？

どうしよう？

どうすれば？

いくら考えても、桜色の包囲網を抜け出せない。

「スバル！」

ティアの声。

同時に、左腕に魔力弾が直撃し、バリアジャケットを突破して、激痛が襲ってきた。

それで、わたしは今、この状況が実戦並みに危険なのだと自覚する。いくら非殺傷設定と言えど、目などのやわらかい器官に当たれば、場合によっては失明の危険があるし、オーバーキルな魔力ダメージは後遺症が残ってもおかしくない。

背骨を締め上げるような緊張感に、体が震える。

だけど、

「あ、あああああ！！！！」

わたしに恐怖はなかった。

あるのは、強くなりたいと言う渴望、そして、これ乗り越えれば、少しでもその力を手にすることが出来るんじゃないかと言う、無謀と呼んでいい思い。

前に出た。

魔力弾が行く手を阻む。

握り込んだ拳を振るって蹴散らそうとする。

が、弾がわたしの拳を避けて回り込んできた。

それを前進して避ける。

バリアジャケットに触れるか触れないかのギリギリの見切り。

「くっっっ・・・あああ・あああああ！」

衝撃。

かすっただけで、金属バットで思いつきり殴られたような痛みが走る。

それでも、進む。

マツハキヤリバーにこれでもかと魔力を込めて、確実に距離を縮める。

「・・・・・・・・」

そんなわたしをなのはさんが感情のない瞳で見ている。

無言で、虫けらでも見下すように……

自分の動きがとても遅く感じた。

全力の加速。

見切りが間に合わない。

そもそも二次元的な動きをする魔力弾を完全に見切れるほどの技量がない。

弾が肩の肉を削ぎとるようにして当たる。

激痛と熱が狂ったように全身を駆け巡り、視界がチカチカした。

かまわず、前へ。

コンマ一秒が一秒、十秒と引き延ばされる。

なのはさんがわたしの拳を逸らした技術を真似て、角度をつけたシルドで弾を逸らす。

足を前に。

動きは最小限、最低限に。

すると、魔力弾の軌道がぼんやりと見えてきた。

これから飛来してくるだろう弾の動きがおぼろ気ながらわかる！

「ああああああっ！！！！」

避ける。

拳を振るい、蹴散らす。

角度をつけたシールド。

呆気なく突破されるけど、僅かにコースが直撃から逸れる。

自分が一段階上の領域に上がった感覚。

それでも足りない。

何発の弾がわたしに狙いをつけているだろう？

十？ 二十？

最大展開数は？

実力の何%だろう。

数に意味はないのかも知れないけど、わたしを倒すならあと十発、弾を増やすだけで事足りる。

避けながら、前へ。

全身を打ちのめす、魔力弾。

その一つ一つに殺意を感じる。

容赦ない殺気の群れ。

確実に近づいている筈なのに、なのはさんが遙か遠くに感じた。

動きが鈍くなっていく。

全身が痛い。

避けきれなくなってきた。

魔力弾の動きは、もう目で追うのは不可能だ。

感覚を研ぎ澄ます。

針の穴に糸を通すどころじゃない……針の穴の中に描かれた肖像画に瞳を書き入れるぐらい……今までにない集中。

もつと魔力を走らせなくちゃ。

助けなくちゃ、

わたしが地獄の中に見捨てた人たちの為にも……

次は、あんなことを起こさない為に。

もっと、もっと・・・

もっともっともっともっともっともっとも
っともっともっともっともっともっとも
っと力を!!!

「がああああッ!!!」

叫ぶ。

体が熱い。

視界は赤い。

構うもんか、と先に進む。

一撃。

それしかない。

限界なんか、とっくの昔に超えちゃってる。

だから、

「ガードリッジいローどおおおおおお……!」

ガシャン、とリボルバーが回転し、破裂しそうな魔力が拳に集中する。

六発ロード、極限のストレート。

なのはさんと目が合う。

お互いの呼吸が感じ取れるほどの間合い。

「があああっ！！！！」

振りかぶる。

瞬間、

「……………」

無言のなのはさんが嘲笑ったように感じた。

拳が……………繰り出せなかった。

宙に固定された腕。

バインドが絡み付いている。

魔法を使ったような素振りはなかったから、おそらくは空間設置型。

……誘導された!?

どうようを押し隠して、無理矢理に拳を突き出す。

コンマ一秒にも満たない隙。

勢いが、殺された。

「これで終わり」

何事もなかったように、なのはさんが呟いた。

向けられる杖にはディバインバスターの輝き。

瞬間、全身を衝撃が突き抜けていった。

桜に塗り潰される視界。

心が軋む。

力は……手に入らない。

気を失う寸前、ティアの叫び声が聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8591n/>

魔法少女リリカルなのは ～次元世界最強の弟子～

2012年1月3日00時11分発行